

IBM Unica Campaign
バージョン 8 リリース 6
2013 年 2 月

管理者ガイド



— お願い —

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、449 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM Unica Campaign バージョン 8 リリース 6 モディフィケーション 0、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原典： IBM Unica Campaign
Version 8 Release 6
February, 2013
Administrator's Guide

発行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担当： トランスレーション・サービス・センター

第1刷 2013.4

© Copyright IBM Corporation 1998, 2013.

目次

第 1 章 IBM Unica Campaign での管理 1

IBM Unica Marketing での Campaign 関連の管理用タ スク	1
---	---

第 2 章 IBM Unica Campaign でのセキ ュリティーの管理 3

セキュリティ・ポリシーについて	3
グローバル・セキュリティ・ポリシー	3
Campaign による権限の評価方法	4
所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用	5
セキュリティ・ポリシーの設計に関するガイドラ イン	5
セキュリティ・シナリオ	6
シナリオ 1: 単一部門を持つ会社	6
シナリオ 2: 複数の独立した部門を持つ会社	8
シナリオ 3: 部門内での制限付きアクセス	10
セキュリティ・ポリシーの実装	11
セキュリティ・ポリシーを作成するには	11
セキュリティ・ポリシーを削除するには	12
フォルダーやオブジェクトにセキュリティ・ポ リシーを割り当てる	12
Campaign での管理権限について	13
レポート・フォルダー権限を構成するには	13
参照資料: Campaign での管理権限	14
Windows 偽装の管理	18
Windows 偽装とは?	19
Windows 偽装を使用する理由	19
Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係	19
Windows 偽装グループ	19
Windows 偽装と IBM Unica Marketing へのログ イン	19
Windows 偽装の作業	20
プロキシ・サーバー認証のサポートについて	21
proxy という名前の仮想データ・ソースに関する 認証の資格情報を設定するには	22

第 3 章 データベース表の管理 23

テーブル管理の概念	23
システム・テーブルとは	23
ユーザー・テーブルとは	23
テーブルのマッピングについて	25
データ・ディクショナリーとは	25
テーブル・カタログとは	26
テーブルの初期管理タスク	27
前提条件: インストール後に前提となる状態	27
システム・テーブルのアクセスをテストする方法	27
ユーザー・テーブルのアクセスをテストする方法	28
「Customer」オーディエンス・レベルのシステ ム・テーブルのマッピング	29
システム・テーブルの作業	30

システム・テーブルをマップまたは再マップする 方法	30
システム・テーブルをマップ解除する方法	31
システム・テーブルの内容を表示する方法	32
ユーザー・テーブルの作業	32
ユーザー・テーブルの作業について	33
ユーザー・テーブルのマッピングのガイドライン	33
フローチャート内からデータ・ソースにアクセス する方法	33
フローチャートを編集する際のユーザー・テー ブルの作業	34
「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テ ーブルの作業	34
データ・ディクショナリーの作業	48
データ・ディクショナリーを開く方法	48
変更をデータ・ディクショナリーに適用する方法	48
データ・ディクショナリーをいつ使用するか	48
データ・ディクショナリーの構文	48
新しいデータ・ディクショナリーを手動で作成す る方法	49
テーブル・カタログの作業	49
テーブル・カタログにアクセスする方法	50
テーブル・カタログを開く方法	50
テーブル・カタログの作成方法	50
保管テーブル・カタログのロード方法	51
テーブル・カタログの削除	52
テーブル・カタログ内のテーブルの事前計算され たプロファイルを更新する方法	52
テーブル・カタログのデータ・フォルダーの定義 方法	53

第 4 章 キャンペーンのカスタマイズ . . . 55

カスタム・キャンペーン属性	55
カスタム・セル属性	55
カスタム・オフター属性	56
静的属性とは	56
表示されない静的属性とは	56
パラメーター化された属性とは	57
カスタム属性の作業	57
カスタム属性の作成	57
カスタム属性の変更方法	59
カスタム・イニシアチブ	61
イニシアチブの追加方法	61
カスタム製品	61
製品の追加方法	61

第 5 章 オフター・テンプレートの管理 63

オフターとは	63
オフター・テンプレートとは	63
オフター・テンプレートとセキュリティ	64
オフター・テンプレートを使用する理由	64

オファー・テンプレートおよびオファーの計画	65
オファー属性を操作する	65
オファー・テンプレートでのカスタム属性の使用	65
カスタム属性の作成	65
カスタム属性の変更方法	68
Campaign 内の標準のオファー属性	69
オファー・テンプレートを操作する	69
オファー・テンプレートでのドロップダウン・リストの使用	70
オファー・テンプレートを作成するには	71
オファー・テンプレートを変更するには	72
オファー・テンプレートを並べ替えるには	73
オファー・テンプレートを回収するには	74
「チャネル」属性へのリスト値の追加	74
テンプレート・アイコン	75
デフォルトのオファー属性	76
Campaign オfferでの Marketing Operations 資産の使用の概要	76
Campaign オfferで Marketing Operations 資産を使用するためのガイドライン	77
Campaign オfferで Marketing Operations の資産を使用するための設定	78

第 6 章 オーディエンス・レベルの管理 81

オーディエンス・レベルについて	81
Campaign で複数の異なるオーディエンス・レベルが必要となる理由	82
デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベル追加のオーディエンス・レベルの作成	82
オーディエンス・レベルおよびシステム・テーブルについて	83
デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベルのシステム・テーブル	83
オーディエンス・レベルおよび戦略的セグメントについて	83
オーディエンス・レベルのユニーク ID	84
オーディエンス・レベルに固有のテーブルの必須フィールド	84
オーディエンス・レベルおよびユーザー・テーブルについて	86
単一のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル	86
複数のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル	87
オーディエンス・レベルの作業	87
新しいオーディエンス・レベルをセットアップするためのワークフロー	88
オーディエンス・レベルの削除	91
グローバル抑制およびグローバル抑制セグメントについて	91
グローバル抑制が設定されたオーディエンスの切り替え	92
グローバル抑制セグメントの作成について	92
グローバル抑制セグメントの更新	93
グローバル抑制セグメントの削除	94
グローバル抑制のためのロギング	94

第 7 章 コンタクト履歴の管理 95

コンタクト履歴の概念	95
コンタクト履歴とは	95
詳細コンタクト履歴とは	96
コンタクト・ステータスとは	96
コンタクト・ステータスの更新について	97
コンタクト履歴とオーディエンス・レベルとの関係	97
コンタクト履歴とデータベース・テーブルおよびシステム・テーブルとの関係	97
オファー履歴とは	97
処理履歴とは	98
コンタクト履歴の作業	99
新しいオーディエンス・レベル用のコンタクト履歴テーブルの作成	99
コンタクト履歴テーブルからシステム・テーブルへのマッピング	99
コンタクト・ステータス・コードの追加方法	99
履歴のロギング	100
コンタクト履歴の更新	101
コンタクト履歴の消去	101
デフォルトのコンタクト・ステータス・コード	101

第 8 章 レスポンス履歴の管理 103

レスポンス履歴の概念	103
レスポンス履歴とは	103
レスポンス・タイプとは	103
レスポンス履歴とオーディエンス・レベルの関係	104
レスポンス履歴とデータベース表の関係	104
レスポンス履歴テーブルでの外部キー制約	104
操作テーブルとは	104
操作テーブルに何が含まれるか	104
操作テーブルを使用する理由	105
レスポンス履歴の操作	105
新しいオーディエンス・レベル用のレスポンス履歴テーブルの作成	105
レスポンス履歴テーブルから IBM Unica システム・テーブルへのマッピング	105
オファーの有効期限が切れた後にレスポンスを記録する日数を設定するには	105
レスポンス・タイプを追加するには	106
レスポンス履歴のログ	106
レスポンス履歴の参照資料	106
デフォルトのレスポンス・タイプ	107
サンプル UA_ActionCustomer テーブル	107

第 9 章 操作モニター 109

操作モニターを構成するには	109
「すべてのモニターされている実行」ページにアクセスするには	109
「すべてのモニターされている実行」ページの表示	109
「すべてのモニターされている実行」ページでフローチャート・リストをソートするには	110
関連するキャンペーンまたはフローチャートを表示するには	110

「すべてのモニターされている実行」ページの表示を最新表示するには	110
「すべてのモニターされている実行」ページでフローチャート进行操作する	111
実行中のフローチャートを停止するには	111
実行中のフローチャートを中断するには	111
中断されたフローチャートを再開するには	112
操作モニターの参照資料	112
フローチャートの状態と操作	112
操作モニターに関連するプロパティ	114
「すべてのモニターされている実行」ページのアイコン	114

第 10 章 ディメンション階層の管理 117

ディメンション階層とは	117
ディメンション階層を使用する理由	117
ディメンション階層およびキューブについて	118
ディメンション階層およびデータベース表について	118
ディメンション階層の作業	119
ディメンション階層の作業について	119
ディメンション階層の設計	120
Campaign のディメンション階層へのアクセス	120
ディメンション階層を作成する	120
保管ディメンション階層をロードする	121
ディメンション階層を編集する	121
ディメンション階層を更新する	122
ディメンション階層を削除する	122

第 11 章 トリガーの管理 123

インバウンド・トリガーとは	123
インバウンド・トリガーを使用する理由	123
インバウンド・トリガーとスケジュール・プロセス	123
ブロードキャストとは?	123
発信トリガーとは	124
同期発信トリガー	124
非同期発信トリガー	124
発信トリガーを使用する理由	125
発信トリガーの戻り値	125
トリガーを定義する方法	125
トリガー・フォルダーおよびトリガーに関する作業	125
トリガーを編成するためのフォルダーを作成するには	125
トリガー・フォルダーを移動するには	126
トリガー・フォルダーを編集するには	126
トリガー・フォルダーを削除するには	127
トリガーを作成するには	127
トリガーを編集または移動するには	128
トリガーを削除するには	129
発信トリガーのセットアップ	129
発信トリガーを実行するためのプロセスのセットアップ	129
成功したときに発信トリガーが実行されるようにフローチャートをセットアップするには	130
失敗したときに発信トリガーが実行されるようにフローチャートをセットアップするには	130

インバウンド・トリガーのセットアップ	130
インバウンド・トリガーをセットアップするには	131
インバウンド・トリガーを使用して実行するためのスケジュール・プロセスの構成	131
トリガーをキャンペーンのすべてのフローチャートにブロードキャストするには	132
トリガーをフローチャートにブロードキャストするには	132
トリガーをすべてのキャンペーンにブロードキャストするには	132
リモート Windows マシンでのトリガー・ユーティリティのセットアップ	133
unica_actrg ユーティリティ: 必要なファイル	133
トリガーの管理に関する参照情報	134
トリガーによってサポートされるトークン	134
Campaign トリガー・ユーティリティの構文	135
Campaign トリガー・ユーティリティのオプション	135

第 12 章 ロギングの管理 137

Campaign リスナー・ログ	137
Campaign Web アプリケーション・ログ	137
Campaign Server Manager ログ	138
Campaign セッション・ユーティリティ・ログ	138
クリーンアップ・ユーティリティ・ログ	138
フローチャート・ログ	138
セッション・ログ	138
Web 接続ログ	139
Windows イベント・ログ	139
log4j ログ・ファイル	139
ログ进行操作する	139
Campaign リスナーのロギング・タスク	139
Campaign Web アプリケーションのロギング・タスク	140
フローチャートのロギング・タスク	140
Windows イベント・ロギング・タスク	143
log4j ロギング・タスク	143

第 13 章 固有コードの管理 145

キャンペーン・コードについて	145
オファーク・コードについて	145
セル・コードについて	146
処理コードについて	146
コード形式	147
デフォルトのコード形式	147
コード形式の要件	148
デフォルトのコード形式の変更について	148
コード構成プロパティについて	149
コード・ジェネレーターについて	149
Campaign のデフォルトのコード・ジェネレーター	149
カスタム・コード・ジェネレーターについて	150
カスタム・コード・ジェネレーターの要件	150
カスタム・コード・ジェネレーターを使用するための Campaign の構成について	150
カスタム・コード・ジェネレーターの作成について	152

固有コードの出力について	152
エラーの出力について	152
カスタム・コード・ジェネレーターの配置につい て	152
カスタム・オファ―・コード・ジェネレーターの 場所を指定するには	153
コード生成の参照	153
コード生成に関連したプロパティー	153
デフォルトのキャンペーンおよびセル・コード・ ジェネレーターのパラメーター	154
デフォルトのオファ―のコード・ジェネレーター のパラメーター	155
カスタム・コード・ジェネレーターのパラメータ ー	155

第 14 章 拡張設定の管理. 157

拡張設定へのアクセス方法	157
「全般」設定について	157
フローチャート実行結果を保存する	157
フローチャート実行中にデータベース内最適化を 使用する	158
このフローチャートのグローバル抑制を無効にす る	158
2000 年 (Y2K) しきい値	158
自動保存	159
チェックポイント	159
許可されるデータ・エラーの最大数	159
フローチャート実行エラーでトリガー送信	160
フローチャート成功でトリガー送信	160
「サーバー最適化」設定について	160
Campaign による仮想メモリ使用量	160
このフローチャートでは一時テーブルを使用しな い	160
「テスト実行設定」について	160

第 15 章 IBM Unica Campaign のユー ティリティー. 163

Campaign リスナー (unica_aclsnr)	163
Campaign リスナーの要件	163
Campaign リスナーの構文	163
Campaign リスナー・オプション	164
リスナーの開始と停止	164
Campaign リスナー・ログ	166
Campaign リスナー・シャットダウン・ユーティリ ティー (svrstop)	166
Campaign svrstop ユーティリティーの参照資料 svrstop ユーティリティーを使用して Campaign リスナーをシャットダウンするには	167
svrstop ユーティリティーを使用して Optimize リスナーをシャットダウンするには	168
Campaign Server Manager (unica_svradm)	168
Campaign Server Manager を実行するには	168
Campaign Server Manager コマンド	169
実行中のフローチャートを強制終了するには	175
Campaign セッション・ユーティリティー (unica_acsesutil)	175

unica_acsesutil で必要な環境変数	175
Campaign セッション・ユーティリティーのユー ースケース	176
Campaign セッション・ユーティリティーの戻り 値	180
Campaign セッション・ユーティリティーの構文	180
Campaign セッション・ユーティリティーのオブ ション	180
Campaign クリーンアップ・ユーティリティー (unica_acclean)	183
unica_acclean で必要な環境変数	183
Campaign クリーンアップ・ユーティリティーの ユースケース	183
キャンペーン・クリーンアップ・ユーティリテ ーの構文	187
Campaign クリーンアップ・ユーティリティーの オプション	187
Campaign レポート生成ユーティリティー (unica_acgenrpt)	190
ユースケース: フローチャート実行からのセル数 の取得	191
IBM Unica Campaign レポート生成ユーティリ ティーの構文	191
IBM Unica Campaign レポート生成ユーティリ ティーのさまざまなオプション	191
ActiveX クリーンアップ・ユーティリティー (uacflchk)	194
ActiveX クリーンアップ・ユーティリティーの前 提条件	194
ActiveX クリーンアップ・ユーティリティーの構 文	194
検査モードでの ActiveX クリーンアップ・ユー ティリティーの実行 (オプションなし)	195
ActiveX クリーンアップ・ユーティリティーのオ プション	196
データベース・テスト・ユーティリティー	196
cxntest ユーティリティー	196
odbctest ユーティリティー	197
db2test ユーティリティー	199
oratest ユーティリティー	200
データベース・ロード・ユーティリティー	200
高速ローダーで繰り返されるトークン	201

第 16 章 IBM Coremetrics と Campaign の統合. 203

IBM Coremetrics と Campaign を統合する方法	203
変換テーブルについて	207
変換テーブルのマッピング	209

第 17 章 Campaign を非 ASCII デー タ用に構成する. 211

非 ASCII データまたは非 US ロケールの使用につ いて	211
文字エンコードについて	211
非 ASCII データベースとの相互作用について	211
複数ロケール・フィーチャーについて	213

非 ASCII 言語または米国以外のロケール用に Campaign を構成する	214
オペレーティング・システムの言語と地域の設定	215
Web アプリケーション・サーバーのエンコード・パラメーターの設定 (WebSphere のみ)	216
Campaign の言語とロケールのプロパティ値の設定	216
システム・テーブルのマップ解除と再マップ	217
データベースおよびサーバーの構成の検査	217
複数ロケール用の Campaign の構成	221
始める前に: Campaign がインストールされている必要があります	221
SQL Server での複数ロケールの構成	221
Oracle での複数ロケールの構成	222
DB2 での複数ロケールの構成	223

付録 A. 構成ページの構成プロパティ 227

Marketing Platform 構成プロパティ	227
全般 ナビゲーション (Navigation)	227
全般 データのフィルター操作 (Data filtering)	228
全般 パスワード設定 (Password settings)	228
全般 その他 (Miscellaneous)	230
Platform	231
Platform Scheduler	233
Platform Scheduler 反復定義 (Recurrence definitions)	234
Platform Scheduler スケジュール登録 (Schedule registrations) キャンペーン [オブジェクト・タイプ (Object type)]	235
Platform Scheduler スケジュール登録 (Schedule registrations) キャンペーン [オブジェクト・タイプ (Object type)] [スロットル・グループ (Throttling group)]	236
Platform セキュリティー	237
Platform セキュリティー ログイン方式の詳細 (Login method details) Windows 統合ログイン (Windows integrated login)	237
Platform セキュリティー ログイン方式の詳細 (Login method details) LDAP	240
Platform セキュリティー ログイン方式の詳細 (Login method details) Web アクセス制御 (Web access control)	243
Platform セキュリティー ログイン方式の詳細 (Login method details) LDAP 同期 (LDAP synchronization)	244
Platform セキュリティー ログイン方式の詳細 (Login method details) LDAP 同期 (LDAP synchronization) Unica グループへの LDAP 参照のマップ (LDAP reference to Unica group map)	252
レポート作成の構成プロパティ	253
レポート 統合 Cognos [バージョン]	253
レポート スキーマ (Schemas) [製品] [スキーマ名 (schema name)] SQL 構成 (SQL Configuration)	257
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン	258

レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン オファー・パフォーマンス (Offer Performance)	258
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン [スキーマ名 (schema name)] 列 [コンタクト指標 (Contact Metric)]	260
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン [スキーマ名 (schema name)] 列 [レスポンス指標 (Response Metric)]	261
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン パフォーマンス	262
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン オファー・レスポンスの詳細 (Offer Response Breakout)	263
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン オファー・レスポンスの詳細 (Offer Response Breakout) [レスポンス・タイプ (Response Type)]	264
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスによるブレイクアウト (Campaign Offer Contact Status Breakout)	265
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスによるブレイクアウト (Campaign Offer Contact Status Breakout) [コンタクト・ステータス・コード]	266
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン カスタム属性 列 [キャンペーン・カスタム列 (Campaign Custom Column)]	266
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン カスタム属性 列 [オファー・カスタム列 (Offer Custom Column)]	267
レポート スキーマ (Schemas) キャンペーン カスタム属性 列 [カスタム列のセル (Cell Custom Column)]	268
レポート スキーマ (Schemas) インタラクト (Interact)	269
レポート スキーマ (Schemas) インタラクト (Interact) インタラクト・パフォーマンス (Interact Performance)	270
レポート スキーマ (Schemas) eMessage	271
Campaign 構成プロパティ	271
Campaign	271
Campaign コラボレーション (Collaborate)	273
Campaign ナビゲーション (navigation)	273
Campaign キャッシング (caching)	275
Campaign パーティション	277
Campaign モニター	371
Campaign ProductReindex	373
Campaign unicaACLlistener	374
Campaign サーバー (server)	379
Campaign ロギング (logging)	379

付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字	381
サポートされていない特殊文字	381

命名上の制約を持たないオブジェクト	381
特定の命名上の制約を持つオブジェクト	382
ユーザー定義フィールドの命名上の制約	382

付録 C. ユーザー・テーブルにおいてサ ポートされるデータ型 383

付録 D. 国際化対応およびエンコード 387

Campaign での文字エンコード	387
西ヨーロッパ	387
Unicode エンコード	388
アラビア語	388
アルメニア語	388
バルト海沿岸語	388
ケルト語	389
中央ヨーロッパ	389
中国語 (簡体字および繁体字)	389
中国語 (簡体字)	389
中国語 (繁体字)	389
キリル文字	389
英語	390
グルジア語	390
ギリシャ語	390
ヘブライ語	390

アイスランド語	390
日本語	390
韓国語	391
ラオ語	391
北ヨーロッパ	391
ルーマニア語	391
南ヨーロッパ	391
タイ語	391
トルコ語	391
ベトナム語	392
その他	392
日付と時刻の形式	392
DateFormat および DateTimeFormat の形式	392
DateOutputFormatString および DateTimeOutputFormatString の形式	394

付録 E. Campaign のエラー・コード 397

Campaign エラー・コード	397
----------------------------	-----

IBM Unica 技術サポートへの連絡 . . . 447

特記事項 449

商標	451
--------------	-----

第 1 章 IBM Unica Campaign での管理

Campaign 内のほとんどの管理機能には、「設定」>「キャンペーン設定」リンクから使用できる、「キャンペーン設定」ページからアクセスできます。このページから、以下のような、管理タスクの 2 つの主なカテゴリーにアクセスできます。

- **テンプレートとカスタマイズ。** 以下のタイプのオブジェクトを作成および管理するページにアクセスできます。
 - キャンペーン、オファー、およびセルのカスタム属性
 - オファーを作成するためのテンプレート
- **データ・ソース操作。** 以下のタスクを実行するためのページにアクセスできます。
 - テーブル・マッピング - ユーザーおよびシステムのテーブル・マッピングを管理します
 - データ・ソース・アクセス - データ・ソースの詳細を管理および表示します
 - ディメンション階層 - ビジネス・オペレーションに必要なディメンション階層を作成および管理します
 - オーディエンス・レベル - ビジネス・オペレーションに必要なオーディエンス・レベルを作成および管理します
 - システム・ログ - 現行セッションのリスナー (acslsr) ログを表示します

IBM Unica Marketing での Campaign 関連の管理用タスク

IBM® Unica Marketing 全体に実装された機能や関数を含む Campaign の管理用タスクは、Marketing Platform で実行されます。これらには以下のタスクが含まれます。

- ユーザー、グループ、役割割り当て、セキュリティー・ポリシー、および許可の管理
- Windows 偽装の管理
- プロキシ・サーバー認証の構成
- 構成プロパティの管理
- レポート作成の構成
- IBM Unica® Scheduler によるフローチャートのスケジューリング

これらのタスクの実行方法について詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

第 2 章 IBM Unica Campaign でのセキュリティの管理

Campaign は Marketing Platform のセキュリティ機能を使用して、Campaign のオブジェクトと機能へのユーザー・アクセスを制御します。管理者は Marketing Platform のセキュリティ・インターフェースを使用して、Campaign へのユーザー・アクセスに必要なユーザー・アカウント、グループ・メンバーシップ、役割、および権限を構成します。

Campaign のオブジェクトと機能へのユーザー・アクセスは、セキュリティ・ポリシーを使って実装されます。

セキュリティ・ポリシーについて

セキュリティ・ポリシーは Campaign のセキュリティを管理する「ルール・ブック」であり、ユーザーがアプリケーションで操作を実行するたびにそれが参照されます。セキュリティ・ポリシーはパーティションごとに作成されます (複数のパーティション間でセキュリティ・ポリシーが共有されることはありません)。Campaign の 1 つのパーティションで複数のセキュリティ・ポリシーを設定することができます。

1 つのセキュリティ・ポリシーは、定義される複数の役割から成ります。それぞれの役割には、ユーザーが実行できる操作とアクセスできるオブジェクトを決定する権限のセットが含まれます。ユーザーを役割に直接割り当てることができます。または、グループを役割に割り当てすることもできます (グループ内のユーザーが役割に割り当てられます)。

最上位フォルダーでキャンペーンやオファーなどのオブジェクトを作成するとき、セキュリティ・ポリシーをそのオブジェクトに適用します。さらに、最上位フォルダーを作成するとき、セキュリティ・ポリシーをフォルダーに適用すると、そのフォルダー内に作成されるオブジェクトやサブフォルダーは、フォルダーに適用されたセキュリティ・ポリシーを継承します。

セキュリティ・ポリシーをオブジェクトやフォルダーに適用することで、Campaign のオブジェクトをさまざまなユーザー・グループ用に分けることができます。例えば、1 つのポリシーに属するユーザーが、他のポリシーに関連付けられたオブジェクトにアクセスできないよう (表示さえできないよう) セキュリティ・ポリシーを構成することができます。

独自のセキュリティ・ポリシーを作成できます。あるいは、Campaign に含まれるデフォルトのグローバル・セキュリティ・ポリシーを使用することもできます。

グローバル・セキュリティ・ポリシー

Campaign には、デフォルトのグローバル・セキュリティ・ポリシーが含まれています。これはそのまま使用することも、組織の必要に合わせて変更することもでき

ます。独自のセキュリティー・ポリシーを作成しないことにした場合、Campaign で作成したオブジェクトに対して、デフォルトのグローバル・セキュリティー・ポリシーが適用されます。

独自のポリシーとグローバル・ポリシーを併用することも、専ら独自のポリシーを使用することもできます。グローバル・ポリシーは、使用されていない場合でも、削除できません。

作成するセキュリティー・ポリシーはすべて、グローバル・セキュリティー・ポリシーの下に置かれます。グローバル・ポリシーの下に、組織内の各部門の従業員用のセキュリティー・ポリシーを個別に作成することもできます。

グローバル・セキュリティー・ポリシーには、事前に定義された 6 つの役割が含まれています。必要に応じてグローバル・ポリシーに役割を追加することができます。事前に定義された役割を削除することはできませんが、その権限を変更することは可能です。

事前に定義されている役割は、次のとおりです。

- **フォルダー所有者** - すべての権限が有効。
- **オブジェクト所有者** - すべての権限が有効。
- **管理** - すべての権限が有効。デフォルトのユーザー `asm_admin` には、この役割が割り当てられます。
- **実行** - すべての権限が有効。
- **設計** - ほとんどのオブジェクトに対する読み取り権限および書き込み権限。フローチャートやセッションをスケジュールに入れることはできません。
- **承認** - 読み取り専用権限。

グローバル・セキュリティー・ポリシーは、所有者役割およびフォルダー所有者役割を介してすべてのユーザーに適用されます。これには、グローバル・ポリシー内で他のどの特定の役割にも割り当てられていないユーザーも含まれます。グローバル・ポリシーは常に適用されるため、これは例えば役割に対する権限をグローバルに拒否するために使用できます。

Campaign による権限の評価方法

ユーザーがタスクを実行する際、またはオブジェクトへのアクセスを試行する際、Campaign は以下のステップを実行します。

1. グローバル・セキュリティー・ポリシー内でユーザーが所属するすべてのグループおよび役割を識別します。ユーザーは、1 つの役割に属することも、多数の役割に属することも、あるいはどの役割にも属さないこともできます。ユーザーはオブジェクトを所有している場合には所有者役割に属します。オブジェクトが置かれているフォルダーを所有している場合にはフォルダー所有者役割に属します。ユーザーは、(直接的に、またはその役割に割り当てられているグループに属しているために) その他の特定の役割に明確に割り当てられている場合のみ、その役割に属します。

2. アクセスされているオブジェクトがカスタム定義ポリシー（存在する場合）に割り当てられているかどうかを識別します。割り当てられている場合、そのカスタム・ポリシー内でユーザーが所属するすべてのグループおよび役割がシステムで識別されます。
3. ステップ 1 とステップ 2 の結果に基づいて、ユーザーの所属先の役割すべての権限を集約します。この複合役割を使用して、アクションの権限がシステムで次のように評価されます。
 - a. 対象のアクションに関していずれかの役割が「拒否 (Denied)」権限を持つ場合、ユーザーはそれを実行できません。
 - b. 対象のアクションに関して「拒否 (Denied)」権限を持つ役割がない場合、そのアクションに関して「許可 (Granted)」権限を持つ役割があるかどうかを判断するために検査されます。その役割がある場合、ユーザーはそのアクションを実行できます。
 - c. a と b のどちらも当てはまらない場合、ユーザーは権限を拒否されます。

所有者役割およびフォルダー所有者役割の使用

デフォルトでは、各セキュリティ・ポリシーには、すべての権限が付与されている所有者役割とフォルダー所有者役割が含まれています。これらの役割は、デフォルトでは、セキュリティ・ポリシーの作成時に作成されます。カスタム設計セキュリティ・ポリシーがあればそこからこれらの役割を削除したり、権限を変更したり、デフォルトの権限を使用したりすることができます。グローバル・セキュリティ・ポリシーでこれらの役割の権限を変更することは可能ですが、削除することはできません。

所有者役割とフォルダー所有者役割はすべてのユーザーに適用されます。ユーザーをそれらの役割に割り当てる必要はありません。所有者役割は、ユーザーが作成した単一のオブジェクトに適用されます。フォルダー所有者役割は、ユーザーが所有するフォルダー内のすべてのオブジェクトに適用されます。

これらの役割は、ユーザー自身が所有していないオブジェクトにアクセスするのを制限する際に便利です。例えば、セキュリティ・ポリシー内の全オブジェクトに対する読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を作成することができます。すべてのユーザーを読み取り専用役割に割り当てます。他の役割が権限（例えば編集または削除）を明示的に拒否しない限り、各ユーザーは（所有者役割の下）所有オブジェクトの編集または削除と、（フォルダー所有者役割の下）各自が所有するフォルダー内のオブジェクトの編集または削除を行うことができますが、他のユーザーが所有するオブジェクトとフォルダーについては（読み取り専用役割の下）表示のみ可能です。

セキュリティ・ポリシーの設計に関するガイドライン

セキュリティ・ポリシーを設計する際、以下のガイドラインに従ってください。

- ・ **設計をシンプルに保つ。** Campaign では複数のセキュリティ・ポリシーおよび役割を作成することが可能ですが、セキュリティ設計はできるだけシンプルに保ち、セキュリティの必要を満たすために使用するポリシーおよび役割の数はできるだけ少なくする必要があります。例えば、最低限のレベルとして、新しい役割やポリシーを作成せずにデフォルトのグローバル・セキュリティ・ポリシーをそのまま使用することができます。

- **セキュリティー・ポリシー間の潜在的な競合を回避する。** 組織で複数のセキュリティー・ポリシーを実装する場合、ポリシーを設計する際に潜在的な競合について留意してください。例えば、複数のセキュリティー・ポリシーで移動権限およびコピー権限を持つユーザーは、その権限を持つポリシーを越えた場所にオブジェクトおよびフォルダーを移動またはコピーすることができます。これを行う際、移動されたオブジェクトまたはフォルダーは宛先のセキュリティー・ポリシーを取るため (別のフォルダーの下にある場合)、ある場所においては正当なユーザーが、宛先のセキュリティー・ポリシーでは役割を持たないために、移動されたオブジェクトにアクセスできなくなることがあります。あるいは、オブジェクトにアクセスする予定ではなかった、宛先のセキュリティー・ポリシーで役割を持つユーザーが、移動されたオブジェクトにアクセスできるようになることもあります。
- **ユーザーがオブジェクトを変更できるようにするために表示権限を割り当てる。** Campaign の多数のオブジェクトを変更するには、オブジェクトに対する表示権限と変更権限の両方が付与されている必要があります。この要件は、以下のオブジェクトに当てはまります。
 - キャンペーン
 - フローチャート
 - オファー
 - オファー・リスト
 - オファー・テンプレート
 - セッション
 - 戦略的セグメント

セキュリティー・シナリオ

このセクションでは、セキュリティー・モデルの例を挙げ、セキュリティー・ポリシーを使って Campaign で実装する方法について説明します。

- 『シナリオ 1: 単一部門を持つ会社』
- 8 ページの『シナリオ 2: 複数の独立した部門を持つ会社』
- 10 ページの『シナリオ 3: 部門内での制限付きアクセス』

シナリオ 1: 単一部門を持つ会社

社内の全従業員が同じオブジェクト (キャンペーン、オファー、テンプレートなど) のセットに対して作業を行います。オブジェクトの共有と再利用が推奨されています。従業員のグループが互いのオブジェクトにアクセスできないようにする必要はありません。オブジェクトに対する従業員のアクセス権限、変更権限、または使用権限を決定する権限のセットを、組織内における役割に基づいて作成する必要があります。

解決策

オブジェクトをグループまたは部門ごとに分ける必要はないので、必要なセキュリティー・ポリシーは 1 つだけです。既存のグローバル・セキュリティー・ポリシーで従業員の職務に応じて役割を定義し、役割ごとに各オブジェクトまたは機能に対する適切な権限を定義します。

表 1. このシナリオにおけるオブジェクト権限

機能/役割	管理者	設計者	レビュー担当者
キャンペーン	☒	☐	☐
• キャンペーンの追加	☒	☒	☐
• キャンペーンの編集	☒	☒	☐
• キャンペーンの削除	☒	☒	☐
• キャンペーンの実行	☒	☐	☐
• キャンペーン要約の表示	☒	☒	☒
オファー	☒	☐	☐
• オファーの追加	☒	☒	☐
• オファーの編集	☒	☒	☐
• オファーの削除	☒	☐	☐
• オファーの撤回	☒	☐	☐
• オファーの要約の表示	☒	☒	☒

例えば、管理者にはキャンペーンおよびオファーに対する全アクセス権限および編集権限があります。レビュー担当者は、キャンペーンおよびオファーにアクセスすることはできますが、それらを追加、編集、削除、または実行することはできません。

オプションで、それらの役割と一致するユーザー・グループを IBM Unica Marketing で作成し、ユーザーをそのグループに追加するだけでユーザー権限を割り当てることもできます。

以下の表は、このシナリオにおけるオブジェクト権限の一部のサンプルを示しています。

表 2. このシナリオにおけるオブジェクト権限

機能/役割	管理者	設計者	レビュー担当者
キャンペーン	☒	☐	☐

表 2. このシナリオにおけるオブジェクト権限 (続き)

機能/役割	管理者	設計者	レビュー担当者
• キャンペーンの追加	☒	☒	☐
• キャンペーンの編集	☒	☒	☐
• キャンペーンの削除	☒	☒	☐
• キャンペーンの実行	☒	☐	☐
• キャンペーン要約の表示	☒	☒	☒
オファー	☒	☐	☐
• オファーの追加	☒	☒	☐
• オファーの編集	☒	☒	☐
• オファーの削除	☒	☐	☐
• オファーの撤回	☒	☐	☐
• オファーの要約の表示	☒	☒	☒

シナリオ 2: 複数の独立した部門を持つ会社

Eastern、Western という 2 つの業務部門が社内であり、それらの間でデータは共有されません。各部門内でそれぞれ異なる職務を果たす人は同じオブジェクト (キャンペーン、オファー、テンプレート) にアクセスする必要がありますが、そのオブジェクトに対して持つ権限はその役割に応じて異なります。

解決策

それぞれ適切な役割と権限を持つ、2 つの別個のセキュリティー・ポリシーを定義します。各セキュリティー・ポリシー内の役割は、それぞれの部門の必要に応じて、同じにすることも別にすることもできます。両方の部門にまたがって作業を行う必要がある個人 (例えば、業務担当者、部門間管理者、または CEO) を除き、1 つのポリシーだけで各ユーザーを役割に割り当てます。グローバル・ポリシー内では、ユーザーに役割を割り当てないでください。両方の部門にまたがって作業を行うユーザーの場合は、グローバル・ポリシー内で役割を割り当て、必要な権限を付与します。

キャンペーン、オファーなどを格納するための、各ポリシーに属する最上位フォルダーを作成します。それらのフォルダーは、各部門に固有のものです。一方のポリシー内で役割を持つユーザーは、他方のポリシーに属するオブジェクトを見ることができません。

以下の表は、Campaign で可能なオブジェクト権限のサンプルのほんの一部を示しています。

表 3. Eastern 部門のセキュリティー・ポリシー

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	管理者	設計者	レビュー担当者
キャンペーン	☒	☒	☒	☐	☐
・ キャンペーンの追加	☒	☒	☒	☒	☐
・ キャンペーンの編集	☒	☒	☒	☒	☐
・ キャンペーンの削除	☒	☒	☒	☒	☐
・ キャンペーン要約の表示	☒	☒	☒	☒	☒
オファー	☒	☒	☒	☐	☐
・ オファーの追加	☒	☒	☒	☒	☐
・ オファーの編集	☒	☒	☒	☒	☐
・ オファーの削除	☒	☒	☒	☐	☐
・ オファーの要約の表示	☒	☒	☒	☒	☒

表 4. Western 部門のセキュリティー・ポリシー

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	管理者	設計者	レビュー担当者
キャンペーン	☒	☒	☒	☐	☐
・ キャンペーンの追加	☒	☒	☒	☒	☐
・ キャンペーンの編集	☒	☒	☒	☒	☐

表 4. Western 部門のセキュリティー・ポリシー (続き)

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	管理者	設計者	レビュー担当者
• キャンペーンの削除	☒	☒	☒	☒	☒
• キャンペーン要約の表示	☒	☒	☒	☒	☒
オファー	☒	☒	☒	☐	☐
• オファーの追加	☒	☒	☒	☒	☒
• オファーの編集	☒	☒	☒	☒	☒
• オファーの削除	☒	☒	☒	☒	☒
• キャンペーンの追加	☒	☒	☒	☒	☒

シナリオ 3: 部門内での制限付きアクセス

会社の部門内の従業員には同じオブジェクト (キャンペーン、オファー、テンプレートなど) のセットに対する読み取り権限が必要ですが、編集と削除は各自の所有オブジェクトと、各自が所有するフォルダー内のオブジェクトに対してのみ行えます。

解決策

オブジェクトに対する読み取り権限だけを付与する読み取り専用役割を定義します。部門内のすべてのユーザーをこの役割に割り当てます。所有者役割およびフォルダー所有者役割に対して定義したとおりのデフォルトの権限を保持します。

注: 会社で必要なセキュリティー・ポリシーが 1 つだけの場合、グローバル・ポリシーを使用して、すべてのユーザーを承認役割に割り当てることができます。

各ユーザーは (所有者役割の下) 所有オブジェクトの編集または削除と、(フォルダー所有者役割の下) 各自が所有するフォルダー内のオブジェクトの編集または削除を行うことができますが、他のユーザーが所有するオブジェクトとフォルダーについては (読み取り専用役割の下) 表示のみ可能です。

以下の表は、このシナリオにおけるオブジェクト権限の一部のサンプルを示しています。

表 5. シナリオ 3 におけるオブジェクト権限

機能/役割	フォルダー所有者	オブジェクト所有者	レビュー担当者
キャンペーン			
• キャンペーンの追加			
• キャンペーンの編集			
• キャンペーンの削除			
• キャンペーン要約の表示			
オファー			
• オファーの追加			
• オファーの編集			
• オファーの削除			
• オファーの要約の表示			

セキュリティ・ポリシーの実装

このセクションでは、Campaign でセキュリティ・ポリシーを作成したり削除したりする方法、およびセキュリティ・ポリシーを Campaign のフォルダーやオブジェクトに適用する方法について説明します。

注: Campaign セキュリティ・ポリシーに対して作業を行うには、Marketing Platform の「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページを管理するための権限が割り当てられている必要があります。複数パーティション環境では、platform_admin ユーザー、または PlatformAdminRole 役割を持つ別のアカウントだけが、すべてのパーティションのセキュリティ・ポリシーに対して作業を行えます。

セキュリティ・ポリシーを作成するには

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページが表示されます。
2. 「キャンペーン」ノードの下で、セキュリティ・ポリシーを追加するパーティションを選択します。
3. 「グローバル・ポリシー」をクリックします。

4. ページの右側で、「ポリシーの追加 (Add Policy)」をクリックします。
5. ポリシー名と説明を入力します。
6. 「変更の保存」をクリックします。

新規ポリシーが「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページの「グローバル・ポリシー」の下にリストされます。デフォルトでは、ポリシーにはフォルダー所有者役割とオブジェクト所有者役割が含まれています。

セキュリティ・ポリシーを削除するには

Campaign でユーザーが作成したセキュリティ・ポリシーで、使用されていないものがあれば、この手順を使用してそれを削除します。グローバル・ポリシーは削除できません。

注: Campaign でオブジェクトに対して適用されたセキュリティ・ポリシーは削除しないでください。使用中のセキュリティ・ポリシーを削除する必要がある場合はまず、そのセキュリティ・ポリシーを使用する各イベント・オブジェクト/フォルダーのセキュリティ・オブジェクトを別のポリシー (例えばグローバル・ポリシー) に設定します。これを行わないと、そのオブジェクトにアクセスできなくなる場合があります。

1. 「設定」>「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」をクリックします。

「ユーザーの役割と権限 (User Roles & Permissions)」ページが表示されます。

2. 「キャンペーン」ノードの下で、セキュリティ・ポリシーを削除するパーティションを選択します。
3. 「グローバル・ポリシー」の横の正符号をクリックします。
4. 削除するポリシーをクリックします。
5. 「ポリシーの削除 (Delete Policy)」をクリックします。

確認ダイアログが表示されます。

6. 「OK」をクリックして、ポリシーを削除します。

フォルダーやオブジェクトにセキュリティ・ポリシーを割り当てる

Campaign で最上位フォルダーまたはオブジェクトを作成するときには、そのセキュリティ・ポリシーを選択する必要があります。最上位オブジェクトまたはフォルダーに関連付けることができるのは、そのユーザーに役割が割り当てられているポリシーだけです。

デフォルトでは、Campaign の全オブジェクトがグローバル・ポリシーに関連付けられますが、オプションのカスタム定義ポリシーを割り当てることもできます。

フォルダーまたはオブジェクトをセキュリティ・ポリシーに関連付けるときには、以下の規則に注意してください。

- ・ フォルダー内のオブジェクトに対してセキュリティ・ポリシーを割り当てることはできません。オブジェクトは、それが格納されているフォルダーのセキュリティ・ポリシーを自動的に継承します。

- **最上位フォルダーはセキュリティ・ポリシーを決定します。** フォルダー内のオブジェクト (サブフォルダーを含む) は、親フォルダーのセキュリティ・ポリシーを継承します。言い換えると、最上位フォルダーのセキュリティ・ポリシーは、その中のオブジェクトおよびサブフォルダーのセキュリティ・ポリシーを決定します。したがって、フォルダー内のオブジェクトに対して手動でセキュリティ・ポリシーを割り当てることはできません。オブジェクトのセキュリティ・ポリシーを変更するには、適切なセキュリティ・ポリシーを持つフォルダーの中、または最上位ルート・フォルダーにオブジェクトを移動する必要があります。
- **オブジェクトが移動またはコピーされると、セキュリティ・ポリシーが変化します。** 複数のセキュリティ・ポリシー間でオブジェクトとフォルダーを移動またはコピーできますが、移動/コピーを実行するユーザーは、ソースと宛先の両方のポリシーでその操作を行う権限を持っている必要があります。

ソースとは異なるセキュリティ・ポリシーに属するフォルダーまたは場所にオブジェクトやフォルダーが移動/コピーされた後、その下位のオブジェクトやサブフォルダーのセキュリティ・ポリシーは、新しいフォルダーまたは場所のセキュリティ・ポリシーに自動的に変更されます。

Campaign での管理権限について

Campaign での管理権限はパーティションごとに割り当てられます。これらの管理機能は、セキュリティ・ポリシーにおけるオブジェクト関連の機能権限 (グローバル・セキュリティ・ポリシーを含む) とは異なります。これらの権限を持つユーザーは、パーティション内の任意のオブジェクトに対して、許可された操作を実行できます。

各パーティションには、事前定義された次の 4 つの役割があります。

- **管理** — すべての権限が有効です。デフォルトのユーザー `asm_admin` には、この役割が割り当てられます。
- **実行** — ほとんどの権限が有効です。ただし、クリーンアップ操作の実行、オブジェクト/フォルダーの所有権の変更、グローバル抑制の管理などの管理機能を除きます。
- **設計** — 「実行」役割と同じ権限です。
- **レビュー** — すべてのオブジェクトに対する読み取り専用アクセス権限。フローチャートの場合、これらのユーザーはフローチャートの編集モードにアクセスできますが、保存は許可されていません。

必要に応じて、それぞれのパーティションでこの他にも管理役割を追加できます。

Campaign で管理役割と権限を管理する手順は、Marketing Platform で役割と権限を管理する手順と同じです。

レポート・フォルダー権限を構成するには

「分析」メニュー項目とオブジェクト・タイプ (例えばキャンペーンやオファー) の「分析」タブへのアクセスを制御することに加えて、レポートのグループの権限を、それが物理的に保管される IBM Cognos® システム上のフォルダー構造に基づいて構成することができます。

1. **ReportSystem** 役割を持つ Campaign 管理者としてログインします。
2. 「設定」>「レポート・フォルダー権限の同期 (Sync Report Folder Permissions)」と選択します。

システムは、すべてのパーティションについて、IBM Cognos システムにあるフォルダーの名前を取得します。（これは、いずれかのパーティションのフォルダー権限を構成することに決めた場合、それをすべてのパーティションに対して構成する必要があることを意味します。）

3. 「設定」>「ユーザー権限」>「キャンペーン」と選択します。
4. 「キャンペーン」ノードの下での最初のパーティションを選択します。
5. 「役割の追加と権限の割り当て (Add Roles and Assign Permissions)」を選択します。
6. 「保存と権限の編集 (Save and Edit Permissions)」を選択します。
7. 「権限」フォームで、「レポート」を展開します。

「レポート」エントリーは、「レポート・フォルダー権限の同期」オプションの初回実行後に表示されます。

8. レポート・フォルダーのアクセス設定を適切に構成し、変更を保存します。
9. パーティションごとに、ステップ 4 から 8 を繰り返します。

参照資料: Campaign での管理権限

Campaign には、以下のカテゴリーの管理権限が含まれています。

- 管理
- オーディエンス・レベル
- データ・ソース
- ディメンション階層
- 履歴
- ログイン
- レポート (フォルダー権限)
- システム・テーブル
- ユーザー・テーブル
- ユーザー変数

注: カテゴリー・ヘッダーの権限を設定することにより、カテゴリー内のすべての機能の権限を設定できます。

管理

表 6. 管理 (管理権限)

権限	説明
モニター領域のアクセス権限	キャンペーン・モニター領域へのアクセスを許可します。
モニター・タスクの実行	キャンペーン・モニター領域でのモニター・タスクの実行を許可します。

表 6. 管理 (管理権限) (続き)

権限	説明
分析領域のアクセス権限	キャンペーン分析領域でのレポートへのアクセスを許可します。
最適化リンクのアクセス権限	Optimize がインストール済みの場合、そのアプリケーションへのアクセスを許可します。
svradm コマンド・ライン・ツールの実行	Campaign Server Manager (unica_svradm) を使用した管理機能の実行を許可します。
genrpt コマンド・ライン・ツールの実行	Campaign レポート生成ユーティリティ (unica_acgenrpt) の実行を許可します。
編集モードでのフローチャートの引き継ぎ	他のユーザーからの「編集」または「実行」モードでのフローチャート制御の引き継ぎを許可します。 注: 「ロックされた」フローチャートの制御を引き継いだ場合、他方のユーザーが締め出されて、最後の保存時より後のフローチャートの変更内容がすべて失われます。
実行中のフローチャートへの接続	Campaign Server Manager (unica_svradm) または Campaign ユーザー・インターフェースを介した実行中のフローチャートへの接続を許可します。
サーバー・プロセスの終了	Campaign Server Manager (unica_svradm) を使用した Campaign サーバー (unica_acsvr) の終了を許可します。
キャンペーン・リスナーの終了	Campaign Server Manager (unica_svradm) または svrstop ユーティリティを使用した Campaign リスナー (unica_aclsnr) の終了を許可します。
sesutil コマンド・ライン・ツールの実行	Campaign セッション・ユーティリティ (unica_acsesutil) の実行を許可します。
仮想メモリ設定のオーバーライド	フローチャート拡張設定の仮想メモリ設定のオーバーライドを許可します。
カスタム属性のアクセス権限	キャンペーン設定ページからのカスタム属性定義へのアクセスと管理を許可します。
セル・レポートのアクセス権限	フローチャートの「編集」ページで「レポート」アイコンからセル・レポートにアクセスできるようにします。セル内容レポートへのアクセスを除外します (この権限も明示的に付与されている場合を除く)。
セル・レポートのエクスポート	セル・レポートへのアクセス権限が付与されている場合、セル・レポートの印刷とエクスポートを許可します。
セル内容レポートのアクセス権限	フローチャートの「編集」ページで「レポート」アイコンからセル内容レポートにアクセスできるようにします。
セル内容レポートのエクスポート	セル内容レポートのエクスポートが付与されている場合、セル内容レポートの印刷とエクスポートを許可します。
クリーンアップ操作の実行	unica_acclean またはカスタム・ツールを使用したクリーンアップ操作の実行を許可します。
オブジェクト/フォルダーの所有権の変更	オブジェクトまたはフォルダーの所有権の変更を許可します。

オーディエンス・レベル

表 7. オーディエンス・レベル (管理権限)

権限	説明
オーディエンス・レベルの追加	キャンペーン設定ページの「オーディエンス・レベルの管理」の下で新しいオーディエンス・レベルを作成できます。
オーディエンス・レベルの削除	キャンペーン設定ページの「オーディエンス・レベルの管理」の下で既存のオーディエンス・レベルを削除できます。
グローバル抑制の管理	Campaign でのグローバル抑制セグメントの作成および構成を許可します。
フローチャートでの抑制の無効化	フローチャートの拡張設定ダイアログでの「このフローチャートのグローバル抑制を無効にする」チェック・ボックスの選択/選択解除を許可します。

データ・ソース

表 8. データ・ソース (管理権限)

権限	説明
データ・ソース・アクセスの管理	管理領域からの (およびフローチャートでの) データ・ソースのログインの管理を許可します。
DB 認証を伴う保存の設定	テーブル・カタログおよびフローチャート・テンプレートで「データベース認証情報と共に保存」フラグを有効にすることを許可します。

ディメンション階層

表 9. ディメンション階層 (管理権限)

権限	説明
ディメンション階層の追加	新しいディメンション階層の作成を許可します。
ディメンション階層の編集	既存のディメンション階層の編集を許可します。
ディメンション階層の削除	既存のディメンション階層の削除を許可します。
ディメンション階層のリフレッシュ	既存のディメンション階層のリフレッシュを許可します。

履歴

表 10. 履歴 (管理権限)

権限	説明
コンタクト履歴テーブルに記録	接触プロセスを構成する際のコンタクト履歴テーブルへの記録を有効化または無効化できるようにします。
コンタクト履歴の消去	コンタクト履歴テーブルから項目をクリアできるようにします。

表 10. 履歴 (管理権限) (続き)

権限	説明
レスポンス履歴テーブルへの記録	応答プロセスを構成する際のレスポンス履歴テーブルへの記録を有効化または無効化できるようにします。
レスポンス履歴のクリア	レスポンス履歴テーブルから項目をクリアできるようにします。

ロギング

表 11. ロギング (管理権限)

権限	説明
システムおよびフローチャートのログの表示	フローチャート・ログおよびシステム・ログを表示できるようにします。
フローチャート・ログのクリア	フローチャート・ログをクリアできるようにします。
フローチャート・ログ・オプションのオーバーライド	デフォルトのフローチャート・ロギング・オプションをオーバーライドできるようにします。

レポート (フォルダー権限)

「設定」メニューから「レポート・フォルダー権限の同期」を初めて実行した後、パーティション権限ページに「レポート」ノードが表示されます。同期プロセスによって、IBM Cognos システムに物理的に置かれているレポートのフォルダー構造が決定され、それらのフォルダーの名前がこのノードの下にリストされます。

このノードの下の設定により、リストに表示されるフォルダーのレポートへのアクセスが認可または拒否されます。

システム・テーブル

表 12. システム・テーブル (管理権限)

権限	説明
システム・テーブルのマッピング	システム・テーブルをマップできるようにします。
システム・テーブルの再マッピング	システム・テーブルを再マップできるようにします。
システム・テーブルのマッピング解除	システム・テーブルをマップ解除できるようにします。
システム・テーブル・レコードの削除	システム・テーブルからレコードを削除できるようにします。

ユーザー・テーブル

表 13. ユーザー・テーブル (管理権限)

権限	説明
ベース・テーブルのマップ	ベース・テーブルをマップできるようにします。
ディメンション・テーブルのマップ	ディメンション・テーブルをマップできるようにします。
その他のテーブルのマップ	その他のテーブルをマップできるようにします。
区切り記号付きファイルのマップ	区切り記号付きファイルにユーザー・テーブルをマップできるようにします。
固定幅フラット・ファイルのマップ	固定幅フラット・ファイルにユーザー・テーブルをマップできるようにします。
データベース表のマップ	データベース表にユーザー・テーブルをマップできるようにします。
ユーザー・テーブルの再マップ	ユーザー・テーブルを再マップできるようにします。
ユーザー・テーブルのマップ解除	ユーザー・テーブルをマップ解除できるようにします。
カウントと値の再計算	テーブルのマッピングで「計算」ボタンを使用してテーブルのカウントと値を再計算できるようにします。
未加工 SQL を使用する	未加工 SQL を選択プロセスの照会、カスタム・マクロ、およびディメンション階層で使用できるようにします。

ユーザー変数

表 14. ユーザー変数 (管理権限)

権限	説明
ユーザー変数の管理	フローチャートのユーザー変数のデフォルト値を作成、削除、および設定できるようにします。
ユーザー変数の使用	出力ファイルまたはテーブルでユーザー変数を使用できるようにします。

Windows 偽装の管理

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 19 ページの『Windows 偽装とは?』
- 19 ページの『Windows 偽装を使用する理由』
- 19 ページの『Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係』
- 19 ページの『Windows 偽装グループ』
- 19 ページの『Windows 偽装と IBM Unica Marketing へのログイン』

Windows 偽装とは？

Windows 偽装は、Campaign の管理者が、Campaign ユーザーを Windows ユーザーに関連付けることを可能にするメカニズムです。その関連付けにより、Campaign ユーザーが呼び出す Campaign プロセスが、対応する Windows ユーザーの資格情報のもとで実行されるようになります。

例えば、Windows 偽装が有効になっている場合、Campaign のユーザー jsmith がフローチャートを編集すると、unica_acsvr プロセスが Marketing Platform のログイン名 jsmith に関連する Windows ユーザー ID のもとで開始されます。

Windows 偽装を使用する理由

Windows 偽装を使用することにより、ファイル・アクセスに関して Windows レベルのセキュリティ許可の仕組みを利用することができます。NTFS を使用するようセットアップされているシステムの場合、ユーザーおよびグループによるファイルやディレクトリーへのアクセスを制御することができます。

さらに、Windows 偽装を使用するなら、Windows システム・モニターのさまざまなツールを使用することにより、どのユーザーがサーバー上のどの unica_acsvr プロセスを実行しているかを知ることができます。

Campaign ユーザーと Windows ユーザーとの関係

Windows の偽装を使用するには、Campaign ユーザーと Windows ユーザーの間に 1 対 1 の関係を確立する必要があります。つまり、Campaign の各ユーザーが、それと正確に同じユーザー名の 1 人の Windows ユーザーに対応していなければなりません。

多くの場合、Campaign を使用することになる、一群の Windows 既存ユーザーの集合から管理作業を開始することになります。Marketing Platform において、Campaign ユーザーを、それぞれ関連する Windows ユーザーと正確に同じ名前で作成する必要があります。

Windows 偽装グループ

Campaign ユーザーをセットアップする対象となる Windows ユーザーのそれぞれを、Windows 偽装グループに入れることが必要です。その上で、そのグループにいくつかの特定のポリシーを割り当てる必要があります。

Campaign パーティション・ディレクトリーに対する read/write/execute 特権を、そのグループについて付与するなら、管理作業を簡素化できます。

Windows 偽装と IBM Unica Marketing へのログイン

Windows 偽装がセットアップされている場合、ユーザーが Windows にログインした時点で、Campaign ユーザーは、シングル・サインオンを使用して自動的に IBM Unica Marketing にログインすることになります。ブラウザを開いて IBM Unica Marketing の URL に移動する際に、再度ログインする必要がなく、IBM Unica Marketing の開始ページがすぐに表示されます。

Windows 偽装の作業

このセクションでは、Windows 偽装のセットアップに含まれる以下の作業について説明します。

- 『Windows 偽装のプロパティの設定』
- 『Campaign ユーザーの作成』
- 『Windows 偽装グループの作成』
- 『Windows 偽装グループのポリシーへの割り当て』
- 21 ページの『Windows 偽装グループへの権限割り当て』

注: Windows 偽装の実行には、LDAP および Active Directory が必要です。LDAP および Active Directory のセットアップについて詳しくは、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

Windows 偽装のプロパティの設定

「構成」ページの Campaign > unicaACListener カテゴリで、enableWindowsImpersonation プロパティの値を TRUE に設定します。

注: 場合によっては、Windows のドメイン・コントローラーのセットアップに基づいたプロパティの付加的な要件があるかもしれません。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」のうちシングル・サインオンに関するセクションを参照してください。

Campaign ユーザーの作成

Marketing Platform を使用して、Campaign の内部または外部ユーザーを作成することができます。

外部ユーザーは、Active Directory のユーザーおよびグループ同期を構成することにより作成します。作成する各ユーザーのログイン名は、そのユーザーの Windows ユーザー名と同じでなければなりません。

Windows 偽装グループの作成

注: この作業を完了するには、Windows サーバー上の管理者特権が必要です。

Campaign ユーザー用の Windows グループを作成します。その後、Campaign ユーザーに対応する Windows ユーザーを、このグループに追加します。

グループの作成について詳しくは、Microsoft Windows の文書を参照してください。

Windows 偽装グループのポリシーへの割り当て

注: この作業を完了するには、Windows サーバー上の管理者特権が必要です。

Campaign ユーザーに対応するユーザーを格納するための Windows グループの作成後、そのグループを以下のポリシーに追加する必要があります。

- プロセスのメモリー割り当て量の調整
- トークン・オブジェクトの作成
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

グループをポリシーに割り当てることについて詳しくは、Microsoft Windows の文書を参照してください。

Windows 偽装グループへの権限割り当て

Windows Explorer を使用して、Campaign インストール済み環境下の `partitions/partition_name` フォルダーに対する `read/write/execute` アクセス権限を、Windows 偽装グループに付与します。

フォルダーに対する権限割り当てについて詳しくは、Microsoft Windows の文書を参照してください。

プロキシ・サーバー認証のサポートについて

すべてのインターネット・トラフィックが必ずプロキシ・サーバーを通過するように Campaign を構成および実行する必要がある場合、プロキシ・サーバー認証サポートを使用できます。この機能により Campaign の Active-X コンポーネントは、認証を必要とするプロキシ・サーバーを介して接続し、(ユーザーごとに) 保管された資格情報を自動的に渡すことができます。以下の認証メカニズムを使用して、プロキシを介したアクセスを構成できます。

- Basic (基本)
- Digest
- NTLM (NT LAN Manager)
- Negotiate (Kerberos または NTLM に解決可能)

注: サポートされるメカニズムの実際のバージョンは、Internet Explorer ブラウザーによって決まります。

ブラウザーでのローカル・エリア・ネットワーク設定のサポートについて

Active-X コンポーネントは、ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) 設定に関する次のような Internet Explorer (IE) オプションをサポートします。

- 自動構成。これには、設定を自動検出し、プロキシ自動設定 (Proxy Auto Configuration、PAC) スクリプトを自動構成スクリプトとして使用するオプションが含まれます。
- プロキシ・サーバー。これには、LAN 用にプロキシ・サーバーを使用したり、ローカル・アドレスの場合にプロキシ・サーバーを迂回したりするオプション、および拡張設定 (HTTP プロキシ・アドレスとポート、例外) が含まれます。

注: 例えば `http://machine:port/proxy.pac` のような `http` または `https` スキームを使用するには、Active-X コンポーネントが PAC ファイル・アドレスを必要とします (提供されている場合)。IE は `file` スキーム (例えば `file://C:/windows/proxy.pac`) を認識しますが、`file` スキームを使用した場合には Active-X コンポーネントが PAC ファイルの探索に失敗します。また、認証が必要な場合 (例えば認証を必要とする Web サーバーによって PAC ファイルが提供される場合) にも、Active-X コンポーネントが PAC ファイルを見つけることができない可能性があります。

proxy という名前の仮想データ・ソースに関する認証の資格情報を設定するには

それぞれの Campaign ユーザーごとに、Marketing Platform では、「proxy」という名前の仮想データ・ソースに関する認証の資格情報（ユーザー名とパスワード）を設定する必要があります。これらの資格情報はプロキシ・サーバーへの接続に使われます。

1. 「設定」>「ユーザー」ページで、各 Campaign ユーザーごとに proxy という名前のデータ・ソースを追加します。
2. proxy データ・ソース用のユーザー名とパスワードには、プロキシ・サーバーのユーザー名およびパスワードを設定します。

注: Marketing Platform にデータが保管されるとき、データは自動的に暗号化されます。しかし Web サーバーから Active-X 実装にデータが渡されるときには、エンコードされるだけです（暗号化されません）。この通信のために追加的なセキュリティが必要であれば、SSL を使用するよう Campaign を構成する必要があります。

注: プロキシ・サーバーのユーザー名またはパスワードが変更された場合、各ユーザーの「proxy」データ・ソースの値を編集することにより、ユーザーはこれらの認証値が一致するように更新する必要があります。

第 3 章 データベース表の管理

Campaign 管理者は、以下を行う必要があります。

- Campaign システム・テーブルをマップする (これが Campaign のインストール時に行われていない場合)。
- Campaign フローチャートで顧客データを使用できるように、ユーザー・テーブルをマップする。

さらに、管理者は以下を扱う作業を行います。

- データ・ディクショナリー。これを使用して、固定幅フラット・ファイルに基づいてユーザー・テーブルの構造を定義します。
- テーブル・カタログ。これは、マップされたユーザー・テーブルを効率的に管理するために使用されます。

テーブル管理の概念

このセクションでは、以下のテーブル管理の概念について説明します。

- 『システム・テーブルとは』
- 『ユーザー・テーブルとは』
- 25 ページの『テーブルのマッピングについて』
- 25 ページの『データ・ディクショナリーとは』
- 26 ページの『テーブル・カタログとは』

システム・テーブルとは

システム・テーブルは、Campaign アプリケーション・データを格納するデータベース表です。具体的には、システム・テーブルには、キャンペーン、セッション、フローチャート、オファー、テンプレート、カスタム・マクロ、ユーザー定義フィールド式、トリガーなどの、キャンペーン・オブジェクトのメタデータが格納されます。コンタクト履歴情報およびレスポンス履歴情報もシステム・テーブルに格納されます。

Campaign のインストールおよび構成のプロセスには、Campaign システム・テーブルのセットアップが含まれます。詳しくは、インストール文書を参照してください。

ユーザー・テーブルとは

ユーザー・テーブルは、フローチャート内のプロセスで使用するデータを格納するテーブルです。ユーザー・テーブルは、リレーショナル・データベース内のテーブル、または ASCII フラット・ファイルにマップできます。

注: Campaign 内のユーザー・テーブルをマップする前に、Campaign でサポートされるデータ型だけがそのテーブルで使用されていることを確認してください。各デ

データベースでサポートされるデータ型のリストについては、383 ページの『付録 C. ユーザー・テーブルにおいてサポートされるデータ型』を参照してください。

通常、ユーザー・テーブルには、企業の顧客、見込み顧客、または製品に関するデータが格納されます。例えば、あるユーザー・テーブルには、アカウント ID、アカウント・タイプ、残高など、顧客アカウント・データの列が含まれるとします。このデータは、特定のアカウント・タイプおよび残高を持つ顧客をターゲットにしたキャンペーンで使用できます。

以下に示す 3 つのタイプのユーザー・テーブルを扱います。

- ベース・テーブル
- ディメンション・テーブル
- 汎用テーブル

ベース・レコード・テーブルとは

ベース・レコード・テーブルは、個別の顧客、業種、アカウント、世帯など、キャンペーンの潜在的なコンタクトに関するデータを格納するテーブルです。

各ベース・レコード・テーブルは、データベース表または ASCII フラット・ファイル (固定幅あるいは区切り記号付き) にマップすることができます。また、ベース・レコード・テーブルにはそのコンタクトの ID が必要です。つまり、1 つ以上の列に格納される値を組み合わせたものをオーディエンス・エンティティのユニーク ID として使用する必要があります。テーブル内のどのレコードについても、これらの列が NULL になることはありません。

ベース・レコード・テーブル内の ID を 1 つ以上のオーディエンス・レベルにマップします。

キャンペーンが実行されるとき、フローチャート内のプロセスは、これらのオーディエンス・レベル ID をベース・レコード・テーブルから選択します。

ディメンション・テーブルとは

ディメンション・テーブルは、データベース表にマップされるベース・レコード・テーブル内のデータを補うデータベース表です。

注: ディメンション・テーブルは、フラット・ファイルにマップすることができません。また、フラット・ファイルにマップされるベース・テーブルと結合させることもできません。ディメンション・テーブルとそれに対応するベース・テーブルは、同じ物理データベース (つまり同じデータ・ソース) 内のデータベース表にマップされる必要があります。

例えば、ディメンション・テーブルには、郵便番号に基づく購買層情報、1 人の顧客が保有する各アカウント、顧客の取り引き内容、製品情報、購入取り引きの詳細などが含まれる場合があります。

ディメンション・テーブルを定義するとき、ディメンション・テーブルをベース・レコード・テーブルに結合させるためのキー・フィールドを指定します。

汎用テーブルとは

汎用テーブルは、Campaign からデータをエクスポートできるフリー・フォーマットのテーブルです。これは最も簡単に作成できるテーブル・タイプで、他のアプリケーションで使用するデータを Campaign からエクスポートするためだけに使用されます (汎用テーブルは、ベース・テーブルとしてマップされていない限り、エクスポート後に Campaign からアクセスすることはできません)。

汎用テーブルは、区切り記号付きフラット・ファイルとして、またはデータ・ディクショナリーを設定したフラット・ファイルとして、リレーショナル・データベース内に定義できます。汎用テーブルには、キーやオーディエンス・レベルがありません。

汎用テーブルの使用方法として、他のアプリケーションで使用するためのキャンペーン・データを「スナップショット」プロセスで取得します。例えば、エクスポートされる汎用テーブルに履歴データやメール配信リストを保管するように「スナップショット」プロセスを定義することができます。

汎用テーブルは、データをエクスポートするためだけに使用します。汎用テーブルのデータを Campaign で照会や操作することはできません。

テーブルのマッピングについて

テーブルのマッピングとは、Campaign でアクセス可能な外部カスタマー・テーブルまたはシステム・テーブルを作成するプロセスです。

テーブル・マッピングは、ベース・テーブル、ディメンション・テーブル、および汎用テーブルを定義するために使用されるメタデータです。そこには、データ・ソース、テーブルの名前と場所、テーブル・フィールド、オーディエンス・レベル、およびデータに関する情報が格納されます。テーブル・マッピングは、テーブル・カタログに保管して再利用できます。

データ・ディクショナリーとは

データ・ディクショナリーは、Campaign でベース・テーブルまたは汎用テーブルとして使用される固定幅 ASCII フラット・ファイルのデータ・フォーマットを定義するファイルです。

データ・ディクショナリーは、固定幅 ASCII テキスト・ファイルの構造とフォーマットを解釈するために必要です。その中では、フィールド名、それらの順序、データ型 (文字列または数値)、およびファイル内で占めるバイト位置を定義します。データ・ディクショナリーは、Campaign によって作成される固定幅フラット・ファイルでは自動的に作成され、通常は手動で作成や編集を行う必要はありません。

データ・ディクショナリーは、作成するフラット・ファイル・テーブルが必ず特定の構成に従うようにするためのもので、「スナップショット」、「メール・リスト」、「コール・リスト」などの出力プロセスで使用されます。

データ・ディクショナリーでは、テーブル・フィールド、データ型、およびサイズを定義します。管理者は、ベンダーまたはチャンネルに固有の出力用データ・ディクショナリーを作成して、事前に決められたフォーマットの出力を作成するためにそれらを再利用することができます。

IBM Unica 以外のサード・パーティー・アプリケーションによって作成された固定幅フラット・ファイルを使用する場合は、関連するデータ・ディクショナリーを手動で、またはプログラムで作成する必要が生じることがあります。あるいは、既存のデータ・ディクショナリーをコピーして編集することにより、新しいファイルを作成することもできます。データ・ディクショナリーを編集してフィールド名を変更することもできます。データ・ディクショナリーに含まれる他のフィールドを編集する場合は、データを破損しないように注意する必要があります。

テーブル・カタログとは

テーブル・カタログは、マップされたユーザー・テーブルの集合です。

テーブル・カタログには、各フローチャートで再利用するための、ユーザー・テーブル・マッピング・メタデータ情報すべてが保管されます。テーブル・カタログは、デフォルトでは `.cat` 拡張子を使用してプロプラエタリー・バイナリー・フォーマットで保管されます。詳しくは、「*Campaign ユーザー・ガイド*」の『保管テーブル・カタログの概要』を参照してください。

また、末尾に `.XML` 拡張子が付いたテーブル・カタログ名を指定することにより、テーブル・カタログを `XML` 形式で保管して後でロードすることもできます。テーブル・カタログを `XML` として保存すると、値の表示や解釈が可能になります。`XML` 形式は、編集目的で使用するると特に役立ちます。`XML` 形式の一般的な使用方法として、グローバルな検索を行い、実稼働データ・ソース名として出現するすべての語句をテスト・データ・ソース名に置き換える操作があります。これにより、テーブル・カタログを他のデータ・ソースに簡単に移植できます。

テーブル・カタログは、以下の目的で使用できます。

- 共通に使用するユーザー・テーブルの保存、ロード、および更新を簡単に行う。
- 代替データ・マッピングを作成する (例えば、実行対象をサンプル・データベースと実稼働データベースとで切り替えるため)。

マップされたユーザー・テーブルをテーブル・カタログに保存した後に、同じテーブル・カタログを他のフローチャートで使用できます。つまり、以下を行うことができます。

- あるフローチャートに含まれるテーブル・カタログを変更してから、更新されたテーブル・カタログを各フローチャートにインポートして、それらの変更を他のフローチャートに伝搬させる。
- あるフローチャートのために最初にロードした内部カタログを保持した状態で、それを他のフローチャートにコピーし、そこで変更する。
- 1 つの「テンプレート」となるテーブル・カタログから開始して、複数の異なるフローチャートの内部カタログに対して別々の変更を行う。

テーブル・カタログの削除には、`Campaign` インターフェースだけを使用してください。テーブルを削除した場合やファイル・システム内のテーブル・カタログを直接変更した場合、`Campaign` はシステム内のデータ保全性を保証できません。

テーブルの初期管理タスク

このセクションでは、Campaign のインストール後に行う、テーブルの以下の初期管理タスクについて説明します。

- 『前提条件: インストール後に前提となる状態』
- 『システム・テーブルのアクセスをテストする方法』
- 28 ページの『ユーザー・テーブルのアクセスをテストする方法』
- 29 ページの『「Customer」 オーディエンス・レベルのシステム・テーブルのマッピング』

前提条件: インストール後に前提となる状態

このセクションで説明される初期管理タスクでは、Campaign のインストールが完了していることを想定しています。これには以下が含まれます。

- Campaign システム・データベースのセットアップおよび構成
- ユーザー・テーブルを格納する任意のデータベースにアクセスするための Campaign の構成 (つまり、データ・ソースが定義されている)

これらのタスクについて詳しくは、インストール文書を参照してください。

さらに、ベース・テーブルに関連したオーディエンス・レベルを指定する必要があるため、ユーザー・テーブルの作業を開始する前に必要なオーディエンス・レベルを定義する必要があります。

Campaign システムでテーブル管理タスクを開始する準備ができたことを確認するための手順については、以下を参照してください。

- 『システム・テーブルのアクセスをテストする方法』
- 28 ページの『ユーザー・テーブルのアクセスをテストする方法』
- 29 ページの『「Customer」 オーディエンス・レベルのシステム・テーブルのマッピング』

システム・テーブルのアクセスをテストする方法

Campaign システム・テーブルがマップされていることと、データベース接続が正常に機能していることを確認する必要があります。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。
2. 「データ・ソース操作」セクションで、「テーブル・マッピングの管理」をクリックします。

「テーブル・マッピング」ウィンドウが開き、「システム・テーブル表示」が選択された状態となります。

ODBC 名に `UA_SYSTEM_TABLES` を使用していれば、Campaign データベースをセットアップするときに Campaign システム・テーブルが自動的にマップされます。詳しくは、インストール文書を参照してください。

IBM Unica システム・テーブルの各エントリーにおいて、右の列にデータベース表名が設定されている必要があります。ただし、実装環境で特定のフィーチャーが使用されないことがあり、その場合にはいくつかのシステム・テーブルがマップされないままとなる場合があります。

システム・テーブルがマップされていることを確認できない場合、Campaign のインストールと構成を実行した担当者に問い合わせてください。

ユーザー・テーブルのアクセスをテストする方法

必要なユーザー・テーブルにアクセスできるように Campaign が正しく構成されていることを確認する必要があります。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。
2. 「データ・ソース操作」セクションで、「テーブル・マッピングの管理」をクリックします。

「テーブル・マッピング」ウィンドウが開き、「システム・テーブル表示」が選択された状態となります。

3. 「ユーザー・テーブル表示」を選択します。初期状態ではマップされたユーザー・テーブルがなく、リストは空です。
4. 「新規テーブル」をクリックします。「新規テーブル定義」ウィンドウが開きます。
5. 「次へ」をクリックします。

ファイルとデータベースのどちらにマップするかを指定するためのプロンプトが出されます。

「選択したデータベースの既存テーブルにマップ」を選択した場合、「データ・ソースの選択」リストに 1 つ以上のデータベースが表示されるはずです。「データ・ソースの選択」ボックスにエントリーが表示されない場合、データ・ソースを定義する必要があります。詳しくは、インストール文書を参照してください。

6. Campaign が 1 つ以上のフラット・ファイルユーザー・データ用に使用している場合、以下のようにします。
 - a. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。「新規テーブル定義」ウィンドウに、フラット・ファイルおよびデータ・ディクショナリーの場所を指定するフィールドが含まれるようになります。
 - b. 「参照」をクリックして必要なファイルを位置指定するか、相対パスとファイル名をテキスト・ボックスに直接入力します。ファイルにアクセスするには、それを Campaign のパーティション・ルートの下に配置する必要があります。

これで、32 ページの『ユーザー・テーブルの作業』に説明されているように、ユーザー・データを Campaign 内にマップできるようになりました。

フローチャートを編集するときに Campaign がアクセスできるようにセットアップされた、顧客データベースを参照することもできます。「設定」>「キャンペーン設定」をクリックし、「データ・ソース・アクセスの表示」を選択します。「データ

ベース・ソース」ウィンドウが開き、システム・テーブル・データベース、および構成済みのすべての顧客データベースがリストされます。このウィンドウから、顧客データベースへのログインおよびログアウトを行うことができます。

「Customer」オーディエンス・レベルのシステム・テーブルのマッピング

Campaign の出荷時には、「Customer」オーディエンス・レベルが設定されています。インストール文書で説明されているように、「Customer」オーディエンス・レベルをサポートするシステム・データベース表は、提供されているシステム・テーブル作成スクリプトを実行するときに作成されます。

ただし、「Customer」オーディエンス・レベル・テーブルのマッピングは、インストール後に行われません。これらのテーブルは、以下の方法でマップする必要があります。

表 15. 「Customer」オーディエンス・レベルのテーブルのマッピング

IBM Unica システム・テーブル	マップ先のデータベース表
顧客コンタクト履歴	UA_ContactHistory
詳細顧客コンタクト履歴	UA_DtlContactHistory
顧客レスポンス履歴	UA_ResponseHistory
顧客セグメント・メンバーシップ	UA_SegMembership

セグメント・メンバーシップ・テーブルのマッピングについて

セグメント・メンバーシップ・テーブルは、ユーザーが新しいオーディエンスを定義する際に Campaign によって作成されるオーディエンス・レベルのシステム・テーブルの 1 つです。Campaign フローチャート、または Optimize 内の最適化セッションで戦略的セグメントを使用する場合、セグメント・メンバーが定義されているデータベース表に対して、セグメント・メンバーシップ・テーブルをマップする必要があります。

例えば、戦略的セグメントと一緒にデフォルトの「Customer」オーディエンスを使用する予定の場合、「Customer セグメント・メンバーシップ (Customer Segment Membership)」システム・テーブルを「UA_SegMembership」セグメント・メンバーシップ・データベース表にマップする必要があります。戦略的セグメントで使用する他のオーディエンスに関しては、「<オーディエンス名>セグメント・メンバーシップ」というシステム・テーブルを、セグメント・メンバーが定義されているデータベース表にマップします。UA_SegMembership を、データベース表のテンプレートとして使用できます。

セグメント作成プロセスを実行する場合、データベース表がセグメント・メンバーシップ・システム・テーブルに既にマップされていると、そのデータベース表にデータが追加されます。データベース表がセグメント・メンバーシップ・システム・テーブルにマップされていないときにセグメント作成プロセスを実行する場合には、後からテーブルをマップしてそのテーブルにデータを追加するためには、セグメント作成プロセスを再実行しなければなりません。そのようにしないと、戦略的セグメントを使用する Optimize 内の最適化セッションにおける結果が不正確になる場合があります。

フローチャートまたは最適化セッションで戦略的セグメントを使用しない場合

Campaign フローチャートおよび Optimize セッションで戦略的セグメントを使用するかどうかは任意です。戦略的セグメントを使用しない場合には、セグメント・メンバーシップ・テーブルをマップしないのがベスト・プラクティスです。オーディエンスのセグメント・メンバーシップ・システム・テーブルをマップすると、Campaign または Optimize において、対象のオーディエンスが含まれるフローチャートまたは最適化セッションを実行するたびにそのテーブルがリフレッシュされます。戦略的セグメントを使用していない場合、これは処理上の不要なオーバーヘッドとなります。

システム・テーブルの作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『システム・テーブルをマップまたは再マップする方法』
- 31 ページの『システム・テーブルをマップ解除する方法』
- 32 ページの『システム・テーブルの内容を表示する方法』

システム・テーブルをマップまたは再マップする方法

大半のシステム・テーブルは、推奨されるシステム・テーブル・データ・ソース名 `UA_SYSTEM_TABLES` が使用されていれば、初期のインストールおよび構成時に自動的にマップされます。詳しくは、インストール文書を参照してください。システム・テーブルをマップする必要がある場合は、以下の手順に従ってください。

重要: システム・テーブルのマップまたは再マップは、どのユーザーも Campaign を使用していないときに行う必要があります。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。
2. 「データ・ソース操作」セクションで、「テーブル・マッピングの管理」をクリックします。「テーブル・マッピング」ウィンドウが開きます。
3. 「システム・テーブル表示」を選択します。
4. マップするテーブルを IBM Unica システム・テーブル・リストから選択し、それをダブルクリックするか、「テーブル・マッピング」または「テーブル再マップ」をクリックします。

「ソース・データベースを選択し、必須フィールドを照合します」ウィンドウが開きます。

5. 「ソース・テーブル」ドロップダウン・リストでテーブルが自動的に選択されない場合は、テーブルを選択します (エントリーは、「所有者名.テーブル名」のアルファベット順にリストされます)。Campaign データベース内のソース・テーブル・フィールドは、必須フィールドに自動的にマップされます。システム・テーブルでは、フィールド・マッピングを追加または削除する必要はありません。すべてのフィールド・エントリーは自動的に照合されます。

注: システム・テーブルをマッピングするとき、「ソース・テーブル」リストから別のテーブルを選択しないでください。これを行うと、マッピングを完了でき

なくなります。間違えて選択した場合には、「キャンセル」をクリックし、「テーブル・マッピング」ウィンドウで正しいテーブルを選択してください。

6. 「完了」をクリックします。

システム・テーブルをマップ解除する方法

重要: システム・テーブルをマップ解除して再マップしないと、重大なアプリケーション問題が発生することがあります。システム・テーブルをマップ解除すると、フィーチャーや既存のキャンペーンの処理が停止することがあります。

重要: システム・テーブルのマップ解除は、どのユーザーも Campaign を使用していないときに行う必要があります。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。
2. 「データ・ソース操作」セクションで、「テーブル・マッピングの管理」をクリックします。「テーブル・マッピング」ウィンドウが開きます。
3. 「システム・テーブル表示」を選択します。
4. マップ解除するテーブルを「Unica システム・テーブル」リストから選択し、「テーブル・マッピング解除」をクリックします。マップ解除の確認を求めるプロンプトが出されます。

すぐにシステム・テーブルを再マップしてください。または、使用する環境ではマップの必要がないことを確認してください。

セグメント・メンバーシップ・テーブルをマップ解除する方法

セグメント・メンバーシップ・テーブルをマップ解除するときは、既存のキャッシュ・ファイルを消去して、Campaign および Optimize リスナーを再始動することも必要です。

注: Optimize を使用している場合、オーディエンスを使用する Optimize セッションが実行している間は、そのオーディエンスのセグメント・メンバーシップ・テーブルのマッピングを変更しないでください。

1. Campaign で、特定のオーディエンスのセグメント・メンバーシップ・テーブルをマップ解除します。
2. Campaign インストール済み環境の conf ディレクトリーから `unica_tbmgr.cache` を削除します。

デフォルトでは、このファイルは `Campaign¥partitions¥<partition[n]>¥conf` にあります。

3. Optimize インストール済み環境の conf ディレクトリーから `unica_tbmgr.cache` を削除します。

デフォルトでは、このファイルは `Optimize¥partitions¥<partition[n]>¥conf` にあります。

4. Campaign リスナー (`unica_aclsnr`) を再始動します。
5. Optimize リスナー (`unica_aolsnr`) を再始動します。

システム・テーブルの内容を表示する方法

マップされたシステム・テーブルについては、内容の表示が可能です。

利便性を考慮し、Campaign のテーブル・マネージャー内からほとんどのシステム・テーブルの内容を参照できます。システム・テーブルのデータは編集できません、

参照できるのは、テーブルの最初の 1000 行のデータだけです。そのため、コンタクト履歴テーブルやレスポンス履歴テーブルなどの非常に大きなテーブルでは、この機能の使用が限定されます。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。
2. 「データ・ソース操作」セクションで、「テーブル・マッピングの管理」をクリックします。「テーブル・マッピング」ウィンドウが開きます。
3. 「システム・テーブル表示」を選択します。
4. 内容を表示するシステム・テーブルを選択します。
5. 「参照」をクリックします。

ウィンドウが開いてテーブル・データが表示されます。

任意の列をクリックすることにより、その列を基準として昇順でソートできます。列を再度クリックすると、ソート順が切り替わります。

ウィンドウを閉じるには、右上隅にある「X」をクリックします。

ユーザー・テーブルの作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 33 ページの『ユーザー・テーブルの作業について』
- 33 ページの『フローチャート内からデータ・ソースにアクセスする方法』
- 34 ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』
- 34 ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』
- 35 ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方法』
- 37 ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング』
- 40 ページの『ディメンション・テーブルをマップする方法』
- 42 ページの『汎用テーブルをデータベース表にマップする方法』
- 42 ページの『汎用テーブルをファイルにマップする方法』
- 44 ページの『ユーザー・テーブルの再マップ』
- 45 ページの『値および件数のプロファイル作成』
- 46 ページの『ユーザー・テーブルをマップ解除する方法』
- 46 ページの『出力プロセスによって新しいユーザー・テーブルを作成する方法』

注: ベース・テーブルに関連したオーディエンス・レベルを指定する必要があるため、ユーザー・テーブルの作業を開始する前に必要なオーディエンス・レベルを定義する必要があります。

ユーザー・テーブルの作業について

通常、フローチャートからアクセスするマーケティング・データの大半は DB 内に存在しますが、フラット・ファイルからデータに直接アクセスするほうが便利な場合があります。Campaign は、区切り記号付き ASCII フラット・ファイル、またはデータ・ディクショナリーが指定された固定幅 ASCII フラット・ファイルのいずれかに保管されたデータを処理する機能をサポートします。フラット・ファイルは、ベース・テーブルとしてマップして、フローチャート内からアクセスすることができます。フラット・ファイルをディメンション・テーブルとしてマップすることはできません。

フラット・ファイルに直接アクセスすることにより、データを Campaign で使用できるようにまずデータベースにアップロードする必要がなくなります。この方法は、サード・パーティー・アプリケーション (Excel や SAS など) からエクスポートされたデータを扱うときに役立ちます。また、1 回だけ使用する一時的なデータ (キャンペーンに固有のシード・リスト、最終段階での抑制、予測モデルのスコア、その他の使用法など) で役立ちます。

ユーザー・テーブルのマッピングのガイドライン

マップされるテーブル名およびフィールド名については、以下のガイドラインに従ってください。

- 名前にスペースを含めないでください。
- 名前の先頭は英字にします。
- サポートされない文字は使用しないでください。Campaign オブジェクトでサポートされない文字および命名上の制約について詳しくは、381 ページの『付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。
- データベースまたはフラット・ファイルからマップされるテーブルの列ヘッダーでは、IBM Unica Macro Language の関数名またはキーワードを使用しないでください。マップされたテーブルの列ヘッダーでこれらの予約語を使用すると、エラーが生じることがあります。これらの予約語について詳しくは、「*IBM Unica Marketing*」のマクロ ユーザー・ガイド」を参照してください。
- フィールド名は、大/小文字の区別がありません。フィールドがマップされている場合、フィールド名の大/小文字を変更してもマッピングには影響がありません。

フローチャート内からデータ・ソースにアクセスする方法

フローチャート内から顧客データベース表または見込み顧客データベース表にアクセスするには、参照先データベースにログインしていることを確認する必要があります。

1. フローチャートの編集集中に、「システム管理」アイコンをクリックして「データベース・ソース」を選択します。

「データベース・ソース」ウィンドウが開きます。システム・テーブルを格納するデータベース、および Campaign がアクセスできるように構成されているすべてのデータベースがリストされます。
2. データベースにログインするには、それを選択して「ログイン」をクリックします。
3. 「閉じる」をクリックします。

これで、そのデータベース内のテーブルにアクセスできるようになりました。そのデータベース内のテーブルを照会するには、次のセクションで説明されているように、そのテーブルをマップする必要があります。

フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業

以下のようにして、フローチャートを編集する際にユーザー・テーブルの作業を行うことができます。

- 「システム管理」メニューを使用する
- 「選択」プロセスによって新しいユーザー・テーブルをマップする
- 「スナップショット」、「コール・リスト」、および「メール・リスト」の各プロセスによって、データをベース・テーブルまたは汎用テーブルにエクスポートする

「システム管理」メニューの使用によるユーザー・テーブルの作業

「システム管理」アイコンをクリックして、「テーブル」を選択します。「テーブル・マッピング」ウィンドウが開き、マップされたユーザー・テーブルのリストが表示されます。

その後に実行できるタスクを以下に示します。

- 35 ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方法』
- 37 ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング』
- 40 ページの『ディメンション・テーブルをマップする方法』
- 42 ページの『汎用テーブルをデータベース表にマップする方法』
- 42 ページの『汎用テーブルをファイルにマップする方法』
- 44 ページの『ユーザー・テーブルの再マップ』
- 46 ページの『ユーザー・テーブルをマップ解除する方法』

「選択」プロセスからのユーザー・テーブルの作業

「選択」プロセスの「ソース」タブにある「入力」ドロップダウン・リストで、「新規テーブル」を選択します。「新規テーブル定義」ウィンドウが開きます。

その後に実行できるタスクを以下に示します。

- 35 ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方法』
- 37 ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング』

エクスポートされたデータからのユーザー・テーブルの作業

新しいユーザー・テーブルを出力プロセスから作成できます。

「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業

「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが開きます。

次に、「テーブル・マッピングの管理」をクリックします。「テーブル・マッピング」ウィンドウが開きます。

その後、次のタスクを実行できます。

- 『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方法』
- 37 ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング』
- 40 ページの『ディメンション・テーブルをマップする方法』
- 42 ページの『汎用テーブルをデータベース表にマップする方法』
- 42 ページの『汎用テーブルをファイルにマップする方法』
- 44 ページの『ユーザー・テーブルの再マップ』
- 46 ページの『ユーザー・テーブルをマップ解除する方法』

注: Campaign 内のユーザー・テーブルをマップする前に、Campaign でサポートされるデータ型だけがそのテーブルで使用されていることを確認してください。各データベースでサポートされるデータ型のリストについては、383 ページの『付録 C. ユーザー・テーブルにおいてサポートされるデータ型』を参照してください。

ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方法

以下のようにして、新しいベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップできます。

- 34 ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニューまたは選択プロセスから行う。
- 34 ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャートのプロセスからそのデータにアクセスできるようにします。

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。

注: 選択プロセスからテーブル・マッピング・ウィザードにアクセスするときには、「ディメンション・テーブル」と「その他のテーブル」の各オプションは、リストされません。

2. 必要な場合、「ベース・レコード・テーブル」を選択してから「次へ」をクリックします。
3. 「選択したデータベースの既存テーブルにマップ」を選択し、データ・ソース名を選択してから、「次へ」をクリックします。
4. マップするテーブルを、「ソース・テーブル」リストから選択します。

テーブルは、<所有者>.<テーブル名> の形式で、アルファベット順にリストされます。必要なテーブルが表示されない場合には、テーブルの特定のエントリーがフィルターで除外されるようにデータ・ソースが構成されていないかを確認してください。

選択したテーブルのソース・フィールドは、作成するベース・レコード・テーブル内の新しいテーブル・フィールドに自動的にマップされます。自動マッピングを変更するには、「ソース・テーブル・フィールド」リストまたは「新規テーブル・フィールド」リストからフィールドを選択し、「追加」、「削

除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、テーブルに対する必要なマッピングが行われるようにします。

「新規テーブル・フィールド」セクションの「フィールド名」列をクリックして、列名をアルファベットの昇順（または降順）で自動的にソートすることができます。

5. 「次へ」をクリックします。
6. オプションで、Campaign がベース・レコード・テーブルおよびそのフィールドに使用する名前を、より分かりやすい名前に変更できます。
 - a. テーブル名を変更するには、「Unica テーブル名」フィールドの名前を編集します。
 - b. フィールド名を変更するには、「新規テーブル・フィールド」リストからフィールド名を選択し、「Unica フィールド名」フィールドのテキストを編集します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. ドロップダウン・リストから「オーディエンス・レベル」を選択します。「オーディエンス・フィールド」リストには、選択したオーディエンス・レベルの定義に必要なフィールドが自動的に追加されます。新しいベース・テーブル内の、各必須キーに対応する 1 つ以上のフィールドに対してマッチングを行う必要があります。
9. 選択したオーディエンス・レベルが正規化されている場合（固有の各オーディエンス ID が現在のベース・テーブルに重複して出現しない場合）、**「オーディエンスにより正規化されている」**にチェック・マークを付けます。

このオプションを正しく設定することは、「オーディエンス」プロセスでオプションを正しく構成するために重要です。正しい設定が不明な場合は、このオプションのチェック・マークを外したままにしてください。

10. 「次へ」をクリックします。
11. オプションで、「追加するオーディエンス・レベルを指定します」画面から、ベース・レコード・テーブルに含まれる 1 つ以上の追加のオーディエンス・レベルを指定できます。追加のオーディエンス・レベルを追加することにより、ユーザーはこのテーブルを「切り替えテーブル」として使用することが可能になり、フローチャートの「オーディエンス」プロセスを使用して 1 つのオーディエンス・レベルから別のオーディエンス・レベルに変換することができます。
 - a. 「追加」をクリックします。「オーディエンス・レベルと ID フィールド」ウィンドウが開きます。
 - b. 「オーディエンス・レベル名」を選択します。
 - c. 「オーディエンス・フィールド」ごとに、ベース・テーブルの該当するフィールドを、オーディエンス・レベルの対応するキーにマッチングさせます。
 - d. 選択したオーディエンス・レベルが正規化されている（つまり、固有の各オーディエンス ID が現在のベース・テーブルに重複して出現しない）場合、**「オーディエンスにより正規化されている」**にチェック・マークを付けます。
 - e. 「OK」をクリックします。

- f. ベース・テーブル用に追加するオーディエンス・レベルごとに、ステップの a から f を繰り返し、その後に「次へ」をクリックします。
- 12. 現行のテーブル・カタログにディメンション・テーブルが存在する場合、「既存のディメンション・テーブルとのリレーションシップを指定します」ウィンドウが開きます。
 - a. 作成するベース・レコード・テーブルに関連したディメンション・テーブルの左側にあるボックスにチェック・マークを付けます。
 - b. 関連したディメンション・テーブルごとに、「新規テーブルのキー・フィールド」リストで、「ディメンション・テーブルのキー・フィールド」リストにリストされた各キーとマッチングさせるフィールドをベース・テーブルから選択し、「次へ」をクリックします。
- 13. 特定のフィールドについての個別値と頻度カウントを管理者が事前計算することもできますし、ベース・レコード・テーブルのデータのプロファイルを実タイムで作成する操作をユーザーに許可することもできます。
- 14. 「完了」をクリックします。

既存のデータベース表に基づいて、ベース・レコード・テーブルが作成されました。新しいベース・テーブルは現行テーブル・カタログの一部となるので、テーブル・マネージャーによって管理できます。

ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング

以下のようにして、新しいベース・レコード・テーブルを、使用するパーティション内にある Campaign サーバー上の既存のファイルにマップできます (つまり、そのファイルは使用するパーティション・ルートの下に配置する必要があります)。

- 34 ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニューまたは選択プロセスから行う。
- 34 ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャートのプロセスからそのデータにアクセスできるようにします。

ベース・レコード・テーブルをファイルにマップする方法:

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
2. 必要な場合、「ベース・レコード・テーブル」を選択してから「次へ」をクリックします。
3. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。
4. ファイルのタイプおよびマッピング設定を指定します。

ベース・レコード・テーブルを既存の固定幅フラット・ファイルにマップする方法:

以下のようにして、新しいベース・レコード・テーブルを、使用するパーティション内にある Campaign サーバー上の既存のファイルにマップできます (つまり、そのファイルは使用するパーティション・ルートの下に配置する必要があります)。

- フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニューまたは選択プロセスから行う。

- 「キャンペーン設定」ページから行う。

新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャートのプロセスからそのデータにアクセスできるようにします。

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
2. 必要な場合、「ベース・レコード・テーブル」を選択してから「次へ」をクリックします。
3. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。
4. 「ファイル・タイプ」の選択値を、デフォルトの「固定幅フラット・ファイル」のままにします。

ウィンドウの「設定」セクションが表示されます。

5. ウィンドウの「設定」セクションで、「参照」をクリックし、キャンペーン・パーティションのルート・ディレクトリー内から「ソース・ファイル」を選択します。Campaign は、「ディクショナリー・ファイル」フィールドに、.dct 拡張子があること以外は同じパスおよびファイル名を自動的に追加します。必要であれば、このエントリーをオーバーライドできます。

ベース・レコード・テーブルを既存の区切り記号付きファイルにマップする方法:
フローチャートの編集集中に、または「キャンペーン設定」ページで、新しいベース・レコード・テーブルを、使用するパーティション内にある Campaign サーバー上の既存のファイルにマップできます (つまり、そのファイルは使用するパーティション・ルートの下に配置する必要があります)。

新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャートのプロセスからそのデータにアクセスできるようにします。

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
2. 必要な場合、「ベース・レコード・テーブル」を選択してから「次へ」をクリックします。
3. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。
4. 「ファイル・タイプ」として「区切り記号付きファイル」を選択します。
5. ウィンドウの「設定」セクションで、「先頭行にフィールド名を含む」にチェック・マークを付けます (これが該当する場合)。これにより、自動的にデータの最初の行が使用されて、ベース・テーブルのフィールドが定義されます。これらの値は、後でオーバーライドできます。
6. 「フィールド区切り記号」(データの行で各フィールドを分離するために使用する記号) を選択します。選択肢は、「タブ」、「コンマ」、「スペース」です。
7. ファイル内で文字列を区切る方法を示すための「引用符」を選択します。選択肢は、「なし」、「単一引用符」、「二重引用符」です。

スペース区切りのファイルで、フィールド・エントリーの一部にスペースが使用されている場合には、これが重要になります。この場合、フィールドを引用符で囲んで、組み込まれたスペースがフィールド区切り記号として解釈されないようにする必要があります。例えば、"John Smith" "100 Main St." などのデータの行があり、区切り記号が「スペース」で引用符が「なし」に設定されている場合、Campaign はこれを 5 つの異なるフィールド ("John" が第 1 フ

フィールドの値、 "Smith" が 2 番目、"100" が 3 番目など) として解析します。引用符が「二重引用符」に設定されている場合には、このレコードは正しく 2 つのフィールド (名前および住所) として解析されます。

重要: Campaign は、区切り記号付きファイルのフィールド・エンタリーでの二重引用符 (") の使用をサポートしていません。使用するフィールド・エンタリーに二重引用符が含まれる場合は、テーブルをファイルにマップする前にそれを別の文字に変更してください。

8. 「参照」をクリックして、パーティション・ディレクトリー内から「ソース・ファイル」を選択します。
9. 新しいテーブルで使用するフィールドを指定します。デフォルトでは、ファイル内のすべてのフィールドがリストされます。

区切り記号付きファイルをマッピングする場合、フィールド・タイプと幅を確認するためにファイルの最初の 50 行がサンプル出力されます。自動的に検出されるフィールド・タイプ (「数値」または「テキスト」) と幅は、オーバーライドできます。例えば、最初の 50 行の ID の幅が 2 文字で検出された場合でも、そのファイルの後のほうでは最大 5 文字で構成される ID があることが分かっている場合には、値を 5 に増やします。

重要: 幅の値が小さすぎる場合、エラーが発生する場合があります。

「追加」、「削除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、新しいテーブルに含まれる「ソース・テーブル・フィールド」およびその順序を指定します。「新規テーブル・フィールド」セクションの「フィールド名」列をクリックして、列名をアルファベットの昇順 (または降順) で自動的にソートします。

10. 完了したら、「次へ」をクリックします。「テーブル名とフィールド情報を指定します」画面が開きます。
11. デフォルトを受け入れるか、または「Unica テーブル名」フィールドを編集して Campaign に表示されるテーブルの名前を変更します。各ソース・フィールド名にマップされた Unica フィールド名を変更することもできます。これを行うには、フィールド名を選択して、「フィールド情報の編集」セクションの「Unica フィールド名」テキスト・ボックス内のテキストを編集します。
12. 変更が完了したら、「次へ」をクリックします。「オーディエンス・レベルを指定して ID フィールドを割り当てます」画面が開きます。
13. ドロップダウン・リストから「オーディエンス・レベル」を選択します。「オーディエンス・フィールド」リストには、データが自動的に追加されます。リストされた各エンタリーに対応するキーとなるフィールドを新しいベース・テーブルから選択する必要があります。
14. 「次へ」をクリックします。「追加するオーディエンス・レベルを指定します」画面が開きます。
15. オプションで、「追加するオーディエンス・レベルを指定します」画面から、ベース・レコード・テーブルに含まれる 1 つ以上の追加のオーディエンス・レベルを指定できます。追加のオーディエンス・レベルを追加することにより、ユーザーはこのテーブルを「切り替えテーブル」として使用することが可能に

なり、フローチャートの「オーディエンス」プロセスを使用して 1 つのオーディエンス・レベルから別のオーディエンス・レベルに変換することができます。

- a. 「追加」をクリックします。「オーディエンス・レベルと ID フィールド」ウィンドウが開きます。
 - b. 「オーディエンス・レベル名」を選択します。
 - c. 「オーディエンス・フィールド」ごとに、ベース・テーブルの該当するフィールドを、オーディエンス・レベルの対応するキーにマッチングさせます。
 - d. 選択したオーディエンス・レベルが正規化されている（つまり、固有の各オーディエンス ID が現在のベース・テーブルに重複して出現しない）場合、「オーディエンスにより正規化されている」にチェック・マークを付けます。
 - e. 「OK」をクリックします。
 - f. ベース・テーブル用に追加するオーディエンス・レベルごとに、ステップの a から f を繰り返し、その後に「次へ」をクリックします。
16. 特定のフィールドについての個別値と頻度カウントを管理者が事前計算することもできますし、ベース・レコード・テーブルのデータのプロファイルをリアルタイムで作成する操作をユーザーに許可することもできます。
17. 「完了」をクリックします。既存のファイルに基づいて、ベース・レコード・テーブルが作成されました。新しいベース・テーブルは現行テーブル・カタログの一部となるので、テーブル・マネージャーによって管理できます。

ディメンション・テーブルをマップする方法

以下のようにして、追加のテーブルに基づく新しいディメンション・テーブルをマップできます。

- 34 ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニューから行う。
- 34 ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

新しいディメンション・テーブルをマップして、郵便番号に基づく購買層情報など、ベース・テーブル内のデータを補うデータにフローチャートのプロセスからアクセスできるようにします。

ディメンション・テーブルは、データベース表にマップする必要があり、同じ IBM Unica データ・ソース（つまり同じデータベース）内のテーブルにマップされた 1 つ以上のベース・テーブルに関連付ける必要があります。ディメンション・テーブルを定義する際に、ベース・テーブルとディメンション・テーブルの間に特定の結合条件を指定できます。

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。

注: 「選択」プロセスからディメンション・テーブルをマップすることはできません。

2. 「ディメンション・テーブル」を選択してから、「次へ」をクリックします。
3. マップするテーブルを、「ソース・テーブル」リストから選択します。

選択したテーブルのソース・フィールドは、作成するベース・ディメンション・テーブル内の新しいテーブル・フィールドに自動的にマップされます。デフォルトの選択を変更するには、「ソース・テーブル・フィールド」リストまたは「新規テーブル・フィールド」リストからフィールドを選択し、「追加」、「削除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、テーブルに対する必要なマッピングが行われるようにします。その後、「次へ」をクリックします。

注: 「新規テーブル・フィールド」セクションの「フィールド名」列をクリックして、列名をアルファベットの昇順 (または降順) で自動的にソートすることができます。

4. (オプション) Campaign がディメンション・テーブルおよびそのフィールドに使用する名前を変更します。
 - a. テーブル名を変更するには、「IBM Unica テーブル名」フィールドの名前を編集します。
 - b. フィールド名を変更するには、「新規テーブル・フィールド」リストからマッピングを選択し、「IBM Unica フィールド名」フィールドのテキストを編集します。その後、「次へ」をクリックします。
5. ディメンション・テーブルのキーと、そのテーブルをベース・レコード・テーブルに結合する方法を指定します。
6. 「キー・フィールド」リストから 1 つ以上のキーを選択します。
7. 「キー・フィールドにより正規化されている」にチェック・マークを付けます (該当する場合)。
8. 「テーブル結合方法」を選択してから、「次へ」をクリックします。

注: 「常に内部結合を使用」オプションを選択すると、ベース・テーブルとこのディメンション・テーブルの間で常に内部結合が使用され、ベース・テーブルからは、ディメンション・テーブル内に存在するオーディエンス ID だけが返されます。「常に外部結合を使用」オプションを選択すると、ベース・テーブルとこのディメンション・テーブルの間で常に外部結合が実行されます (ベース・テーブル内のすべてのオーディエンス ID について、対応する行がディメンション・テーブル内に必ず存在するとは限らないことが分かっている場合に、この設定は最適な結果になります)。デフォルト設定の「自動」では、選択プロセスおよびセグメント・プロセスでは内部結合を使用し、出力プロセス (「スナップショット」、「メール・リスト」、および「コール・リスト」) では外部結合を使用します。この設定は、選択基準を考慮するためにディメンション・テーブル内の値が必要であり、その一方で、出力されるディメンション・テーブル・フィールドを示すオーディエンス ID が存在しないときには NULL を出力する必要もある場合に、通常は適切な動作となります。

9. ベース・レコード・テーブルが存在する場合、「ベース・テーブルとのリレーションシップを指定します (Specify Relationship to Base Tables)」画面が開きます。作成するディメンション・テーブルに関連したベース・レコード・テーブルの左側にあるボックスにチェック・マークを付けます。結合フィールドを指定して、「次へ」をクリックします。
10. 特定のフィールドについての個別値と頻度カウントを管理者が事前計算することもできますし、ベース・レコード・テーブルのデータのプロファイルを実タイムで作成する操作をユーザーに許可することもできます。

11. 「完了」をクリックします。 ディメンション・テーブルが作成されました。

汎用テーブルをデータベース表にマップする方法

以下のようにして、新しい汎用テーブルを既存のデータベース表にマップできます。

- 34 ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニューから行う。
- 34 ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

Campaign データを他のアプリケーションで使用する目的でエクスポートするために、新しい汎用テーブルをマップします。

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
2. 「その他のテーブル」を選択してから、「次へ」をクリックします。
3. 「選択したデータベースの既存テーブルにマップ」を選択し、顧客データベース名を選択してから、「次へ」をクリックします。
4. マップするテーブルを、「ソース・テーブル」リストから選択します。

選択したテーブルのソース・フィールドは、作成する汎用テーブル内の新しいテーブル・フィールドに自動的にマップされます。自動マッピングを変更するには、「ソース・テーブル・フィールド」リストまたは「新規テーブル・フィールド」リストからフィールドを選択し、「追加」、「削除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、テーブルに対する必要なマッピングが行われるようにします。その後、「次へ」をクリックします。

5. (オプション) Campaign が汎用テーブルおよびそのフィールドに使用する名前を変更します。

テーブル名を変更するには、「Unica テーブル名」フィールドの名前を編集します。

フィールド名を変更するには、「新規テーブル・フィールド」リストからマッピングを選択し、「Unica フィールド名」フィールドのテキストを編集します。

6. 「完了」をクリックします。

データベース表に基づいて汎用テーブルが作成されました。

汎用テーブルをファイルにマップする方法

以下のようにして、新しいベース・レコード・テーブルをファイルにマップできます。

- 34 ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニューから行う。
- 34 ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

Campaign データを他のアプリケーションで使用する目的でエクスポートするために、新しい汎用テーブルをマップします。

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
2. 「その他のテーブル」を選択してから、「次へ」をクリックします。
3. 「既存ファイルにマップ」を選択してから、「次へ」をクリックします。
4. ベース・レコード・テーブルを固定幅フラット・ファイルにマップするには、以下のようにします。
 - a. 「ファイル・タイプ」の選択値を、デフォルトのままにします。
 - b. 「参照」をクリックして、「ソース・ファイル」を選択します。 Campaign は、「ディクショナリー・ファイル」フィールドに、`.dct` 拡張子があること以外は同じパスおよびファイル名を自動的に追加します。必要であれば、このエントリーをオーバーライドできます。
5. ベース・レコード・テーブルを区切り記号付きファイルにマップするには、以下のようにします。
 - a. 「ファイル・タイプ」として「区切り記号付きファイル」を選択します。
 - b. 「先頭行にフィールド名を含む」にチェック・マークを付けます (これが該当する場合)。
 - c. 使用する「フィールド区切り記号」を選択します。選択肢は、「タブ」、「コンマ」、「スペース」です。
 - d. ファイル内で文字列を区切る方法を示すための「引用符」を選択します。選択肢は、「なし」、「単一引用符」、「二重引用符」です。
 - e. 「参照」をクリックし、「ソース・ファイル」を選択してから、「次へ」をクリックします。「新規テーブルのフィールドを指定します」ウィンドウが開きます。
6. 新しいテーブルで使用するフィールドを指定します。デフォルトでは、ファイル内のすべてのフィールドがリストされます。

区切り記号付きファイルをマッピングする場合、フィールド・タイプと幅を確認するためにファイルの最初の 50 行がサンプル出力されます。自動的に検出されるフィールド・タイプ (「数値」または「テキスト」) と幅は、オーバーライドできます。例えば、最初の 50 行の ID の幅が 2 文字で検出された場合でも、そのファイルの後のほうでは最大 5 文字で構成される ID があることが分かっている場合には、値を 5 に増やします。

重要: 幅の値が小さすぎる場合、エラーが発生する場合があります。

注: データをディスク上の固定幅フラット・ファイルにエクスポートする場合、そのファイルのデータ・ディクショナリーを編集して、事前設定されたフィールドの長さをオーバーライドできます。

「追加」、「削除」、「1 つ上へ」、「1 つ下へ」の各ボタンを使用して、新しいテーブルに含まれる「ソース・テーブル・フィールド」およびその順序を指定します。

7. 完了したら、「次へ」をクリックします。

「テーブル名とフィールド情報を指定します」ウィンドウが開きます。

8. デフォルトを受け入れるか、または「Unica テーブル名」フィールドを編集して Campaign に表示されるテーブルの名前を変更します。さらに、ソース・フィールド名にマップされる「Unica」フィールド名を変更します。
9. 「完了」をクリックします。 ファイルに基づいて汎用テーブルが作成されました。

ユーザー・テーブルの再マップ

ユーザー・テーブルは、いつでも再マップできます。これは以下を行うために実行できます。

- 不要なフィールドを削除して、テーブルの作業を簡単にする。
- 使用可能にする必要のある新しいフィールドを追加する。
- テーブルまたはそのフィールドの名前を変更する。
- オーディエンス・レベルを追加する。
- または、プロファイルの特性を変更する。

フローチャートで参照されているフィールドを削除する場合、またはテーブルや参照先フィールドの名前を変更する場合は、フローチャートが構成解除されます。その場合、テーブルが使用されている各プロセス・ボックスを手動で編集して、参照を修正する必要があります。

ユーザー・テーブルを再マップすると、現在のフローチャートのローカル・テーブル・マッピングだけが変更されることに注意してください。更新されたテーブル・マッピングをテーブル・カタログに保存するには、テーブル・カタログを保存する必要があります。テーブル・カタログに保存された後、そのテーブル・カタログを使用する (またはインポートする) 後続のフローチャートはその変更を認識するようになります。

以下のようにして、ユーザー・テーブルを再マップできます。

- 34 ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニューから行う。
- 34 ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。

ユーザー・テーブルを再マップする方法:

1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
2. 再マップするテーブルを選択します。
3. 「テーブル再マップ」をクリックします。
4. その後、テーブルのマッピングに関係する以下の手順を繰り返します。
 - 35 ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方法』
 - 37 ページの『ベース・レコード・テーブルから既存のファイルへのマッピング』
 - 40 ページの『ディメンション・テーブルをマップする方法』
 - 42 ページの『汎用テーブルをデータベース表にマップする方法』
 - 42 ページの『汎用テーブルをファイルにマップする方法』

値および件数のプロファイル作成

ユーザー・テーブルをマップするとき、特定のフィールドについての個別値と頻度カウントを管理者が事前計算することもできますし、ベース・レコード・テーブルのデータのプロファイルをリアルタイムで作成する操作をユーザーに許可することもできます。プロファイルを作成することにより、ユーザーは生データを参照しなくてもフローチャートの編集集中にテーブルの値を知ることができ、照会の作成中に有効な値を容易に選択できるようになります。事前計算されたプロファイルを使用すると、データベースを照会しなくても、個別フィールド値と件数を素早く効率的に参照できます。リアルタイムでプロファイルを作成すると、最新のデータを参照できます。これは、データベースが頻繁に更新される場合に役立つことがあります。プロファイルを事前計算する場合、プロファイルが再生成される頻度を管理者が制御できます。

注: プロファイルを動的にリアルタイムで作成することをユーザーに許可する方法とプロファイルを事前計算する方法の両方を選択することもできますし、リアルタイムのプロファイル作成は無効にして、事前計算されたプロファイルしかユーザーが使用できないようにすることもできます。「リアルタイム・プロファイルを許可する」オプションを有効または無効に設定すると、チェック・マークを付けたテーブル・フィールドだけではなく、すべてのテーブル・フィールドに適用されます。リアルタイムのプロファイル作成を無効にした上で、事前生成されたプロファイルを使用する代替手段を指定しない場合、ユーザーは、このテーブルのすべてのフィールドについて値や件数を表示できなくなります。リアルタイムのプロファイル作成を無効にした上で、事前計算されたプロファイルを 1 つ以上のフィールドに提供した場合、ユーザーはテーブル全体の事前計算されたプロファイルを使用できるようになります。ユーザーは、プロセスの入力セルの値だけについてのプロファイルを作成することはできません。柔軟性を最大にするためには、リアルタイム・プロファイルを許可する必要があります。

プロファイルを構成する方法:

1. Campaign で個別値および頻度件数を事前計算するフィールドにチェック・マークを付けます。

デフォルトでは、Campaign は、事前計算されたプロファイルを「Campaign」>「パーティション」>「パーティション[n]」>「プロファイル」 カテゴリーに `data source_table name_field name` の形式で保管します。

2. 個別値および件数が別個のデータベース表に保管されていて、Campaign がそれを使用する必要がある場合、「データ・ソースの構成」をクリックします。「他のテーブルの集計フィールドの指定」を選択して、テーブル名、値を格納するフィールド、および件数を格納するフィールドを選択します。次に「OK」をクリックします。
3. 「リアルタイム・プロファイルを許可する」にチェック・マークを付けて、選択されたフィールドの値のレコードを Campaign がリアルタイムで更新するようにします。このオプションにより、フローチャートを編集集中のユーザーはそれらのフィールドの現行値を参照できます。ただし、ユーザーが「プロファイル」をクリックするたびにデータベース照会も必要になるため、パフォーマンスが低下する可能性があります。

ユーザー・テーブルをマップ解除する方法

ユーザー・テーブルはいつでもマップ解除できます (テーブルをマップ解除しても基礎となる元のデータは削除されず、他のフローチャートが影響を受けることもありません)。

重要: ユーザー・テーブルをマップ解除すると、そのユーザー・テーブルを参照する現行フローチャート内のプロセスがすべて構成解除されます。

以下のようにして、ユーザー・テーブルをマップ解除できます。

- 34 ページの『フローチャートを編集する際のユーザー・テーブルの作業』で説明されているように、フローチャートを編集するとき、「システム管理」メニューから行う。
 - 34 ページの『「キャンペーン設定」ページからのユーザー・テーブルの作業』の説明のように、「キャンペーン設定」ページから行う。
1. 「新規テーブル定義 - テーブル・タイプを選択」ウィンドウから始めます。
 2. マップ解除するテーブルを選択します。
 3. 「テーブル・マッピング解除」をクリックします。確認を求めるプロンプトが出されます。
 4. 「OK」をクリックしてテーブルをマップ解除します。

重要: このプロセスは、元に戻すことはできません。マップ解除されたテーブルを復元するには、初めてマップする場合と同様に行うか、またはマップされたテーブル定義を格納する保管テーブル・カタログをインポートする必要があります。テーブルを完全にマップ解除してよいか確信がない場合には常に、現行のテーブル・マッピングをテーブル・カタログに保存して、後で必要になった場合に復元できるようにします。

出力プロセスによって新しいユーザー・テーブルを作成する方法

「エクスポート」ドロップダウン・リストの出力プロセス (「スナップショット」、「コール・リスト」、および「メール・リスト」) から、新しいユーザー・テーブルを作成できます。

1. フローチャートの編集集中に、新しいユーザー・テーブルを作成するための出力プロセスを開きます。
2. 「エクスポート先」ドロップダウン・リストで、「新規マップ・テーブル」を選択します。「新規テーブル定義」ウィンドウが開きます。
3. 「ベース・レコード・テーブル」、「ディメンション・テーブル」、または「その他のテーブル」を選択します。通常、このプロセスでは、既存のフラット・ファイルまたはデータベース内の新しいベース・テーブルにデータをエクスポートします。エクスポートしたデータを再び Campaign で読み取る必要がある場合には、それをベース・テーブルとしてエクスポートする必要があります。
4. 「次へ」をクリックします。
5. 「新規ファイル作成」または「選択したデータベースに新規テーブル作成」を選択します。
6. 新しいデータベース表の作成を選択した場合には、以下のようにします。
 - a. テーブルを作成するデータベースを選択します。
 - b. 「次へ」をクリックします。

- c. 新しいテーブルまたはファイルにエクスポートする「ソース・テーブル・フィールド」を選択します。 Campaign 生成済みフィールド、オーディエンス・レベル ID、および入力セルのフィールドから選択できます。「追加」、「削除」、「上へ (Up)」、および「下へ (Down)」ボタンを使用して、「新規テーブル・フィールド」リスト内のフィールドを定義します。
 - d. 「次へ」をクリックします。
 - e. 新しいテーブルの「データベース表名」および「Unica テーブル名」を指定します。
 - f. オプションで、新しいテーブル・フィールドを選択して、「Unica フィールド名」を変更します。
 - g. 「次へ」をクリックします。
 - h. 新しいテーブルの「オーディエンス・レベル」を選択して、新しいテーブルにオーディエンス・レベル・フィールドを指定します。
 - i. 「次へ」をクリックします。
 - j. オプションで、「追加」をクリックして、新しいテーブルの追加のオーディエンス・レベルを選択します。
 - k. 「次へ」をクリックします。
 - l. 新しいテーブルのプロファイルを定義します。詳しくは、45 ページの『値および件数のプロファイル作成』を参照してください。
 - m. 「完了」をクリックします。
7. 新規ファイルの作成を選択した場合には、以下のようになります。
- a. 「次へ」をクリックします。
 - b. 「固定幅フラット・ファイル」または「区切り記号付きファイル」を選択してから、「設定」フィールドを適切に指定します。
 - c. 「次へ」をクリックします。
 - d. 新しいテーブルまたはファイルにエクスポートする「ソース・テーブル・フィールド」を選択します。 Campaign 生成済みフィールド、オーディエンス・レベル ID、および入力セルのフィールドから選択できます。「追加」、「削除」、「上へ (Up)」、および「下へ (Down)」ボタンを使用して、「新規テーブル・フィールド」リスト内のフィールドを定義します。
 - e. 「次へ」をクリックします。
 - f. 新しいテーブルの「オーディエンス・レベル」を選択して、新しいテーブルにオーディエンス・レベル・フィールドを指定します。
 - g. 「次へ」をクリックします。
 - h. オプションで、「追加」をクリックして、新しいテーブルの追加のオーディエンス・レベルを選択します。
 - i. 「次へ」をクリックします。
 - j. 新しいテーブルのプロファイルを定義します。詳しくは、45 ページの『値および件数のプロファイル作成』を参照してください。
 - k. 「完了」をクリックします。

データ・ディクショナリーの作業

既存または新規作成のベース・テーブルまたは汎用テーブルに対するデータ・ディクショナリーを編集することもできますし、既存の固定幅フラット・ファイルから新しいデータ・ディクショナリーを作成することができます。

注: データ・ディクショナリーは、テーブル・マッピングに使用するために、Campaign サーバー上に保管するか、またはそのサーバーからアクセス可能でなければなりません。

データ・ディクショナリーを開く方法

必要なデータ・ディクショナリーを見つけてから、それをメモ帳や他の任意のテキスト・エディターで開きます。

そのファイルは、以下の例に示すようなものです。

```
CellID, ASCII string, 32, 0, Unknown,  
MBRSH, ASCII string, 12, 0, Unknown,  
MP, ASCII Numeric, 16, 0, Unknown,  
GST_PROF, ASCII Numeric, 16, 0, Unknown,  
ID, ASCII Numeric, 10, 0, Descriptive/Names,  
Response, ASCII Numeric, 10, 0, Flag,  
AcctAge, ASCII Numeric, 10, 0, Quantity,  
acct_id, ASCII string, 15, 0, Unknown,  
src_extract_dt, ASCII string, 50, 0, Unknown,  
extract_typ_cd, ASCII string, 3, 0, Unknown,
```

必要に応じてファイル内の情報を変更できます。関連したテーブルに保管されるデータが、設定するパラメーターを使用できるようにしてください。

変更をデータ・ディクショナリーに適用する方法

フローチャートを保存、クローズ、および再オープンする必要があります。

データ・ディクショナリーをいつ使用するか

データ・ディクショナリーは、作成する固定幅出力ファイルが特定の構成に従うようにするためのもので、「スナップショット」プロセスで使います。

データ・ディクショナリーの構文

データ・ディクショナリーの各行は、次の構文を使用して固定幅フラット・ファイルのフィールドを定義します。

<変数名>, <"ASCII string" または "ASCII Numeric" >, <バイト単位の長さ>, <小数点>, <フォーマット>, <コメント>

注: <小数点> 値は、小数点より右側の桁数を指定し、「ASCII Numeric」フィールドでのみ有効です。「ASCII string」フィールドでは、この値は常に 0 にする必要があります。

例えば、次のような行があるとします。

```
acct_id, ASCII string, 15, 0, Unknown,
```

この行は、ファイル内のレコードに「acct_id」という名前のフィールドがあり、そのフィールドは 15 バイトの文字列で小数部がなく (文字列のフィールドなので)、フォーマットは不明でコメントの文字列は空白であることを意味します。

注: フォーマット・フィールドおよびコメント・フィールドは、Campaign では使用されません。そのため、最適な結果を得るには、フォーマット値には「Unknown」を使用して「コメント」フィールドはブランクにしてください。

新しいデータ・ディクショナリーを手動で作成する方法

このセクションでは、新しいデータ・ディクショナリーを手動で作成する方法を説明します。新しいデータ・ディクショナリーを作成するときには、Campaign によって作成された既存のデータ・ディクショナリーを元にする方法が簡単です。

1. 空の .dat ファイル (長さ = 0) および対応する .dct ファイルを作成します。
2. .dct ファイル内に、フィールドを次のフォーマットで定義します。

<変数名>, < "ASCII string" または "ASCII Numeric" >, <バイト単位の長さ>, <小数点 >, <フォーマット>, <コメント>

以下のように、フォーマットには Unknown を使用して、コメント・フィールドはブランクにします。

acct_id, ASCII string, 15, 0, Unknown,

hsehlid_id, ASCII Numeric, 16, 0, Unknown,

occpn_cd, ASCII string, 2, 0, Unknown,

dob, ASCII string, 10, 0, Unknown,

natural_lang, ASCII string, 2, 0, Unknown,

commun_lang, ASCII string, 2, 0, Unknown,

3. これで、このデータ・ディクショナリーを使用して新しいテーブルをファイルにマップできます。

テーブル・カタログの作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 50 ページの『テーブル・カタログにアクセスする方法』
- 50 ページの『テーブル・カタログを開く方法』
- 50 ページの『テーブル・カタログの作成方法』
- 51 ページの『保管テーブル・カタログのロード方法』
- 52 ページの『テーブル・カタログの削除』
- 52 ページの『テーブル・カタログ内のテーブルの事前計算されたプロファイルを更新する方法』
- 53 ページの『テーブル・カタログのデータ・フォルダーの定義方法』

テーブル・カタログにアクセスする方法

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが表示されます。

2. 「テーブル・マッピングの管理」をクリックします。

「テーブル・マッピング」ウィンドウが表示されます。

3. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで、「ユーザー・テーブル表示」を選択します。

注: フローチャートの編集中に、「オプション」メニューからテーブル・カタログにアクセスすることもできます。

テーブル・カタログを開く方法

1. 『テーブル・カタログにアクセスする方法』の手順に従ってください。
2. 「ロード」をクリックします。以前に保管されたカタログが、「項目リスト」にリストされます。
3. 開くカタログを選択し、「ロード」をクリックします。

テーブル・カタログの作成方法

テーブル・カタログを作成するには、現行フローチャートの内部テーブル・カタログにあるユーザー・テーブルを保存します。テーブル・カタログを共通に定義されたテーブル・マッピングと共に保存すると、テーブル・マッピングの共有やテーブル・マッピングの復元が容易になります。

1. 『テーブル・カタログにアクセスする方法』の手順に従ってください。テーブル・カタログとして保存するユーザー・テーブルが、Campaign でマップされていることを確認してください。
2. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで、テーブル・カタログに保存するユーザー・テーブルを選択し、「保存」をクリックします。
3. 「テーブルの保存」ウィンドウで、すべてのテーブル・マッピングをテーブル・カタログに保存するオプション、または選択されたテーブル・マッピングだけをテーブル・カタログに保存するオプションを選択してから、「OK」をクリックします。

「テーブル・マッピングをカタログ・ファイルに保存」ウィンドウが開きます。

4. 新しいテーブル・カタログの詳細を入力します。それには保存先のフォルダー、名前、セキュリティ・ポリシー、説明、このカタログをデータベース認証情報と共に保存するかどうかなどが含まれます。
5. テーブル・カタログの名前を入力します。拡張子名として .XML を入力すると、テーブル・カタログはプロプラエタリー・バイナリー・ファイルではなく XML 形式で保存されます。

注: この名前はフォルダーの中で固有でなければなりません。そうでない場合は、同じ名前の既存のテーブル・カタログを上書きすることを確認するプロンプトが出されます。この名前には、ピリオド、アポストロフィ、単一引用符を使用

できません。それは文字で開始して、文字 A から Z、数字 0 から 9、および下線文字 (_) だけを含めることができます。

6. (オプション) テーブル・カタログの説明を「説明」フィールドに追加します。
7. (オプション) 「データベース認証情報と共に保存」にチェック・マークを付けます。
 - 「データベース認証情報と共に保存」にチェック・マークを付けない場合、このテーブル・カタログを使用するすべてのユーザーは、テーブル・カタログで参照されるすべてのデータ・ソースに対して、データベースのログイン名およびパスワードを入力する必要があります。これらのパスワードは、ASM ユーザー・プロファイルに既に保存されていることがあります。有効なログイン名およびパスワードがまだ保存されていない場合、それらの入力を求めるプロンプトがユーザーに出されます。この設定は、セキュリティの観点からはベスト・プラクティスです。
 - 「データベース認証情報と共に保存」にチェック・マークを付けた場合、現在の認証情報 (これらのデータ・ソースにアクセスするために現在使用しているログイン名およびパスワード) がテーブル・カタログに保存され、このテーブル・カタログへのアクセス権限を持つすべてのユーザーは、テーブル・カタログに保管された認証情報を使用してデータ・ソースに自動的に接続されます。つまり、このテーブル・カタログのユーザーは、ログイン名やパスワードを入力しなくてもこれらのデータ・ソースにアクセスでき、このデータ・ソースの読み書き用に保管されたログイン名が持つすべての特権を付与されます。セキュリティの観点から、この設定を避けることができます。
8. 「保存先」ドロップダウン・リストを使用して、テーブル・カタログを保存するフォルダーを選択します。

テーブル・カタログはフォルダー別に編成できます。「項目リスト」から既存のフォルダーを選択するか、または「新規フォルダー」ボタンをクリックして新しいフォルダーを作成します。

特定のフォルダーを選択しない場合、または「保存先」ドロップダウン・リストで「なし」を選択した場合は、現在のテーブル・カタログが最上位に保存されます。選択されたフォルダーが、「保存先」フィールドの下に表示されます。

9. 「保存」をクリックします。

テーブル・カタログは、名前と共に拡張子を指定していない場合には .cat ファイルとして保存され、選択した場所に置かれます。ファイル名と共に .xml 拡張子を指定した場合、テーブル・カタログは XML 形式で保存されます。

保管テーブル・カタログのロード方法

以前に保存したテーブル・カタログを、現行フローチャートで使用するためにロードすることができます。

注: 「保管テーブル・カタログからテーブル・マッピングをロードする (既存のマッピングを消去)」オプションを選択した場合、そのフローチャートに存在するマッピング済みテーブルは失われます。つまり、それらはロードされるカタログのテーブル・マッピングで置き換えられます。「保管テーブル・カタログからテーブル・マッピ

ングをマージする (既存のマッピングを上書き)』を選択した場合、ロードされる新しいテーブル・カタログに含まれていない古いテーブル・マッピングは保持されます。

default.cat テーブル・カタログを定義した場合、新しいフローチャートを作成するたびにそれがデフォルトでロードされます。ただし、cookie を受け入れるようにブラウザを設定し、別のテーブル・カタログをロードした場合は、デフォルトでそのカタログが default.cat の代わりにロードされます。これは保管されたディメンション階層についても同じです。

1. 50 ページの『テーブル・カタログにアクセスする方法』の手順に従ってください。
2. 「ロード」をクリックします。

「テーブルのロード」ウィンドウが開きます。

3. テーブルをロードするときに既存のマッピングを消去するか上書きするかを選択するための該当するオプションを選択します。デフォルトでは、既存のマッピングを消去するオプションが選択されています。
4. 「OK」をクリックします。

「保管テーブル・カタログ」ウィンドウが開きます。

5. ロードするテーブル・カタログの名前を選択します。

テーブル・カタログの名前をクリックすると、その情報が「詳細情報」ボックスに表示されて、「ロード」ボタンが使用可能になります。

6. 「ロード」をクリックします。

選択したカタログがロードされます。新しいカタログに含まれるテーブルの詳細が、「テーブル・マッピング」ウィンドウに表示されます。

テーブル・カタログの削除

テーブル・カタログは、「編集」モードでフローチャート・ページから削除します。このタスクは、「キャンペーン設定」ページの「テーブル・マッピングの管理」リンクからは使用できません。

重要: テーブル・カタログの削除には、Campaign インターフェースだけを使用してください。テーブルを削除した場合やファイル・システム内のテーブル・カタログを直接変更した場合、Campaign はシステム内のデータ保全性を保証できません。

保管テーブル・カタログの削除方法について詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

テーブル・カタログ内のテーブルの事前計算されたプロファイルを更新する方法

基礎となるマーケティング・データが変更された場合、Campaign を使用してテーブル・フィールドのプロファイル情報を事前計算するときは、レコード数とテーブルに指定した事前計算値とを再計算して、テーブル・カタログを更新する必要があります。

1. 50 ページの『テーブル・カタログにアクセスする方法』の手順に従ってください。
2. ユーザー・テーブルのサブセットのレコード数および値を更新するには、テーブルのリストでそれらのテーブルを選択します。Ctrl + クリックを使用して、複数のテーブルを選択することもできます。

すべてのユーザー・テーブルのレコード数および値を計算するとき、どのテーブルも選択する必要はありません。

3. 「計算」をクリックします。

「再計算」ウィンドウが開きます。

1 つもテーブルを選択していない場合、デフォルトでは、「すべてのテーブルのレコード数を再計算する」オプションが選択されます。

テーブルのサブセットを選択した場合、「選択したテーブルのレコード数を再計算する」オプションが選択されます。すべてのテーブルを計算するオプションも選択可能です。

注: 計算対象となるテーブルを選択しなかったとき、選択したテーブルの値を計算するオプションを有効にするには、「再計算」ウィンドウで「キャンセル」をクリックします。ウィンドウが閉じて「テーブル・マッピング」ウィンドウに戻ります。このウィンドウで、レコード数と値を計算するテーブルを選択できます。

4. 選択を確定するには、「OK」をクリックします。

計算が完了すると、「テーブル・マッピング」ウィンドウに戻ります。

テーブル・カタログのデータ・フォルダーの定義方法

テーブル・カタログを作成するとき、そのテーブル・カタログに関連した 1 つ以上のデータ・フォルダーを指定することもできます。「スナップショット」などの出力プロセスでは、ファイルの場所を選択するダイアログで、これらの指定フォルダーは、事前定義されたフォルダーの場所として示されます。

1. フローチャートの「編集」モードで「システム管理」アイコンをクリックし、「テーブル」を選択します。
2. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで、カタログに保存するマップ済みユーザー・テーブルを選択します。「保存」をクリックします。
3. 「テーブル・マッピングをカタログ・ファイルに保存」ウィンドウで「Unica データ・フォルダー」セクションをクリックして、項目を追加します。
4. 追加するデータ・フォルダーの名前と場所を、現行パーティションのホーム・ディレクトリーからの相対位置で入力します。例えば、パーティション 1 で作業している場合、指定するフォルダーの場所は、partitions/partition1 フォルダーからの相対位置となります。
5. 「保存」をクリックします。

関連したデータ・フォルダーを指定してテーブル・カタログを保存した後、「スナップショット」などの出力プロセスが含まれるフローチャート内のカタログを再ロードすると、ファイルの場所を選択するダイアログでこれらのフォルダーがオプションとして示されます。

例えば、「フォルダーの場所」に `temp` を指定して `MyFolder` という名前の Unica データ・フォルダーを追加した場合、「スナップショット」プロセス構成ダイアログで、「エクスポート先」ドロップダウン・リストに「ファイル・イン `MyFolder`」が表示されます。「`MyFolder` のファイル (File in `MyFolder`)」を選択すると、「出力ファイルの指定」ウィンドウの「ファイル名」フィールドに自動的に相対パス `temp/` が設定されます。

第 4 章 キャンペーンのカスタマイズ

カスタム・キャンペーン属性、イニシアチブ、および製品を使用して、キャンペーンをカスタマイズできます。

カスタム・キャンペーン属性

注: Campaign インストール済み環境が Marketing Operations と統合されている場合、Marketing Operations を使用してカスタム・キャンペーン属性を作成する必要があります。詳細については、Marketing Operations の資料を参照してください。

キャンペーンをカスタマイズするには、各キャンペーンについてのメタデータを保管するカスタム・キャンペーン属性を追加します。

カスタム属性は、キャンペーンをさらに定義して分類するために役立ちます。例えば、カスタム・キャンペーン属性の「部門」を定義して、組織内においてキャンペーン企画を担当している部門の名前を保管することができます。定義したカスタム属性は、各キャンペーンの「サマリー」タブに表示されます。

カスタム・キャンペーン属性は、システム内のすべてのキャンペーンに適用されます。既存のキャンペーンがあるときにカスタム・キャンペーン属性を追加した場合、それらのキャンペーンの属性値は NULL になります。それらのキャンペーンは、後で編集してカスタム属性の値を指定することができます。

注: カスタム属性の名前は、キャンペーン、オファー、およびセル全体にわたって固有なカスタム属性名でなければなりません。

カスタム・セル属性

注: Campaign インストール済み環境が Marketing Operations と統合されている場合、Marketing Operations を使用してカスタム・セル属性を作成する必要があります。詳細については、Marketing Operations の資料を参照してください。

キャンペーンで作成するセルに関するメタデータを保管するためのカスタム属性を作成できます。例えば、カスタム・セル属性の「オーディエンス・タイプ」を定義して、「抱き合わせ販売」、「上位商品販売」、「離反」、「ロイヤリティー」などの使用する可能性がある値を保管できます。

カスタム・セル属性は、すべてのキャンペーンで同じです。ユーザーは、キャンペーンのターゲット・セル・スプレッドシートでカスタム・セル属性の値を入力します。例えば、上記の説明どおりにカスタム・セル属性「オーディエンス・タイプ」を作成した場合、ユーザーがターゲット・セル・スプレッドシートの行を編集するときに「オーディエンス・タイプ」が選択可能なフィールドとして表示されます。

フローチャートの出力処理において、カスタム・セル属性の出力値を Campaign 生成済みフィールド (UCGF) として生成することもできます。その後、ユーザーはセ

ル属性の値に基づくレポートを表示できます (レポートがこれをサポートするようにカスタマイズされている場合)。詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

カスタム・オファー属性

Campaign には、オファー・テンプレートで利用できる標準的なオファー属性のセットが備わっています。カスタム・オファー属性を作成することで、定義、出力、または分析に関する追加のオファー・メタデータを保管できます。

例えば、住宅ローンのオファーで提供される利率の値を保管する **Interest Rate** (利率) というカスタム・オファー属性を定義できます。

オファー・テンプレートを定義するとき、特定の種類のオファーでどの標準/カスタム・オファー属性を表示するかを選択できます。その後、ユーザーは、オファーを作成したり使用したりするときにこれらの属性の値を提供します。

以下の 3 つのいずれかの方法で、カスタム属性をオファー・テンプレートで使用できます。

- 静的属性として
- 表示されない静的属性として
- パラメーター化された属性として

静的属性とは

静的属性とは、値が一度だけ設定されて、オファーの使用時にその値が変わらないオファー・フィールドです。

オファー・テンプレートを作成するときに、すべての静的属性の値を提供します。そのテンプレートに基づいてユーザーがオファーを作成するとき、既に入力されている値がデフォルト値として使われます。ユーザーは必要に応じてこれらのデフォルト値をオーバーライドできます。ただし、フローチャート処理でオファーを使用するときには、ユーザーは静的属性の値をオーバーライドできません。

すべてのオファー・テンプレートに自動的に含まれる静的属性もあります。

表示されない静的属性とは

表示されない静的属性は、そのテンプレートに基づいてユーザーがオファーを作成するときにユーザーに表示されないオファー・フィールドです。例えば、オファーを管理するための組織にとってのコストを、表示されない静的属性にすることができます。

オファーを作成しているユーザーは、表示されない静的属性の値を編集 (および表示) できません。ただし管理者は、他のオファー属性の場合と同じ方法で、表示されない静的属性の値を追跡してレポートを生成することができます。

オファー・テンプレートを作成するとき、表示されない静的属性として入力した値は、そのテンプレートに基づくすべてのオファーに適用されます。

パラメーター化された属性とは

パラメーター化された属性とは、フローチャート内のセルにオファーが関連付けられるインスタンスごとにユーザーが変更できるフィールドです。

オファー・テンプレートを作成するときには、パラメーター化された属性のデフォルト値を提供します。その後、このテンプレートに基づいてユーザーがオファーを作成するとき、既に入力されているデフォルト値を受け入れたり、変更したりすることができます。最後に、パラメーター化された属性を含むオファーがフローチャート内のセルに関連付けられるとき、ユーザーはオファーに入力されたデフォルト値を受け入れるか、変更することができます。

カスタム属性の作業

以下のトピックでは、キャンペーン、オファー・テンプレートとオファー、ターゲット・セル・スプレッドシート上のセルのいずれかで使用できるカスタム属性の処理方法を説明します。

- 『カスタム属性の作成』
- 59 ページの『カスタム属性の変更方法』
- 65 ページの『オファー・テンプレートでのカスタム属性の使用』
- 74 ページの『「チャンネル」属性へのリスト値の追加』

カスタム属性の作成

カスタム属性を作成するための手順は、キャンペーン、オファー、セルのいずれについても同じです。カスタム属性の作成時に指定するタイプによって、その属性を使用できるのがキャンペーンであるか、オファー・テンプレートとオファーであるか、それともターゲット・セル・スプレッドシート上のセルであるかが決まります。

注: キャンペーン、オファー、およびセルのカスタム属性を追加する権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。
2. 「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「カスタム属性の定義」をクリックします。

「カスタム属性の定義」ウィンドウに、標準のオファー属性とすべての作成済みのカスタム属性が表示されます。

3. 「カスタム属性の追加」アイコンをクリックします。
4. 「属性詳細の追加」ウィンドウを使用して属性を定義します。
 - a. ユーザーに表示されるラベルを指定する「属性表示名」を入力します。特別な命名上の制約はありません。
 - b. 「内部名」を入力します。これは、照会やカスタム・マクロなどの IBM Unica Marketing 式を作成するときこの属性を参照する目的で使用されます。内部名は、先頭文字を英字にする必要があります。さらに、スペースを含めることができず、グローバルに固有の名前でなければなりません。内部名には大/小文字の区別がありません。ベスト・プラクティスは、表示名と同じ名前を、スペースを除去して使用することです（「InterestRate」など）。

- c. 「**次の属性**」ドロップダウン・リストを使用して、この属性を使用できる場所を指定します。
- 「**キャンペーン**」属性は、すべてのキャンペーン (既に作成済みのキャンペーンを含む) に組み込まれます。
 - 「**オファー**」属性は、新規オファー・テンプレートで使用できます。オファー・テンプレートにこの属性を組み込むと、そのテンプレートに基づくすべてのオファーにその属性が組み込まれます。
 - 「**セル**」属性は、すべてのキャンペーン (既に作成済みのキャンペーンを含む) のターゲット・セル・スプレッドシートに組み込まれます。
- d. オプションで、「**説明**」を入力します。
- e. オプションで、「**必須**」ボックスにチェック・マークを付けて、この属性の値を必須にします。この設定は、必要であれば後で変更できます。
- キャンペーンの場合、ユーザーはこの属性の値を指定する必要があります (このフィールドは空白にはできません)。
 - セルの場合、ユーザーはターゲット・セル・スプレッドシートに値を指定する必要があります (このセルは空白にはできません)。
 - オファーの場合、管理者は、属性がオファー・テンプレートに追加されるときに値を指定する必要があります。ユーザーがオファーを作成または編集するときに別の値を指定した場合を除き、そのテンプレートに基づくすべてのオファーで、この指定値が使用されます。

注: オファー・テンプレートに「表示されない静的属性」または「パラメーター化された属性」としてオファー属性を追加する場合、その属性が「必須」として定義されていない場合でも、値が常に必要になります。オファー・テンプレートに「静的属性」としてオファー属性を追加する場合、値が必要であるかどうかは「**必須**」の設定によって決まります。

- f. 「**フォーム要素タイプ**」リストを使用して、オファーまたはセルの属性フィールドに保管されるデータの型を指定します。

重要: カスタム属性を追加した後に、そのデータ型を変更することはできません。

- g. 選択内容に応じて、以下のいずれかの値を入力する必要があることがあります。
- 「**最大文字列長**」: 「**選択ボックス - 文字列**」または「**テキスト・フィールド - 文字列**」を選択した場合、この属性の値として保管される文字の最大数を指定する必要があります。
 - 「**小数点以下**」: 「**テキスト・フィールド - 数値**」または「**テキスト・フィールド - 通貨**」を選択した場合、小数点の右側に表示される小数位の桁数を指定する必要があります。

重要: 「**テキスト・フィールド - 通貨**」の場合、その地域通貨で通常使用される小数点以下の桁数が通貨の値に反映されます。小数点以下の桁数を通常使用される数よりも小さい値に指定した場合、通貨の値は切り捨てられます。

- h. 「**選択ボックス - 文字列**」を「**フォーム要素タイプ**」として選択した場合には、次のようになります。

- オプションで、「**編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可**」にチェック・マークを付けると、この属性が組み込まれるキャンペーン、オファー・テンプレート、またはオファーをユーザーが作成または編集するときに、使用可能な値のリストに新しい固有値を追加できます。（このオプションはセルには適用されません。）例えば、オファー・テンプレートの「選択ボックス」に小、中、大 という値が設定されている場合、オファーの作成時やオファー・テンプレートの編集時に、ユーザーは特大 という値を追加することができます。

重要: ユーザーは、キャンペーン、オファー・テンプレート、またはオファーを一度保存すると、新しいリスト項目を削除できなくなります。値は元のカスタム属性定義に保存されて、すべてのユーザーが使用できるようになります。管理者だけが、カスタム属性を変更する方法を使ってリストから項目を削除できます。

- 「**使用可能な値のソース・リスト**」は、「選択ボックス」で選択可能な項目のリストです。このリストにデータを設定するには、「**新規項目または選択した項目**」フィールドに値を入力して「**承認**」をクリックします。値を削除するには、それを「使用可能な値のソース・リスト」で選択し、「**削除**」をクリックします。
- オプションで、「選択ボックス」の「**デフォルト値**」を指定します。そのデフォルト値がキャンペーン、オファー、または TCS で使用されますが、ユーザーがキャンペーン、オファー、またはセルを作成または編集するときに別の値を指定した場合にはその値が使用されます。
- 「**ソート順**」を指定して、リスト内で値が表示される方法を決定します。

5. 「**変更の保存**」をクリックします。

カスタム属性の変更方法

カスタム属性を変更するための手順は、キャンペーン、オファー、セルのいずれについても同じです。

注: オファーおよびセルのカスタム属性を変更する権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

1. 「**設定**」>「**キャンペーン設定**」を選択します。
2. 「**テンプレートとカスタマイズ**」セクションで、「**カスタム属性の定義**」をクリックします。

「カスタム属性の定義」ウィンドウに、標準のオファー属性とすべての作成済みのカスタム属性が表示されます。

3. 変更する属性の名前をクリックします。
4. 「**属性詳細**」ウィンドウを使用して以下のように変更します。
 - a. 「**属性表示名**」: 作成したカスタム属性の表示名を変更できます。標準のオファー属性の表示名は変更できません。
 - b. 「**内部名**」: 自分で作成したカスタム属性の内部名は変更できますが、既存のフローチャートでその内部名を使用するとエラーになり、その属性を保存するときに警告を受け取ります。デフォルトのオファー属性の内部名を変更することはできません。

重要: カスタム属性の内部名は、グローバルに固有の名前でなければならず、先頭文字を英字にする必要があります。さらに、スペースを含めることができず、大/小文字の区別はありません。

- c. オプションで、「説明」を変更します。
- d. 「必須」ボックスは、この属性で値が必要であるかどうかに応じてチェック・マークを付けるか外します。
 - 「必須」を必須でない設定に変更すると、その属性が使用されるときに値が必要でなくなります。
 - 必須でない設定を「必須」に変更すると、今後この属性が使用されるときには必ず値が必要になります。この変更による既存のオブジェクトへの影響は、それを編集する場合を除いて、ありません。例えば、「編集」モードでキャンペーン、ターゲット・セル・スプレッドシート、またはオファーを開くとき、保存する前に値を指定する必要があります。
- e. 「選択ボックス - 文字列」または「テキスト・フィールド - 文字列」フィールドの場合、「最大文字列長」を変更して、この属性の値として保管する文字の最大数を指定できます。

重要: 既存の属性の長さを小さくすると、既存の値は切り捨てられるので、そのフィールドが突き合わせのために使用される場合には、レスポンス・トラッキングに不具合が生じることがあります。

- f. 「テキスト・フィールド - 数値」または「テキスト・フィールド - 通貨」フィールドの場合、「小数点以下」を変更して、小数点の右側に表示される小数位の桁数を指定できます。

重要: この値を小さくすると、ユーザー・インターフェースでの表示は切り捨てられます。ただし、元の値はデータベースに保持されます。

- g. 属性が「選択ボックス - 文字列」の場合、以下を行うことができます。
 - 「編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可」を変更して、ユーザーがキャンペーン、オファー、またはオファー・テンプレートを定義するときに新しい固有値をリストに追加する操作を許可または不許可にできます。このオプションは、カスタム・セル属性には適用されません。
 - リスト項目の編集: これを「使用可能な値のソース・リスト」で選択し、それを「新規項目または選択した項目」フィールドで変更してから「承認」をクリックします。
 - リスト項目の追加: 「新規項目または選択した項目」フィールドで値を入力し、「承認」をクリックします。
 - リスト項目の削除: それを「使用可能な値のソース・リスト」で選択し、「削除」をクリックします。
 - 「デフォルト値」を変更します。
 - 「ソート順」を変更して、リスト内の項目の順序を決定します。
5. 「変更の保存」をクリックします。

カスタム・イニシアチブ

Campaign では、「イニシアチブ」という名前の組み込み属性が提供されています。「イニシアチブ」属性は、キャンペーンの「サマリー」タブにあるドロップダウン・リストです。初期状態では、ドロップダウン・リストに値が含まれていません。管理者は、選択するイニシアチブを定義する必要があります。

イニシアチブの追加方法

キャンペーンの「サマリー」タブの「イニシアチブ」ドロップダウン・リストからユーザーが選択できるイニシアチブを追加できます。イニシアチブは、データベース表 `UA_Initiatives` に直接追加します。

1. データベース管理システムを使用して、Campaign システム・テーブル・データベースにアクセスします。
2. データベース表 `UA_Initiatives` の「InitiativeName」列に値を追加します。それぞれの値は最大 255 文字まで可能です。
3. 変更内容を `UA_Initiatives` テーブルに保存します。

カスタム製品

ユーザーは、オファーに 1 つ以上の製品を関連付けることができます。製品 ID は、Campaign システム・テーブル・データベースの `UA_Product` テーブルに保管されます。初期状態では、このテーブルにレコードは含まれていません。管理者は、このテーブルにデータを追加できます。

製品の追加方法

ユーザーがオファーに関連付けることのできる製品を追加できます。製品は、データベース表 `UA_Products` に直接追加します。

1. データベース管理システムを使用して、Campaign システム・テーブル・データベースにアクセスします。
2. `UA_Product` テーブルを見つけます。

テーブルには、次の 2 つの列があります。

- `ProductID` (bigint、長さ 8)
- `UserDefinedFields` (int、長さ 4)

3. オプションで、テーブルを変更して追加の列を組み込みます。
「`UserDefinedFields`」列を削除することもできます。
4. 必要に応じてテーブルにデータを追加し、オファーと関連付けることのできる製品を含めます。
5. 変更内容を `UA_Product` テーブルに保存します。

第 5 章 オファー・テンプレートの管理

オファーの管理を進める前に、以下の点を理解しておく必要があります。

- 『オファーとは』
- 『オファー・テンプレートとは』
- 64 ページの『オファー・テンプレートとセキュリティー』
- 64 ページの『オファー・テンプレートを使用する理由』
- 56 ページの『カスタム・オファー属性』

オファーとは

オファーとは、1 つ以上の経路 (チャネル) を使って特定の人々のグループに送られる、マーケティング上の特定のコミュニケーションです。単純なオファーも複雑なオファーも可能であり、通常は、創造的部分、コスト、チャネル、終了日がオファーに含まれます。

例えば、オンライン小売業者からの単純なオファーは、「4 月中にオンラインで購入される全品目の送料が無料になる」という項目から成ることがあります。より複雑なオファーとしては、金融機関からのクレジット・カードに、対象となる顧客の信用格付けと地域に基づいてアートワーク、初期の利率、有効期限を個人別に組み合わせて付帯することがあります。

Campaign では、オファーは

- 管理されるオファー・テンプレートに基づきます。
- キャンペーンで使用され、ターゲット・セルに関連付けられます。

関連付けられたオファーは、その後、これらのターゲット・セルで識別される顧客に向けて送られます。

また、複数のオファーをリストとしてグループ化し、オファー・リストをターゲット・セルに割り当てることもできます。

注: オffer名とオffer・リスト名の文字には、固有の制約事項があります。詳しくは、381 ページの『付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

オファー・テンプレートとは

オffer・テンプレートは、特定の種類のオfferの構造を定義します。作成済みのオffer・テンプレートに基づいて、ユーザーはオfferを作成します。

重要: オffer・テンプレートは必須です。ユーザーは、テンプレートに基づかないでオfferを作成することができません。

企業においてさまざまな種類のオファーを管理するために、適切な数のオファー・テンプレートを作成することができます。オファー・テンプレートを定義するときには、関連するオファー属性とそれらの使用方法を一緒に指定します。

注: オファー・テンプレートの名前には、固有の制約事項はありません。

オファー・テンプレートとセキュリティ

オファー・テンプレートに対して設定されるセキュリティ・ポリシーは、どのユーザーがオファー・テンプレートを使用できるかを決定します。

オファー・テンプレートのセキュリティ・ポリシーは、このオファー・テンプレートを使って作成されるオファーに適用されるセキュリティ・ポリシーとは無関係です。つまり、テンプレートに基づくオファーにはセキュリティ・ポリシーが伝搬されません。

ユーザーが新しいオファーを作成するとき、オファーのセキュリティ・ポリシーは、それが格納されるフォルダーに基づきます。そのフォルダーが最上位のオファー・フォルダー内に作成される場合、ユーザーはそのフォルダーに対して他の有効なセキュリティ・ポリシーを選択できます。

オファー・テンプレートの操作 (オファー・テンプレートの追加、編集、回収などの作業) を行うには、オファー・テンプレートの表示権限を含む適切な権限が必要です。例えばオファー・テンプレートを追加するには、「**オファー・テンプレートの追加**」と「**オファー・テンプレートの表示**」の両方の権限を付与される必要があります。

Campaign のセキュリティについて、詳しくは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

オファー・テンプレートを使用する理由

オファー・テンプレートを使用すると、企業および Campaign ユーザーにとって以下のような利点があります。

- オファー・テンプレートを作成することにより、ユーザーにとってオファー作成が単純化されます。特定の種類のオファーに関連するオファー属性だけが表示されるためです。
- オファー属性のデフォルト値を提供することにより、オファー作成プロセスが速くなります。
- オファー・テンプレート内でパラメーター化されたオファー属性を指定することにより、新規オファーが作成される時点、およびオファー・バージョンが代わりに使用可能になる時点を制御できます。
- カスタム属性を使って特定のデータ (例えばオファーに関連付けられた割引率やボーナス・ポイント) を取得することにより、キャンペーンのレポート機能および分析を改善することができます。

オファー・テンプレートおよびオファーの計画

オファーを計画するときには、どのテンプレートを使用するか、どの属性をパラメーター化するか、このオファーが割り当てられるセルで検証制御グループを使用するかどうか、などの事柄を考慮します。

以下の点で、さまざまに異なるオファーが可能です。

- 有効期限日付を含む、パラメーター化されたさまざまなオファー・フィールド
- さまざまなオファー・コード (コードの数、長さ、形式、カスタム・コード・ジェネレーター)
- 特定の種類のオファーで表示されるカスタム属性 (例えばクレジット・カード・オファーには初期の年利率と通常の利率があり、住宅ローン・オファーには支払い頻度と期間があります)。

ベスト・プラクティスとしては、オファーの中でパラメーター化された値を最小限に抑えてください。ほとんどのオファー属性は、パラメーター化されるべきではありません。オファーの「本質」を変えない属性 (開始日、終了日など) にのみ、パラメーターを作成すべきです。

オファーおよびオファー・テンプレートの設計を注意深く考慮してください。設計は、キャンペーンの詳細をどのように分析および報告できるかに大きな影響を与えることがあります。

オファーを使った作業について、詳しくは「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

オファー属性を操作する

以下のトピックでは、オファー属性の操作方法について説明します。

- 『オファー・テンプレートでのカスタム属性の使用』
- 57 ページの『カスタム属性の作成』
- 59 ページの『カスタム属性の変更方法』
- 69 ページの『Campaign 内の標準のオファー属性』

オファー・テンプレートでのカスタム属性の使用

カスタム・オファー属性を作成すると、それを新しいオファー・テンプレートに追加できるようになります。そのテンプレートに基づいて作成されたすべてのオファーには、カスタム属性が組み込まれます。関連情報については、70 ページの『オファー・テンプレートでのドロップダウン・リストの使用』を参照してください。

カスタム属性の作成

カスタム属性を作成するための手順は、キャンペーン、オファー、セルのいずれについても同じです。カスタム属性の作成時に指定するタイプによって、その属性を使用できるのがキャンペーンであるか、オファー・テンプレートとオファーであるか、それともターゲット・セル・スプレッドシート上のセルであるかが決まります。

注: キャンペーン、オファー、およびセルのカスタム属性を追加する権限が必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。
2. 「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「カスタム属性の定義」をクリックします。

「カスタム属性の定義」ウィンドウに、標準のオファー属性とすべての作成済みのカスタム属性が表示されます。

3. 「カスタム属性の追加」アイコンをクリックします。
4. 「属性詳細の追加」ウィンドウを使用して属性を定義します。
 - a. ユーザーに表示されるラベルを指定する「属性表示名」を入力します。特別な命名上の制約はありません。
 - b. 「内部名」を入力します。これは、照会やカスタム・マクロなどの IBM Unica Marketing 式を作成するときにこの属性を参照する目的で使用されます。内部名は、先頭文字を英字にする必要があります。さらに、スペースを含めることができず、グローバルに固有の名前でなければなりません。内部名には大/小文字の区別がありません。ベスト・プラクティスは、表示名と同じ名前を、スペースを除去して使用することです (「InterestRate」など)。
 - c. 「次の属性」ドロップダウン・リストを使用して、この属性を使用できる場所を指定します。
 - 「キャンペーン」属性は、すべてのキャンペーン (既に作成済みのキャンペーンを含む) に組み込まれます。
 - 「オファー」属性は、新規オファー・テンプレートで使用できます。オファー・テンプレートにこの属性を組み込むと、そのテンプレートに基づくすべてのオファーにその属性が組み込まれます。
 - 「セル」属性は、すべてのキャンペーン (既に作成済みのキャンペーンを含む) のターゲット・セル・スプレッドシートに組み込まれます。
 - d. オプションで、「説明」を入力します。
 - e. オプションで、「必須」ボックスにチェック・マークを付けて、この属性の値を必須にします。この設定は、必要であれば後で変更できます。
 - キャンペーンの場合、ユーザーはこの属性の値を指定する必要があります (このフィールドは空白にはできません)。
 - セルの場合、ユーザーはターゲット・セル・スプレッドシートに値を指定する必要があります (このセルは空白にはできません)。
 - オfferの場合、管理者は、属性がオファー・テンプレートに追加されるときに値を指定する必要があります。ユーザーがオファーを作成または編集するときに別の値を指定した場合を除き、そのテンプレートに基づくすべてのオファーで、この指定値が使用されます。

注: オffer・テンプレートに「表示されない静的属性」または「パラメーター化された属性」としてオffer属性を追加する場合、その属性が「必須」として定義されていない場合でも、値が常に必要になります。オffer・テンプレートに「静的属性」としてオffer属性を追加する場合、値が必要であるかどうかは「必須」の設定によって決まります。

- f. 「**フォーム要素タイプ**」リストを使用して、オファーまたはセルの属性フィールドに保管されるデータの型を指定します。

重要: カスタム属性を追加した後に、そのデータ型を変更することはできません。

- g. 選択内容に応じて、以下のいずれかの値を入力する必要があることがあります。
- 「**最大文字列長**」: 「**選択ボックス - 文字列**」または「**テキスト・フィールド - 文字列**」を選択した場合、この属性の値として保管される文字の最大数を指定する必要があります。
 - 「**小数点以下**」: 「**テキスト・フィールド - 数値**」または「**テキスト・フィールド - 通貨**」を選択した場合、小数点の右側に表示される小数位の桁数を指定する必要があります。

重要: 「**テキスト・フィールド - 通貨**」の場合、その地域通貨で通常使用される小数点以下の桁数が通貨の値に反映されます。小数点以下の桁数を通常使用される数よりも小さい値に指定した場合、通貨の値は切り捨てられます。

- h. 「**選択ボックス - 文字列**」を「**フォーム要素タイプ**」として選択した場合には、次のようになります。
- オプションで、「**編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可**」にチェック・マークを付けると、この属性が組み込まれるキャンペーン、オファー・テンプレート、またはオファーをユーザーが作成または編集するときに、使用可能な値のリストに新しい固有値を追加できます。(このオプションはセルには適用されません。) 例えば、オファー・テンプレートの「**選択ボックス**」に小、中、大 という値が設定されている場合、オファーの作成時やオファー・テンプレートの編集時に、ユーザーは特大 という値を追加することができます。

重要: ユーザーは、キャンペーン、オファー・テンプレート、またはオファーを一度保存すると、新しいリスト項目を削除できなくなります。値は元のカスタム属性定義に保存されて、すべてのユーザーが使用できるようになります。管理者だけが、カスタム属性を変更する方法を使ってリストから項目を削除できます。

- 「**使用可能な値のソース・リスト**」は、「**選択ボックス**」で選択可能な項目のリストです。このリストにデータを設定するには、「**新規項目または選択した項目**」フィールドに値を入力して「**承認**」をクリックします。値を削除するには、それを「**使用可能な値のソース・リスト**」で選択し、「**削除**」をクリックします。
- オプションで、「**選択ボックス**」の「**デフォルト値**」を指定します。そのデフォルト値がキャンペーン、オファー、または TCS で使用されますが、ユーザーがキャンペーン、オファー、またはセルを作成または編集するときに別の値を指定した場合にはその値が使用されます。
- 「**ソート順**」を指定して、リスト内で値が表示される方法を決定します。

5. 「**変更の保存**」をクリックします。

カスタム属性の変更方法

カスタム属性を変更するための手順は、キャンペーン、オファー、セルのいずれについても同じです。

注: オファーおよびセルのカスタム属性を変更する権限が必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。
2. 「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「カスタム属性の定義」をクリックします。

「カスタム属性の定義」ウィンドウに、標準のオファー属性とすべての作成済みのカスタム属性が表示されます。

3. 変更する属性の名前をクリックします。
4. 「属性詳細」ウィンドウを使用して以下のように変更します。
 - a. 「属性表示名」: 作成したカスタム属性の表示名を変更できます。標準のオファー属性の表示名は変更できません。
 - b. 「内部名」: 自分で作成したカスタム属性の内部名は変更できますが、既存のフローチャートでその内部名を使用するとエラーになり、その属性を保存するときに警告を受け取ります。デフォルトのオファー属性の内部名を変更することはできません。

重要: カスタム属性の内部名は、グローバルに固有の名前でなければならず、先頭文字を英字にする必要があります。さらに、スペースを含めることができず、大/小文字の区別はありません。

- c. オプションで、「説明」を変更します。
- d. 「必須」ボックスは、この属性で値が必要であるかどうかに応じてチェック・マークを付けるか外します。
 - 「必須」を必須でない設定に変更すると、その属性が使用されるときに値が必要でなくなります。
 - 必須でない設定を「必須」に変更すると、今後この属性が使用されるときには必ず値が必要になります。この変更による既存のオブジェクトへの影響は、それを編集する場合を除いて、ありません。例えば、「編集」モードでキャンペーン、ターゲット・セル・スプレッドシート、またはオファーを開くとき、保存する前に値を指定する必要があります。
- e. 「選択ボックス - 文字列」または「テキスト・フィールド - 文字列」フィールドの場合、「最大文字列長」を変更して、この属性の値として保管する文字の最大数を指定できます。

重要: 既存の属性の長さを小さくすると、既存の値は切り捨てられるので、そのフィールドが突き合わせのために使用される場合には、レスポンス・トラッキングに不具合が生じることがあります。

- f. 「テキスト・フィールド - 数値」または「テキスト・フィールド - 通貨」フィールドの場合、「小数点以下」を変更して、小数点の右側に表示される小数位の桁数を指定できます。

重要: この値を小さくすると、ユーザー・インターフェースでの表示は切り捨てられます。ただし、元の値はデータベースに保持されます。

- g. 属性が「**選択ボックス - 文字列**」の場合、以下を行うことができます。
- 「**編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可**」を変更して、ユーザーがキャンペーン、オファー、またはオファー・テンプレートを定義するときに新しい固有値をリストに追加する操作を許可または不許可にできます。このオプションは、カスタム・セル属性には適用されません。
 - リスト項目の編集: これを「**使用可能な値のソース・リスト**」で選択し、それを「**新規項目または選択した項目**」フィールドで変更してから「**承認**」をクリックします。
 - リスト項目の追加: 「**新規項目または選択した項目**」フィールドで値を入力し、「**承認**」をクリックします。
 - リスト項目の削除: それを「**使用可能な値のソース・リスト**」で選択し、「**削除**」をクリックします。
 - 「**デフォルト値**」を変更します。
 - 「**ソート順**」を変更して、リスト内の項目の順序を決定します。

5. 「**変更の保存**」をクリックします。

Campaign 内の標準のオファー属性

次の表は、Campaign と共に提供される標準のオファー属性のリストです。

表 16. 標準のオファー属性

属性表示名	属性内部名	フォーム要素タイプ
平均レスポンス収益	AverageResponseRevenue	テキスト・フィールド - 数値
チャンネル	チャンネル	選択ボックス - 文字列
チャンネル・タイプ	ChannelType	選択ボックス - 文字列
オファー当たりのコスト	CostPerOffer	テキスト・フィールド - 文字列
クリエイティブ URL	CreativeURL	テキスト・フィールド - 文字列
開始日	EffectiveDate	テキスト・フィールド - 日付
終了日	ExpirationDate	テキスト・フィールド - 日付
期間	ExpirationDuration	テキスト・フィールド - 数値
フルフィルメント・コスト	FulfillmentCost	テキスト・フィールド - 通貨
対話点 ID	UACInteractionPointID	テキスト・フィールド - 数値
対話点	UACInteractionPointName	テキスト・フィールド - 文字列
オファー固定コスト	OfferFixedCost	テキスト・フィールド - 通貨

オファー・テンプレートを操作する

各オファーの基礎になるのは、オファー・テンプレートです。そのため、管理者がオファー・テンプレートを作成しておかないと、ユーザーはオファーを作成できません。

テンプレート (それに基づくオファーがあるもの) は、限定的に変更できます (基本的なオプションと属性のデフォルト値を変更できます)。他の項目を変更する場合、元のオファー・テンプレートを回収して、必要な変更点を反映した新しいオファー・テンプレートを作成することにより、置き換える必要があります。

オファー・テンプレートの操作を始める前に、必要になる可能性があるカスタム・オファー属性を作成する必要があります。例えば、ユーザーがオファーを作成するときに選択できるように、いくつかの選択項目で構成されるドロップダウン・リストを作成しておくこともできます。

注: オファー・テンプレート进行操作するには、適切な権限が必要です。例えばオファー・テンプレートを追加するには、「オファー・テンプレートの追加」と「オファー・テンプレートの表示」の両方の権限が必要です。詳しくは、3 ページの『第 2 章 IBM Unica Campaign でのセキュリティの管理』を参照してください。

オファー・テンプレートでのドロップダウン・リストの使用

ドロップダウン・リストは選択ボックスとも呼ばれ、ユーザーが 1 つの項目を選択できる値リストです。ドロップダウン・リストをオファー・テンプレートで (したがってオファーでも) 使用できるようにするには、「**選択ボックス - 文字列**」タイプのカスタム・オファー属性を定義し、それをオファー・テンプレートに追加します。そのテンプレートに基づくすべてのオファーには、そのリストが組み込まれます。

リスト内で選択可能な値は、カスタム属性が作成されるときに指定されます。また、値の「**ソート順**」、「**デフォルト値**」、この属性の値が必須であるかどうか (「**必須**」) も指定できます。オプションで「**編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可**」にチェック・マークを付けると、ユーザーが、オファー・テンプレートを編集するときやテンプレートに基づいてオファーを作成するとき新しい固有値をリストに追加できるようになります。例えば、「選択ボックス」に小、中、大 という値が設定されている場合、どんなユーザーでも特大 という値を追加することが可能になります。

注: ユーザーは、オファー・テンプレートまたはオファーを一度保存すると、新しいリスト項目を削除できなくなります。値は元のカスタム属性定義に保存されて、すべてのユーザーが使用できるようになります。管理者だけが、カスタム属性を変更する方法を使ってリストから項目を削除できます。

「**必須**」設定によって、この属性に値が必要であるかどうかが決まります。「**必須**」が選択されている場合、管理者は、属性がオファー・テンプレートに追加されるときに値を指定する必要があります。ユーザーがオファーを作成または編集するときに別の値を指定した場合を除き、そのテンプレートに基づくすべてのオファーで、この指定値が使用されます。

注: オファー・テンプレートに「表示されない静的属性」または「パラメーター化された属性」としてオファー属性を追加する場合、その属性が「**必須**」として定義されていない場合でも、値が常に必要になります。オファー・テンプレートに「静的属性」としてオファー属性を追加する場合、値が必要であるかどうかは「**必須**」の設定によって決まります。

オファー・テンプレートを作成するには

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。

2. 「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。

「オファー・テンプレートの定義」ウィンドウが開きます。

3. オファー・テンプレートのリストの下部で、「追加...」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 1/3: メタデータ」ウィンドウが開きます。

4. オファー・テンプレートのメタデータを次のように入力します。

- a. 基本オプションとして「テンプレート名」、「セキュリティ・ポリシー」、「説明」、「推奨される使い方」、「テンプレート・アイコン」のデータを入力します。
- b. このオファー・テンプレートを Interact と共に使用するには、「このテンプレートから作成したオファーをリアルタイム対話で使用できます」を選択します。
- c. 「オファー・コード形式」、「オファー・コード・ジェネレーター」、「処理コード形式」、「処理コード・ジェネレーター」では、デフォルトを受け入れるか、オファー/処理のコード形式とジェネレーターに関するデータを変更します。

重要: オファー・コード形式ではスペース文字を使用できません。

「処理コード・ジェネレーター」フィールドを空白のままにした場合、デフォルトの処理コード・ジェネレーターが使用されます。

5. 「次へ >>」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 2/3: オファー属性」ウィンドウが開きます。

6. 必要に応じて、標準およびカスタムの属性をオファー・テンプレートに追加します。矢印ボタン (<< および >>) を使用すると、オファー・テンプレートの属性リストの中に属性を移動したり除去したりでき、含まれる属性の順序と種類 (静的、表示されない、パラメーター化) を変更することもできます。

注: フローチャート内でオファーが使用可能になるには、少なくとも 1 つの標準属性またはカスタム属性を持っている必要があります。

7. 「次へ >>」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 3/3: デフォルト値」ウィンドウが開きます。

8. オファー・テンプレートに既に追加した属性に関して、ユーザーがこのテンプレートを使ってオファーを作成するときに使用されるデフォルト値を提供します。オファーの作成時に、ユーザーは静的属性およびパラメーター化された属

性のデフォルト値を変更できますが、表示されない静的属性としてオファー・テンプレートに入力した値は変更できません。

9. ドロップダウン・リストで値が提供されるパラメーター化された属性の場合、オファー・テンプレートの作成時に、リスト項目をここで追加することもできます。ここで追加した新しいリスト項目を除去できますが、既に存在していたリスト項目はどれも除去できません。ここで追加したリスト項目は、オファーのカスタム属性に保存されます。

重要: パラメーター化された属性として「オファー有効期間」属性をテンプレートに追加した場合、「フローチャート実行日」オプションがこの画面に表示されます。デフォルトのオファー有効日を入力する代わりにこのオプションを選択した場合、Campaign はフローチャート全体の実行日ではなく、オファーを使用する処理の実行日を使用します。

10. 「このテンプレートから作成したオファーをリアルタイム対話で使用できます」を選択した場合、「対話点 ID」および「対話点名」を入力します。

インタラクション・ポイント ID のデフォルト値として任意の整数を入力でき、インタラクション・ポイント名として任意の文字列を入力できます。実行時環境では値として正しいデータが自動的に入りますが、設計環境ではデフォルト値が必要です。

11. 「完了」をクリックします。

これでオファー・テンプレートが作成されました。オファーの作成でこれを使用できるようになりました。

オファー・テンプレートを変更するには

テンプレートに基づくオファーが存在する場合、オファー・コードやオファー・カスタム属性についてのテンプレート・データを変更することはできません。変更可能な項目は、基本オプションと、属性のデフォルト値だけです。このため、オファー・テンプレートの他の項目を変更するには、元のオファー・テンプレートを回収して、必要な変更点を反映した新しいオファー・テンプレートを作成することにより、置き換える必要があります。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。

2. 「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。

「オファー・テンプレートの定義」ウィンドウが開きます。

3. 変更対象のオファー・テンプレートの名前をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 1/3: メタデータ」ウィンドウが開きます。

オファー・テンプレートがオファーによって現在使用されている場合は、基本オプションの編集だけが可能です。そうでない場合は、オファーと処理のコード・データもまた編集可能です。

4. 「次へ >>」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 2/3: オファー属性」ウィンドウが開きます。

5. 必要に応じて属性の設定を変更します。

注: オファー・テンプレートがオファーによって現在使用されている場合、オファー属性の設定を変更することはできません。テンプレートが使用されていない場合は、必要に応じてオファー・テンプレートで属性を変更できます。矢印ボタン (<< および >>) を使用すると、オファー・テンプレートの属性リストの中に属性を移動したり除去したりでき、含まれる属性の順序と種類 (静的、表示されない、パラメーター化) を変更することもできます。

6. 「次へ >>」をクリックします。

新規オファー・テンプレートの「手順 3/3: デフォルト値」ウィンドウが開きます。

7. オファー・テンプレート内の属性のデフォルト値を提供します。

オファーの作成時に、ユーザーは静的属性およびパラメーター化された属性のデフォルト値を変更できます。しかし、ユーザーは、表示されない静的属性として入力した値を変更することができません。

重要: パラメーター化された属性として「オファー有効期間」属性をテンプレートに追加した場合、「フローチャート実行日」ラジオ・ボックスがこの画面に表示されます。デフォルトのオファー有効日を入力する代わりにこのオプションを選択した場合、Campaign は (フローチャート全体ではなく) オファーを使用する処理の実行日を使用します。

8. 「完了」をクリックします。

これでオファー・テンプレートが変更されました。

オファー・テンプレートを並べ替えるには

定義した複数のオファー・テンプレートの順序は、新規オファーの作成時にユーザーに表示されるテンプレートの順序となります。デフォルトでは、作成された順序でオファー・テンプレートがリストされます。しかし、ユーザーに表示されるのは、オファー・テンプレートとユーザー役割のセキュリティ・ポリシーで許可された特定のオファー・テンプレートだけです。すべてのオファー・テンプレートがユーザーに表示されるとは限りません。ただし、表示される項目の順序は、指定した順序に従います。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。

2. 「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。

「オファー・テンプレートの定義」ウィンドウが開きます。

3. オファー・テンプレートのリストの上部または下部で、「並べ替え...」をクリックします。

「オファー・テンプレートの並べ替え」ウィンドウが開いて、現在の順序でオファー・テンプレートがリストされます。

4. オファー・テンプレートの順序を変更するには、一度に 1 つのテンプレートを選んで上または下に移動するアイコンをクリックすると、リスト内でそのテンプレートの位置が変わります。
5. オファー・テンプレートが適切な順序になったら、「変更の保存」をクリックします。

オファー・テンプレートを回収するには

オファー・テンプレートに基づいてユーザーが新しいオファーを作成できないようにするには、テンプレートを回収します。回収されるテンプレートに基づいて既に作成されたオファーは、影響を受けません。

注: オファー・テンプレートを回収した後、回収を取り消すことはできません。同じ特性を持つ新しいオファー・テンプレートを作成する必要があります。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。

2. 「テンプレートとカスタマイズ」セクションで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。

「オファー・テンプレートの定義」ウィンドウが開きます。

3. 使用できないようにするオファー・テンプレートの右側で、「回収する」をクリックします。

回収を確認するプロンプトが出されます。

4. 「OK」をクリックしてオファー・テンプレートを回収するか、「キャンセル」をクリックして操作を停止します。

「OK」をクリックするとオファー・テンプレートが回収され、そのステータスが画面に示されます。

「チャネル」属性へのリスト値の追加

Campaign には、オファー・テンプレートで使用するための「チャネル」カスタム属性が組み込まれています。「チャネル」属性は、E メールや電話など、オファーのアウトバウンド通信チャネルを示すためのものです。

出荷時の状態では、「選択ボックス - 文字列」タイプの「チャネル」属性には選択可能な値が組み込まれていません。「チャネル」属性を利用するには、属性を変更して、ユーザーが選択可能な値を指定する必要があります。

「編集フォーム内からのリスト項目の追加を許可」にチェック・マークを付けることにより、そのフィールドの追加の値をユーザーが入力できるように設定することも可能です。

テンプレート・アイコン

オファー・テンプレートを作成または変更するときには、基本オプションの 1 つとしてテンプレート・アイコンを選択します。テンプレート・アイコンは、ユーザーが新しいオファーを作成するとき、オファー・テンプレートについての視覚的なヒントとなります。以下の表は、使用可能なテンプレート・アイコンのリストとその外観です。

表 17. オファー・テンプレート・アイコン

アイコン名	アイコン
offertemplate_default.gif	
offertemplate_manychans.gif	
offertemplate_manydates.gif	
offertemplate_manyresp.gif	
offertemplate_manysegs.gif	
offertemplate_repeatingtabl.gif	
offertemplate_simpleemail.gif	
offertemplate_simplemail.gif	

表 17. オファー・テンプレート・アイコン (続き)

アイコン名	アイコン
offertemplate_simplephone.gif	
offertemplate_versions.gif	

デフォルトのオファー属性

オファー・テンプレートを作成するとき、必要に応じてテンプレート属性を追加できます。

デフォルトでは、以下の静的属性がすべてのオファー・テンプレートに含まれています。

- 名前
- 説明
- オファー・コード
- 関連製品

これらの静的属性をテンプレートから除去することはできません。

Campaign オファーでの Marketing Operations 資産の使用の概要

Marketing Operations と Campaign の両方がインストールされていて、Marketing Operations の IBM Unica マーケティング資産管理アドオンの使用を許諾している場合、Marketing Operations 資産ライブラリーにあるデジタル資産をキャンペーンに組み込むことができます。例えば、Marketing Operations 資産ライブラリーに保存されている製品ロゴをオファーに組み込むことができます。

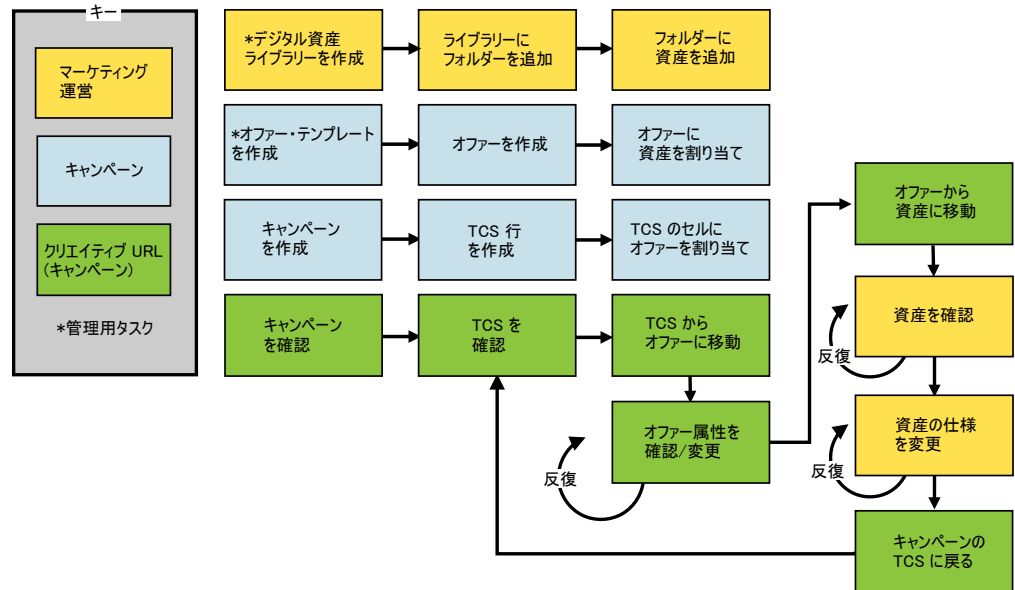
資産をオファーに組み込むには、**CreativeURL** 属性が組み込まれたテンプレートに基づいてオファーを作成します。「クリエイティブ URL」は、Marketing Operations 内の資産の場所を示すポインターです。**CreativeURL** 属性が指す資産は、オファーに組み込まれます。

CreativeURL 属性を使用すると、ユーザーがオファー、オファー・テンプレート、またはキャンペーンを構成するときに、Campaign から Marketing Operations にシームレスに移動できます。

例えば、キャンペーンの作成または編集時に、ターゲット・セル・スプレッドシート (TCS) のセルからそのセルに関連したオファーに移動できます。オファーからは、Marketing Operations にある関連資産まで移動して、資産の表示または変更を行うことができます。また、キャンペーンですぐに使用できるよう新しい資産をライブラリーにアップロードすることもできます。

実行可能なワークフローの 1 つを次の例に示します。ご使用のワークフローとは異なる場合があります。

重要: Campaign は、Marketing Operations と統合されている場合も、されていない場合もあります。ただし、オファー統合は有効にしないでください。オファーの作成は Campaign で実行します。



Campaign オファーで Marketing Operations 資産を使用するためのガイドライン

このトピックでは、Campaign オファーで Marketing Operations 資産を使用するための前提条件と要件をリストします。この機能は、**CreativeURL** オffer属性に依存します。

- Marketing Operations と Campaign の両方をインストールする必要があります。
(**CreativeURL** 属性は、Campaign と共にインストールされます。ただし、Marketing Operations もインストールされていないと、この機能を使用することはできません。)
- Marketing Operations の IBM Unica マーケティング資産管理アドオンの使用を許諾している必要があります。
- Campaign は、Marketing Operations と統合されている場合も、されていない場合もあります。UMO-UC の統合が無効でも、ユーザーは資産をオファーに割り当てることができます。
- オffer統合は有効にしないでください (Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー (server) | 内部 (internal))
- **CreativeURL** は、標準の Campaign オffer属性ですが、必須ではありません。オffer・テンプレートは、この属性があってもなくても作成できます。
- **CreativeURL** 属性がテンプレートに組み込まれている場合は、そのテンプレートに基づく各オfferがオプションで Marketing Operations 資産ライブラリーから資産を組み込むことができます。

- オファー・テンプレート、およびそれに基づくオファーには、**CreativeURL** を 1 つしか組み込むことができません。このため、各オファーには、Marketing Operations からの資産を 1 つしか組み込むことができません。

注: オファーは 1 つの資産としか関連できません。ただし、1 つの資産は複数のオファーと関連できます。

Campaign オファーで Marketing Operations の資産を使用するための設定

このトピックでは、Marketing Operations からのデジタル資産を Campaign のオファーに関連させる操作を Campaign ユーザーに許可するために管理者が行う必要がある操作を説明します。

資産とは、マーケティング・プログラムで使用するために設計されている電子ファイルのことをいいます。例として、ロゴ、ブランド・イメージ、マーケティング・リサーチ資料、参照資料、企業の販促資料、文書テンプレートなどがあります。資産を Campaign のオファーに追加するには、**CreativeURL** 属性を使用します。

CreativeURL 属性は、Campaign と共にインストールされる標準のオファー属性です。「クリエイティブ URL」は、Marketing Operations 資産ライブラリー内のファイルのポインターです。

表 18. Campaign オファーで Marketing Operations の資産を使用するための設定

作業	詳細	資料
デジタル資産を保持するためのライブラリーを作成する。	通常、この作業は、Marketing Operations 管理者によって行われます。 IBM Marketing Operations では、「設定」>「 Marketing Operations 設定 」を選択し、「 資産ライブラリー定義 」をクリックしてライブラリーを追加します。	<i>IBM Unica Marketing Operations 管理者ガイド</i>
資産をライブラリーに追加する。	通常、この作業は、Marketing Operations ユーザーによって行われます。 IBM Marketing Operations では、「操作」>「資産」を選択します。ライブラリーを開き、特定のフォルダーまで移動して、「 資産の追加 」アイコンをクリックします。資産名、説明などの情報を指定し、「 アップロード 」を使用してファイルの選択とライブラリーへのアップロードを行います。	<i>IBM Unica Marketing Operations ユーザー・ガイド</i>

表 18. Campaign オファーで Marketing Operations の資産を使用するための設定 (続き)

作業	詳細	資料
CreativeURL 属性が組み込まれたオファー・テンプレートを作成する。	通常、この作業は、Campaign 管理者によって行われます。 オファー属性とは、オファーを定義するフィールドのことをいいます。 CreativeURL は、Campaign で提供される標準の属性です。 CreativeURL 属性をテンプレートに追加すると、そのテンプレートに基づくすべてのオファーでその属性を使用できます。 「設定」>「Campaign 設定」を選択し、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。「追加」をクリックしてから、プロンプトに従います。 - 手順 1/3 で、テンプレートを定義します。 - 手順 2/3 で、「クリエイティブ URL」を「選択した属性」リストに移動します。 - 手順 3/3 で、「クリエイティブ URL」フィールドの「ライブラリーの参照」をクリックします。資産ライブラリー内のフォルダーに移動し、このオファーで使用する資産を選択します。あるいは資産を作成する場合には、ライブラリーの名前をクリックしてから「資産の追加」をクリックし、必要な情報を入力します。「ファイル」フィールドで「アップロード」をクリックしてから特定のファイルを参照します。アップロードできるのは、ファイル、プレビュー・ファイル、およびサムネールです。プロンプトに従い、操作を完了します。 資産の URL が「クリエイティブ URL」フィールドに組み込まれるようになります。 - オファー・テンプレートを保存します。	<i>Campaign</i> 管理者ガイド: 71 ページの『オファー・テンプレートを作成するには』
Campaign を使用して、Marketing Operations からの資産が組み込まれたオファーを作成します。	Campaign ユーザーは、CreativeURL 属性が組み込まれたテンプレートに基づいてオファーを作成できる状態になっています。ユーザーはオファーを定義するときに、資産ライブラリーに移動して、資産を選択または作成できます。	<i>Campaign</i> ユーザー・ガイド

第 6 章 オーディエンス・レベルの管理

Campaign 管理者は、以下のタスクを実行できます。

- 企業のキャンペーンに必要なオーディエンス・レベルの作成。
- Campaign システム・データベース内での、新しいオーディエンス・レベルをサポートするデータベース表の作成。
- Campaign システム・データベース内での、新しいオーディエンス・レベルをサポートするデータベース表とシステム・テーブルの間のマッピング。
- ユーザー・テーブルをマッピングする際の、オーディエンス・レベルおよび関連データベース・フィールドの指定。
- 1 つ以上のオーディエンス・レベルに対するグローバル抑制セグメントの作成。

オーディエンス・レベルについて

オーディエンス・レベルは、キャンペーンのターゲットにできる ID の集合です。例えば、一連のキャンペーンでは、オーディエンス・レベルとして、「世帯」、「見込み顧客」、「顧客」、「アカウント」などを使用できます。これらの各レベルは、キャンペーンで使用可能なマーケティング・データの特定の視点を表すものです。

オーディエンス・レベルは、通常は階層として編成されます。上記の例を使用すると、次のようになります。

- 「世帯」は階層の最上位にあり、各世帯には、複数の「顧客」と 1 つ以上の「見込み顧客」を含めることができます。
- 「顧客」は階層の次の段階にあり、それぞれの顧客は複数のアカウントを持つことができます。
- 「アカウント」は、階層の最下位にあります。

その他、より複雑なオーディエンス階層の例としては、企業間取引の環境があります。その場合にはオーディエンス・レベルとして、業種、企業、部署、グループ、個人、アカウントなどが必要になるかもしれません。

これらのオーディエンス・レベルには、互いに「1 対 1」、「多対 1」、「多対多」などの異なる関係が存在する場合があります。オーディエンス・レベルを定義すると、このような概念を Campaign で表すことができるので、ユーザーは、ターゲティングで利用するためにこれら異なるオーディエンス間の関係を管理できます。例えば、1 つの世帯に複数の見込み顧客がいる場合には、メール配信を各世帯につき 1 人の見込み顧客だけに限定することもできます。

オーディエンス・レベルは、一定数のキーまたはデータベース表フィールドから構成され、それらの組み合わせによってそのオーディエンス・レベルのメンバーが一意的に識別されます。

例えば、オーディエンス・レベル「Customer」は、「IndivID」フィールドだけで識別できたり、「HouseholdID」フィールドと「MemberNum」フィールドを組み合わせで識別できたりするかもしれません。

オーディエンス・レベルについて詳しくは、「*Campaign ユーザー・ガイド*」でオーディエンス・プロセスに関するセクションを参照してください。

Campaign で複数の異なるオーディエンス・レベルが必要となる理由

複数の異なるオーディエンス・レベルを使用することにより、フローチャートの設計担当者は、キャンペーンで使用する識別可能な特定のグループ間でターゲット設定と切り替えをする操作や、あるオーディエンス・レベルを別のオーディエンス・レベルによって範囲設定する操作（世帯別に 1 人の個人をターゲット設定するなど）を行えるようになります。

例えば、複数のオーディエンス・レベルを使用すると、開発者は以下を行うことができます。

- 世帯ごとに、勘定残高が最も多い顧客を選択する。
- 特定の顧客群に属する、残高がマイナスのアカウントをすべて選択する。
- 少なくとも 1 人の個人が当座勘定を持つ世帯をすべて選択する。

オーディエンス・レベルについて詳しくは、「*Campaign ユーザー・ガイド*」でオーディエンス・プロセスに関するセクションを参照してください。

デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベル

Campaign の出荷時には、「Customer」という名前のオーディエンス・レベルだけが設定されています。ユーザー・テーブルおよびキャンペーンの必要に合わせて、追加のオーディエンス・レベルを定義できます。

デフォルトでは、Campaign システム・データベースには、「Customer」オーディエンス・レベルをサポートするために必要なテーブルが含まれています。Campaign をインストールした後、これらのテーブルをマップする必要があります。

追加のオーディエンス・レベルの作成

追加のオーディエンス・レベルが必要な場合、デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベルに対して行ったように、追加オーディエンス・レベルをサポートするための同等のシステム・テーブルのセットを作成してマップする必要があります。

各オーディエンス・レベルは、ユーザー・テーブルをマップする前に定義する必要があります。これは、ユーザー・テーブルのマッピング・プロセス中にオーディエンス・レベルを指定できるようにするためです。特定のオーディエンス・レベルでマップされたベース・テーブルを照会すると、そのオーディエンス・レベルの ID が返されます。

オーディエンス・レベルおよびシステム・テーブルについて

作成するオーディエンス・レベルごとに、関連する以下のシステム・テーブルが必要になります。

- コンタクト履歴テーブル
- 詳細コンタクト履歴テーブル
- レスポンス履歴テーブル
- セグメント・メンバーシップ・テーブル

これらのシステム・テーブルの項目は、オーディエンス・レベルを作成するときに自動的に作成されます。その後、以下を行う必要があります。

- Campaign システム・テーブル・データベース内に物理データベース表を作成する。
- これらのシステム・テーブルをデータベース表にマップする。

注: 戦略的セグメントを Campaign フローチャートまたは Optimize の Optimize セッションと共に使用する場合には、セグメント・メンバーシップ・テーブルをマップすることを IBM はお勧めします。

デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベルのシステム・テーブル

Campaign では、デフォルトの「Customer」オーディエンス・レベルをサポートするテーブルを作成するための、システム・テーブル ddl スクリプトが提供されています。Campaign をインストールした後、以下の方法で、これらのシステム・テーブルを、Campaign システム・データベース内のテーブルにマップする必要があります。

表 19. デフォルトのオーディエンス・レベルのシステム・テーブル

Unica システム・テーブル	データベース表名
顧客コンタクト履歴	UA_ContactHistory
顧客レスポンス履歴	UA_ResponseHistory
顧客詳細コンタクト履歴テーブル	UA_DtlContactHist
顧客セグメント・メンバーシップ	UA_SegMembership

これらのテーブルが上記のリストと同様にマップされている場合、Campaign で提供されるサンプル・レポートを処理するときの変更箇所は、最小限に抑えられます。

これらのテーブルおよび関連した索引の作成に使用される SQL ステートメントは、他のオーディエンス・レベルのテーブルを作成するためのテンプレートとして使用できます。

オーディエンス・レベルおよび戦略的セグメントについて

戦略的セグメントを使用するフローチャートまたは Optimize セッションに含まれるオーディエンスごとに、セグメント・メンバーシップ・システム・テーブルを、セグメント・メンバーを定義する物理テーブルにマップします。例えば、戦略的セグメントが含まれる最適化セッションでデフォルトの「Customer」オーディエンスを

使用する場合、オーディエンス・システム・テーブル「Customer セグメント・メンバーシップ」を UA_SegMembership セグメント・データベース表にマップする必要があります。データベース表には、「セグメント化」プロセスを使用してデータを追加します。

注: IBM Unica では、戦略的セグメントを使用するフローチャートか Optimize セッションでオーディエンスを使用する計画の場合のみ、オーディエンスのセグメント・メンバーシップ・テーブルをマップすることが勧められています。

Campaign フローチャートまたは Optimize セッションでの戦略的セグメントの使用はオプションです。セグメント・メンバーシップ・テーブルをマップする場合、フローチャートまたは Optimize セッションを実行するたびに、Campaign または Optimize はテーブルを更新します。戦略的セグメントを使用していない場合、これは処理上の不要なオーバーヘッドとなります。

オーディエンス・レベルのユニーク ID

新しいオーディエンス・レベルを作成するとき、そのオーディエンス・レベルのメンバーのユニーク ID として使用するために、少なくとも 1 つのフィールドを指定する必要があります。オーディエンスの各メンバーを一意的に識別するために、複数のフィールドを使用しなければならないこともあります。以下に例を示します。

- 「世帯」は、フィールド「HHold_ID」で識別できるとする。
- 「顧客」は、フィールド「HHold_ID」と「MemberNum」で識別できるとする。
- 「見込み顧客」は、フィールド「Prospect_ID」で識別できるとする。
- 「アカウント」は、フィールド「Acct_ID」で識別できるとする。

新しいオーディエンス・レベルのフィールド名 (特にユニーク ID のフィールド名) は、マッピングに支障がないように、データベース表のフィールド名と厳密に一致する必要があります。このようにすると、Campaign の機能により、オーディエンス・レベル作成時に、データベース・フィールドは該当するシステム・テーブル・フィールドに自動的に対応するようになります。

注: オーディエンス・レベル・フィールド名には、文字に関する特定の制限があります。詳しくは、381 ページの『付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

オーディエンス・レベルに固有のテーブルの必須フィールド

このセクションでは、各オーディエンス・レベルに必要なシステム・テーブルの必須フィールドのリストを示します。

- 『コンタクト履歴テーブルの必須フィールド』
- 85 ページの『詳細コンタクト履歴テーブルの必須フィールド』
- 85 ページの『レスポンス履歴テーブルの必須フィールド』
- 86 ページの『セグメント・メンバーシップ・テーブルの必須フィールド』

コンタクト履歴テーブルの必須フィールド

Campaign システム・データベース内の各オーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルには、少なくとも以下のフィールドが含まれている必要があります。

表 20. コンタクト履歴テーブルの必須フィールド

キー	列名	データ型	長さ	NULL の許可
はい	オーディエンス・レベルの ID	数値またはテキスト		いいえ
はい	CellID	bigint	8	いいえ
はい	PackageID	bigint	8	いいえ
いいえ	ContactDateTime	日時	8	はい
いいえ	UpdateDateTime	日時	8	はい
いいえ	ContactStatusID	bigint	8	はい
いいえ	DateID	bigint	8	はい
いいえ	TimeID	bigint	8	はい

注: Campaign の出荷時には、「Customer」オーディエンス・レベルの UA_ContactHistory テーブルに追加のフィールド (ValueBefore および UsageBefore) が設定済みであるため、サンプル・レポートがサポートされます。必要に応じて、独自の「追加トラッキング・フィールド」をコンタクト履歴レポートおよびカスタマイズ・レポート用に定義できます。

詳細コンタクト履歴テーブルの必須フィールド

Campaign システム・データベース内の各オーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルには、少なくとも以下のフィールドが含まれている必要があります。

表 21. 詳細コンタクト履歴テーブルの必須フィールド

キー	列名	データ型	長さ	NULL の許可
はい	オーディエンス・レベルの ID	数値またはテキスト		いいえ
いいえ	TreatmentInstID	bigint	8	いいえ
いいえ	ContactStatusID	bigint	8	はい
いいえ	ContactDateTime	日時	8	はい
いいえ	UpdateDateTime	日時	8	はい
いいえ	DateID	bigint	8	いいえ
いいえ	TimeID	bigint	8	いいえ

レスポンス履歴テーブルの必須フィールド

Campaign システム・データベース内の各オーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルには、少なくとも以下のフィールドが含まれている必要があります。

表 22. レスポンス履歴テーブルの必須フィールド

キー	列名	データ型	長さ	NULL の許可
はい	オーディエンス・レベルの ID	数値またはテキスト		いいえ
はい	TreatmentInstID	bigint	8	いいえ
はい	ResponsePackID	bigint	8	いいえ
いいえ	ResponseDateTime	日時	8	いいえ

表 22. レスポンス履歴テーブルの必須フィールド (続き)

キー	列名	データ型	長さ	NULL の許可
いいえ	WithinDateRangeFlg	int	4	はい
いいえ	OrigContactedFlg	int	4	はい
いいえ	BestAttrib	int	4	はい
いいえ	FractionalAttrib	float	8	はい
いいえ	CustomAttrib	float	8	はい
いいえ	ResponseTypeID	bigint	8	はい
いいえ	DateID	bigint	8	はい
いいえ	TimeID	bigint	8	はい
いいえ	DirectResponse	int	4	はい

新しいオーディエンス・レベル用に作成する各レスポンス履歴テーブルでは、UA_Treatment テーブルの「TreatmentInstID」フィールドに対する外部キー制約を設定する必要があります。

セグメント・メンバーシップ・テーブルの必須フィールド

Campaign または Optimize で戦略的セグメントを使用する場合、戦略的セグメントで使用するオーディエンス・レベルごとにセグメント・メンバーシップ・テーブルを作成する必要があります。そのテーブルには、少なくとも以下のフィールドが含まれている必要があります。

表 23. セグメント・メンバーシップ・テーブルの必須フィールド

キー	列名	データ型	長さ	NULL の許可
はい	SegmentID	bigint	8	いいえ
はい	オーディエンス・レベル の ID	数値またはテキ スト		いいえ

オーディエンス・レベルおよびユーザー・テーブルについて

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『単一のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル』
- 87 ページの『複数のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル』

単一のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル

ユーザー・テーブルをマップするとき、少なくとも 1 つのオーディエンス・レベルをそのテーブルのプライマリー・オーディエンスとして指定する必要があります。オーディエンス・レベルの作成時に指定したフィールドは、このステップの際に、Campaign によってユーザー・テーブル内の同じ名前の ID フィールドに関連付けられます。これを指定することにより、デフォルト状態では、Campaign がこのユーザー・テーブルから選択を行うときに、プライマリー・オーディエンス・レベルから ID が返されます。

例えば、「アカウント」という名前のオーディエンス・レベルとそのフィールド「Acct_ID」を作成し、ユーザー・テーブル「アカウント」をマップするときこの

オーディエンス・レベルをプライマリー・オーディエンスとして選択すると、「Acct_ID」オーディエンス・レベル・フィールドが、「アカウント」データベース表のユニーク ID (1 次キー) であるユーザー・テーブル・フィールドに関連付けられます。

複数のオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブル

ユーザー・テーブルは複数のオーディエンス・レベルに関連付けることができます。その中の 1 つのオーディエンス・レベルはプライマリー・オーディエンス・レベルとして指定し、その他のオーディエンス・レベルは代替オーディエンス・レベルとして指定します。

注: あるオーディエンス・レベルから別のオーディエンス・レベルに切り替える操作や、あるオーディエンス・レベルを別のオーディエンス・レベルによって範囲設定する操作をフローチャート設計担当者が行えるようにするには、必要なすべてのオーディエンス・レベルを指定したユーザー・テーブルを少なくとも 1 つ定義する必要があります。このテーブルを使用すると、Campaign は必要に応じて 1 つのオーディエンス・レベルを別のオーディエンス・レベルに「変換」することができます。

例えば、顧客アカウントに関するデータを格納するユーザー・テーブルに以下の列が含まれるとします。

- Acct_ID
- Indiv_ID
- HHold_ID

このテーブルで、「Acct_ID」はレコードごとに固有のものにできます。個人が複数のアカウントを持つことが可能であり、世帯に複数の個人を含めることができるので、「Indiv_ID」フィールドの値と「HHold_ID」フィールドの値は、レコードごとに固有であるとは限りません。

「アカウント」、「顧客」、「世帯」の 3 つのオーディエンス・レベルがあると想定すると、このユーザー・テーブルをマップするとき、これら 3 つのオーディエンス・レベルすべてを指定して、対応する上記のユーザー・テーブル・フィールドに関連付けることができます。これにより、フローチャート設計担当者は、このテーブルを使用するときに、対象オーディエンスを切り替える操作や、あるオーディエンス・レベルを別のオーディエンス・レベルによって範囲設定する操作 (顧客別のアカウント、世帯別の顧客、世帯別のアカウントなど) を行えるようになります。

オーディエンス・レベルの作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 88 ページの『新しいオーディエンス・レベルをセットアップするためのワークフロー』
- 91 ページの『オーディエンス・レベルの削除』

新しいオーディエンス・レベルをセットアップするためのワークフロー

以下のステップでは、新しいオーディエンス・レベルをセットアップするためのワークフローを説明します。特定の手順については、それぞれのタスクを参照してください。

- 『タスク 1: 新しい各オーディエンス・レベルの必須データベース表の作成』
- 89 ページの『タスク 2: Campaign での新しいオーディエンス・レベルの作成』
- 89 ページの『タスク 3: Unica システム・テーブルからデータベース表へのマップ』
- 90 ページの『タスク 4: 関連データを含んだユーザー・テーブルから適切なオーディエンス・レベルへのマップ』
- 91 ページの『タスク 5: マップされたテーブルをテーブル・カタログに保存する作業』

タスク 1: 新しい各オーディエンス・レベルの必須データベース表の作成

作成する新しい各オーディエンス・レベルをサポートするために、Campaign システム・データベース内に物理データベース表を作成する必要があります。オーディエンス・レベルごとに必要なテーブルは以下のとおりです。

- コンタクト履歴テーブル
- 詳細コンタクト履歴テーブル
- レスポンス履歴テーブル
- セグメント・メンバーシップ・テーブル

必要なそれぞれのテーブルには必須フィールド・セットがあります。オーディエンス・テーブルには追加のカスタム・フィールドを作成できます。

注: 作成するテーブルには、索引を作成する必要があります。例えば、新しい「個人」オーディエンス・レベル用に `INDIV_ContactHistory` テーブルを作成する場合、次のようにして索引を作成できます: `CREATE INDEX XIE1INDIV_ContactHistory ON INDIV_ContactHistory (IndivID)`。

他のオーディエンス・レベル用のテーブルを作成するために、Campaign のデフォルトのオーディエンス・レベル・テーブルと関連した索引の作成に使用した SQL ステートメントを、テンプレートとして使用できます。例えば、`UA_ContactHistory` を `Acct_ContactHistory` (オーディエンス・レベル「アカウント」用) のテンプレートとして使用できます。使用可能な SQL ステートメントを調べるには、`/Campaign/ddl` ディレクトリーでデータベース管理システムのシステム・テーブルを作成するスクリプトを探してください。

注: 基礎となる同一の物理データベース表 (必要なすべてのオーディエンス・レベルで使用するための十分なオーディエンス・フィールドを含むもの) に新しいオーディエンス・レベルのシステム・テーブルを複数マップすることもできますし、オーディエンス・レベルごとに別個のデータベース表を作成することもできるなど、柔軟な設定が可能です。IBM Unica コンサルティングまたは実装パートナーは、ご使

用の環境でコンタクト履歴テーブルとレスポンス履歴テーブルを実装する最善の方法を決定する上で支援をすることができます。

タスク 2: Campaign での新しいオーディエンス・レベルの作成

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが表示されます。

2. 「キャンペーン設定」ページの「データ・ソース操作」で、「オーディエンス・レベルの管理」をクリックします。

「オーディエンス・レベル」ウィンドウが開いて、既存のオーディエンス・レベルが表示されます。

3. 「新規作成」をクリックします。

「新規オーディエンス・レベルの作成」ウィンドウが開きます。

4. 「オーディエンス・レベル名」に、そのオーディエンス・レベルにおける ID グループを反映する固有の名前を入力します。

オーディエンス・レベルの名前には、文字に関する特定の制限がありません。

5. 「フィールド・リスト」で、オーディエンス・レベルの各メンバーを一意的に識別するために使用される各フィールドに名前を入力し、そのタイプ (数値またはテキスト) を選択します。

注: オーディエンス・レベル・フィールド名には、文字に関する特定の制限があります。

このオーディエンス・レベルのデータベース表内のフィールド名と完全に等しい名前を指定する必要があります。 Campaign がフィールド名に関する完全一致を検出した場合のみ、『タスク 3: Unica システム・テーブルからデータベース表へのマップ』でフィールドをマップできます。

例えば、新しいオーディエンス・レベル「世帯」を作成するとき、1 つのフィールドを「HouseholdID」という名前の固有のオーディエンス・レベル ID に指定する場合は、各オーディエンス・レベル固有のデータベース表の ID フィールドがこれと厳密に一致する (つまりそのフィールドの名前も「HouseholdID」にする) 必要があります。

6. 「OK」をクリックします。

「オーディエンス・レベル」ウィンドウで、新しいオーディエンス・レベルを選択すると、必要なテーブルが「マップされていません」と示されてリストされます。マッピングは、『タスク 3: Unica システム・テーブルからデータベース表へのマップ』で実行します。

タスク 3: Unica システム・テーブルからデータベース表へのマップ

新しい各オーディエンス・レベルの物理データベース表と各オーディエンス・レベルとを Campaign に作成した後、Unica システム・テーブルをそれらのデータベース表にマップする必要があります。

ユーザー・テーブルから作成済みオーディエンス・レベルへのマッピングは、Unica システム・テーブルからデータベース表へのマッピングを行わなくても実行できますが、コンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴テーブル、およびレスポンス履歴テーブルをマップしなければ、コンタクト履歴およびレスポンス履歴をログに記録することはできません。

IBM では、戦略的セグメントが含まれる Campaign フローチャートまたは Optimize セッションで使用されるオーディエンスに対してのみ、セグメント・メンバーシップ・システム・テーブルを物理データベース表にマップすることをお勧めします。Campaign および Optimize での戦略的セグメントの使用はオプションです。

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが表示されます。

2. 「キャンペーン設定」ページの「データ・ソース操作」で、「オーディエンス・レベルの管理」をクリックします。

「オーディエンス・レベル」ウィンドウが開いて、既存のオーディエンス・レベルが表示されます。

3. データベース表をマップするオーディエンス・レベルを選択して、「履歴テーブル」をクリックします。
4. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで各 Unica システム・テーブルを選択し、「テーブル・マッピング」をクリックします。
5. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで、そのオーディエンス・レベルの Unica システム・テーブルに対応するデータベース表を選択します。「ソース・テーブル・フィールド」リストに、選択したデータベース表のフィールドのデータが追加されます。「必須フィールド」リストに、「選択済みフィールド」(ソース・データベース表のフィールド) と、対応する「必須フィールド」(Unica システム・テーブルのフィールド) のデータが追加されます。

重要: フィールドをマップできるのは、Campaign がフィールド名の完全一致を検出した場合のみです。

6. 「次へ」をクリックして、データベース表内のカスタム・フィールドのマッピングを指定します。
7. 「次へ」をクリックして、カスタム・フィールドの表示名を指定します。このオプションは、すべてのテーブルで使用可能であるとは限りません。
8. 「完了」をクリックしてマッピングを完了します。オーディエンス・レベルに必要な Unica システム・テーブルごとに、この手順を繰り返します。

注: 「キャンペーン設定」ページの「テーブル・マッピングの管理」リンクからも、このタスクを実行できます。

タスク 4: 関連データを含んだユーザー・テーブルから適切なオーディエンス・レベルへのマップ

ユーザー・テーブルをマップするとき、1 つのプライマリー・オーディエンス・レベルを指定する必要があります。また、1 つ以上の代替オーディエンス・レベルを指定することもできます。

オーディエンス・レベルごとに、そのオーディエンス・レベルのエンティティを示す ID が含まれるユーザー・テーブルにマップします。

タスク 5: マップされたテーブルをテーブル・カタログに保存する作業

(オプション)。マップされたテーブルをテーブル・カタログに保存して、個別のテーブルを再マップしなくてもカタログを再ロードできるようにします。

オーディエンス・レベルの削除

重要: Campaign 内で使用されたオーディエンス・レベルは削除しないでください。以下に示すように、重大なシステム問題の原因となるためです。

オーディエンス・レベルを削除すると、システム・テーブルが削除されますが、基礎となるデータベース表は残ります。

そのため、オーディエンス・レベルを削除すると、そのオーディエンス・レベルに依存する (つまりそのオーディエンス・レベルのテーブルに書き込もうとする) プロセスおよびフローチャートではエラーが発生します。

重要: IBM Unica では、オーディエンス・レベルを削除する前に、Campaign システム全体をバックアップして、削除後に問題が発生した場合に現在のシステム状態をリカバリーできるようにすることが勧められています。

削除されたオーディエンス・レベルの復元は、同じ名前の「新しい」オーディエンス・レベルを同じ必須フィールドを持つテーブルと共に作成し、オーディエンス・レベルのテーブルを再マップすることによって可能です。

オーディエンス・レベルを削除する方法

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが表示されます。

2. 「データ・ソース操作」で、「オーディエンス・レベルの管理」をクリックします。

「オーディエンス・レベル」ウィンドウが開いて、既に定義されたオーディエンス・レベルが表示されます。

3. 削除するオーディエンス・レベルを選択します。
4. 「削除」をクリックします。

削除の確認を求められます。

5. 「OK」をクリックします。

グローバル抑制およびグローバル抑制セグメントについて

注: グローバル抑制セグメントの指定および管理には、Campaign 内でのグローバル抑制の管理権限が必要です。

グローバル抑制機能を使用して、Campaign でフローチャート内のすべてのセルから自動的に除外される ID のリスト (オーディエンス・レベル別) を指定します。

これを行うには、このユニーク ID のリストを戦略的セグメントとして作成してから、そのセグメントを特定のオーディエンス・レベルのグローバル抑制セグメントとして指定します。オーディエンス・レベルごとに 1 つのグローバル抑制セグメントしか構成できません。

あるオーディエンス・レベルに対してグローバル抑制セグメントを構成した場合、そのオーディエンス・レベルに関連付けられた最上位の「選択」、「抽出」、または「オーディエンス」のいずれかのプロセスを実行すると、グローバル抑制セグメントの ID が出力結果から自動的に除外されます (特定のフローチャートにおいてグローバル抑制が明示的に無効になっている場合を除く)。デフォルトでは、各フローチャートでグローバル抑制が有効になっているため、構成したグローバル抑制を適用するために操作を行う必要はありません。

グローバル抑制を無効にする方法については、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

デフォルトではグローバル抑制が有効になりますが、グローバル戦略的セグメントそのものを作成した「セグメント化」プロセスが含まれるフローチャートの場合は、例外となります。この場合、グローバル抑制は常に無効になります (グローバル抑制セグメントが作成されたオーディエンス・レベルについてのみ)。

グローバル抑制が設定されたオーディエンスの切り替え

フローチャート内でオーディエンス 1 からオーディエンス 2 に切り替える場合、これらのオーディエンス・レベルごとに 1 つのグローバル抑制が定義されているときは、オーディエンス 1 のグローバル抑制セグメントが入力テーブルに適用され、オーディエンス 2 のグローバル抑制セグメントが出力テーブルに適用されます。

グローバル抑制セグメントの作成について

グローバル抑制セグメントを作成するには、以下のタスクを実行します。

- 『フローチャート内にグローバル抑制セグメントを作成する方法』
- 93 ページの『セグメントをグローバル抑制セグメントとして指定する方法』

フローチャート内にグローバル抑制セグメントを作成する方法

重要: グローバル抑制セグメントを作成または更新するときのベスト・プラクティスは、操作対象と同じオーディエンス・レベルのフローチャートが実行されていない (つまりセグメントが使用される可能性がない) ときにその操作を行うことです。グローバル抑制セグメントがフローチャートによって使用されているときにそれらのセグメントを作成または更新すると、抑制リストの整合性は保証されません。

- 通常の方法でフローチャート内に戦略的セグメントを作成し、リストから選択する際に容易に識別できるような名前を付けます。戦略的セグメントの作成方法について詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。
- セグメント化プロセス構成ダイアログの「セグメントの定義」タブで、「編集...」をクリックします。

3. 「セグメントの編集」ウィンドウの「一時テーブルのデータ・ソース」フィールドで、1 つ以上のデータ・ソースを選択します。

グローバル戦略的セグメントが通常使用されるすべてのデータ・ソースを指定する必要があります。戦略的セグメントがデータ・ソース内で持続しない場合、バイナリー・ファイルを使用して Campaign サーバーで抑止が行われます。「セグメント化」プロセスで戦略的セグメントを作成することやセグメントを指定データ・ソースに書き込むことができない場合、そのセグメントは構成解除されるかまたは実行時に失敗します。

一時テーブルのデータ・ソースに対する変更は、フローチャートの保存時や実行時ではなく、プロセス構成を保存するときに行われます。

4. 「OK」をクリックします。

「セグメントの定義」タブで、選択したデータ・ソースが現在のセグメントの「一時テーブル DS」列に表示されます。

セグメントをグローバル抑制セグメントとして指定する方法

1. グローバル抑制セグメントとして使用するセグメントを作成した後に、Campaign で「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが表示されます。

2. 「キャンペーン設定」ページで、「オーディエンス・レベルの管理」をクリックします。
3. 「オーディエンス・レベル」ウィンドウで、グローバル抑制セグメントを指定するオーディエンス・レベルを選択します。
4. 「グローバル抑制...」をクリックします。

「グローバル抑制セグメント」ウィンドウで、現在のオーディエンス・レベルと一致するセグメントのリストがドロップダウン・リストに表示されます。

5. 現在のオーディエンス・レベルのグローバル抑制セグメントとして使用するセグメントを選択してから、「OK」をクリックします。
6. 「閉じる」をクリックします。

選択した戦略的セグメントが、そのオーディエンス・レベルのグローバル抑制セグメントとして指定されます。

グローバル抑制セグメントが定義されると、Marketing Platform の「構成」ページで、次のパスのオーディエンス・レベル・プロパティに表示されます。

「パーティション」>「パーティション
[n]」>「audienceLevels」>「audienceLevelN」>「globalSuppressionSegmentID」

グローバル抑制セグメントの更新

グローバル抑制セグメントは、戦略的セグメントを更新するときと同じ方法で更新します。戦略的セグメントを編集する方法については、「Campaign ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

重要: グローバル抑制セグメントを作成または更新するときのベスト・プラクティスは、操作対象と同じオーディエンス・レベルのフローチャートが実行されていない (つまりセグメントが使用される可能性がない) ときにその操作を行うことです。グローバル抑制セグメントがフローチャートによって使用されているときにそれらのセグメントを作成または更新すると、抑制リストの整合性は保証されません。

グローバル抑制セグメントの削除

グローバル抑制セグメントは、戦略的セグメントを削除するときと同じ方法で削除します。戦略的セグメントを削除する方法については、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

グローバル抑制セグメントを作成したフローチャートが削除されると、そのセグメントも削除されます。

グローバル抑制のためのロギング

グローバル抑制に関する以下の情報がフローチャート・ログに含まれます。

- 適用対象となるプロセスのグローバル抑制セグメント名 (およびパス)
- 抑制の前の ID 数
- 抑制の後の ID 数

第 7 章 コンタクト履歴の管理

コンタクト履歴の作業を開始する前に、オーディエンス・レベルの管理に関するトピックをすべて読み、必要なオーディエンス・レベルをセットアップする必要があります。

コンタクト履歴は、オーディエンス・レベルごとに別個のテーブルで Campaign システム・データベースに保管されます。そのため、コンタクト履歴の作業を行う前にオーディエンス・レベルをセットアップする必要があります。

さらに、コンタクト履歴に関する基本概念、およびコンタクト履歴を記録するフローチャートのセットアップ方法に関する情報が、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」に説明されています。

コンタクト履歴の概念

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『コンタクト履歴とは』
- 96 ページの『詳細コンタクト履歴とは』
- 96 ページの『コンタクト・ステータスとは』
- 97 ページの『コンタクト・ステータスの更新について』
- 97 ページの『コンタクト履歴とオーディエンス・レベルとの関係』
- 97 ページの『コンタクト履歴とデータベース・テーブルおよびシステム・テーブルとの関係』
- 97 ページの『オファー履歴とは』
- 98 ページの『処理履歴とは』

コンタクト履歴とは

コンタクト履歴は、ダイレクト・マーケティング活動またはコミュニケーションの履歴レコードで、コンタクトの対象、日時、メッセージまたはオファーの内容、使用したチャンネルについての詳細情報が含まれます。通常、コンタクト履歴には、キャンペーンによってコンタクトを受けるターゲットに加えて、ターゲット・グループとの比較目的で測定される、コミュニケーションを受け取らない検証制御 (グループ) も含まれます。

Campaign のコンタクト履歴には、各 ID に提供される厳密なバージョン・オファーのレコードが含まれます。これにはパーソナライズされたオファー属性の値が含まれ、マーケティング・コミュニケーションの完全な履歴ビューが提供されます。

例えば、キャンペーンによってターゲットの顧客リストが生成される場合があります。このリストは、「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスから出力されます。その顧客リストは、サンプルの「Customer」オーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルである、Campaign システム・データベース内の UA_ContactHistory に書き込まれます。

コンタクト履歴は、Campaign システム・データベースに記録されて保管されます。作成するオーディエンス・レベルごとに、ベース・コンタクト履歴システム・テーブルのための別個のエントリーがあります。同じセルに含まれるすべてのオーディエンス・エンティティーが厳密に同じオファーを受け取る場合、ベース・コンタクト履歴には、マーケティング・キャンペーンで使用されるそれぞれのターゲット・セルと制御セルの中のオーディエンス・メンバーシップが格納されます。ベース・コンタクト履歴テーブルのデータは UA_Treatment システム・テーブルと連携して使用され、誰がどのオファーを受け取るかが厳密に決定されます。

注: ユーザーが「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスでのコンタクト履歴ロギングをオフにした場合、そのプロセスで作成されるコンタクト履歴はデータベースに書き込まれません。

コンタクト履歴は、実稼働実行の場合にのみデータベースに書き込まれ、テスト実行の際には書き込まれません。

詳細コンタクト履歴とは

詳細コンタクト履歴にデータが追加されるのは、オファーのデータ駆動型パーソナライズが使用される（複数の個人が同じセルに含まれる場合に、受け取るオファー・バージョンが個人によって異なる、つまりパーソナライズされたオファー属性ごとに異なる値のオファーを受け取る）場合のみです。これらの詳細は、オーディエンス・レベルごとに詳細コンタクト履歴テーブル (UA_DtlContactHist など) に書き込まれます。

作成するオーディエンス・レベルごとに、詳細コンタクト履歴システム・テーブルのための別個のエントリーがあります。詳細コンタクト履歴には、各オーディエンス・エンティティーが受け取った厳密な処理が格納されます。

詳細コンタクト履歴は、オーディエンス ID とオファー・バージョンの対ごとに 1 行を記録します。例えば、ある個人が 3 つの異なるオファー・バージョンを受け取る場合、その個人の詳細コンタクト履歴には 3 行が書き込まれ、UA_Treatment テーブルには 3 つの処理が示されます。

注: ユーザーが「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスでのコンタクト履歴ロギングをオフにした場合、そのプロセスで作成される詳細コンタクト履歴はデータベースに書き込まれません。

詳細コンタクト履歴は、実稼働実行の場合にのみデータベースに書き込まれ、テスト実行の際には書き込まれません。

コンタクト・ステータスとは

コンタクト・ステータスは、作成されるコンタクトのタイプの指標です。Campaign ユーザーは、「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスを構成するときに、使用するコンタクト・ステータスを指定します。

注: 制御セルは、Defaults 列に値が 2 のコンタクト・ステータスを自動的に受け取ります。デフォルトでは、その行の名前は「コンタクト」になります。

Campaign では、デフォルトのコンタクト・ステータス・コードのセットが提供されています。管理者は、追加のステータス・コードを追加できます。

コンタクト・ステータスの更新について

「トラッキング」プロセスを使用して、コンタクト・ステータス、およびコンタクト履歴内の他のトラッキング対象フィールドを更新します。

例えば、「メール・リスト」プロセスは、顧客コンタクトを `UA_ContactHistory` テーブルに記録する場合があります。このコンタクトでは、一時的なコンタクト・ステータスとして「`CountsAsContact`」フィールドに `0` の値が設定されます。その後、キャンペーン・マネージャーは、このコンタクト・リストをメール・ハウスに送信します。メール・ハウスは、リストに対する後処理を実行して無効アドレスを除去してから、実際にコンタクトを受けた顧客のリストを返します。その返されたリストから、別のフローチャートを使って顧客を選択し、トラッキング・プロセスを使用してコンタクト・ステータスの「`CountsAsContact`」フィールドを `1` に更新します。

トラッキング・プロセスの使用方法について詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

コンタクト履歴とオーディエンス・レベルとの関係

`Campaign` は、定義したオーディエンス・レベルごとに異なるコンタクト履歴および詳細コンタクト履歴を記録して、保守することができます。オーディエンス・レベルごとに、関連するコンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルを `Campaign` システム・データベースに保管する必要があります。

コンタクト履歴とデータベース・テーブルおよびシステム・テーブルとの関係

コンタクト履歴テーブルは、`Campaign` システム・データベースに保管する必要があります。各オーディエンス・レベルの履歴コンタクトを保管します。

「`Customer`」オーディエンス・レベルが例として用意されていて、顧客をターゲットとするコンタクトの履歴は、`Campaign` システム・データベース内の `UA_ContactHistory` に保管できます。「`Customer`」オーディエンス・レベルの詳細履歴は、`UA_DtlContactHist` テーブルに保管できます。

追加のオーディエンス・レベルを作成する場合、そのコンタクト履歴テーブルと詳細コンタクト履歴テーブル、および関連した索引を、`Campaign` システム・データベースに作成する必要があります。サンプルの「`Customer`」オーディエンス・レベルのテーブルをテンプレートとして使用できます。

新しいオーディエンス・レベル用のテーブルを `Campaign` システム・データベースに作成した後、そのオーディエンス・レベルのコンタクト履歴用の新しいテーブルを詳細コンタクト履歴にマップする必要があります。

オファー履歴とは

オファー履歴は、キャンペーンで実施されたオファーの履歴レコードです。これはキャンペーンで行われたコンタクトの全体的な履歴レコードの一部です。

オファー履歴は、`Campaign` システム・テーブル・データベースにある、以下の複数のテーブルに格納されます。

- UA_OfferHistory テーブル
- UA_OfferHistAttrib テーブル (パラメーター化されたオファー属性用)
- UA_OfferAttribute テーブル (静的オファー属性用)

例えば、典型的なフローチャートによってターゲットの顧客リストが生成されます。このリストは、「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスから出力されます。そのフローチャートで作成されるオファーのレコードは、UA_OfferHistory テーブルのオファー履歴に書き込まれます。

注: ユーザーが「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスでのコンタクト履歴ロギングをオフにした場合、そのプロセスで作成されるオファー履歴はデータベースに書き込まれません。

オファー履歴は、実稼働実行の場合にのみデータベースに書き込まれ、テスト実行の際には書き込まれません。

オファー履歴は、オーディエンス・レベル別に異なるテーブルに保管されるのではなく、すべてのオファー履歴が、同じセットに含まれるシステム・テーブルに保管されます。

処理履歴とは

処理履歴とは、キャンペーンで生成された処理の記録のことで、ターゲット処理と制御処理の両方が含まれます。処理は、セル、オファー、および時間 (特定のフローチャートの実行) の固有の組み合わせです。同じフローチャートを複数回実行すると、そのたびに新しい処理が生成されます。

処理履歴は、Campaign システム・テーブル・データベースの UA_Treatment テーブルに保存され、コンタクト履歴と共に使用することにより、セル内の ID に送られたオファーと、送られた各オファーの属性の具体的詳細とに関する完全な履歴レコードとなります。

セル・メンバーシップは、該当するオーディエンス・レベルの UA_ContactHistory テーブルに記録され、各セルに対して行われる処理は、UA_Treatment テーブルに記録されます。これは完全な履歴情報を保管するための、高圧縮で効率的な手段です。例えば、セル内の 10,000 人がすべて同じ 3 つのオファーを受け取る場合、コンタクト履歴に $3 * 10,000 = 30,000$ レコードを書き込む代わりに、セル内の個人を記録する 10,000 行がコンタクト履歴に書き込まれ、処理を表す 3 行が UA_Treatment テーブルに書き込まれます。

注: ユーザーが「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスでのコンタクト履歴ロギングをオフにした場合、そのプロセスで作成される処理履歴はデータベースに書き込まれません。

オファー履歴は、実稼働実行の場合にのみデータベースに書き込まれ、テスト実行の際には書き込まれません。

処理履歴は、オーディエンス・レベル別に異なるテーブルに保管されるのではなく、すべての処理履歴が UA_Treatment テーブルに保管されます。

コンタクト履歴の作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『新しいオーディエンス・レベル用のコンタクト履歴テーブルの作成』
- 『コンタクト履歴テーブルからシステム・テーブルへのマッピング』
- 『コンタクト・ステータス・コードの追加方法』
- 100 ページの『履歴のロギング』
- 101 ページの『コンタクト履歴の更新』
- 101 ページの『コンタクト履歴の消去』

新しいオーディエンス・レベル用のコンタクト履歴テーブルの作成

新しいオーディエンス・レベルを作成するとき、そのオーディエンス・レベルのターゲットと制御用のコンタクト履歴および詳細コンタクト履歴を保管するテーブルを、Campaign システム・テーブル・データベースに作成しなければならないことがあります。

これらのテーブルを作成するときは、その索引を作成する必要があります。例えば、新しい「個人」オーディエンス・レベル用に `INDIV_ContactHistory` テーブルを作成する場合、次のようにして索引を作成できます。

```
CREATE INDEX XIE1INDIV_ContactHistory ON INDIV_ContactHistory ( IndivID )
```

コンタクト履歴テーブルからシステム・テーブルへのマッピング

新しいオーディエンス・レベルを作成するたびに、新しいオーディエンス・レベルのコンタクト履歴システム・テーブルおよび詳細コンタクト履歴システム・テーブルをマップする必要があります。

重要: 使用しないコンタクト・ステータスは削除できますが、使用されているコンタクト・ステータスは削除しないでください。

コンタクト・ステータス・コードの追加方法

Campaign に付属のコンタクト・ステータスを補足するために、独自のコンタクト・ステータス・コードを追加することができます。新しいコンタクト・ステータス・コードを Campaign システム・データベースの `UA_ContactStatus` テーブルで定義します。コンタクト・ステータスは、作成されるコンタクトのタイプ (例えば、配信済み、未配信、制御) を表します。

コンタクト・ステータスを追加する前に、『デフォルトのコンタクト・ステータス・コード』を参照して、既存のステータス・コードで必要が満たされるかどうかを確認してください。

Campaign ユーザーは「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスを構成する際に、コンタクト・ステータスを指定します。ユーザーはコンタクト・ステータスを更新するために、「トラック」プロセスを構成します。Campaign で提供されているコンタクト・ステータスが必要を満たしていない場合は、以下の手順を実行してコンタクト・ステータスを追加します。

1. Campaign システム・テーブル・データベースを格納するデータベース管理システムにログインします。
2. UA_ContactStatus テーブルを開きます。
3. 新しいコンタクト・ステータス用の行を追加します。新しいステータスごとに、以下を行います。
 - a. 固有の ContactStatusID を入力します。

注: ContactStatusID は、構成パラメーター internalIdLowerLimit と internalIdUpperLimit の値の範囲内にある、任意の固有の正整数とすることができます。構成パラメーターの値は、Marketing Platform の「構成」ページで定義されています。

- b. 「名前」を入力します。
- c. オプションで、「説明」を入力します。
- d. 固有の ContactStatusCode を入力します。値には A から Z および 0 から 9 を使用できます。
- e. CountsAsContact 列に、ステータスがコンタクトの成功を示す場合には 1、そうでない場合には 0 を入力します。

注: この列は、コンタクトの負担を管理するために Optimize によって使用されます。この列は、コンタクト履歴テーブルに対する照会で、一定の期間内に特定回数のコンタクトを受けた個人を抑制するときに役立つ場合があります。

- f. Defaults 列に、そのステータスをデフォルトにしない場合は 0、デフォルトにする場合は 1 を入力します。制御セルのデフォルトのステータスには 2 を入力します。この列では、1 つの行だけが 1 の値を持ち、1 つの行は 2 の値を持つようにします。

4. テーブルの変更内容を保存します。

テーブル内のデータの変更方法について詳しくは、データベース管理システムの資料を参照してください。

履歴のロギング

コンタクト履歴をログに記録するには、ユーザーは 1 つ以上のコンタクト・プロセス（コール・リストまたはメール・リスト）を構成します。その後、フローチャートが実稼働（テストではない）モードで実行されると、そのフローチャートで使用されるオーディエンス・レベルに関連したテーブルにコンタクト履歴が書き込まれます。

コンタクト履歴のログ記録が有効であるときには、オファー履歴と処理履歴も書き込まれます。

注: プロセスが、コンタクト履歴をログに記録するように構成されてはいても、ターゲットが選択されていないセルで実行される場合、履歴レコードは書き込まれません。

ユーザーはオプションで、「コール・リスト」プロセスまたは「メール・リスト」プロセスによってコンタクト履歴がログに記録されないようにすることもできます。

詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

コンタクト履歴の更新

コンタクト履歴を更新する（例えば、コンタクト・ステータスまたは追加のトラッキング対象コンタクト履歴フィールドを更新するため）には、ユーザーは「トラッキング」プロセスを構成します。例えば、「トラッキング」プロセスへの入力、メール・ハウスから受け取った更新済みのコンタクト・リストであり、そこにコンタクトできなかったターゲットのリストが含まれる場合があります。「トラッキング」プロセスが含まれるフローチャートが実稼働モードで実行される場合、コンタクト履歴は、使用されるオーディエンス・レベルに関連したテーブルに更新されます。

詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

コンタクト履歴の消去

ユーザーは、コンタクト・プロセスで生成されるコンタクト履歴を構成するときに、その履歴を消去できます。また、既存のコンタクト履歴を持つプロセスまたはプランチを再実行する際に、実行履歴オプションの選択を求めるプロンプトがユーザーに出されます。それは、このタイプの実行によってフローチャートの実行 ID がインクリメントされないためです。

ユーザーは、その特定のプロセスによって生成されたすべてのコンタクト履歴の消去、特定の実行インスタンス（実行日時によって識別される）の消去、または指定したコンタクト日付範囲内に行われたすべてのコンタクトの消去のいずれかを実行できます。その後、そのオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルから、該当するレコードが完全に削除されます。次にフローチャートが実行されるとき、コンタクト履歴テーブルの中で、コンタクト履歴は追加されるのではなく置き換えられます。

詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

デフォルトのコンタクト・ステータス・コード

Campaign では、UA_ContactStatus テーブルで定義された以下のコンタクト・ステータスが提供されています。

表 24. デフォルトのコンタクト・ステータス・コード

Contact-StatusID	Name	Description	Contact-StatusCode	Counts-AsContact	Defaults
1	キャンペーン送信	<NULL>	CSD	1	0
2	配信済み	<NULL>	DLV	1	1
3	未配信	<NULL>	UNDLV	0	0
4	制御	<NULL>	CTR	0	2

第 8 章 レスpons履歴の管理

レスポンス履歴の操作を始める前に、オーディエンス・レベル管理についてのトピックを参照して、必要なオーディエンス・レベルをセットアップしてください。

レスポンス履歴は、オーディエンス・レベルごとに別個のテーブルとして Campaign システム・データベースに保管されます。このため、レスポンス履歴を操作する前に、オーディエンス・レベルをセットアップする必要があります。

さらに「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」には、コンタクトとレスポンスの履歴についての基本概念、およびレスポンス・プロセスを使用するようフローチャートをセットアップする方法についての情報が記載されています。

レスポンス履歴の概念

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『レスポンス履歴とは』
- 『レスポンス・タイプとは』
- 104 ページの『レスポンス履歴とオーディエンス・レベルの関係』
- 104 ページの『レスポンス履歴とデータベース表の関係』
- 104 ページの『レスポンス履歴テーブルでの外部キー制約』
- 104 ページの『操作テーブルとは』
- 104 ページの『操作テーブルに何が含まれるか』
- 105 ページの『操作テーブルを使用する理由』

レスポンス履歴とは

レスポンス履歴は、キャンペーンに対するレスポンスの履歴レコードです。対象レスポnderまたは（コンタクトされなくても望まれていた操作を実行した可能性のある）検証制御グループのメンバーによるレスポンスを扱います。

Campaign でのレスポンス履歴の詳細情報、およびレスポンスを記録するようフローチャートを設計する方法については、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

レスポンス・タイプとは

レスポンス・タイプは、ターゲットによって出されたレスポンスのタイプを示す標識です。Campaign ユーザーは、レスポンス・プロセスを構成するときに、使用するレスポンス・タイプを指定します。

Campaign にはデフォルトのレスポンス・タイプのセットが備わっています。管理者はその他のタイプを追加することができます。

Campaign でのレスポンス・タイプの詳細情報については、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

レスポンス履歴とオーディエンス・レベルの関係

Campaign は、定義されたオーディエンス・レベルごとに別個のレスポンス履歴を記録し、保守します。各オーディエンス・レベルには、Campaign システム・データベース内にそれぞれ関連するレスポンス履歴テーブルがあり、関連する Unica システム・テーブルもあります。

レスポンス履歴とデータベース表の関係

レスポンス履歴テーブルは Campaign システム・データベース内に存在する必要があり、各オーディエンス・レベルのレスポンス履歴を保管します。

「Customer」オーディエンス・レベルがデフォルトで備わっていて、顧客からのレスポンスの履歴を Campaign システム・データベース内の UA_ResponseHistory に保管することができます。

追加のオーディエンス・レベルを作成する場合、それに関するレスポンス履歴テーブルを Campaign システム・データベースの中に作成する必要があります。

新しいオーディエンス・レベル用のテーブルを Campaign システム・データベース内に作成した後、その新しいテーブルをオーディエンス・レベルのレスポンス履歴用の Unica システム・テーブルにマップする必要があります (このシステム・テーブルは、オーディエンス・レベル作成時に自動的に作成されます)。

レスポンス履歴テーブルでの外部キー制約

新しいオーディエンス・レベル用に作成するレスポンス履歴テーブルごとに、UA_Treatment テーブルの TreatmentInstID フィールドで外部キー制約が必要です。この制約をセットアップする方法の詳細については、システム・テーブルを作成する DDL ファイルを参照してください。

操作テーブルとは

操作テーブルは、キャンペーンに対するターゲットのレスポンスのデータを格納するオプションのテーブルです。通常、操作テーブルは各ターゲットのレスポンス・タイプと関心のある操作、その他のキャンペーン固有データを提供します。操作テーブルは、レスポンス・プロセスでの入力セルのソース・データとして機能します。

操作テーブルはオーディエンス・レベルに固有です。通常、Campaign では各オーディエンス・レベルに対して 1 つの操作テーブルを作成します。

重要: レスポンスの追跡に使われる操作テーブルが、レスポンス処理中に必ずロックされることを確認してください。また、レスポンスが複数回にわたって考慮されないよう、レスポンス処理後に行をクリアする必要もあります。

操作テーブルに何が含まれるか

操作テーブルの各行は 1 つのイベントを表し、少なくともオーディエンス ID、レスポンス・タイプ、およびレスポンス日付がそれに含まれる必要があります。さらに、通常、1 つ以上のレスポンス・コード (キャンペーン、セル、オファー、または処理のコード)、および予想されるレスポンス追跡用の 1 つ以上の標準/カスタム・オファー属性 (例えば購入された製品やサービス) が含まれます。イベントの中

でデータが入っているすべてのフィールドを使って、そのオファー属性を持つ処理の候補に対してマッチングが行われ、NULL であるフィールドはすべて無視されます。

操作テーブルを使用する理由

ターゲットのレスポンスに関する十分なデータを確実に記録して使用できるようにするうえで、操作テーブルの使用はベスト・プラクティスです。Campaign には、UA_ActionCustomer という名前の、「Customer」オーディエンス・レベル用のサンプル操作テーブルがシステム・データベース内に備わっています。

レスポンス履歴の操作

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- ・『新しいオーディエンス・レベル用のレスポンス履歴テーブルの作成』
- ・『レスポンス履歴テーブルから IBM Unica システム・テーブルへのマッピング』
- ・『オファーの有効期限が切れた後にレスポンスを記録する日数を設定するには』
- ・106 ページの『レスポンス・タイプを追加するには』
- ・106 ページの『レスポンス履歴のログ』

新しいオーディエンス・レベル用のレスポンス履歴テーブルの作成

新しいオーディエンス・レベルを作成するときには、そのオーディエンス・レベルでのターゲットに関するレスポンス履歴を保管するために、Campaign システム・データベース内にテーブルを作成する必要があります。

また、このテーブルを作成するとき、パフォーマンスの改善のためにインデックスを作成する必要もあります。例えば、新しい Individual オーディエンス・レベル用の INDIV_ResponseHistory テーブルを作成する場合、以下のようにインデックスを作成できます。

```
INDEX XIE1INDIV_ResponseHistory ON INDIV_ResponseHistory ( IndivID )
```

レスポンス履歴テーブルから IBM Unica システム・テーブルへのマッピング

新しいオーディエンス・レベル用のレスポンス履歴テーブルを作成した後、オーディエンス・レベルのレスポンス履歴用の IBM Unica システム・テーブルにそれをマップする必要があります。

オファーの有効期限が切れた後にレスポンスを記録する日数を設定するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

構成ページで、「アプリケーション」>「キャンペーン」>「パーティション」>「パーティション[n]」>「サーバー」>「flowchartConfig」カテゴリの allowResponseNDaysAfterExpiration プロパティを適切な日数に設定します。

レスポンス・タイプを追加するには

レスポンス・タイプを追加する前に、107 ページの『デフォルトのレスポンス・タイプ』を参照して、既存のどのタイプによって要件が満たされるか、何を作成する必要があるかを判別してください。

Campaign システム・データベースの UA_UsrResponseType テーブルの中でレスポンス・タイプを定義します。

1. Campaign システム・データベースを含むデータベース管理システムにログインします。
2. UA_UsrResponseType テーブルを開きます。
3. 追加する必要があるレスポンス・タイプ用の行を追加します。それぞれの新しいタイプに関して、
4. 固有の ResponseTypeID を入力します。
5. 「名前」を入力します。
6. オプションで、「説明」を入力します。
7. 固有の ResponseTypeCode を入力します。
8. CountsAsResponse 列で、成功レスポンスを表すタイプの場合は 1、表さない場合は 0、拒否を表す場合は 2 をそれぞれ入力します。
9. IsDefault 列で、タイプがデフォルトにならない場合は 0、デフォルトになる場合は 1 をそれぞれ入力します。この列の中で 1 つの行だけが値 1 を持つことを確認してください。
10. テーブルの変更内容を保存します。
11. UA_UsrResponseType システム・テーブルを再マップします。

テーブルのデータを変更する方法についての詳しい説明は、データベース管理システムの資料を参照してください。

レスポンス履歴のログ

レスポンス履歴をログに記録するには、ユーザーがレスポンス・プロセスを構成します。その後、フローチャートの実行時に、フローチャートで使われるオーディエンス・レベルに関連したテーブルにレスポンス履歴が書き込まれます。

詳しくは、「Campaign ユーザーズ・ガイド」を参照してください。

レスポンス履歴の参照資料

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 107 ページの『デフォルトのレスポンス・タイプ』
- 107 ページの『サンプル UA_ActionCustomer テーブル』

デフォルトのレスポンス・タイプ

Campaign には以下のレスポンス・タイプが備わっています。これらは UA_UsrResponseType テーブルに定義されています。

それぞれのレスポンス・タイプに関して、CountsAsResponse フィールドでの有効な値は次のとおりです。

0 - レスポンスとしてカウントしません

1 - 肯定的レスポンスとしてカウントします

2 - 否定的レスポンスとしてカウントします

注: 各レスポンス・タイプに関して CountsAsResponse 値は相互に排他的です。言い換えると、同じレスポンス・タイプを応答および拒否の両方としてカウントすることはできません。

表 25. デフォルトのレスポンス・タイプ

レスポンス - TypeID	名前	説明	レスポンス - StatusCode	カウント - AsResponse	IsDefault
1	Explore	<NULL>	EXP	0	0
2	Consider	<NULL>	CON	0	0
3	Commit	<NULL>	CMT	1	0
4	Fulfill	<NULL>	FFL	0	0
5	Use	<NULL>	USE	0	0
6	Unsubscribe	<NULL>	USB	0	0
7	Unknown	<NULL>	UKN	1	1

サンプル UA_ActionCustomer テーブル

Campaign には、サンプル操作テーブル UA_ActionCustomer が備わっています。このテーブル内のフィールドは、レスポンス履歴の生成に役立つフィールドの例となります。

表 26. サンプル UA_ActionCustomer テーブル

列名	データ型	長さ	NULL の許可
CustomerID	bigint	8	いいえ
ActionDateTime	datetime	8	いいえ
ResponseChannel	varchar	16	はい
CampaignCode	varchar	32	いいえ
OfferCode	varchar	64	いいえ
CellCode	varchar	64	いいえ
TreatmentCode	varchar	64	いいえ
ProductID	bigint	8	いいえ
ResponseTypeCode	varchar	64	はい

第 9 章 操作モニター

操作モニターを使用すると、アクティブなすべてのフローチャートを 1 つのビューで表示できます。

操作モニターは管理機能です。「モニター・ページへのアクセス」または「モニター・タスクの実行」セキュリティ権限を持つユーザーだけが、「操作モニター (Operational Monitoring)」ページの表示を許可されます。「モニター・タスクの実行」セキュリティ権限を持つユーザーだけが、フローチャートの開始、停止、または中断を許可されます。

「モニター・タスクの実行」権限を持つユーザーは、個別の各フローチャートに対してどんな通常のアクセス権限を持っているかに関わらず、表示されるすべてのフローチャートを制御することができます。実行中のフローチャートを停止、一時停止、または再開する権限を意図的に与えようとしている場合を除き、この権限をエンド・ユーザーに与えないでください。

操作モニターを構成するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

実際の環境に適した方法で操作モニターを構成する必要があります。これには、過去のフローチャート実行に関するモニター情報を保管および表示する期間についてのパラメーターの設定が含まれます。

構成ページで、「キャンペーン」>「モニター」カテゴリのプロパティを必要に応じて設定します。プロパティについて詳しくは、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

「すべてのモニターされている実行」ページにアクセスするには

注: 「モニター」ページにアクセスするには、適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

「キャンペーン」>「モニター」を選択します。「すべてのモニターされている実行」ページが表示されます。

「すべてのモニターされている実行」ページの表示

「すべてのモニターされている実行」ページでは、所属するキャンペーンごとに、アクティブ状態のフローチャートが Campaign によってグループ化されます。

各フローチャートの状況は、「ステータス」列およびステータス標識の色という 2 つの方法で示されます。各フローチャートに対して使用できる操作ボタンは、フローチャートのステータスによって異なります。

各ステータスに対応する色と有効な操作については、112 ページの『フローチャートの状態と操作』にある表を参照してください。

注: 「モニター・タスクの実行」セキュリティ権限を持つ場合にのみ、操作ボタンが使用可能になります。

「すべてのモニターされている実行」ページでフローチャート・リストをソートするには

デフォルトでは、キャンペーン名を基準に昇順でフローチャートが並べられます。

このほかに「ステータス」、「実行者」、「開始時刻」、または「終了時刻」列を基準にしてフローチャートのリストをソートすることもできます。

フローチャートのリストをソートするには、ソート基準となる列名をクリックします。

右側の矢印の方向は、昇順または降順のどちらで列がソートされるかを示します。

- ・ 上矢印は、昇順で列が並んでいることを示します。
- ・ 下矢印は、降順で列が並んでいることを示します。

ソート順序を逆にするには、列名を再びクリックします。

注: 「すべてのモニターされている実行」ページを終了した後、再びページに戻ったときには、デフォルトのソート順 (キャンペーン名を基準に昇順) でフローチャートがリストされます。

関連するキャンペーンまたはフローチャートを表示するには

「すべてのモニターされている実行」ページから、キャンペーンまたはフローチャートのサマリーを開くことができます。青色の下線は、キャンペーンまたはフローチャートの名前がハイパーテキスト・リンクであることを示します。

キャンペーン・サマリーを表示するには、「キャンペーンおよびフローチャート」列の左側に表示されるキャンペーンの名前をクリックします。

「読み取り専用」モードでフローチャートを表示するには、キャンペーン名の右側に斜体字で表示されるフローチャートの名前をクリックします。

「すべてのモニターされている実行」ページの表示を最新表示するには

「リフレッシュ」機能を使用すると、「すべてのモニターされている実行」ページの内容をリフレッシュして、操作上の最新の詳細情報を表示することができます。

「すべてのモニターされている実行」ページを最新表示するには、右上にある「リフレッシュ」をクリックします。ページが最新表示されて、最新のデータが表示されます。

「すべてのモニターされている実行」ページでフローチャート进行操作する

注: 「すべてのモニターされている実行」ページからフローチャート进行操作するための権限が必要です。

「モニター・タスクの実行」セキュリティ権限を持っている場合、「すべてのモニターされている実行」ページでフローチャートに対して以下の操作を実行できます。フローチャートに対して実行できる操作は、フローチャートの現在のステータスによって異なります。

注: フローチャート・ページの「実行」メニューからフローチャートを一時停止、続行、または停止することもできます。一時停止および続行操作は、フローチャートの「実行」メニューからのみ実行可能です。詳細については、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

実行中のフローチャートを停止するには

実行中のフローチャートに対してのみ、停止操作を実行できます。

1. 「すべてのモニターされている実行」ページで、停止の対象となるフローチャートを見つけます。そのステータスと、使用可能な操作ボタンが表示されます。

2. フローチャート・ステータスの横にある「停止」ボタン  をクリックします。

フローチャートが停止します。「すべてのモニターされている実行」ページで、そのステータスが「停止」に変わり、ステータス標識の色が赤に変化します。

実行中のフローチャートを中断するには

実行中のフローチャートに対してのみ、中断操作を実行できます。

フローチャートを中断すると、プロセス実行が終了してシステム・リソースが解放されます。中断された位置からフローチャートの実行を再開できるよう、プレースホルダーが残されます。これは（フローチャートの「実行」メニューから操作する）フローチャートの一時停止とは異なります。フローチャートを一時停止した場合はプロセスが残り、（メモリーなどの）システム・リソースは解放されません。

1. 「すべてのモニターされている実行」ページで、中断の対象となるフローチャートを見つけます。そのステータスと、使用可能な操作ボタンが表示されます。

2. フローチャート・ステータスの横にある「中断」ボタン  をクリックします。

中断処理が始まります。「すべてのモニターされている実行」ページで、フローチャートのステータスが「中断中」に変わり、ステータス標識の色が黄色に変化します。「中断中」ステータスの間は、フローチャートに対してどんな操作も実行できません。

注: 実行中のフローチャートを正常に中断するには、実行中のプロセス・ボックスを安全に保存および再開できる状態になるまで待つ必要があるため、しばらく時間がかかる可能性があります。

中断処理が完了すると、フローチャートのステータスが「中断」に変わります。ステータス標識の色は黄色のままです。

中断されたフローチャートを再開するには

中断されているフローチャートを再開することができます。これにより、フローチャートが再始動して、中断された場所から実行を続けます。

1. 「すべてのモニターされている実行」ページで、再開の対象となる中断状態のフローチャートを見つけます。 そのステータスと、使用可能な操作ボタンが表示されます。

2. フローチャート・ステータスの横にある「再開」ボタン  をクリックします。

フローチャートの実行が再開されます。「すべてのモニターされている実行」ページで、そのステータスが「実行中」に変わり、ステータス標識の色が緑に変化します。

操作モニターの参照資料

このセクションには、以下の参照情報が含まれています。

- 『フローチャートの状態と操作』
- 114 ページの『操作モニターに関連するプロパティ』

フローチャートの状態と操作

以下の表は、「すべてのモニターされている実行」ページに表示される有効なフローチャートの状態と、それぞれの状態に対して実行できる操作を示しています。

フローチャート・ステータスは、最後の実行のステータスを反映します。

注: ユーザーがフローチャートを実行したときに 1 つのブランチが成功しても、(そのフローチャート内の) そのブランチに含まれない別のプロセスが失敗した場合には、フローチャート・ステータスは「失敗」になります。

表 27. フローチャートの状態と操作

ステータス (ステータス標識の色)	説明	有効な操作
実行中 (緑色)	フローチャートは実行中です。	• 中断 • 停止

表 27. フローチャートの状態と操作 (続き)

ステータス (ステータス標識の色)	説明	有効な操作
一時停止 (黄色)	フローチャートの「実行」メニューから、実行中のフローチャートが一時停止されました。(「モニター」ページからフローチャートを一時停止させることはできません。) フローチャートが一時停止すると、プロセスは保持されたまま処理が停止します。これにより、フローチャートの実行が続行されるときに作業内容が失われません。「一時停止」操作によってシステム・リソースが解放されないことに注意してください (CPU の使用は停止しますが、メモリーは解放されません)。 フローチャートの「実行」メニューから、一時停止中のフローチャートの実行を続行できます。 フローチャートの実行の一時停止および続行について、詳しくは「<i>Campaign ユーザーズ・ガイド</i>」を参照してください。	「モニター」ページからは、ありません (フローチャートからは「実行」>「続行」)
中断中 (黄色)	「モニター」ページからフローチャートの「中断」操作が開始されたため、フローチャートはこのステータスに移行中です。	なし
中断 (黄色)	フローチャートの中断操作が完了し、フローチャートは中断された状態になっています。プロセスはシャットダウンされ、システム・リソースが既に解放されました。中断された位置からフローチャート実行を再始動するためのプレースホルダーが残されています。 「モニター」ページの「再開」ボタンを使用すると、中断されたフローチャートの実行を再開できます。 注: 最初から再実行できる (結果として実質的に同じ動作になる) 実行中のプロセス・ボックスは、中断コマンドが出されると直ちに停止して、部分的に完了した作業内容はすべて失われます。フローチャートの実行が再開されるときに、これらのプロセス・ボックスは再実行されます。	再開
成功 (明るい青色)	フローチャートの実行が正常に完了し、エラーはありません。	なし

表 27. フローチャートの状態と操作 (続き)

ステータス (ステータス標識の色)	説明	有効な操作
停止 (赤色)	フローチャートの実行が停止されました。フローチャートの「実行」メニューからユーザー操作により停止されたか、またはエラーが原因です (つまりフローチャート内の 1 つ以上のプロセス・ボックスでエラーが検出されました)。フローチャートの「実行」メニューからのフローチャートの停止について、詳しくは「 <i>Campaign ユーザーズ・ガイド</i> 」を参照してください。	なし
失敗 (赤色)	実行が失敗しました。未処理エラーまたはサーバー・エラー (つまり予期しないフローチャート・サーバー・プロセスの終了) が原因です。	なし

操作モニターに関連するプロパティー

Marketing Platform 構成ページの「キャンペーン」>「モニター」カテゴリにある以下のプロパティーを使用して、操作モニターの動作を変更します。プロパティーの詳細については、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

- cacheCleanupInterval
- cacheRunCompleteTime
- monitorEnabled
- serverURL
- monitorEnabledForInteract
- protocol
- port

「すべてのモニターされている実行」ページのアイコン

「すべてのモニターされている実行」ページでは、以下のアイコンが使用されます。



以下の表では、左側のアイコンから右側のアイコンへの順番で説明します。

表 28. 「すべてのモニターされている実行」ページで使用するアイコン

アイコン名	説明
項目の印刷	各項目の横にあるチェック・ボックスをクリックして、モニターされている 1 つ以上の実行を選択した後、このアイコンをクリックすると、選択された項目が印刷されます。

表 28. 「すべてのモニターされている実行」 ページで使用されるアイコン (続き)

アイコン名	説明
リフレッシュ	このアイコンをクリックすると、ページ上に示されるモニターされている実行のリストが最新表示されます。

第 10 章 ディメンション階層の管理

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『ディメンション階層とは』
- 『ディメンション階層を使用する理由』
- 118 ページの『ディメンション階層およびキューブについて』
- 118 ページの『ディメンション階層およびデータベース表について』

ディメンション階層とは

ディメンション階層とは、データを値の範囲に基づいてビンにグループ化するのに使用されるデータ構造のことです。ディメンション階層に複数レベルを含めることができ、レベルごとにそれぞれのビンのセットを持ちます。各下位のビンは、上位ビンにきちんとロールアップされなければなりません。

例えば、「年齢」ディメンション階層は、最下位とロールアップの 2 つのレベルを持つことができます。顧客はそれぞれのレベルのビンにグループ化されます。

最下位: (21-25)、(26-30)、(31-35)、(36-45)、(45-59)、(60+)

ロールアップ: 若年 (21-35)、中年 (36-59)、高齢 (60+)

注: 上位にロールアップされる場合、下位ビン (例えば、上記のビン 26-30) を分割して、26-27 歳の個人を「若年」、28-30 を「中年」に分割することはできません。下位の単一ビンはどれも、上位ビンの範囲に完全に入らなければなりません。実際に「若年」を 21-27 歳の人と定義する場合は、下位に別々のビン (例えば、26-27 と 28-30) を作成し、それぞれ「若年」と「中年」にロールアップされるようにする必要があります。

一般に指定される他のディメンション階層として、時間、地理、製品、部門、流通チャネルがあります。ただし、ビジネスやキャンペーンに関係のあるどのようなディメンション階層でも作成できます。

ディメンション階層を使用する理由

キューブの構成要素であるディメンション階層は、データ探索やクイック・カウントに使用できる、あるいはターゲット・キャンペーンの基本として使用できる、さまざまなレポートの基本です。キューブは、数値フィールド (例えば、集約レベルが増加している全製品の総売上高、地理別の経費対売上高のクロス集計分析など) のカウントや単純計算 (合計、最小、最大、平均、標準偏差) を事前集約できます。

ディメンション階層は、(キューブを作成したりクロス集計レポートからキューブが機能したりすることを必要とせずに) 戦略セグメントから直接選択する手段としても使用可能です。

Campaign は、以下をサポートします。

- レベルとエレメント (それぞれ数の制限なし) から成るディメンション
- 顧客分析レポート作成および視覚的選択の入力として作成されたデータ・ポイント
- ドリルダウン機能をサポートするためのカテゴリ (数の制限なし) へのロールアップ

ディメンション階層およびキューブについて

ディメンション階層は、動的データ・キューブを作成するために使用します。これらのキューブは、戦略的セグメント上に作成される、顧客データを基に事前計算された 2 ディメンションまたは 3 ディメンションの集合体です。キューブを使用すると、データに対してドリルスルーを行い、その結果生成される顧客セットをフローチャートでの新しいセルとして使用できるため、データの探索や視覚的選択のために使用されます。

キューブについて詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

ディメンション階層およびデータベース表について

Campaign にディメンション階層を作成するとき、それをデータベース内のテーブルまたはフラット・ファイルにマップします。そのテーブルには、以下のための列が含まれている必要があります。

- ディメンション名
- ディメンション階層に含まれる各レベル
- オーディエンス・エンティティを bin に定義する未加工 SQL 式または IBM Unica Marketing 式
- データ・ソース

例えば、「年齢」ディメンション階層に 3 つのレベルがある場合を考えます。第 1 レベルは「すべての年齢」で、その後に 2 つのレベルが続きますが、これは以下のリストに示されている 2 つのレベルに対応します。

- 30 未満
 - 20 未満
 - 20 から 25
 - 26 から 30
- 30 から 50
 - 30 から 40
 - 41 から 50
- 50 より上
 - 51 から 60
 - 60 より上

このディメンション階層は、以下のデータベース表に基づいています。

表 29. ディメンション階層のデータベース表

ディメンション名	Dim1Name	Dim2Name	Dim3Name	式	データ・ソース
MemberAge	すべての年齢	30 未満	< 20 歳	年齢 < 20	ユーザー・データマート
MemberAge	すべての年齢	30 未満	20 - 25 歳	年齢 between 20 and 25	ユーザー・データマート
MemberAge	すべての年齢	30 未満	26 - 30 歳	年齢 between 26 and 30	ユーザー・データマート
MemberAge	すべての年齢	30 - 50 歳	30 - 40 歳	年齢 between 31 and 40	ユーザー・データマート
MemberAge	すべての年齢	30 - 50 歳	41 - 50 歳	年齢 between 41 and 50	ユーザー・データマート
MemberAge	すべての年齢	50 より上	51 - 60 歳	年齢 between 51 and 60	ユーザー・データマート
MemberAge	すべての年齢	50 より上	60 より上	年齢 > 60	ユーザー・データマート

ディメンション階層の作業

このセクションには、以下の情報が記載されています。

- 『ディメンション階層の作業について』
- 120 ページの『ディメンション階層の設計』
- 120 ページの『Campaign のディメンション階層へのアクセス』
- 120 ページの『ディメンション階層を作成する』
- 121 ページの『保管ディメンション階層をロードする』
- 121 ページの『ディメンション階層を編集する』
- 122 ページの『ディメンション階層を更新する』
- 122 ページの『ディメンション階層を削除する』

ディメンション階層の作業について

Campaign でディメンション階層を使用するには、以下を行う必要があります。

- ディメンション階層を、ユーザー・データマートにあるデータベース表に定義して作成するか、区切り記号付きフラット・ファイルまたは固定幅フラット・ファイルに定義します。
- このテーブルまたはフラット・ファイルを、Campaign 内のディメンション階層にマップします。

このディメンション階層が Campaign にマップされると、ディメンション階層が「キューブ」プロセスで使用できるようになり、戦略的セグメントに動的データ・キューブを作成できます。

ユーザーまたは IBM Unica コンサルティング・チームは、データマートまたはフラット・ファイルにディメンション階層定義を作成する必要があります。これは Campaign の外部で行われる操作です。また、ディメンション階層の最下位では、未

加工 SQL 式または純粋な (カスタム・マクロ、ユーザー変数、ユーザー定義フィールドのない) IBM Unica Marketing 式を使用して、各 bin の個別オーディエンス ID メンバーシップを定義する必要もあります。

ディメンション階層の設計

ディメンション階層を設計するときには、以下を検討する必要があります。

- ディメンションの相互関係 (例: 年齢/地域/期間)。
- 各ディメンションおよびキューブの詳細レベル。
- ディメンションは単一のキューブに限定されず、多数のキューブで使用できる。
- ディメンションの境界をまたぐときに明確にロールアップするため、エレメントは相互に排他的で、オーバーラップしないようにする必要があります。

Campaign のディメンション階層へのアクセス

以下のいずれかの方法で、ディメンション階層の作業を行うことができます。

- フローチャートの編集時に、「システム管理」アイコンをクリックし、「ディメンション階層」を選択する。
- 「キャンペーン設定」ページで、「ディメンション階層の管理」をクリックする。

注: ディメンション階層を使用してキューブを作成するとき、キューブ・プロセスを使用して、フローチャートからアプリケーションの「セッション」領域に動的データ・キューブを作成することをお勧めします。

ディメンション階層を作成する

この手順は、ディメンション階層定義のあるテーブルが既に使用可能であることを前提としています。

1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
2. 「ディメンション階層」ウィンドウで、「新規ディメンション」をクリックします。

「ディメンションの編集」ウィンドウが開きます。

3. 新規ディメンション階層の以下の詳細を入力します。
 - 「ディメンション名」
 - 「説明」
 - ディメンション階層の「階層数」。このディメンション階層をマップするテーブルの階層レベルに対応している必要があります。
 - このディメンション階層をキューブの基本として使用する場合は、「データの重複を許可しない」にチェック・マークを付けておく必要があります (デフォルトでは、このオプションにチェック・マークが付いています)。そうしないと、キューブ内でエレメントがオーバーラップできないため、このディメンション階層を使用してキューブを作成するときにエラーを受け取ります。単に戦略セグメントからの選択用にディメンション階層を作成する場合は、このオプションを無効にしてオーバーラップ定義を作成することも可能です。ただし、作成するディメンション階層をキューブの作成にも戦略セグメントでも自由に使用できるように、非オーバーラップ・ピンを作成することをお勧めします。

4. 「テーブル・マッピング」をクリックします。

「テーブル定義の編集」ウィンドウが開きます。

5. ディメンション階層テーブルをデータベース内のテーブルかまたはディメンション階層定義が含まれるフラット・ファイルのどちらかにマップするには、35ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方法』の手順に従ってください。

ディメンション階層のマッピングを完了すると、「ディメンションの編集」ウィンドウに戻ります。この時点で、このウィンドウに新規ディメンション階層の詳細が表示されます。

6. 「OK」をクリックします。

「ディメンション」ウィンドウに戻ります。

7. (オプション、ただし推奨) 「保存」をクリックすることにより、テーブル・カタログで将来使用するためにディメンション階層を保管できます。ディメンション階層を保管すると、そうした階層を再作成しなくても、別の使用目的で後で取り出したり、他のユーザーと共有したりできます。

保管ディメンション階層をロードする

ディメンション階層は、フローチャート内のマップされた他のテーブルとともに、テーブル・カタログに保管されます。

1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
2. 「ロード」をクリックします。
3. ロードするディメンション階層が含まれるテーブル・カタログを選択します。
4. 「ロード」をクリックします。ディメンション階層がロードされます。

ディメンション階層を編集する

1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
2. 編集するディメンション階層のロードが必要なこともあります。
3. 編集するディメンション階層を選択します。
4. 「編集」をクリックします。
5. ディメンション階層の以下の詳細を変更します。
 - 「ディメンション名」
 - 「説明」
 - ディメンション階層の「階層数」。このディメンション階層をマップするデータベース表の階層レベルに対応している必要があります。
 - このディメンション階層をキューブの基本として使用する場合は、「データの重複を許可しない」にチェック・マークを付けておく必要があります (デフォルトでは、このオプションにチェック・マークが付いています)。そうしないと、キューブ内でエレメントがオーバーラップできないため、このディメンション階層を使用してキューブを作成するときにエラーを受け取ります。
6. テーブル・マッピングを変更するには、「テーブル・マッピング」をクリックします。

「テーブル定義の編集」ウィンドウが開きます。

7. 35 ページの『ベース・レコード・テーブルを既存のデータベース表にマップする方法』の手順に従ってください。
8. ディメンションのマッピングを完了すると、「ディメンションの編集」ウィンドウに戻ります。この時点で、このウィンドウに新規ディメンション階層の詳細が表示されます。
9. 「OK」をクリックします。

「ディメンション」ウィンドウに戻ります。

10. (オプション、ただし推奨) 「保存」をクリックすることにより、テーブル・カタログで将来使用するためにディメンション階層に対する変更を保管できます。

ディメンション階層を更新する

Campaign は、ディメンション階層の自動更新をサポートしていません。基礎データが変わった場合は、ディメンションを手動で更新する必要があります。

注: キューブは戦略セグメントに基づいたディメンション階層から成っているの
で、戦略セグメントを更新するときは必ずキューブを更新する必要があります。

1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
2. 編集するディメンション階層のロードが必要なこともあります。
3. 更新するディメンション階層が含まれるテーブル・カタログを選択します。
4. 「更新」をクリックします。

ディメンション階層を削除する

重要: ディメンション階層を削除すると、戦略セグメントで使用できなくなります。ディメンション階層に基づいたキューブは、削除されたディメンション階層を使用している場合は、構成解除された状態になります。

テーブル・カタログからディメンション階層を削除しても、既存のフローチャートに影響を及ぼしません (これらのフローチャートにはディメンション階層定義のコピーが含まれるため)。

1. 「ディメンション階層」ウィンドウを開きます。
2. 更新するディメンション階層のロードが必要なこともあります。
3. 削除するディメンション階層を選択します。
4. 「削除」をクリックします。

削除の確認を求められます。

第 11 章 トリガーの管理

Campaign では、パーティション内のすべてのフローチャートで利用できるインバウンド・トリガーおよび発信トリガーを定義することができます。

注: Campaign フローチャートで定義されるトリガーは、IBM Unica Scheduler では使用されません。IBM Unica Scheduler でのトリガーの使用について詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

インバウンド・トリガーとは

インバウンド・トリガーとは、1 つ以上のキャンペーンにブロードキャストされるメッセージのことです。特定のトリガーを「listen」して 1 つ以上のプロセスの実行を開始するようにフローチャートを構成することができます。サード・パーティー・システムは通常、何らかの外部イベントの発生に基づいてトリガーを送信します。

インバウンド・トリガーを使用する理由

インバウンド・トリガーが Campaign でのプロセスを開始する要因となり得るイベントの例を以下に示します。

- データベースの更新により、すべての戦略的セグメントの再計算がトリガーされます (例えば、最近の購入アクティビティに基づいた高い値、中程度の値、低い値による顧客の分類)。
- データベース内のスコアを更新する予測モデルにより、獲得キャンペーンがトリガーされます。これは、最新のスコアが実行されるのを待ちます。
- サード・パーティーのスケジューリング・ツールは、フローチャートの実行をスケジュールおよびトリガーするために使用されます。
- 最適化セッションの実行の完了により、参加キャンペーンの実行による、最適化された結果の取得と処理がトリガーされます。

インバウンド・トリガーとスケジュール・プロセス

これを行うように構成すると、スケジュール・プロセスはインバウンド・トリガーを listen し、そのいずれかがブロードキャストされたときに実行されます。

ブロードキャストとは?

ブロードキャストとは、Campaign 内のすべてのフローチャート、特定のキャンペーン、または特定のフローチャートに、インバウンド・トリガーが実行されたことを通知するプロセスのことです。その後、そのインバウンド・トリガーを listen するように構成されているスケジュール・プロセスが実行されます。

インバウンド・トリガーをキャンペーンまたはフローチャートに送信するには、トリガー・ユーティリティー `CAMPAIGN_HOME/bin/unica_actrg.exe` を使用してトリガーを Campaign にブロードキャストする必要があります。

発信トリガーとは

発信トリガーとは、フローチャートまたはプロセスの実行後に行われるコマンド、バッチ・ファイル、またはスクリプトの実行のことです。何らかのアクション (アプリケーションのオープン、Eメールの送信、またはプログラムの実行など) を仮想実行するようにトリガーを定義することができます。

Campaign は、スケジュール・プロセス、コール・リスト・プロセス、またはメール・リスト・プロセスを実行するときに発信トリガーを実行できます。例えば、コール・リスト・プロセスが完了したときに、発信トリガーは、コンタクトのリストの準備が整ったことを管理者に知らせる自動 Eメールを送信することができます。

注: トリガーは、テスト実行および実稼働実行の完了時に実行されます。

Campaign は、フローチャートの実行時に発信トリガーを自動的に実行することもできます。フローチャートが正常に完了したときと失敗したときのそれぞれに対してトリガーを構成することができます。

発信トリガーには、同期のものと非同期のものがあります。

同期発信トリガー

Campaign が発信トリガーを同期的に実行する際、それを呼び出したプロセスは、実行されたコマンドが完了し、成功または失敗のステータスを返すのを待ちます。言い換えると、フローチャートは、トリガーの結果が返されるまで実行を続行しません。トリガーが失敗する場合 (非ゼロの戻り値によって示される)、プロセス・ボックスは処理を続行せず、エラー (赤い X) および該当するエラー・メッセージを示します。

フローチャートが外部プロセスによる作業の完了を待ってから続行する場合は、同期実行が便利です。例えば、同期発信トリガーはサード・パーティーの予測モデル・スコアをリアルタイムで実行でき、フローチャートはその完了を待った後、更新されたモデル・スコアからの選択を行います。

発信トリガーを同期発信トリガーにするには、プロセス構成でトリガーを指定する際に、トリガー名の後ろに疑問符 (?) を置きます。以下に例を示します。

EmailUpdate ?

非同期発信トリガー

非同期発信トリガーを実行すると、フローチャートの処理は即時に続行されます。トリガーを呼び出したプロセスは、それが成功または失敗するのを待ちません。

発信トリガーを非同期にするために終了文字を追加する必要はありません。ただし、トリガーが非同期であることを明示的に知らせるために、プロセス構成でトリガーを指定する際に、トリガー名の後ろにアンパーサンド (&) を置くことができます。以下に例を示します。

EmailUpdate &

発信トリガーを使用する理由

発信トリガーは、キャンペーンに関連するものの、キャンペーン外にあるアクションを実行するさまざまな状況で役立ちます。役立つ発信トリガーの代表的な例を以下に挙げます。

- キャンペーンのフローチャートの完了時に E メール通知を送信する。
- フローチャートが失敗した場合に E メール通知を送る、または他の何らかのタスクを実行する。
- サード・パーティーのモデリング・ツール (SAS など) を実行して、フローチャート・ロジックを使ってインラインの結果をリアルタイムで生成する。
- UNIX シェル・スクリプトを実行して、ファイル作成後に FTP で出力ファイルを送信する。
- 顧客データベースの更新を起動する。
- 別のフローチャートを起動またはトリガーする。

発信トリガーの戻り値

発信トリガーによって実行されるプログラムは、成功したときは 0 を、失敗したときは非ゼロの値を返します。

トリガーを定義する方法

フローチャートを編集する際にトリガーを定義します。1 つのフローチャートで定義するトリガーは、同じパーティション内のすべてのフローチャートで使用できます。

トリガーの実行可能ファイルは、`CAMPAIGN_HOME/partitions/partition_name` ディレクトリーに保管する必要があります。必要に応じて、この場所にサブディレクトリー `triggers` を作成することも、その他のサブフォルダーを使用することもできます。

トリガー・フォルダーおよびトリガーに関する作業

このセクションでは、以下のタスクについて説明します。

- 『トリガーを編成するためのフォルダーを作成するには』
- 126 ページの『トリガー・フォルダーを移動するには』
- 126 ページの『トリガー・フォルダーを編集するには』
- 127 ページの『トリガー・フォルダーを削除するには』
- 127 ページの『トリガーを作成するには』
- 128 ページの『トリガーを編集または移動するには』
- 129 ページの『トリガーを削除するには』

トリガーを編成するためのフォルダーを作成するには

注: トリガー用のフォルダーを作成するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「ツール (Tools)」>「トリガー」と選択します。

「トリガー」ウィンドウが開きます。

2. 「新規フォルダー」をクリックします。

「フォルダー作成」ウィンドウが開きます。

3. フォルダーの「名前」を入力します。
4. オプションで、「説明」を入力します。
5. 「保存先」ドロップダウン・リストで、新規フォルダーの作成先フォルダーを選択するか、「なし (None)」を選択して最上位フォルダーを作成します。
6. 最上位フォルダーを作成する場合、セキュリティ・ポリシーを選択します。

サブフォルダーは、その親フォルダーからのセキュリティ・ポリシーを自動的に継承します。

7. 「保存」をクリックします。

トリガー・フォルダーを移動するには

注: トリガー・フォルダーを移動するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「オプション」アイコンをクリックし、「トリガー」を選択します。「トリガー」ウィンドウが開きます。
2. 左側のペインで、移動するフォルダーを選択します。
3. 「編集/移動」をクリックします。「フォルダーの編集」ウィンドウが開きます。
4. 「保存先」ドロップダウン・リストで、選択したフォルダーの移動先フォルダーを選択するか、「なし (None)」を選択してフォルダーを最上位フォルダーにします。
5. フォルダーを最上位に移動する場合、セキュリティ・ポリシーを選択します。

サブフォルダーは、その親フォルダーからのセキュリティ・ポリシーを自動的に継承します。

6. 「保存」をクリックします。

トリガー・フォルダーを編集するには

注: トリガー・フォルダーを編集するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「オプション」アイコンをクリックし、「トリガー」を選択します。

「トリガー」ウィンドウが開きます。

2. 左側のペインで、編集するフォルダーを選択します。
3. 「編集/移動」をクリックします。

「フォルダーの編集」ウィンドウが開きます。

4. フォルダーの「名前」を編集します。
5. 「説明」を編集します。

6. 「保存先」ドロップダウン・リストで、選択したフォルダーの移動先フォルダーを選択するか、「なし (None)」を選択してフォルダーを最上位フォルダーにします。
7. 最上位フォルダーを編集する場合、セキュリティー・ポリシーを選択します。

サブフォルダーは、その親フォルダーからのセキュリティー・ポリシーを自動的に継承します。

8. 「保存」をクリックします。

トリガー・フォルダーを削除するには

注: トリガー・フォルダーを削除するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「オプション」アイコンをクリックし、「トリガー」を選択します。

「トリガー」ウィンドウが開きます。

2. 左側のペインで、削除するフォルダーを選択します。
3. 「削除」をクリックします。

削除の確認を求めるプロンプトが出されます。

4. 「OK」をクリックします。

トリガーを作成するには

注: トリガーを作成するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「ツール (Tools)」>「トリガー」と選択します。

「トリガー」ウィンドウが開きます。

2. 「新規項目」をクリックします。

新規トリガーのデータ・フィールドがウィンドウの右側に表示されます。

3. オプションで、トリガーの保存先フォルダーを「保存先」ドロップダウン・リストから選択します。

注: 選択するフォルダーの場所によって、フォルダーのセキュリティー・ポリシーに基づいてどのユーザーがトリガーにアクセスできるかが決まります。

4. トリガーの名前を「名前」フィールドに入力します。
 - 文字列にスペースを使用することはできませんが、下線 (_) は使用できます。
 - この名前は、トリガーを保存するフォルダー内で固有でなければなりません。
5. トリガーを最上位フォルダーに作成する場合は、セキュリティー・ポリシーを選択するか、デフォルトのままにします。
6. オプションで、トリガーの説明を「説明」フィールドに入力します。

トリガーのテキスト記述は、文書の目的で、フリー・フォームで入力できます。誰がトリガーを変更したか、いつ、また何が変更されたかに関する変更履歴を保持することもできます。

7. 「コマンド」フィールドに、現行パーティション・ルートへの相対パスおよび Campaign サーバー上の実行可能ファイルのファイル名を入力します。「参照」をクリックすると、現行パーティション内の実行可能ファイルを視覚的に選択することができます。

発信トリガーを作成する場合にそれを同期発信トリガーにするには、コマンドの最後に疑問符 (?) を置きます。

トリガーを非同期にするには、コマンドの最後に特殊文字を置かないで、アンバーサンド (&) を使用してください。

8. 「保存」をクリックして、トリガーを保存します。
9. 「閉じる」をクリックして、「トリガー」ウィンドウを終了します。

トリガーを編集または移動するには

注: トリガーを編集または移動するための権限が必要です。

1. フローチャートを編集する際に、「ツール (Tools)」>「トリガー」と選択します。

「トリガー」ウィンドウが開き、現行 Campaign パーティション内で定義されているすべてのトリガーが表示されます。

2. 「項目リスト」で、編集するトリガーを見つけて選択します。
3. 「編集/移動」をクリックします。

トリガーのデータ・フィールドがウィンドウの右側に表示されます。

4. オプションで、トリガーの保存先フォルダーを「保存先」ドロップダウン・リストで変更します。

注: 選択するフォルダーの場所によって、フォルダーのセキュリティー・ポリシーに基づいてどのユーザーがトリガーにアクセスできるかが決まります。

5. オプションで、「名前」フィールドのトリガー名を変更します。
 - 文字列にスペースを使用することはできませんが、下線 (_) は使用できます。
 - この名前は、トリガーを保存するフォルダー内で固有でなければなりません。

重要: トリガー名を変更する場合、そのトリガーを参照しているプロセスはすべて構成解除され、実行できなくなります。新規トリガー名を参照するように各プロセスを編集する必要があります。

6. 最上位フォルダーのトリガー変更する場合、またはトリガーを最上位フォルダーに移動する場合、セキュリティー・ポリシーを選択するか、デフォルトのままにします。
7. オプションで、「説明」フィールドのトリガーの説明を変更します。
8. オプションで、「コマンド」フィールドの現行パーティション・ルートへの相対パスおよび Campaign サーバー上の実行可能ファイルのファイル名を変更します。「参照」をクリックすると、現行パーティション内の実行可能ファイルを視覚的に選択することができます。

発信トリガーを作成する場合にそれを同期発信トリガーにするには、コマンドの最後に疑問符 (?) を置きます。

トリガーを非同期にするには、コマンドの最後に特殊文字を置かないで、アンパーサンド (&) を使用してください。

9. 「保存」をクリックして、トリガーを保存します。
10. 「閉じる」をクリックして、「トリガー」ウィンドウを終了します。

トリガーを削除するには

注: トリガーを削除するための権限が必要です。

トリガーを削除する場合、そのトリガーを参照しているプロセスはすべて構成解除され、実行できなくなります。各プロセスを編集して、削除されるトリガーへの参照を削除する必要があります。

1. フローチャートを編集する際に、「ツール (Tools)」>「トリガー」と選択します。

「トリガー」ウィンドウが開き、現行 Campaign パーティション内で定義されているすべてのトリガーが表示されます。

2. 「項目リスト」で、削除するトリガーを見つけて選択します。
3. 「削除」をクリックします。

削除の確認を求めるプロンプトが出されます。

4. 「OK」をクリックして、トリガーを削除します。
5. 「閉じる」をクリックして、「トリガー」ウィンドウを終了します。

発信トリガーのセットアップ

注: フローチャートでトリガーを使用するための権限が必要です。

このセクションには以下のトピックが記載されています。

- 『発信トリガーを実行するためのプロセスのセットアップ』
- 130 ページの『成功したときに発信トリガーが実行されるようにフローチャートをセットアップするには』
- 130 ページの『失敗したときに発信トリガーが実行されるようにフローチャートをセットアップするには』

発信トリガーを実行するためのプロセスのセットアップ

次のいずれかのプロセスが実行されたときに発信トリガーが実行されるようにすることができます。

- スケジュール
- コール・リスト
- メール・リスト

スケジュール・プロセスでは、実行するトリガーを「スケジュール」タブで指定します。

コール・リスト・プロセスおよびメール・リスト・プロセスで実行するトリガーを「実現」タブで指定します。

これらのプロセスの構成について詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

成功したときに発信トリガーが実行されるようにフローチャートをセットアップするには

1. フローチャートを編集する際に、「システム管理」アイコンをクリックし、「拡張設定」を選択します。

「拡張設定」ウィンドウが開きます。

2. 「フローチャート成功でトリガー送信」で、実行するトリガーを選択します。

複数のトリガーを使用するには、各トリガーの名前をスペースで区切って入力します。

3. 「OK」をクリックして、設定を保存します。

選択したトリガーは、フローチャートが正常に実行されたときに実行されます (実稼働実行とテスト実行の両方)。

失敗したときに発信トリガーが実行されるようにフローチャートをセットアップするには

1. フローチャートを編集する際に、「システム管理」アイコンをクリックし、「拡張設定」を選択します。

「拡張設定」ウィンドウが開きます。

2. 「フローチャート実行エラーでトリガー送信」で、実行するトリガーを選択します。

複数のトリガーを使用するには、各トリガーの名前をスペースで区切って入力します。

3. 「OK」をクリックして、設定を保存します。

選択したトリガーは、フローチャートの実行中にエラーが発生したときに実行されます (実稼働実行とテスト実行の両方)。

インバウンド・トリガーのセットアップ

このセクションには以下の内容が記載されています。

- 131 ページの『インバウンド・トリガーをセットアップするには』
- 131 ページの『インバウンド・トリガーを使用して実行するためのスケジュール・プロセスの構成』

- 132 ページの『トリガーをキャンペーンのすべてのフローチャートにブロードキャストするには』
- 132 ページの『トリガーをフローチャートにブロードキャストするには』
- 132 ページの『トリガーをすべてのキャンペーンにブロードキャストするには』

注: フローチャートでトリガーを使用するための権限が必要です。

インバウンド・トリガーをセットアップするには

1. 127 ページの『トリガーを作成するには』の説明に従って、フローチャート内にトリガーを作成します。
2. 『インバウンド・トリガーを使用して実行するためのスケジュール・プロセスの構成』の説明に従って、インバウンド・トリガーを受け取ったときに実行するすべてのフローチャートのスケジュール・プロセスを構成します。
3. 以下の説明に従って、Campaign Trigger Utility `unica_actrg` (フォルダー `Campaign_home/bin` にある) を使用してトリガーをブロードキャストします。
 - 132 ページの『トリガーをキャンペーンのすべてのフローチャートにブロードキャストするには』
 - 132 ページの『トリガーをフローチャートにブロードキャストするには』
 - 132 ページの『トリガーをすべてのキャンペーンにブロードキャストするには』

インバウンド・トリガーを使用して実行するためのスケジュール・プロセスの構成

インバウンド・トリガーを使用してフローチャートを実行するには、次のように構成したスケジュール・プロセスを使ってそのフローチャートを開始する必要があります。

- 「実施頻度」ドロップダウン・リストで、「カスタム設定」を選択します。
- 「トリガー指定」にチェック・マークを付けます。
- 「トリガー指定」フィールドに、ブロードキャストされたときにフローチャートを実行するトリガーの名前を入力します。複数のトリガーはスペースで区切ります。

その他の条件に基づいて実行されるようにスケジュール・プロセスを構成することもできます。トリガー条件を構成すると、指定されたトリガーを受け取ったときに、後続のプロセスを追加で実行します。

重要: インバウンド・トリガーを受け取ったときにフローチャートが実行されるようにするには、前述のとおりフローチャートでスケジュール・プロセスを構成し、そのフローチャートを実行しておく必要があります。フローチャートを実行すると、フローチャートの状態が「待機中」または「listen 中」になります。これにより、トリガーを受け取ったときにフローチャートを実行する準備が整ったことになります。トリガーがブロードキャストされたときに実行されていないフローチャートは、実行されません。

スケジュール・プロセスの構成について詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

トリガーをキャンペーンのすべてのフローチャートにブロードキャストするには

Campaign Trigger Utility を次の構文で実行します。

```
unica_actrg campaign_code trigger_name
```

以下に例を示します。

```
unica_actrg C003 web_hit
```

指定されたキャンペーンのフローチャートが、web_hit インバウンド・トリガーに基づいてブロードキャストを受信したときに実行されるように構成されているスケジュール・プロセスを使って開始される場合、そのフローチャートはブロードキャスト・トリガーを受け取ったときに実行されます。

トリガーをフローチャートにブロードキャストするには

Campaign Trigger Utility を次の構文で実行します。

```
unica_actrg -n flowchart_name trigger_name
```

以下に例を示します。

```
unica_actrg -n account_inquiry_flowchart web_hit
```

トリガーは、指定された名前を持つ実行中のすべてのフローチャートに対してのみブロードキャストされます。指定された名前のフローチャートが、web_hit インバウンド・トリガーに基づいてブロードキャストを受信したときに実行されるように構成されているスケジュール・プロセスを使って開始される場合、そのフローチャートはブロードキャスト・トリガーを受け取ったときに実行されます。

トリガーをすべてのキャンペーンにブロードキャストするには

Campaign Trigger Utility を次の構文で実行します。

```
unica_actrg * trigger_name
```

以下に例を示します。

```
unica_actrg * web_hit
```

トリガーは、すべてのキャンペーンのすべてのフローチャートにブロードキャストされます。任意のフローチャートが、web_hit インバウンド・トリガーに基づいてブロードキャストを受信したときに実行されるように構成されているスケジュール・プロセスを使って開始される場合、そのフローチャートはブロードキャスト・トリガーを受け取ったときに実行されます。

注: UNIX サーバーでは、アスタリスクはエスケープするか (*), 二重引用符で囲む ("*") 必要があります。

リモート Windows マシンでのトリガー・ユーティリティのセットアップ

トリガーを UNIX 上の Campaign インストールに送信するように Windows マシンを構成できます。以下のステップに従い、リモート Windows マシン上で unica_actrg ユーティリティおよび必要なファイルのセットアップを行います。

1. 必要なファイルを取得します。

Windows 上の別の Campaign インストールからファイルをコピーすることも、Campaign をインストールしてファイルを取得することもできます。

必要なファイルのリストについては、『unica_actrg ユーティリティ：必要なファイル』を参照してください。Campaign のインストールについて詳しくは、インストール文書を参照してください。

インストーラーを実行してトリガー・ユーティリティ・ファイルを取得し、不要なファイルを削除する場合、トリガー・ユーティリティに必要なファイルを別のディレクトリにコピーしてから、Campaign をアンインストールします。Campaign のアンインストールについて詳しくは、「IBM Unica Campaignインストール・ガイド」を参照してください。

2. リモート Windows マシン上でコマンド・プロンプトを開きます。
3. まだ設定されていない場合は、リモート Windows マシン上で CAMPAIGN_HOME 環境変数を設定します。以下に例を示します。

```
set CAMPAIGN_HOME=C:\Unica\Campaign
```

unica_actrg.exe を実行する際、Campaign インストールが存在するマシンのポートおよびサーバー名を指定します。

unica_actrg ユーティリティ：必要なファイル

リモート Windows マシンで Campaign トリガー・ユーティリティ (unica_actrg) を実行するには、以下のファイルが必要です。

表 30. unica_actrg ユーティリティで必要なファイル

ディレクトリ	ファイル名
<CAMPAIGN_HOME>%bin	iconv.dll
	intl.dll
	libeay32.dll
	ssleay32.dll
	tls4d.dll
	unica_actrg.exe
	xerces-c_1_4.dll
<CAMPAIGN_HOME>%conf	config.xml

トリガーの管理に関する参照情報

このセクションの参照には、以下の内容が含まれます。

- 『トリガーによってサポートされるトークン』
- 135 ページの『Campaign トリガー・ユーティリティのオプション』
- 135 ページの『Campaign トリガー・ユーティリティの構文』

トリガーによってサポートされるトークン

トークンを発信トリガーのコマンド・ラインで使用して、実行中のフローチャートから特定の情報を渡すことができます。

次の表は、トリガーによってサポートされているトークンと、特定のトークンが使用可能なプロセスをリストしています。

表 31. トリガーによってサポートされるトークン

トークン	説明	使用場所
<AMUSER>	フローチャートを実行しているユーザーの IBM Unica Marketing ユーザー名。	発信トリガーをサポートしているプロセス。
<CAMPCODE>	現行キャンペーンに関連付けられているキャンペーン・コード。	トリガー、失敗時のトリガー、成功時のトリガーをサポートしているプロセス。
<CONTACTLIST>	コンタクト・プロセスで指定されるコンタクト・リスト。 コンタクト・リストがファイルに書き込まれる場合、適切な絶対パス名およびファイル名によってトリガー・トークンが置き換えられます。 コンタクト・リストがデータベース表に書き込まれる場合、トークンは単に削除されます。	コール・リスト・プロセスおよびメール・リスト・プロセス。
<CONTACTLOG>	特定のコンタクト・プロセスのログ。 ログがファイルに書き込まれる場合、適切な絶対パス名およびファイル名によってトリガー・トークンが置き換えられます。	コール・リスト・プロセスおよびメール・リスト・プロセス。
<FLOWCHARTFILENAME>	フローチャートの .ses ファイルの絶対パス名	発信トリガーをサポートしているプロセス。
<IXUSER>	Distributed Marketing ユーザーのユーザー名。	トリガー、失敗時のトリガー、成功時のトリガーをサポートしているプロセス。

表 31. トリガーによってサポートされるトークン (続き)

トークン	説明	使用場所
<OUTPUTEMPTABLE>	一時テーブルを作成するために、「拡張設定」ウィンドウの下の前処理および後処理において未加工 SQL で使用するトークン。例: Create <OUTPUTEMPTABLE> as SELECT CustIDs from CustomerTable WHERE ...	選択プロセス。
<OWNER>	フローチャートを作成したユーザーの Marketing Platform セキュリティー・ユーザー名。	トリガー、失敗時のトリガー、成功時のトリガーをサポートしているプロセス。
<PROCESSNAME>	現行プロセス・ボックスの名前。	トリガーをサポートしているプロセス。
<PROCESSID>	現行プロセス・ボックスの ID。	トリガーをサポートしているプロセス。
<SESSIONID>	現行フローチャートの ID。	トリガー、失敗時のトリガー、成功時のトリガーをサポートしているプロセス。
<SESSIONNAME>	現行フローチャートの名前。	トリガー、失敗時のトリガー、成功時のトリガーをサポートしているプロセス。
<UserVar.UserVarName>	任意のユーザー変数の値。現行フローチャートでユーザー変数を定義する必要があります。	トリガー、失敗時のトリガー、成功時のトリガーをサポートしているプロセス。

Campaign トリガー・ユーティリティの構文

```
[-p <port>] [-s <server_name>] [-v] [<campaign_code> | -n
"<flowchart_name>"] "<trigger1>" "<trigger2>"...
```

Campaign トリガー・ユーティリティのオプション

unica_actrg ユーティリティは、以下のオプションをサポートしています。

表 32. Campaign トリガー・ユーティリティのオプション

パラメーター	使用法
-p <port>	ユーティリティを実行するために使用するポート。
-s <server_name>	Campaign サーバーの名前。
-v	Campaign Trigger Utility のバージョンを報告します。
<campaign_code>	実行するすべてのフローチャートが含まれているキャンペーンの ID。このパラメーターを -n "<flowchart_name>" パラメーターと一緒に使用することはできません。

表 32. Campaign トリガー・ユーティリティのオプション (続き)

パラメーター	使用法
-n "<flowchart_name>"	実行するフローチャートの名前。フローチャート名は必ずしも固有名ではないため、この名前を持つすべてのフローチャートがブロードキャスト・トリガーを受け取ります。このパラメーターを <campaign_code> パラメーターと一緒に使用することはできません。
"<trigger1>" "<trigger2>" ...	使用するトリガーの名前。トリガーは、少なくとも 1 つは指定しなければなりません。オプションで、複数のトリガーをスペースで区切って指定できます。

第 12 章 ログिंगの管理

Campaign では、次のような種類のログを使用できます。

- 『Campaign リスナー・ログ』
- 『Campaign Web アプリケーション・ログ』
- 138 ページの『Campaign Server Manager ログ』
- 138 ページの『Campaign セッション・ユーティリティー・ログ』
- 138 ページの『クリーンアップ・ユーティリティー・ログ』
- 138 ページの『フローチャート・ログ』
- 138 ページの『セッション・ログ』
- 139 ページの『Web 接続ログ』
- 139 ページの『Windows イベント・ログ』 (Campaign サーバーが Windows 上にインストールされている場合)
- 139 ページの『log4j ログ・ファイル』

Campaign リスナー・ログ

Campaign リスナー・ログ・ファイルには、Campaign リスナーによって生成されるイベントが含まれます。

このログは、*Campaign_home/logs* ディレクトリーにあるファイル *unica_aclsru.log* に含まれます。

システムのログिंग設定に応じて、Campaign リスナーの複数の履歴ログが *Campaign_home/logs* ディレクトリーに含まれることがあります。各ログは拡張番号で終わります (例えば *unica_aclsru.log.1*、*unica_aclsru.log.2* など)。

保持されるログの数と、各ログの最大サイズは、「アプリケーション」>「キャンペーン」> *unicaACListener* > *logMaxBackupIndex* および「アプリケーション」>「キャンペーン」> *unicaACListener* > *logMaxFileSize* プロパティの値にそれぞれ依存します。

Campaign Web アプリケーション・ログ

Campaign Web ログ・ファイルには、Campaign Web アプリケーションによって生成されるイベントが含まれます。

このログは、デフォルトでは *Campaign_home/logs* ディレクトリーにある *campaignweb.log* というファイルに含まれます。

システムのログिंग設定に応じて、Campaign Web アプリケーションの複数の履歴ログが *Campaign_home/log* ディレクトリーに含まれることがあります。各ログは拡張番号で終わります (例えば *campaignweb.log.1*、*campaignweb.log.2* など)。

(デフォルトでは *Campaign_home/conf* ディレクトリーにある)
campaign_log4j.properties ファイルの中で、Campaign Web アプリケーションの
ロギング・プロパティを構成できます。

Campaign Server Manager ログ

Campaign Server Manager ログ・ファイル (*unica_svradm.log*) は、*unica_svradm*
ユーティリティーの実行時にエラーが発生すると、生成されます。このログ・ファ
イルは、*Campaign_home/logs* ディレクトリーに配置されます。

Campaign セッション・ユーティリティー・ログ

Campaign セッション・ユーティリティー・ログ・ファイル (*unica_acsesutil.log*)
は、*unica_acsesutil* ユーティリティーの実行時にエラーが発生すると、生成され
ます。このログ・ファイルは、*Campaign_home/partitions/partition_name/logs*
ディレクトリーに配置されます。

クリーンアップ・ユーティリティー・ログ

クリーンアップ・ユーティリティー・ログ・ファイル (*unica_acclean.log*) は、
unica_acclean ユーティリティーの実行時にエラーが発生すると、生成されます。
このログ・ファイルは、*Campaign_home/partitions/partition_name/logs* ディレ
クトリーに配置されます。

フローチャート・ログ

それぞれのキャンペーン・フローチャートは、実行されるときにフローチャート固
有のロギング情報を生成します。

ログは *campaign_name_campaign_code_flowchart_name.log* という名前のファイ
ルに含まれます。デフォルトでは、このログ・ファイルは *Campaign_home/*
partitions/partition_name/logs ディレクトリーに入ります。ただし、フローチャー
トを編集するとき、「オプション」メニューをクリックして「ログ・パスの変更」
を選択することにより、ログの場所をカスタマイズできます。なお、Campaign のプ
ロパティで *AllowCustomLogPath* を有効にしない限り、「ログ・パスの変更」を
選択できないことに注意してください。

セッション・ログ

ユーザーがフローチャートを表示したとき、編集前に、そのフローチャートのセッ
ション情報のログが (*Campaign_home/partitions/partition_name/logs* ディレクト
リーにある) *ac_sess.log* ファイルに書き込まれます。

ac_sess.log ファイルには、フローチャートが開いたときのサーバー接続について
の情報が記録されます。

Web 接続ログ

ユーザーが Campaign にログインしたとき、(*Campaign_home*/partitions/*partition_name*/logs ディレクトリーにある) *ac_web.log* ファイルの中に情報がログとして記録されます。

ac_web.log ファイルには、Campaign システム・データベースへのユーザー接続についての情報が記録されます。

Windows イベント・ログ

Campaign が Windows コンピューター上にインストールされている場合、オプションで、Campaign リスナーおよびフローチャートのイベントを Windows イベント・ログに記録することができます。Windows イベント・ログが使用されるかどうかは、以下の構成プロパティーによって決まります。

- Applications > Campaign > unicaACListener > enableWindows-EventLogging (Campaignリスナー用)。
- Applications > Campaign > partitions > *partition_name* > server > logging > enableWindowsEventLogging (そのパーティション内のフローチャート用)。

log4j ログ・ファイル

Campaign Web アプリケーションは、構成、デバッグ、およびエラー情報をログに記録するために Apache log4j ユーティリティーを使用します。

ログを操作する

ログを操作する方法については、以下を参照してください。

- 『Campaign リスナーのロギング・タスク』
- 140 ページの『Campaign Web アプリケーションのロギング・タスク』
- 140 ページの『フローチャートのロギング・タスク』
- 143 ページの『Windows イベント・ロギング・タスク』

Campaign リスナーのロギング・タスク

Campaign リスナーのロギング・タスクには、以下のものが含まれます。

- 『Campaign リスナー・ロギングを構成するには』
- 140 ページの『Campaign リスナー・ログ・ファイルを表示するには』

Campaign リスナー・ロギングを構成するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

構成ページで、「キャンペーン」>「unicaACListener」カテゴリの以下のプロパティーを必要に応じて設定します。プロパティーについて詳しくは、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

- enableWindowsEventLogging

- loggingLevels
- logMaxBackupIndex
- logMaxFileSize
- windowsEventLoggingLevels

Campaign リスナー・ログ・ファイルを表示するには

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが開き、様々な管理タスクへのリンクが表示されます。

2. 「システム・ログの表示」をクリックします。

現在の Campaign リスナー・ログが新しいブラウザー・ウィンドウで開きます。ログ・ファイルを開いた後で発生したイベントは、リストに含まれません。

Campaign Web アプリケーションのロギング・タスク

Campaign Web アプリケーションのロギング・タスクには、以下のものが含まれます。

- 『Campaign Web アプリケーション・ロギングを構成するには』
- 『Campaign Web アプリケーション・ログのファイル名と場所を変更するには』

Campaign Web アプリケーション・ロギングを構成するには

1. 「アプリケーション」>「キャンペーン」>「ロギング (logging)」>「プロパティ」で指定されたファイルを見つけます。デフォルトでは、このファイルは *Campaign_home/conf/campaign_log4j.properties* です。
2. このファイル内のコメントに従って、Web アプリケーション・ロギング設定を変更します。
3. ファイルを保存して、Web アプリケーションを再始動します。

Campaign Web アプリケーション・ログのファイル名と場所を変更するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

構成ページで、「キャンペーン」>「ロギング (logging)」カテゴリの log4jConfig プロパティの値を変更し、Campaign Web アプリケーション・ログのプロパティを定義するために使用されるファイルの場所と名前を指定します。

フローチャートのロギング・タスク

フローチャートのロギング・タスクには、以下のものが含まれます。

- 141 ページの『フローチャート・ロギングを構成するには』
- 141 ページの『フローチャート・ロギングを有効または無効にするには』
- 141 ページの『フローチャート・ロギング・レベルを変更するには』
- 142 ページの『フローチャート・ログ・ファイルの場所をカスタマイズするには』

- 142 ページの『フローチャート・ログ・ファイルを表示するには』
- 142 ページの『フローチャート・ログ・ファイルを消去するには』

フローチャート・ロギングを構成するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

構成ページで、Campaign > partitions > partition[n] > server > logging カテゴリの以下のプロパティを必要に応じて変更します。プロパティについて詳しくは、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform* 管理者ガイド」を参照してください。

- allowCustomLogPath
- enableLogging
- enableWindowsEventLogging
- keepFlowchartLogOpen
- logFileBufferSize
- loggingCategories
- loggingLevels
- logMaxBackupIndex
- logMaxFileSize
- logProcessId
- windowsEventLoggingCategories
- windowsEventLoggingLevels

フローチャート・ロギングを有効または無効にするには

1. フローチャートの編集時に、「オプション」アイコンをクリックします。
2. 「オプション」メニューで、「ログを有効にする」コマンドを次のように確認します。
 - このコマンドにチェック・マークが表示されている場合、ロギングは有効です。
 - チェック・マークが表示されない場合、ロギングは無効になっています。
3. 「ログを有効にする」を選択すると、現在の設定が切り替わります。

フローチャート・ロギング・レベルを変更するには

1. フローチャートの編集時に、「オプション」>「ログ・オプション」を選択します。

「ログ・オプション」ウィンドウが開きます。
2. ログに記録するメッセージ・タイプを確認します。以下の 4 つのロギング・レベルがあり、次第に冗長度が高くなります。
 - エラー - フローチャートのエラー。
 - 警告 - フローチャートの警告。
 - 通知 - 通知メッセージ。

- **デバッグ** - 詳細なデバッグ情報。

通知メッセージやデバッグ・メッセージをログに記録した場合、ログ・ファイルが急速に大きくなる可能性があるため、デバッグする場合を除いてこれらのオプションをクリアするのが適切でしょう。

3. ログに記録するメッセージ・カテゴリを確認します。
4. 「**ログ・エントリーにプロセス ID を含める**」にチェック・マークを付けると、各エントリーにプロセス ID が含まれます。
5. 「**OK**」をクリックして、設定を保存します。

フローチャート・ログ・ファイルの場所をカスタマイズするには

ログ・ファイルの場所をカスタマイズするには、その前に、「キャンペーン」>「パーティション」>「パーティション[n]」>「サーバー」>「ロギング (logging)」カテゴリで Campaign サーバーの構成プロパティ AllowCustomLogPath を有効にしておく必要があります。構成プロパティの設定について、詳しくは「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルトでは、それぞれのフローチャート・ログ・ファイルは Campaign_home/partitions/partition_name/logs ディレクトリーに保管されます。ただし、フローチャートを編集するとき、フローチャートのログ・ファイルを別の場所に保管するよう指定できます。

1. フローチャートの編集時に、「**ツール**」>「**ログ・パスの変更**」を選択します。

「ログ・パスの選択」ウィンドウが表示されます。

「**ログ・パスの変更**」オプションが使用可能でない場合、サーバーの構成プロパティ AllowCustomLogPath を有効にして、フローチャートの編集で操作を再試行してください。

2. 「**ディレクトリー**」リストを使用して、フローチャート・ログ・ファイルの保管場所となるディレクトリーを見つけます。 いずれかのディレクトリー名をダブルクリックすると、そこに含まれるディレクトリーが表示されます。
3. オプションで、「**ディレクトリー**」リストの上にある「**新規フォルダー**」アイコンをクリックして、新しいディレクトリーを Campaign サーバー上に作成することもできます。
4. リストでディレクトリーを選択した後、「**開く**」をクリックすると選択項目が受け入れられます。「ログ・パスの選択」ウィンドウが自動的に閉じます。

これで、指定したディレクトリーにフローチャートのログ・ファイルが保管されるようになります。

フローチャート・ログ・ファイルを表示するには

フローチャートの編集時に、「**オプション**」>「**ログの表示**」を選択します。

フローチャート・ログ・ファイルが新しいブラウザー・ウィンドウで開きます。

フローチャート・ログ・ファイルを消去するには

フローチャートの編集時に、「**オプション**」>「**ログの消去**」を選択します。

ログ・ファイルの内容が削除されます。

Windows イベント・ロギング・タスク

Windows イベント・ロギング・タスクには、以下のものが含まれます。

- 『Campaign リスナー用の Windows イベント・ロギングを構成するには』
- 『フローチャート用の Windows イベント・ロギングを構成するには』

Campaign リスナー用の Windows イベント・ロギングを構成するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

構成ページで、「アプリケーション」>「キャンペーン」>「unicaACListener」カテゴリの `enableWindowsEventLogging` および `windowsEventLoggingLevels` プロパティを必要に応じて設定します。プロパティについて詳しくは、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

フローチャート用の Windows イベント・ロギングを構成するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

構成ページで、Campaign > partitions > partition[n] > server > logging カテゴリの以下のプロパティを必要に応じて変更します。

- `enableWindowsEventLogging`
- `windowsEventLoggingCategories`
- `windowsEventLoggingLevels`

プロパティについて詳しくは、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

log4j ロギング・タスク

Campaign の log4j ログ機能を使用すると、以下のタスクを実行できます。

- 『log4j のロギングを構成するには』
- 144 ページの『`campaign_log4j.properties` ファイルの場所を変更するには』

log4j のロギングを構成するには

IBM Unica Campaign 用の log4j のロギングを構成するには、Campaign インストール済み環境の `conf` ディレクトリーにある `campaign_log4j.properties` ファイル内でプロパティ値を設定します。例えばログ・ファイルの場所を変更するには、`campaign_log4j.properties` ファイルを開いて、`log4j.appender.FILE.File` プロパティの値を、ログ・ファイルの書き込み先となる完全修飾パスに変更します。

log4j プロパティ設定の変更については、以下の情報源を参照してください。

- `campaign_log4j.properties` ファイル内のコメント。
- 以下の Apache Web サイトにある log4j 資料:

<http://logging.apache.org/log4j/1.2/manual.html>

注: campaign_log4j.properties ファイル内の値を変更した後、IBM Unica Campaign Web アプリケーションを再始動する必要があります。

campaign_log4j.properties ファイルの場所を変更するには

構成ページで、「キャンペーン」>「ロギング (logging)」カテゴリの log4jConfig プロパティの値を適切な場所に変更します。

第 13 章 固有コードの管理

Campaign の各キャンペーン、オファー、処理、およびセルには、コード・ジェネレーターによって生成される識別コードがあり、指定された形式に準拠します。

Campaign 管理者は、以下の操作を実行できます。

- 各タイプのコードを生成する方法やコードの有効な形式を制御するために構成パラメーターを設定します。
- デフォルトのジェネレーターが必要を満たさない場合は、カスタム・コード・ジェネレーターを作成し、セットアップします。

キャンペーン・コードについて

キャンペーン・コードとは、キャンペーンのグローバル・ユニーク ID のことです。各キャンペーンにコードが必要であり、同じ Campaign パーティション内で 2 つのキャンペーン・コードが同じであってはなりません。

注: キャンペーン・コードは各パーティション内で固有でなければなりませんが、キャンペーン名は固有である必要はありません。

ユーザーがキャンペーンを作成すると、コード・ジェネレーターによって「**キャンペーン・コード**」フィールドに固有値が自動的に取り込まれます。

ユーザーは「**コードの再生成**」をクリックしてコード・ジェネレーターによって新規 ID が提供されるようにすることも、コードを手動で入力することもできます。ユーザーがコードを手動で入力する場合は、指定された形式の固有のコードでなければなりません。

オファー・コードについて

オファー・コードとは、オファーのグローバル・ユニーク ID のことです。

Campaign の各オファーにはコードが必要であり、同じ Campaign パーティション内で 2 つのオファー・コードが同じであるべきではありません。

オファー・コードで許容される構成は 1 文字から 5 文字です。これはオファー・テンプレートを作成するときに指定します。

ユーザーがオファーを作成すると、コード・ジェネレーターによって「**オファー・コード**」のフィールドに固有値が自動的に取り込まれます。

ユーザーは「**コードの再生成**」をクリックしてコード・ジェネレーターによって新規 ID が提供されるようにすることも、コードを手動で入力することもできます。オファー・コードをオーバーライドするには、ユーザーに適切な権限が必要です。

重要: ユーザーがどのオファー・コードもオーバーライドしない場合のみ、自動的に生成されるセル・コードのグローバルな固有性は保証されます。

セル・コードについて

セル・コードは、フローチャートまたはターゲット・セル・スプレッドシート内の各セルの ID です。

新規出力セルを作成するフローチャート・プロセス (例えば、選択、マージ、セグメント、サンプル、オーディエンス、抽出などのプロセス) では、プロセスの出力のセル・コードが「全般」タブで構成されます。

デフォルトでは、セル・コードは自動的に生成されます。ユーザーは「自動生成」チェック・ボックスをクリアし、有効な形式でコードを入力することにより、生成されたセル・コードを手動でオーバーライドできます。

セル・コードがフローチャート内で固有でなければならないかどうかは、`AllowDuplicateCellCodes` 構成パラメーターの設定によって異なります (『コード生成の参照』で説明されています)。 `AllowDuplicateCellCodes` の値が `FALSE` の場合、セル・コードはフローチャート内で固有でなければなりません。異なるフローチャートおよびキャンペーンであれば、同じセル・コードを使用できます。 `AllowDuplicateCellCodes` の値が `TRUE` の場合、単一フローチャート内のセル・コードは固有である必要はありません。

複製セル・コードが許可されていない場合にユーザーが同じフローチャートのどこかで既に使用されているセル・コードを入力する場合、エラーは即時生成されません。ただし、複製セル・コードが許可されていない場合、ユーザーはフローチャート検証ツールを使用して、フローチャートを検証して複製セル・コードを検出することができます。フローチャートの検証について詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」のフローチャートの検証に関するセクションを参照してください。

重要: ユーザーがどのセル・コードもオーバーライドしない場合のみ、自動的に生成されるセル・コードの固有性は保証されます。セルの処理について詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

処理コードについて

特定の時点で使用されるセルとオファーの固有の組み合わせのことを、*Campaign* では処理と呼びます。各処理は、処理コードによって一意的に識別されます。

処理について詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

フローチャートが実行されるたびに、処理と処理コードが個別に生成されます。ユーザーが 1 月 1 日にフローチャートを実行し、1 月 15 日に再び実行する場合、2 つの別個の処理が作成されます。これにより、オファーに対するレスポンスを可能な限り詳細にトラッキングすることができます。

注: 処理コードは、生成後にオーバーライドすることができません。

コード形式

各タイプの生成コードのデフォルトおよび有効な形式では、文字タイプを表す一連の文字が使用されます。コード形式を制御するために使用できる文字を以下の表にリストします。

表 33. 制御コード形式

文字	扱い
A-Z、任意の記号、 b、d-m、o-w、y、z (つまり c、n、x を除く b-z)	生成コードの定数値
a	任意の大文字 A-Z
c または x	任意の大文字 A-Z、または任意の数値 0-9
x	任意の大文字 A-Z、任意の数値 0-9。ただし、ユーザーは生成文字を任意の ASCII 文字で置き換えることができます。 可変長コードを指定するには、コード形式の末尾に 1 つ以上の "x" 文字を置き、allowVariableLengthCodes プロパティを "TRUE" に設定する必要があります。
n	任意の数値 0-9

例

表 34. 制御コード形式の例

形式定義	生成コードの例
CAMP_aaannn	CAMP_DWP839 (CAMP_、ランダムに生成された 3 つの大文字、ランダムに生成された 3 桁の数値の順)

デフォルトのコード形式

Campaign に組み込まれているコード・ジェネレーターによって生成されるキャンペーン、セル、オファー、および処理の各コードのデフォルトの形式を以下の表に示します。

表 35. デフォルトのコード形式

コード・タイプ	デフォルト値	定義される場所
キャンペーン	Cnnnnnnnnn	Marketing Platform の「構成」ページの campCodeFormat パラメーター
セル	Annnnnnnnn	Marketing Platform の「構成」ページの cellCodeFormat パラメーター
オファー	nnnnnnnnnn	Campaign で定義される各オファー・テンプレート内
処理	nnnnnnnnnn	Campaign で定義される各オファー・テンプレート内

コード形式の要件

キャンペーン、セル、処理、オファーの固有のコードは、32 文字以下でなければなりません。これは、デフォルトのジェネレーターによって生成されるコードとカスタム・コード・ジェネレーターによって生成されるコードの両方に当てはまります。また、手動で入力するコードにも当てはまります。

オファー・コードではスペース文字を使用できません。

デフォルトのコード形式の変更について

Campaign に組み込まれているコード・ジェネレーターによって生成されるコードのデフォルトの形式はオーバーライドすることができます。

デフォルトのコード形式を変更する前に、Campaign にあるコード形式の制限を思いに留めておいてください。

キャンペーン・コード形式を変更するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

キャンペーン・コード形式を変更すると、新規形式がすべての新規キャンペーンに適用されます。既存のキャンペーンは引き続き以前の形式の現行コードを使用します。ただし、ユーザーがキャンペーン・コードを編集する場合、新規コードはキャンペーン・コードの現行の形式に従う必要があります。

必要に応じて、「構成」ページの Campaign > partitions > partition[n] > server > systemCodes カテゴリの campCodeFormat プロパティを設定します。147 ページの『コード形式』で説明されている形式に関するガイドラインに従ってください。

セル・コード形式を変更するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

重要: ユーザーがフローチャートを作成した後は、セル・コード形式を変更しないでください。それを行うと、既存のフローチャートが無効になります。

必要に応じて、「構成」ページの Campaign > partitions > partition[n] > server > systemCodes カテゴリの cellCodeFormat プロパティを設定します。147 ページの『コード形式』で説明されている形式に関するガイドラインに従ってください。

既存のオファー・テンプレートのオファーまたは処理コード形式を変更するには

作成するオファー・テンプレートごとに、オファーおよび処理コード形式を定義します。オファーまたは処理コード形式は、それぞれのオファー・テンプレートを作成する時点で設定します。テンプレートを編集することによって、既存のオファ

ー・テンプレートのオファーおよび処理コード形式を変更することもできます。ただし、オファーを作成するためにテンプレートがまだ使用されていない場合に限り
ます。

注: 既存のオファー・テンプレートのオファーおよび処理コード形式の変更は、オ
ファーを作成するためにテンプレートがまだ使用されていない場合のみ行えます。

1. Campaign にログインし、「管理」をクリックします。
2. 「キャンペーン設定」ページで、「オファー・テンプレートの定義」をクリック
します。
3. 変更するオファーまたは処理コード形式が含まれるオファー・テンプレートのリ
ンクをクリックします。
4. 「オファー・テンプレートの定義」ページで、「オファー・コード形式」または
「処理コード形式」を必要に応じて変更します。その際、『コード形式の要件』
にある形式要件に従います。

重要: オファー・コード形式ではスペース文字を使用できません。

5. 「完了」をクリックします。

コード構成プロパティについて

Campaign でキャンペーン・コードやセル・コード、コード・ジェネレーター、およ
びオファー・コードの特定の属性を構成するためのプロパティはすべて、
Marketing Platform の「構成」ページで設定されます。

オファー・コード形式は、パラメーターを使用して構成されるのではなく、オファ
ー・テンプレートで定義されます。

コード・ジェネレーターについて

コード・ジェネレーターとは、Campaign で必要な形式のキャンペーン、セル、オファ
ー、および処理などの各コードを自動生成するために使用されるプログラムのこ
とです。組み込みコード・ジェネレーターに加えて、Campaign は、ユーザーが独自
に開発するカスタム・コード・ジェネレーターもサポートしています。

Campaign のデフォルトのコード・ジェネレーター

Campaign には、各タイプのコードに対して指定されているデフォルトの形式と一致
するキャンペーン、セル、オファー、および処理の各コードを自動的に生成するコ
ード・ジェネレーターが備えられています。各タイプのコードの組み込みコード・
ジェネレーターの名前とその場所を以下の表に示します。

表 36. デフォルトのコード・ジェネレーター

コード・タイプ	デフォルトのジェネレーター	場所
キャンペーン	uaccampcodegen	<install_dir>/Campaign/bin
セル	uaccampcodegen	<install_dir>/Campaign/bin
オファー	uacoffercodegen	<install_dir>/Campaign/bin
処理	uaccampcodegen	<install_dir>/Campaign/bin

<install_dir> を、Campaign がインストールされている実際のディレクトリーに置き換えます。

Campaign に組み込まれているコード・ジェネレーターでは貴社の必要が満たされない場合には、カスタム・コード・ジェネレーターを開発して使用することができます。

カスタム・コード・ジェネレーターについて

Campaign のデフォルトのコード・ジェネレーターでは必要が満たされない場合、独自のコード・ジェネレーターを開発して使用することができます。カスタム・コード・ジェネレーターとは、固有のキャンペーン、オファー、またはセルのコード (あるいは 3 つすべて) を出力するように開発するプログラムのことです。カスタム・コード・ジェネレーターは、Campaign Web アプリケーションが配置されているオペレーティング・システム用の実行可能ファイルにコンパイルできるプログラミング言語であれば、どの言語でも開発できます。

重要: Campaign Web および分析サーバーが別のマシンに配置される場合は、コード・ジェネレーターをすべてのマシンに配置してください。

カスタム・コード・ジェネレーターを作成する最も一般的な理由は、所属する会社のビジネスの必要を満たすコードを生成することです。例えば、キャンペーン所有者のイニシャルと現在日付が含まれるキャンペーン・コードが作成されるようにカスタム・コード・ジェネレーターをセットアップすることもできます。

カスタム・コード・ジェネレーターの要件

カスタム・コード・ジェネレーターは、以下の要件を満たしている必要があります。

- 実行可能ファイル名は、スペースを含まない単一の語でなければなりません。
- 生成される固有コードは、指定されているコード形式と一致している必要があります。これは、カスタム・コード・ジェネレーターへの入力として渡されます。
- カスタム・コード・ジェネレーターは、固有のコードまたはエラーを標準出力ストリーム (stdout) に出力する必要があります。
- カスタム・キャンペーンおよびセル・コード・ジェネレーターは /Campaign/bin ディレクトリーに置く必要があります。カスタム・オファー・コード・ジェネレーターは、任意の場所に置くことができます。これは、Marketing Platform の「構成」ページのオファー・コード・ジェネレーターの構成プロパティーで指定する必要があります。

カスタム・コード・ジェネレーターを使用するための Campaign の構成について

Marketing Platform の「構成」ページのプロパティーを使用して、キャンペーン・コードおよびセル・コードの形式およびジェネレーターを指定します。

注: このタスクを完了するには、IBM Unica Marketing で適切な権限が必要です。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

作成するオファー・テンプレートごとに、オファーおよび処理コード・ジェネレーターを指定します。テンプレートに基づいて作成される各オファーは、固有のオファー・コードおよび処理コードを生成するために指定するプログラムを使用します。

キャンペーン・コード・ジェネレーターを指定するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

必要に応じて、「構成」ページの「キャンペーン」>「パーティション」>「パーティション[n]」>「サーバー」>「systemCodes」カテゴリの `campCodeGenProgFile` プロパティの値をカスタム・キャンペーン・コード・ジェネレーターの実行ファイル名に設定します。

セル・コード・ジェネレーターを指定するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

必要に応じて、「構成」ページの「キャンペーン」>「パーティション」>「パーティション[n]」>「サーバー」>「systemCodes」カテゴリの `cellCodeGenProgFile` プロパティの値をカスタム・キャンペーン・コード・ジェネレーターの実行可能ファイル名に設定します。

オファー・コード・ジェネレーターを指定するには

1. Campaign にログインし、「管理」をクリックします。
2. 「キャンペーン設定」ページで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。
3. 指定するオファー・コード・ジェネレーターが含まれるオファー・テンプレートのリンクをクリックします。
4. 新しいオファー・テンプレートの定義のページの「手順 1」で、カスタム・オファー・コード・ジェネレーターの実行可能ファイル名を「オファー・コード・ジェネレーター」フィールドの値として入力します。
5. 「完了」をクリックします。

処理コード・ジェネレーターを指定するには

1. Campaign にログインし、「管理」をクリックします。
2. 「キャンペーン設定」ページで、「オファー・テンプレートの定義」をクリックします。
3. 指定するオファー・コード・ジェネレーターが含まれるオファー・テンプレートのリンクをクリックします。
4. 「手順 1: オファー・テンプレートの定義 (Step 1 offer template definition)」ページで、カスタム処理コード・ジェネレーターの実行可能ファイル名を「処理コード・ジェネレーター」フィールドの値として入力します。このフィールドを空白のままにする場合、デフォルトの処理コード・ジェネレーターが使用されます。
5. 「完了」をクリックします。

カスタム・コード・ジェネレーターの作成について

カスタム・コード・ジェネレーターは、Campaign を実行しているオペレーティング・システム用の実行可能ファイルにコンパイルできる言語であれば、どの言語でも作成できます。

固有コードの出力について

カスタム・コード・ジェネレーターは、32 文字以下の固有のコードを標準出力ストリーム (stdout) に出力する必要があります。

重要: Campaign は、オファー・コードおよびセル・コードを保存する際に、その固有性をチェックしません。使用するカスタム・コード・ジェネレーターがグローバル固有コードを生成できるようにする必要があります (ユーザーが生成コードをオーバーライドしないことを前提としています)。

出力行は、次の形式でなければなりません。

- 1 で始まる。
- その後に 1 つ以上の空白スペースが続く。
- その後に二重引用符で囲まれた固有のコードが続く。

例

以下の例は、正しいコード出力形式を示しています。

```
1 "unique_code"
```

エラーの出力について

カスタム・コード・ジェネレーターは、正しい形式の固有のコードを正しく生成できない場合に、標準出力ストリーム (stdout) にエラーを出力する必要があります。

エラーの出力行は、次の形式でなければなりません。

- 0 で始まる。
- その後に 1 つ以上の空白スペースが続く。
- その後に二重引用符で囲まれたエラー・メッセージが続く。

例

以下の例は、正しいコード出力形式を示しています。

```
0 "error_message"
```

注: カスタム・コード・ジェネレーターによって生成されるエラー・メッセージは、ユーザーに表示され、ログに書き込まれます。

カスタム・コード・ジェネレーターの配置について

キャンペーン・コードまたはセル・コードを生成するアプリケーションを Campaign インストールの bin ディレクトリーに配置する必要があります。

カスタム・オファー・コード・ジェネレーターを任意の場所に配置した後、IBM Unica Marketing を使用して場所を指定することができます。

カスタム・オファー・コード・ジェネレーターの場所を指定するには

注: このタスクを完了するには、Marketing Platform を使用するための適切な権限が必要です。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

「構成」ページで、「キャンペーン」>「パーティション」>「パーティション_N」>「offerCodeGenerator」カテゴリの offerCodeGeneratorConfigString プロパティの値をカスタム・オファー・コード・ジェネレーターの実行ファイルの場所に変更します。この場所は、Campaign Web アプリケーション・ホームに対する相対位置です。

コード生成の参照

このセクションには、以下の参照トピックが含まれています。

- 『コード生成に関連したプロパティ』
- 154 ページの『デフォルトのキャンペーンおよびセル・コード・ジェネレーターのパラメーター』
- 155 ページの『デフォルトのオファーのコード・ジェネレーターのパラメーター』
- 155 ページの『カスタム・コード・ジェネレーターのパラメーター』

コード生成に関連したプロパティ

コード形式およびジェネレーターをカスタマイズするには、以下のプロパティを使用します。これらのプロパティへのアクセスとその変更をするには、Marketing Platform の「構成」ページを使用します。これらのプロパティについて詳しくは、コンテキスト・ヘルプまたは「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

表 37. コード形式およびジェネレーターをカスタマイズするためのプロパティ

プロパティ	パス
allowVariableLengthCodes	Campaign> partitions> partition[n] > server>systemCodes>
campCodeFormat	Campaign> partitions> partition[n] > server>systemCodes>
campCodeGenProgFile	Campaign> partitions> partition[n] > server>systemCodes>
cellCodeFormat	Campaign> partitions> partition[n] > server>systemCodes>
cellCodeGenProgFile	Campaign> partitions> partition[n] > server>systemCodes>
displayOfferCodes	Campaign> partitions> partition[n] > server>systemCodes>

表 37. コード形式およびジェネレーターをカスタマイズするためのプロパティ (続き)

プロパティ	パス
offerCodeDelimiter	Campaign> partitions> <i>partition[n]</i> > server>systemCodes>
allowDuplicateCell codes	Campaign> partitions> <i>partition[n]</i> > server>flowchartConfig>
defaultGenerator	Campaign> partitions> <i>partition[n]</i> > offerCodeGenerator>
offerCodeGenerator Class	Campaign> partitions> <i>partition[n]</i> > offerCodeGenerator>
offerCodeGenerator Classpath	Campaign> partitions> <i>partition[n]</i> > offerCodeGenerator>
offerCodeGenerator ConfigString	Campaign> partitions> <i>partition[n]</i> > offerCodeGenerator>

デフォルトのキャンペーンおよびセル・コード・ジェネレーターのパラメーター

uaccampcodegen プログラムでは、以下のパラメーターがサポートされています。このプログラムは <Campaign_home>/bin ディレクトリーにあります (<Campaign_home> は Campaign インストール・ディレクトリーであり、C:\Unica\Campaign\bin または /Unica/Campaign/bin のようになります)。

表 38. デフォルトのキャンペーンおよびセル・コード・ジェネレーターのパラメーター

パラメーター	使用法
-c	セル名を渡します。
-d	日を渡します。1 桁または 2 桁の整数を受け入れることができます。値は 31 を超えてはなりません。
-f	コード形式を渡します。デフォルトの形式をオーバーライドするために使用されます。
-i	追加の整数を渡します。固有のコードを生成するために使用されます。
-m	月を渡します。1 から 12 までの、1 桁または 2 桁の整数を受け入れることができます。
-n	キャンペーン名を渡します。
-o	キャンペーン所有者を渡します。
-s	追加の文字列を渡します。固有のコードを生成するために使用されます。
-u	キャンペーン ID を渡します。システム生成 ID の代わりに使用します。
-v	最初の引数を標準出力ストリーム (STOUT) に出力します。
-y	年を渡します。4 桁の整数を受け入れます。

デフォルトのオファ어의コード・ジェネレーターのパラメーター

uacoffercodegen プログラムでは、以下のパラメーターがサポートされています。このプログラムは <Campaign_home>/bin ディレクトリーにあります (ここで、<Campaign_home> は Campaign インストール・ディレクトリーです)。

表 39. デフォルトのオファ어・コード・ジェネレーターのパラメーター

パラメーター	使用法
-a	オファ어・コード部分の数値 (1 から 5) を渡します。
-d	日を渡します。1 桁または 2 桁の整数を受け入れることができます。値は 31 を超えてはなりません。
-f	コード形式を渡します。デフォルトの形式をオーバーライドするために使用されます。
-i	追加の整数を渡します。固有のコードを生成するために使用されます。
-m	月を渡します。1 から 12 までの、1 桁または 2 桁の整数を受け入れることができます。
-n	キャンペーン名を渡します。
-s	追加の文字列を渡します。固有のコードを生成するために使用されます。
-u	キャンペーン ID を渡します。システム生成 ID の代わりに使用します。
-v	最初の引数を標準出力ストリーム (STOUT) に出力します。
-y	年を渡します。4 桁の整数を受け入れます。

例

```
uacoffercodegen -f "nnnnnnnnnn nnnnnnnnnn nnnnnnnnnn nnnnnnnnnn nnnnnnnnnn"
-a 5 -u 3 -y 2008 -m 1 -d 14
```

カスタム・コード・ジェネレーターのパラメーター

Campaign は、Campaign で使用するために構成するカスタム・コード・ジェネレーターへの入力としてカスタム・パラメーターをサポートしています。

これらのパラメーターに対する検証は実行されませんが、次の制限が当てはまります。

- デフォルトの Campaign のコード・ジェネレーターのフラグを、カスタム・コード・ジェネレーターのパラメーターのフラグとして再利用することはできません。
- カスタム・コード・ジェネレーターの実行可能ファイル名にスペースを使用しないでください。
- パラメーターまたは実行可能ファイル名の前後に二重引用符を使用しないでください。
- コード・ジェネレーターの実行ファイル名の間、およびパラメーターの間のスペースは区切り文字と見なされます。最初のスペースは実行可能ファイル名の末尾のマーキングとして解釈され、次に見つかるスペースは複数のパラメーターの区切り文字として解釈されます。
- 構成マネージャーのコード・ジェネレーター・フィールドとオファ어・テンプレート・インターフェースは、200 文字に制限されています。

第 14 章 拡張設定の管理

拡張設定を使用して、Campaign のいくつかの設定およびサーバー最適化機能を管理します。

拡張設定へのアクセス方法

1. フローチャートを「編集」モードで開きます。
2. 「システム管理」アイコンをクリックして、「**拡張設定**」を選択します。

「拡張設定」ウィンドウが開きます。

「拡張設定」ウィンドウには、以下の 3 つのタブがあります。

- 全般
- サーバー最適化
- テスト実行設定

「全般」設定について

「全般」タブ設定により、以下を指定できます。

- この保存フローチャートの実行結果を保存するかどうか。
- フローチャート処理を「データベース内」と Campaign サーバー上のどちらで行うか。
- このフローチャートでのグローバル抑制を無効にするかどうか。
- Y2K (2000 年) しきい値。
- Campaign がこのフローチャートを自動的に保存するかどうか。
- Campaign がこのフローチャートの実行中にチェックポイントを使用するかどうか。
- Campaign が許容するデータ・エラーの最大数。
- このフローチャートの実行がエラーの結果になった場合に送信されるトリガー。
- このフローチャートの実行が正常に完了した場合に送信されるトリガー。

フローチャート実行結果を保存する

フローチャートの実行により出力されたセルが実行の終了時に保存されるように指定するには、このチェック・ボックスを選択します。結果を保存した場合、次にフローチャートを開くときに、実行の終了したプロセスの結果のプロファイルを作成したり、フローチャートの中間からプロセスまたはブランチの実行を開始したりできます。結果を保存しない場合、フローチャート実行の結果を表示するたびに、フローチャート全体を最初から再実行する必要があります。

デフォルトでは、このチェック・ボックスは選択されています。

フローチャート実行中にデータベース内最適化を使用する

フローチャートを実行する際に、Campaign が IBM Unica サーバー上ではなく、可能な限りデータベース内で作動するように指定するには、このチェック・ボックスを選択します。そのようにすると、各プロセスの実行後にデータベースから IBM Unica サーバーにデータを引き出す必要がないので、パフォーマンスを改善できます。デフォルトでは、このチェック・ボックスはクリアされています。

注: データベース内処理は、一部のデータベースではサポートされません。
Campaign 管理者は、このオプションがご使用のデータ・ソースで使用可能かどうかを確認することができます。

データベース内最適化について詳しくは、「*Campaign ユーザーズ・ガイド*」を参照してください。

このフローチャートのグローバル抑制を無効にする

グローバル抑制では、Campaign でフローチャート内のすべてのセルから自動的に除外される ID のリスト (オーディエンス・レベル別) を指定します。該当する権限がある場合は、このフローチャートのグローバル抑制を無効にすることができます。

注: 適切な権限がない場合は、設定を変更できないので、既存の設定でフローチャートを実行する必要があります。デフォルトでは、新しいフローチャートはこの設定がクリアされた状態で作成されるので、グローバル抑制が適用されます。

2000 年 (Y2K) しきい値

2 桁だけで表記された年を Campaign で解釈する方法は、「**2000 年 (Y2K) しきい値**」の値で決まります。

注: 混乱を避けるために、データベースに保管する日付には 4 桁の年を使用するように強くお勧めします。

有効な値は 0 から 100 までです。100 よりも高い値は 100 に設定されます。
「2000 年 (Y2K) しきい値」のデフォルト設定は 20 です。

Campaign はこのしきい値を使用して年の範囲を計算します。下限はしきい値 + 1900、上限はそれに 99 を加えた年となります。

例えば、「2000 年 (Y2K) しきい値」を 50 に設定した場合、年の範囲は、下限が $1900 + 50 = 1950$ で、上限がそれに 99 を加えた年である 2049 となります。

このとき、しきい値 (この例では 50) 以上の 2 桁の年を入力した場合、日付は 1900 年代のものとして解釈されます。しきい値より小さい 2 桁の年を入力した場合、日付は 2000 年代のものとして解釈されます。

「2000 年 (Y2K) しきい値」を最大値の 100 に設定した場合、年の範囲は $1900 + 100 = 2000$ から 2099 までになります。この場合、2 桁の年はすべて、2000 年代のものとして解釈されます。

このしきい値は、必要に応じて変更できます。

自動保存

自動保存機能を設定することにより、リカバリーの目的で定期的 (5 分ごとなど) に作業を自動保存できます。フローチャートの編集中に Campaign サーバーが終了した場合、自動保存を有効にしていれば、フローチャートを再び開くときに、最後に自動保存されたバージョンが表示されます。

注: この機能が作動するためには、事前に現行のフローチャートを (ファイル名を指定して) 保存しておく必要があります。

Campaign は自動保存ファイルを一時ディレクトリーに保管するので、元のフローチャート・ファイルは変更されません。そのため、リカバリーを行わない状態 (フローチャートを保存せずに手動でフローチャートの「編集」モードを終了した場合など) では、自動保存バージョンは取得されません。この状態のときは、保存せずに手動で終了したフローチャートを再び開くと、最後に手動で保存したバージョンが表示されます。

選択されたプロセスの実行中に自動保存が発生する場合でも、一時停止状態のフローチャートは自動保存で保存されません。

自動保存のデフォルト設定は、「しない」です。

チェックポイント

チェックポイント機能には、リカバリーの目的で、実行中のフローチャートの「スナップショット」を取得する機能があります。チェックポイントの「保存」には、「ファイル」>「保存」を選択した場合と同じ効果があり、サーバーが停止またはダウンした場合にフローチャートを最新のチェックポイント保存の状態にリカバリーできるようにします。

チェックポイントの頻度間隔を設定すると、フローチャートを実行するサーバーのタイマーがその設定に従って制御されます。チェックポイントの保存は指定された間隔で行われます。

フローチャートの実行中、および「フローチャート」でブランチを実行するとき、チェックポイントはアクティブになります。実行中のフローチャートが保存されるとき、Campaign は「一時停止」モードでそれを保存します。フローチャートを開くときは、そのフローチャートを停止または再開する必要があります。再開すると、現在実行中のプロセスは最初から再実行されます。

チェックポイントのデフォルト設定は、「しない」です。

許可されるデータ・エラーの最大数

Campaign がデータをファイルまたはマップされたテーブルにエクスポートするとき (「スナップショット」プロセスまたは「最適化」プロセスなどの場合)、フォーマット上のエラー (データがテーブルに収まらないなど) が検出されることが時々あります。「最大エラー許容数」オプションにより、Campaign は最初のエラーで失敗するのではなく、ファイルに対する作業を続行できます (エラー発生数が N より小さい場合)。

デフォルトのエラー数はゼロ (0) です。

注: エクスポートの問題をデバッグする場合、エラーをログ・ファイルに書き込むときには、この値をより大きく設定してください。

フローチャート実行エラーでトリガー送信

このオプションにより、フローチャートの実行中にキャンペーンによってエラーが検出されたときに実行される 1 つ以上のトリガーを、発信トリガーのリストから選択できます (赤の X により示されます)。このオプションを使用する最も一般的な例は、問題の発生を管理者に通知するために E メールをトリガーする場合です。失敗時のトリガーは、失敗したプロセス実行ごとに実行されます。

フローチャート成功でトリガー送信

このオプションにより、セッションが成功したときに実行される 1 つ以上のトリガーを、発信トリガーのリストから選択できます。このオプションを使用する最も一般的な例は、実行の成功を管理者に通知するために E メールをトリガーする場合です。成功時のトリガーは、フローチャート実行全体が正常に完了した場合にのみ実行されます。

「サーバー最適化」設定について

「サーバー最適化」タブを使用すると、Campaign 「仮想メモリ使用上限」を指定して、現在のフローチャートの一時テーブルの使用をオーバーライドできます。

Campaign による仮想メモリ使用量

「Campaign による仮想メモリ使用量」を使用すると、特定のフローチャートの実行に使用するシステム仮想メモリの最大メガバイト数を指定できます。この値を大きくするとパフォーマンスが向上し、この値を小さくすると単一のフローチャートによって使用されるリソースを制限することができます。

デフォルトの設定値は 32 MB ですが、サーバーの機能およびユーザーの必要に適合するようにこの設定を変更できます。

注: $(80\% \times \text{使用可能メモリ}) / (\text{同時に実行される Campaign フローチャートの予想数})$ と等しくなるように値を設定します。

このフローチャートでは一時テーブルを使用しない

「このフローチャートでは一時テーブルを使用しない」チェック・ボックスにより、現在のフローチャートでは一時テーブルを使用しないように指定できます。これは、IBM Unica Marketing によって提供される中央構成リポジトリの `allow_temp_tables` プロパティをオーバーライドします。

「テスト実行設定」について

「テスト実行設定」タブを使用すると、テスト実行の結果をデータベースに書き込むかどうかを指定できます。

テスト実行の結果がデータベースに出力されるように指定するには、「出力を有効にする」チェック・ボックスを選択します。

一般に、Campaign はテスト実行の結果をデータベースに書き込みません。しかし必要であれば、結果が適切に記録されていることを確認できます。これを行うには、セル・サイズを制限してから「出力を有効にする」チェック・ボックスを選択し、限られた量のデータを使用してフローチャートの実行とその出力のテストをするようにします。

第 15 章 IBM Unica Campaign のユーティリティー

このセクションでは、Campaign に付属する管理ユーティリティーについて説明します。

Campaign リスナー (unica_aclsnr)

Campaign リスナー (unica_aclsnr) は、クライアントが Campaign Web アプリケーションに接続するために使用するユーティリティーです。IBM Unica Marketing にログインするユーザーが Campaign フィーチャーを使って作業を行えるようにするには、Campaign が配置され実行されている Web アプリケーション・サーバーに加えて、Campaign リスナーを事前に実行しておく必要があります。

リスナーは、ログインごと、およびアクティブ・フローチャートごとに別個の unica_acsvr プロセスを自動的に spawn します。例えば、あるユーザーがログインしてフローチャートをオープンすると、リスナーは unica_acsvr.exe の 2 つのインスタンスを spawn することになります。

リスナーの開始と停止は、手動でも自動でも可能です。

Campaign が実行されているシステムで Campaign サーバーが自動的に始動するようにするには、次のようにします。

- Campaign が Windows サーバーにインストールされている場合、リスナーをサービスとしてセットアップしてください。詳しくは、165 ページの『Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールする方法』を参照してください。
- Campaign が UNIX サーバーにインストールされている場合、リスナーを init プロセスの一部としてセットアップします。init プロセスのセットアップについて詳しくは、UNIX ディストリビューションの資料を参照してください。

Campaign リスナーの要件

Campaign リスナーを使用するには、Marketing Platform が実行されている必要があります。リスナーは config.xml ファイル内の configurationServerBaseURL プロパティの値を使って Marketing Platform に接続します。このファイルは、Campaign インストールの conf ディレクトリーにあります。通常、この値は http://hostname:7001/Unica です。Marketing Platform が実行されていない場合、Campaign リスナーを開始できません。

リスナーが正常に開始するためには Marketing Platform に依存するため、リスナーを開始する前に、Web アプリケーション・サーバーを稼働し、Marketing Platform Web アプリケーションを配置しておく必要があります。

Campaign リスナーの構文

unica_aclsnr ユーティリティーの構文は、次のとおりです。

```
unica_aclsnr [-i] {[ -n ] | [ -r ] } [-u] [-v]
```

Campaign リスナー・オプション

unica_aclnsr ユーティリティーは、以下のオプションをサポートしています。

表 40. Campaign リスナー・オプション

オプション	説明
-i	このオプションは、リスナー・ユーティリティーをサービスとしてインストールします (Windows のみ)。
-n	このオプションは、-r の逆です。リスナーが unica_acslnr.ldb ファイルを検査しないようにします。
-r (デフォルト)	このオプションは、実行中のフローチャートを検索して登録するようリスナーに強制することにより、リカバリーの実行を開始します。このパラメーターは、リスナーが何らかの理由でダウンし、フローチャート (つまり acsvr プロセス) は引き続き実行されている場合に使用します。リスナーは、フローチャート情報をテキスト・ファイル (unica_acslnr.ldb) に保管します。-r オプションを使用すると、リスナーは実行されているフローチャートを求めてファイルを検査し、接続を再確立します。 実行中のフローチャート・プロセス (フローチャートとブランチの実稼働実行のみ) がリスナーとともにダウンした場合でも、リスナーはそのフローチャートを再ロードし、最後に保存したチェックポイントから実行を再開します。
-u	このオプションは、リスナー・ユーティリティーをサービスとしてアンインストールします (Windows のみ)。
-v	このオプションは、リスナーの現行バージョンを表示します。

リスナーの開始と停止

リスナーをサービスとしてセットアップするか (Windows)、init プロセスの一部としてセットアップした場合 (UNIX)、サーバーの始動時にリスナーは自動的に開始されます。

このセクションで説明されているように、リスナーの開始と停止は手動でも行えます。

Windows システムで Campaign リスナーを開始するには

サポートされている Windows システムで Campaign リスナーを開始するには、以下のようにします。

1. Campaign が配置されている Web アプリケーション・サーバーが稼働していることを確認します。
2. Campaign インストールの下の bin ディレクトリーにある cmpServer.bat スクリプトを実行することにより、Campaign リスナーを開始します。

unica_aclnsr.exe プロセスが「Windows タスク・マネージャー」の「プロセス」タブに表示されていれば、それはサーバーが正常に始動したことを示しています。

Windows システムで Campaign リスナーを停止するには

サポートされている Windows システムで Campaign リスナーを停止するには、以下のようにします。

1. Campaign bin ディレクトリーに移動して、コマンド `svrstop -p 4664` を実行します。

CAMPAIGN_HOME 環境変数を求めるプロンプトが出されたら、それを次の例のように設定し、`svrstop` コマンドを再度実行します。

```
set CAMPAIGN_HOME=C:¥<installation_path>¥Campaign
```

2. ログイン・プロンプトで、Campaign ユーザーのユーザー名を入力します。
3. パスワード・プロンプトで、入力した Campaign ユーザーのパスワードを入力します。

Campaign リスナー・プロセスが閉じます。リスナーが実行されていない場合、IBM Unica Marketing に接続するユーザーは、どの Campaign フィーチャーも開くことができません。

Campaign サーバーを Windows サービスとしてインストールする方法

Campaign サーバーを、Windows システムが始動するときにはいつでも自動的に開始される Windows サービスとしてインストールするには、次のようにします。

1. Campaign のインストール・ディレクトリーの下にある bin ディレクトリーを、ユーザーの PATH 環境変数に追加します。ユーザーの PATH 環境変数がない場合には、作成します。

このパスが、システムの PATH 変数ではなく、ユーザーの PATH 変数に追加されるようにしてください。

Campaign bin ディレクトリーがシステム PATH 環境変数にある場合には、それを削除します。Campaign サーバーをサービスとしてインストールするには、そのディレクトリーがシステム PATH 環境変数にある必要はありません。

2. サーバーがサービスとしてインストールされている旧バージョンの Campaign からアップグレードする場合には、サービスを停止してください。
3. コマンド・ウィンドウを開き、ディレクトリーを Campaign インストールの下の bin ディレクトリーに変更します。
4. 次のコマンドを実行し、Campaign サーバー・サービスを作成します。

```
unica_aclsnr -i
```

サービスが作成されます。

注: CAMPAIGN_HOME がシステム環境変数として作成されたことを確認してから、Campaign サーバー・サービスを開始します。

UNIX システムでリスナーを開始するには

システム・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
rc.unica_ac start
```

UNIX システムでリスナーを停止するには

システム・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
rc.unica_ac stop
```

Campaign リスナー・ログ

リスナー・プロセスは、unica_aclnr.log という名前のログ・ファイルを作成します。

Campaign リスナー・シャットダウン・ユーティリティ (svrstop)

Campaign リスナー・シャットダウン・ユーティリティ (svrstop) を使用して、以下のタスクを実行します。

- Campaign リスナーをシャットダウンします。
- Optimize リスナーをシャットダウンします。

ベスト・プラクティスは、ACOServer スクリプト (これは svrstop ユーティリティを使用する) を使って Optimize リスナーを開始およびシャットダウンすることです。詳しくは、「IBM Unica Optimize インストール・ガイド」を参照してください。

注: リスナー・シャットダウン・ユーティリティは、指定したリスナーを停止するための独立したコマンドとして使用することも、必要な認証引数が組み込まれている場合はスクリプトで使用することもできます。

Campaign svrstop ユーティリティの参照資料

svrstop ユーティリティを使用して、ローカル・サーバーまたはネットワーク上のいずれかのサーバー (ユーザーが適切な資格情報を持っているもの) で稼働している Campaign リスナーまたは Optimize リスナーを停止します。

svrstop ユーティリティは、すべての Campaign サーバーの <install_dir>/Campaign/bin ディレクトリーに自動的にインストールされます。<install_dir> は Campaign がインストールされている親 IBM Unica ディレクトリーです。

svrstop ユーティリティの構文は、次のとおりです。

```
svrstop [-g] [-p <port> [-S]] [-s <serverName>] [-y <user>] [-z <password>] [-v] [-P <product>]
```

それぞれの引数について以下の表で説明します。

表 41. svrstop 構文の引数

引数	説明
-g	リスナーがアクティブかどうかを判別するために、指定されたサーバーを ping します。
-p <port>	リスナーが実行されているポート。 Campaign リスナーをシャットダウンするには <port> を 4664 に設定します。 Optimize リスナーをシャットダウンするには <port> を 2882 に設定します。

表 41. `svrstop` 構文の引数 (続き)

引数	説明
<code>-S</code>	<code>-p</code> または <code>-P</code> 引数によって指定されているリスナーが SSL を使用していることを指定します。
<code>-s <serverName></code>	リスナーが実行されているサーバーのホスト名 (<code>optimizeServer</code> や <code>campaignServer.example.com</code> など)。この引数を省略する場合、ユーティリティは、ローカル・サーバー上の指定されたリスナーのシャットダウンを試行します。
<code>-y <user></code>	指定されたリスナーをシャットダウンするための Campaign 管理者権限を持つ IBM Unica Marketing ユーザー。この値を省略する場合、ユーティリティの実行時にユーザーを求めるプロンプトが出されます。
<code>-z <password></code>	<code>-y</code> 引数を使って指定した IBM Unica Marketing ユーザーのパスワード。この値を省略する場合、ユーティリティの実行時にパスワードを求めるプロンプトが出されます。
<code>-v</code>	<code>svrstop</code> ユーティリティのバージョン情報を報告し、それ以上のアクションを行わずに終了します。
<code>-P <product></code>	シャットダウンするリスナーが含まれる製品。Optimize リスナーをシャットダウンするには、これを「Optimize」に設定します。この引数にそれ以外の値を設定するか、この引数を省略すると、Campaign リスナーがシャットダウンされます。

```
svrstop -y asm_admin -z password -p 4664
```

svrstop ユーティリティを使用して Campaign リスナーをシャットダウンするには

Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、`svrstop` ユーティリティを実行して、そのサーバーで実行されている Campaign リスナーを停止できます。別のサーバーで実行されている Campaign リスナーを停止するには、`-s servername.example.com` のように `-s` 引数を使用し、必要な認証を提供します。

1. Campaign サーバーでコマンド・プロンプトを開きます。
2. `CAMPAIGN_HOME` 環境変数を `<install_dir>/Campaign/bin` に設定します。
`<install_dir>` は、Campaign がインストールされる親ディレクトリです。
3. 次のコマンドを入力します。

```
svrstop -p 4664
```

`-p` 引数は、リスナーが接続を受け入れるポートを指定します。ポート 4664 は、Web クライアントからの接続を受け入れるために Campaign が内部的に使用するポートなので、`-p 4664` 引数は Campaign リスナーを停止することを示します。

4. プロンプトが出されたら、リスナーを停止する権限を持つ任意の IBM Unica Marketing ユーザーの名前とパスワードを指定します。

オプションで、引数として `svrstop>` コマンドに `-y <username>` と `-z <password>` を組み込み、ユーザー名とパスワードのプロンプトが表示されないようにすることもできます。

必要な情報を入力した後、Campaign リスナーはシャットダウンされます。

svrstop ユーティリティーを使用して Optimize リスナーをシャットダウンするには

Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、svrstop ユーティリティーを実行して、そのサーバーで実行されている Optimize リスナーを停止できます。別のサーバーで実行されている Optimize リスナーを停止するには、-s servername.example.com のように -s 引数を使用し、必要な認証を提供します。

1. Campaign サーバーでコマンド・プロンプトを開きます。
2. CAMPAIGN_HOME 環境変数を <install_dir>/Campaign/bin に設定します。
<install_dir> は、Campaign がインストールされる親ディレクトリーです。
3. 次のコマンドを入力します。

```
svrstop -P "Optimize"
```

-P 引数は、シャットダウンするリスナーが含まれる製品を指定します。別の方法として、-p 2882 と入力して、内部ポート番号 2882 (これも Optimize リスナーを示す) を使用してリスナーをシャットダウンすることもできます。

4. プロンプトが出されたら、リスナーを停止する権限を持つ任意の IBM Unica Marketing ユーザーの名前とパスワードを指定します。

オプションで、引数として svrstop> コマンドに -y <username> と -z <password> を組み込み、ユーザー名とパスワードのプロンプトが表示されないようにすることもできます。

必要な情報を入力した後、Optimize リスナーはシャットダウンされます。

Campaign Server Manager (unica_svradm)

Campaign Server Manager (unica_svradm) は、以下のタスクを実行するためのコマンド・ラインのサーバー管理ユーティリティーです。

- Campaign リスナーに接続する
- 現在開かれているすべてのフローチャートおよびその状態を表示する
- 環境変数を表示および設定する
- フローチャートを実行する
- フローチャートを中断/再開する
- フローチャートを停止する
- ランナウェイ・フローチャートを強制終了する

unica_svradm ユーティリティーは、開始時にリスナーが実行されているかどうかを検査します。

リスナーが実行されている場合、接続が自動的に確立され、サーバーの名前とポート番号が表示されます。

Campaign Server Manager を実行するには

Campaign Server Manager を実行するには、事前に以下のようにする必要があります。

- リスナーを実行しておく。
- 使用するコマンド・ウィンドウで UNICA_PLATFORM_HOME 環境変数と CAMPAIGN_HOME 環境変数を設定する。
- IBM Unica Marketing ログインのために「Svradm コマンド・ラインの実行」権限を取得する。

1. コマンド・プロンプトで、以下のように入力します。

```
unica_svradm -s listener_server -y Unica_Marketing_username -z
Unica_Marketing_password
```

2. 次のようにプロンプトが出されます。

```
unica_svradm[server:port]>
```

ここで、『Campaign Server Manager コマンド』で説明されているコマンドを発行します。

Campaign Server Manager コマンド

Campaign Server Manager は、以下のセクションで説明されるコマンドをサポートしています。unica_svradm で使用可能なすべてのコマンドのリストを表示するには、Help コマンドを使用します。

注: 引数としてフローチャート名を取るコマンドは、同じ名前を持つすべてのキャンペーンおよびセッションのすべてのフローチャートに使用できます。フローチャート・パスを取るコマンドには、相対フローチャート・パスを使用します。

Campaign Server Manager コマンドでは大/小文字が区別されません。

Cap (Distributed Marketing)

Cap

Cap コマンドを使用すると、Distributed Marketing フローチャートが追加で開始されないようにしつつ、現在実行中のものを完了できるようにします。設定解除する場合は、uncap コマンドを使用します。

Changeowner

Changeowner -o <olduserid> -n <newuserid> -p <policyid>

Changeowner コマンドを使用すると、ユーザーのキャンペーンの所有者を変更することができます。このコマンドは例えば、ユーザーを削除または無効にし、そのユーザーのキャンペーンの所有権を新規ユーザーに再び割り当てる場合に使用できます。

オプション	説明
-o <olduserid>	キャンペーンの現行所有者のユーザー ID。
-n <newuserid>	キャンペーンに割り当てる新規所有者のユーザー ID。
-p <policyid>	キャンペーンに適用するセキュリティ・ポリシーのポリシー ID。

Connect

Connect [-f] [-s *server*] [-p *port*] [-S]]

Connect コマンドは、*port* 番号で *server* で実行されているリスナーに接続します。一度に 1 つのサーバーにしか接続できません。別のサーバーに接続するには、-f (強制) 接続を使用します。

-p オプションを使用してポートを指定する場合、-S オプションも含めることによって SSL 接続を確立するように指示することができます。-p オプションを使用してポートを指定するときに -S オプションを指定しない場合には、接続で SSL は使用されません。

Disconnect

Disconnect

Disconnect コマンドは、サーバーから切断します。このコマンドは、サーバーと接続されている場合のみ使用できます。

注: 別のサーバーに接続するには、-f パラメーターを使用するか、最初に切断してから新規サーバーに接続します。

Exit

Exit

Exit コマンドを使用すると、ユーザーは Campaign Server Manager からログアウトします。

Help

Help

Help コマンドは、使用可能なコマンドを表示します。

Kill

Kill -p *pid*

Kill コマンドは、指定された *pid* に対して "kill-p" を発行します (Windows NT では Windows NT の相当するものが発行されます)。これは、ランナウェイ・プロセスのためのものです。

Loglevel

Loglevel [high | low | medium | all]

Loglevel コマンドは、Campaign のリスナー・ロギング・レベルを設定します。引数なしでコマンドを入力する場合は、現行のロギング・レベルが表示されます。ロギング・レベルを変更する場合、変更は即時に有効になります。そのため、このコマンドを入力した後にリスナーを再始動する必要はありません。

Quit

Quit

Quit コマンドを使用すると、ユーザーは Campaign Server Manager からログアウトします。

Resume

Resume {-s flowchart_name |-p pid |-a}

Resume コマンドは、1 つ以上のフローチャートの実行を再開します。

- 単一の特定フローチャートを名前でも再開するには -s を使用します
- 指定されたプロセス ID を再開するには -p を使用します
- 中断されているすべてのフローチャートを再開するには -a を使用します

Run

Run -p relative-path-from-partition-root -u

Unica_Marketing_Platform_user_name [-h partition] [-c catalogFile] [-s] [-m]

Run コマンドは、特定の単一フローチャート・ファイルを開いて実行します。その際、相対フローチャート・パスおよびファイル名、パーティション、カタログ・ファイル、およびユーザー名を指定します。

次の構文を使用できます。

[-S dataSource -U db_User -P db_Password]*

注: Unix プラットフォームの場合、フローチャートはユーザー名の代替ログインとして指定された Unix アカウントによって実行されます。 Windows NT の場合、フローチャートは管理者のユーザー・ログインとして実行されます。

Run コマンドのオプション

オプション	説明
-h	パーティション名を指定します。
-l	プロセス・ログ・ファイルの代替保管場所を示します。このオプションの後に、Campaign インストールへの相対パスを続ける必要があります (例えば ¥partition¥logs)。このオプションではファイル名を指定しないでください。ファイル名は自動的に割り当てられるからです。 注: このオプションを使用する場合、Campaign > partitions > partition[n] > server > logging カテゴリの AllowCustomLogPath 構成プロパティを有効にしておく必要もあります。構成プロパティの設定について、詳しくは「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。
-m	複数のフローチャートを実行することを指定します。このオプションは、バッチ・フローチャートではサポートされていません。
-p	パーティション・ルートからの相対パスを指定します。
-P	データ・ソースのパスワードを指定します。
-s	同期実行を指定します。
-S	データ・ソースを指定します。
-u	IBM Unica Marketing ユーザー名を指定します。

オプション	説明
-U	データ・ソースのユーザー名を指定します。
-v	次の構文を使って、フローチャートの変数値をコマンドで直接指定します。 [-v "varname=[']value[']"]*
-x	次の構文を使って、フローチャートの変数値を XML ファイルで指定します。 [-x <i>xml-filename</i>]

-x 引数に関する XML ファイルの例

このサンプル XML ファイルは、ユーザー変数名 UVAcctType を値 Gold に設定します。

注: Campaign は、このファイルに書かれているとおりに変数の値を設定します。値に引用符を含めない場合は、値を引用符で囲まないでください。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes" ?>
    <UserVariables>
        <UserVar Name="UVAcctType">
            <Values>
                <Option>Gold</Option>
            </Values>
        </UserVar>
    </UserVariables>
```

Save

Save {-s *flowchart_name*|-p *pid*|-a}

Save コマンドは、アクティブ・フローチャートの現在の状態を保存します。

オプション	説明
-s	<i>flowchart-name</i> によって定義される名前で、単一の特定フローチャートを保存します。
-p	<i>pid</i> によって定義されるフローチャートを保存します。
-a	実行中のすべてのフローチャートを保存します。

Set

Set [variable[=value]]

Set コマンドは、環境変数を表示および設定します。現在の値を表示する場合は値を省略し、特定の変数を設定する場合は値を指定します。

Shutdown

Shutdown [-f]

Shutdown コマンドは、リスナーをシャットダウンします。

システムは、実行されているフローチャートがないか検査します。実行されているフローチャートが見つかった場合、シャットダウンの確認を求める警告メッセージが表示されます。

オーバーライドしてシャットダウンを強制するには、**-f** を使用します。

Status

Status [-d | -i] [-u] [-v | -c]]

Status コマンドは、実行されているフローチャートと中断されているフローチャートの両方に関する情報（フローチャート名、所有者、ファイルの場所など）を表示します。

オプション	説明
d	表示される出力にサーバー ID、キャンペーン・コード、およびキャンペーン ID を追加します。
i	プロセス ID (PID) のみを表示します。
u	表示されるデータに非 ASCII 文字が含まれている場合にこのオプションを使用します。
v	出力を表示する前に unica_acsvr プロセスが存在するかどうかを確認します。これにより、破損したプロセスがステータス・リストに表示されないようにします。
c	出力を表示する前に unica_acsvr プロセスが存在するかどうかを確認します。これにより、破損したプロセスがステータス・リストに表示されないようにします。また、オプション c は、破損したサーバー・プロセスに関連付けられているパーティションの temp ディレクトリーに一時ファイルがあれば、それをクリーンアップするようにリスナーに指示します。

Status コマンドは、プロセスを次のように識別します。

- c - 接続 (クライアントは、リスナー・プロセスに接続されています。クライアントは実行されている場合とそうでない場合があります。)
- d - 切断 (クライアントは閉じていますが、フローチャートはバックグラウンドで実行されています。)
- o - 孤立 (クライアントはフローチャートに接続されておらず、バックグラウンドでも実行されていません。このプロセスは既に存在せず、リスナーに再接続できません。ユーザーがそれにログインできるよう、強制終了する必要があります。)

注: WRITER 列に <no writer> という値がある場合、それは、サーバー・プロセスに編集モードのクライアントがないことを示します。このことは、クライアントが接続されていない場合や、ログイン・セッションの場合に生じる可能性があります。

Stop

Stop [-f] {-s flowchart_name | -p pid | -a}

Stop コマンドは、アクティブ・クライアントの有無を検査し、存在する場合は警告を出して (これは -f 強制オプションでオーバーライドできる)、IBM Unica サーバー・プロセスを停止します。

オプション	説明
-s	flowchart_name によって定義される名前で、単一の特定フローチャートを停止します。

オプション	説明
-p	<i>pid</i> によってフローチャートを停止します。
-a	実行中のすべてのフローチャートを停止します。

オーバーライドして停止を強制するには、-f を使用します。

Suspend

Suspend [-f] {-s flowchart_name | -p pid | -a}

Suspend コマンドを使用すると、実行中のキャンペーンを「静止」し、対応するコマンド Resume を使って後で再始動するために状態を保存します。現在出力プロセスを実行しているすべてのフローチャートはデータ・エクスポート・アクティビティを完了します。その後、フローチャートは一時停止されたフローチャートとして保存されます。これにより、失われる作業量が可能な限り少なくなり、出力ファイルのデータ保全性が保持されます。フローチャートを即時に停止する必要がある場合、Save コマンドに続いて、Stop を発行します。

オプション	説明
-s	<flowchart_name> によって定義される名前で、単一の特定フローチャートを中断します。
-p	<i>pid</i> によって指定されるフローチャートを中断します。
-a	実行中のすべてのフローチャートを中断します。

システムは、現在実行されているプロセスの実行すべてを終了し、その後にプロセスが開始されないようにします。フローチャートは保存され、中断されているフローチャートのリストに書き込まれます。

-f パラメーターを使用すると、中断を強制できます。中断された後、フローチャートは中断されたフローチャートとしてリスナーに書き込まれます。

注: 中断した時点でフローチャートが実行されていない場合、フローチャートは保存されますが、リスナーに書き込まれず、Resume を使って開始できません。

Uncap (Distributed Marketing)

Uncap

Uncap コマンドは、Cap (Distributed Marketing) コマンドを取り消します。『Cap (Distributed Marketing)』を参照してください。

Version

Version

Version コマンドは unica_svradm のバージョンと、接続されているリスナー・プロセスのバージョンを表示します。このコマンドの使用は、バージョン不一致エラーのトラブルシューティングに役立ちます。

実行中のフローチャートを強制終了するには

フローチャートを即時に停止するために強制終了しなければならない場合があります。フローチャート名はさまざまなキャンペーンおよびセッションで同じにすることができるため、このセクションの指示に従う必要があります。

1. コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力して、サーバー上で実行されているフローチャートのリストを取得します。

```
% unica_svradm status
```

フローチャート名が同じの場合でも、フローチャートを一意的に識別するために絶対パスを使用することができます。

2. 強制終了するフローチャートに関連付けられている PID のメモを取ります。
3. フローチャートを強制終了するには、強制終了するフローチャートの PID で PID を置き換えて、コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力します。

```
unica_svradm kill -p PID
```

フローチャートが強制終了される際、そのバッファはディスクにフラッシュされません。代わりに、最後のチェックポイントのコピーが保存されます。

Campaign セッション・ユーティリティ (unica_acsesutil)

Campaign セッション・ユーティリティ (unica_acsesutil) を使用して、以下のタスクを実行します。

- 1 つのサーバーから別のサーバーにキャンペーン、セッション、およびフローチャートをインポートおよびエクスポートする。
- フローチャート・ファイルまたはテーブル・カタログを入力として渡し、テーブル・カタログをバイナリーまたは XML 形式で出力として生成する。
- セッションまたはカタログの特殊値のレコード数およびリストを更新する。

注: unica_acsesutil ユーティリティは、同じバージョンの Campaign がインストールされているサーバー間のオブジェクトのインポートとエクスポートだけをサポートしています。

unica_acsesutil で必要な環境変数

unica_acsesutil を実行するには、次の環境変数を設定する必要があります。

- UNICA_PLATFORM_HOME
- CAMPAIGN_HOME

UNIX の場合のみ、UNIX プラットフォームに応じて次のデータベース固有のライブラリー・パスを設定します。

- LIBPATH (AIX® の場合)
- SHLIB_PATH (HP-UX の場合)
- LD_LIBRARY_PATH (Linux または Sun Solaris の場合)

Campaign セッション・ユーティリティのユースケース

セッション・ユーティリティ (unica_acsesutil) を使用して、以下のタスクを実行します。

- 『サーバー間のオブジェクトのエクスポートおよびインポート』
- 178 ページの『セッションのバックアップ』
- 178 ページの『レコード数および値のリストの更新』
- 179 ページの『テーブル・カタログの操作』
- 180 ページの『カタログ・コンテンツの文書化』

サーバー間のオブジェクトのエクスポートおよびインポート

注: unica_acsesutil ユーティリティは、同じバージョンの Campaign がインストールされているサーバー間のオブジェクトのインポートとエクスポートだけをサポートしています。

unica_acsesutil を使用して、1 つのサーバーから別のサーバーにキャンペーン、セッション、およびフローチャートをエクスポートおよびインポートします。ただし、次の制限があります。

- キャンペーンまたはセッションをエクスポートする際、関連付けられているシステム・テーブルとメタデータだけがエクスポートされます。関連付けられているフローチャートは、別途エクスポートする必要があります。フローチャートのエクスポートは一度に 1 つずつのみ行えます。
- フローチャートをターゲット・システムにインポートするには、そのフローチャート (.ses) ファイルと、それに関連付けられているキャンペーンまたはセッションがターゲット・システムに既に存在している必要があります。そのため、関連付けられているフローチャートをエクスポートおよびインポートする前に、キャンペーンおよびセッションをすべてエクスポートおよびインポートし、フローチャート (.ses) ファイルをターゲット・サーバーに手動でコピーしておく必要があります。
- エクスポートまたはインポートするオブジェクト・タイプに関係なく、処理を行う Campaign フローチャート (.ses) ファイルを指定するために -s パラメーターを使用する必要があります。関連付けられている複数のフローチャートとともにキャンペーンまたはセッションをエクスポートまたはインポートする際は、関連付けられているいずれかの .ses ファイルを使用できます。
- eMessage または Distributed Marketing フローチャートのインポートを試みる際に、unica_acsesutil は関連アプリケーションがターゲット・システム上にインストールされているかどうかを調べるために検査します。必要なアプリケーションがターゲット・システム上にインストールされていない場合、unica_acsesutil はエラーを生成し、選択したオブジェクトはインポートされません。

エクスポートおよびインポート・プロセスについて: unica_acsesutil を使用してサーバー間でオブジェクトを移動するプロセスは、さまざまな段階で行われます。一部の手順は手動で行う必要があります。

1. -s オプションで指定したフローチャートの (.ses) ファイルの情報を使用して、unica_acsesutil ユーティリティは、エクスポートしたオブジェクトおよび情報を、-e オプションで指定した中間出力ファイルに書き込みます。

2. 出力ファイルをターゲット・サーバーに手動で移動 (コピー) します。
3. ターゲット・サーバーで、`-i` オプションを使用して `unica_acsesutil` 出力ファイルをインポートします。

インポートの際の既存のデータとの競合について: `unica_acsesutil` は、システム・テーブルにデータをインポートする際 (例えば、セッション情報、トリガー、またはカスタム・マクロ)、各オブジェクトがターゲット・システムに既に存在するかどうか検査します。検査は内部オブジェクト ID に基づいて行われます。つまり、キャンペーンで内部キャンペーン ID が固有でない場合、`unica_acsesutil` はキャンペーンを上書きするかどうか尋ねます。キャンペーンの上書きを選択する場合、`unica_acsesutil` はターゲット・サーバー上の既存のキャンペーンに関連付けられているすべてのデータを削除してから、新規キャンペーンをインポートします。同様に、オファーをインポートする際、`unica_acsesutil` は内部オファー ID が固有かどうかを検査します。

同じ ID のオブジェクトが既に存在する場合には、インポート・プロセスでそのオブジェクトをスキップするか、既存のオブジェクトを置換するかを選択できます。

注: 競合しているオブジェクト (キャンペーン、セッション、またはオファーなど) が既にターゲット・システムに存在することがインポートを行う前に分かっている場合には、競合解決の要求が出されないようにするために、インポートを実行する前にオブジェクトを削除することを検討してください。

キャンペーン、セッション、またはフローチャートをエクスポートするには:

```
unica_acsesutil -s <sesFileName> -h <partitionName>  
-e <exportFileName> [-f { flowchart | campaign | session }]  
[-S <datasource> -U <DBusername> -P <DBpassword>]
```

例 1: キャンペーンのエクスポート

```
unica_acsesutil -s "campaigns/Campaign C000001_C000001.ses" -h partition1  
-e campaign.exp -f campaign
```

この例は、Flowchart1 と関連付けられているキャンペーンをエクスポートするための出力ファイル `campaign.exp` を、`partition1` にある `"campaigns/Campaign C000001_C000001.ses"` ファイルに基づいて生成します。

例 2: フローチャートのエクスポート

```
unica_acsesutil -s "campaigns/Campaign C000001_C000001_Flowchart1.ses"  
-h partition1 -e flowchart.exp -f flowchart
```

この例は、フローチャート `C000001_Flowchart1` をエクスポートするための出力ファイル `flowchart.exp` を、`partition1` にある `"campaigns/Campaign C000001_C000001_Flowchart1.ses"` ファイルに基づいて生成します。

キャンペーン、セッション、またはフローチャートをインポートするには:

注: フローチャートをインポートするには、そのフローチャート (`.ses`) ファイルと、それに関連付けられているキャンペーンまたはセッションがターゲット・システムに存在する必要があります。そのため、フローチャートをインポートする前に、(1) 関連付けられている `.ses` ファイルをソース・システムからターゲット・システムに手動でコピーし、(2) 関連付けられているキャンペーンまたはセッションをターゲット・システムにインポートする必要があります。

```
unica_acsesutil -s <sesFileName> -h <partitionName>
-i <importFileName> [-f { flowchart | campaign | session }]
[-b { abort | replace | skip }]
[-S <datasource> -U <DBUsername> -P <DBpassword>]
```

例 1: キャンペーンのインポート

```
unica_acsesutil -s "campaigns/Campaign C000001_C000001.ses" -h partition1
-i campaign.exp -f campaign
```

この例は、事前に生成された campaign.exp ファイルを使用し、Campaign C000001 データをターゲット・システムのシステム・テーブル、および partition1 にある "campaigns/Campaign C000001_C000001.ses" ファイルにインポートします。

例 2: フローチャートのインポート

```
unica_acsesutil -s "campaigns/Campaign C000001_C000001_
Flowchart1.ses" -h partition1 -i import.exp -f flowchart
```

この例は、事前に生成された flowchart.exp ファイルを使用し、Campaign C000001_Flowchart1 に関連付けられているデータをターゲット・システムのシステム・テーブル、および partition1 にある "campaigns/Campaign C000001_C000001_Flowchart 1.ses" ファイルにインポートします。

セッションのバックアップ

Campaign セッション・ユーティリティーを使用して、セッションをバックアップします。セッション・ディレクトリー内のすべてのファイルをエクスポートしてそれをバックアップ・システムにインポートするようにスクリプトを作成できます。

レコード数および値のリストの更新

Campaign セッション・ユーティリティーは、レコード数や値の種類のリストを更新したり、それらのカウントの自動再計算のスケジュールを設定したりするために使用します。

再計算の対象となるカウントの種類を指定するため、以下の 3 つのパラメーターを使用可能です。

- -n -- レコード数のみ再計算
- -l -- 値の種類のリストのみ再計算
- -a -- 全テーブルのレコード数および値の種類のリストを再計算

これらのオプションを使用して、セッション (-s) またはカタログ (-t) について、レコード数や値のリストをすべて再計算します。これらのオプションは、インポート (-i) など、その他のオプションと組み合わせることができます。

フローチャート内でマップされているすべてのテーブルを対象としてカウントを再計算するには、

```
unica_acsesutil -s sesFileName -i importFileName
[{-a | -n | -l }][-S Datasource -U DBUser -P DBPassword]
```

テーブル・カタログ内のテーブルを対象としてカウントを再計算するには、

```
unica_acsesutil -t catFileName
[{-a | -n | -l }][-S Datasource -U DBUser -P DBPassword]
```

注: フローチャート内に接続情報が保管されていない場合、データベース接続を定義するパラメーター (-S、-U、-P) を指定する必要があります。

テーブル・カタログの操作

Campaign セッション・ユーティリティを使用して、Campaign の外部でテーブル・カタログに対して操作を行うことができます。

一般的には、XML テーブル・カタログは、データ・ソース名の一括検索および置換を実行するために使用します。例えば、実稼働データベースで使用できるよう、テスト・データベースで使用するために開発されたテーブル・カタログの変換などを行います。この場合、テーブル・カタログを XML としてエクスポートし、必要に応じて一括検索および置換を実行した後、XML テーブル・カタログを保存して、使用のためにロードします。

ステップ 1 - XML 形式への変換

Campaign セッション・ユーティリティは、このプロセスの最初のステップでのみ使用します。これを使用して、要求されるカタログのすべてのデータが含まれる XML 形式のファイルを生成します。カタログが既に XML 形式になっている場合、このステップは不要です。

次のコマンドを使用します。

```
unica_acsesutil -t catFileName -x [-o outputFileName] [-u] [-p]
[{-a | -n | -l}][-S dataSource -U DBUserName -P DBPassword]
```

ステップ 2 - 必要に応じた編集

次に、ステップ 1 で生成した XML ファイルを必要に応じて編集します。ファイルの整形された状態を維持するために、ファイル構文を検査する XML エディターを使用する必要があります。

ステップ 3 (オプション) - バイナリー形式への変換

必要に応じて、XML カatalog・ファイルを再びバイナリー形式のカタログに変換することができます。

次のコマンドを使用します。

```
unica_acsesutil -t <catFileName> -x -o <outputFileName>
```

注: カatalogを XML 形式のままにしておくことは、データ・アクセス用のパスワードが公開されてしまうという危険があります。カatalogを XML 形式のままにしておく場合は、ファイルがオペレーティング・システム・レベルで保護されるようにしてください。

ステップ 4 - セッションでの新規カatalogのロード

再びバイナリー形式に変換した後、新規カatalogをセッションにロードできるようになります。

カタログ・コンテンツの文書化

2 つの手法を使ってカタログ・コンテンツを文書化することができます。

- XML カatalog・ファイルを使用したレポートの生成
- Campaign セッション・ユーティリティを使用したテーブル・マッピングの出力

XML カatalog・ファイルの使用

unica_acsesutil を使用して、要求されるカタログのすべてのデータが含まれる XML 形式のファイルを生成します。

現時点では、XML カatalog・ファイルをユーザー・フレンドリー・レポートに変換するための IBM Unica ユーティリティはありません。

テーブル・マッピングの出力

unica_acsesutil を使用して、カタログからのテーブル・マッピング情報を出力することができます。

次のコマンドを使用します。

```
unica_acsesutil -t catFileName -h partitionName -p
```

Campaign セッション・ユーティリティの戻り値

unica_acsesutil ユーティリティは、正常に実行されると、値 0 を返します。指定されたフローチャートまたはカタログのファイル名を持つファイルが見つからない場合、1 を返します。

Campaign セッション・ユーティリティの構文

```
unica_acsesutil -s sesFileName -h partitionName  
[-r | -c | -x [-o outputFileName]] [-u] [-v]  
[{-e exportFileName [-f {flowchart | campaign | session}]}  
| {-i importFileName [-t catFileName]}]  
[-b {abort | replace | skip}]]]  
[-p] [-a | -n | -l]  
[-S dataSource -U DBUser -P DBPassword]*  
[-y userName] [-z password]  
[-j owner] [-K policy]
```

Campaign セッション・ユーティリティのオプション

unica_acsesutil ユーティリティは、以下のオプションをサポートしています。

表 42. Campaign セッション・ユーティリティのオプション

オプション	構文	説明
-a	-a	すべてのテーブルのレコード数および個別値のリストを再計算します。

表 42. Campaign セッション・ユーティリティーのオプション (続き)

オプション	構文	説明
-b	-b {abort replace skip}	インポート・オプション (-i) にのみ当てはまります。インポートがバッチ・モードで行われることを指定します。 複製オブジェクト (ID が競合する場合) の処理方法を指定するために、以下のいずれかの引数が必要です。 • abort - 複製オブジェクトが検出された場合、インポートは停止します。 • replace - 複製オブジェクトが検出された場合、インポートされるオブジェクトで置き換えます。 • skip - 複製オブジェクトが検出された場合、置換せず、インポートを続行します。
-c	-c <outputFileName>	outputFileName のテーブル・カタログを .cat 形式 (Campaign 内部形式) で生成します。-s オプションを指定すると、このオプションは無視されます。
-e	-e <exportFileName>	-f オプションによって指定されたオブジェクト・タイプを exportFileName という名前のファイルにエクスポートします。 -f オプションが使用されない場合、デフォルトではフローチャートがエクスポートに設定されます。
-f	-f {flowchart campaign session}	エクスポートするオブジェクトのタイプを指定します。このオプションを省略すると、デフォルトではフローチャートがエクスポートに設定されます。 -f が使用される場合、flowchart、campaign、session のいずれかの引数が必要です。
-h	-h <partitionName>	フローチャート・ファイル (-s によって指定される) が置かれているパーティションの名前を指定します。このパラメーターは必須です。
-i	-i <importFileName>	インポートされるファイルの名前を指定します。以前のエクスポート操作で -e オプションを使ってエクスポートされたファイルを指定する必要があります。
-j	-j <owner>	インポートまたはエクスポートされるファイルの所有者を指定します。
-k	-k <policy>	インポートされるファイルのセキュリティ・ポリシーを指定します。
-l	-l	個別値のリストのみを再計算します。
-n	-n	レコード数のみを再計算します。
-o	-o <outputFileName>	カタログを名前 outputFileName で指定します。指定されない場合、-x オプションと -c のどちらを使用するかに応じて、catFileName.xml または catFileName.cat がデフォルトになります。ワイルドカードを使用する場合、出力ファイル名に宛先ディレクトリーを指定する必要があります。

表 42. Campaign セッション・ユーティリティーのオプション (続き)

オプション	構文	説明
-P	-P <DBPassword>	データベース・ユーザー・アカウントのパスワードを指定します。 -U オプションおよび -S オプションと一緒に使用します。
-p	-p	テーブル・マッピングをコンソールに出力します。
-r	-r <outputFileName>	フローチャートの XML レポートを <i>outputFileName</i> に生成します。 -t オプション (テーブル・カタログを入力として使用する) を使用する場合、このパラメーターは無視されます。
-S	-S <dataSource>	処理が行われるオブジェクトのデータ・ソースの名前を指定します。 -U <database_user> および -P <database_password> オプションと一緒に使用します。
-s	-s <sesFileName>	処理を行う Campaign フローチャート (.ses) ファイルを指定します。オブジェクト・タイプ (キャンペーン、セッション、またはフローチャート) に関係なく、エクスポートおよびインポートの際は常に .ses ファイルを指定する必要があります。関連付けられている複数のフローチャートとともにキャンペーンまたはセッションをエクスポートまたはインポートする際は、関連付けられているいずれかの .ses ファイルを使用できます。 ファイル名には、このフローチャート・ファイルの存在場所のパーティション (-h オプションを使用して定義されるもの) より下のパスが含まれていなければなりません。 -s の有効な値の例を以下に示します。 "campaign/Campaign C00001_C00001_Flowchart 1.ses" 一致する複数のフローチャートに対して処理を行うために、<sesFileName> にワイルドカード文字を含めることができます。
-t	-t <catFileName>	<catFileName> というテーブル・カタログを入力として読み取ります。 <catFileName> にはワイルドカード文字を含めることができます。
-U	-U <DBUserName>	-S オプションによって指定されたデータ・ソースのユーザー・ログインを指定します。 -P オプション (このデータベース・ユーザーのデータベース・パスワードを指定する) と一緒に使用します。
-u	-u	テーブル・カタログを保存する際に既存のデータベース認証情報を使用します。
-v	-v	バージョン番号を表示して終了します。
-x	-x <outputFileName>	代替 XML 形式のテーブル・カタログ・ファイルを <i>outputFileName</i> に生成します。入力テーブル・カタログが .cat ファイルの場合、対応する .xml ファイルを生成します (この逆の場合も同様です)。
-y	-y <userName>	IBM Unica Marketing ユーザー名を指定します。

表 42. Campaign セッション・ユーティリティのオプション (続き)

オプション	構文	説明
-z	-z <password>	-y オプションによって指定された IBM Unica Marketing ユーザーのパスワードを指定します。

Campaign クリーンアップ・ユーティリティ (unica_acclean)

クリーンアップ・ユーティリティ (unica_acclean) を使用して、現行パーティション内の一時ファイルとデータベース表を識別してクリーンアップします。クリーンアップ・ユーティリティは、Campaign システム・テーブル・データベースとユーザー・テーブル・データベースの両方で使用できます。

このユーティリティを実行するユーザーには、「クリーンアップ操作の実行」権限が必要です。この権限は、Campaign 管理者によって付与されます。ユーザーが適切な権限を持たずにこのユーティリティ実行しようとする、エラーが表示され、その後、ツールが終了します。

注: このツールがパーティションをまたがって実行されることはありません。unica_acclean の実行時には毎回、指定されたパーティション内のテーブルとファイルに対してのみ実行されます。

ユーティリティが識別してクリーンアップできる項目は、次のとおりです。

- ある特定の条件に基づいて、指定されたオブジェクトまたはオブジェクト・タイプに関連付けられている一時ファイルおよびテーブル。
- 孤立一時ファイルおよびテーブル。つまり、関連付けられたオブジェクトの削除後に残された一時ファイルおよびテーブル。

unica_acclean で必要な環境変数

unica_acclean を実行するには、次の環境変数を設定する必要があります。

- UNICA_PLATFORM_HOME
- CAMPAIGN_HOME
- LANG

CAMPAIGN_PARTITION_HOME の設定はオプションです。

Campaign クリーンアップ・ユーティリティのユースケース

クリーンアップ・ユーティリティ (unica_acclean) を使用して、以下のタスクを実行します。

- 184 ページの『孤立ファイルおよび孤立テーブルのリストの生成』
- 184 ページの『ファイル内にリストされているファイルおよびテーブルの削除』
- 184 ページの『孤立一時ファイルおよび孤立一時テーブルすべての削除』
- 185 ページの『オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブルのリストの選択的生成』

- 186 ページの『オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブルの選択的削除』

孤立ファイルおよび孤立テーブルのリストの生成

クリーンアップ・ユーティリティを使用して、孤立一時ファイルおよび孤立一時テーブルのリストを確認し、出力することができます。

注: IBM Unica ではベスト・プラクティスとして、ユーティリティを実行してファイルやテーブルを即時に削除するのではなく、クリーンアップ・ユーティリティを使用して削除を実行する前に、特定された孤立ファイルや孤立テーブルのリストを検証のために出力することを推奨しています。これは、不慮の削除を避けるために役立ちます。削除した後でリカバリーすることはできません。

孤立ファイルおよび孤立テーブルのリストを出力するには:

```
unica_acclean -o <list file name> -w orphan
```

これを使用するには `-w orphan` が必須であり、条件を指定することはできません。

ファイル名を指定するには、`-o` オプションを使用します。ファイルが保存されるパスを指定することもできます。パスを含めない場合、ファイルは `unica_acclean` ユーティリティと同じディレクトリに保存されます。

例

```
unica_acclean -o "OrphanList.txt" -w orphan
```

この例は、孤立ファイルおよび孤立テーブルのリストを生成し、それをファイル `OrphanList.txt` に書き込みます。

ファイル内にリストされているファイルおよびテーブルの削除

クリーンアップ・ユーティリティを使用して、ユーティリティによって生成されるファイル内にリストされている一時ファイルと一時テーブルすべてを削除することができます。

ファイル内にリストされているファイルおよびテーブルを削除するには:

```
unica_acclean -d -i "OrphanList.txt"
```

`OrphanList.txt` は、削除されるファイルのリストが含まれているファイルで、クリーンアップ・ユーティリティによって生成されます。

一時ファイルまたは一時テーブルではないリスト・ファイルから行が読み取られる場合、クリーンアップ・ツールはその項目をスキップし、項目が削除されないことを示すエラーをコンソールおよびログ・ファイルに記録します。

孤立一時ファイルおよび孤立一時テーブルすべての削除

クリーンアップ・ユーティリティを使用して、孤立していると見なされる一時ファイルおよび一時テーブルすべてを、システム・テーブルおよびユーザー・テーブルのデータベースとファイル・システムから削除することができます。

システムから孤立一時ファイルおよび孤立一時テーブルすべてを削除するには:

```
unica_acclean -d -w orphan
```

孤立ファイルおよび孤立テーブルについて

unica_acclean ユーティリティーは、ファイルおよびテーブルが孤立しているかどうかを以下の方法で判別します。

テーブル

ユーティリティーは、一時テーブルのリストを取得するために、現行パーティションのデータベースをスキャンします。テーブルは、Marketing Platform の「構成」ページの各データ・ソースに対して指定されている「TempTablePrefix」プロパティーに基づいて、「一時」テーブルとして識別されます。

一時テーブルのリストがコンパイルされた後、その一時テーブルのうちのいずれかがフローチャートで使用されているかどうかを確認するために、システム内のすべてのフローチャート・ファイルがスキャンされます。フローチャートで参照されていない一時テーブルはすべて、孤立テーブルと見なされます。

注: クリーンアップ・ユーティリティーは、ユーティリティーを実行しているユーザーの Marketing Platform ユーザー管理モジュールで定義されているデータ・ソースのみをスキャンします。そのため、クリーンアップ・ユーティリティーを実行するユーザーは、スキャンを実行するために、データ・ソースのグローバル・セットまたは該当するセットに対する認証権限があることを常に確認する必要があります。

ファイル

ユーティリティーは、一時ファイルを識別するために 2 つの場所をスキャンします。

- パーティションの一時ディレクトリー (`<partition home>/<partition>/tmp`)。 `.t~#` 拡張子に基づいて「一時」ファイルとして識別されるファイルのリストをこの場所から取得します。
- `<partition home>/<partition>/[campaigns | sessions]` ディレクトリー。これは、既知の Campaign 一時ファイル拡張子を持つファイル用のディレクトリーです。

一時ファイルのリストがコンパイルされた後、その一時ファイルのうちのいずれかがフローチャートで使用されていないかどうかを確認するために、システム内のすべてのフローチャート・ファイルがスキャンされます。フローチャートで参照されていない一時ファイルはすべて、孤立ファイルと見なされます。

オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブルのリストの選択的生成

クリーンアップ・ユーティリティーを使用して、オブジェクト・タイプおよび条件によってファイルおよびテーブルのリストを生成することができます。

オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブルのリストを選択的に生成するには:

```
unica_acclean -o <list file name> -w {flowchart | campaign | session |  
sessionfolder | campaignfolder} -s criteria [-r]
```

例 1: キャンペーン・フォルダーによる一時ファイルおよび一時テーブルのリスト

```
unica_acclean -o "JanuaryCampaignsList.txt" -w campaignfolder -s  
"NAME='JanuaryCampaigns'" -r
```

この例は、キャンペーン・フォルダー「JanuaryCampaigns」内、および「JanuaryCampaigns」のすべてのサブフォルダー内のキャンペーンおよびフローチャートに関連付けられている一時ファイルと一時テーブルのリストを生成し、ファイル JanuaryCampaignsList.txt にそれを書き込みます。

例 2: フローチャート LASTRUNENDDATE による一時ファイルおよび一時テーブルのリスト

```
unica_acclean -o "LastRun_Dec312006_List.txt" -w flowchart -s  
"LASTRUNENDDATE < '31-Dec-06'"
```

この例は、すべてのフローチャート内の、LASTRUNENDDATE が 2006 年 12 月 31 日より前の一時ファイルと一時テーブルすべてのリストを生成し、ファイル LastRun_Dec312006_List.txt にそれを書き込みます。

注: すべての日付条件が、データベースにとって正しい日付形式で指定されていることを確認してください。

オブジェクト・タイプおよび条件によるファイルおよびテーブルの選択的削除

クリーンアップ・ユーティリティを使用して、オブジェクト・タイプおよび条件によって一時ファイルおよび一時テーブルを削除することができます。

オブジェクト・タイプおよび条件によってファイルおよびテーブルを選択的に削除するには:

```
unica_acclean -d -w {flowchart | campaign | session | sessionfolder |  
campaignfolder} -s <criteria> [-r]
```

例

例 1: キャンペーン・フォルダーによる一時ファイルと一時テーブルの削除

```
unica_acclean -d -w campaignfolder -s "NAME='JanuaryCampaigns'" -r
```

この例は、キャンペーン・フォルダー「JanuaryCampaigns」内、および「JanuaryCampaigns」のすべてのサブフォルダー内のキャンペーンおよびフローチャートに関連付けられている一時ファイルと一時テーブルを削除します。

例 2: フローチャート LASTRUNENDDATE による一時ファイルおよび一時テーブルの削除

```
unica_acclean -d -w flowchart -s "LASTRUNENDDATE < '31-Dec-06'"
```

この例は、すべてのフローチャート内の、LASTRUNENDDATE が 2006 年 12 月 31 日より前の一時ファイルと一時テーブルをすべて削除します。

重要: すべての日付条件が、データベースにとって正しい日付形式で指定されていることを確認してください。

キャンペーン・クリーンアップ・ユーティリティの構文

```
unica_acclean {-d|-o <list file name>}  
-w {flowchart | campaign | session | sessionfolder | campaignfolder |  
other} -s <criteria>  
[-u <user name>] [-p <password>] [-n <partition name>]  
[-l {low|medium|high|all}]  
[-f <log file name>]  
[-S <dataSource> -U <DB-user> -P <DB-password>]*
```

クリーンアップ・ユーティリティは、ユーザー名またはパスワードが指定される場合には、非対話式となります。ユーザー名が指定されない場合、ユーザー名とパスワードを求めるプロンプトがツールによって出されます。パスワードが指定されない場合、パスワードを求めるプロンプトがツールによって出されます。

Campaign クリーンアップ・ユーティリティのオプション

unica_acclean ユーティリティは、以下のオプションをサポートしています。

表 43. Campaign クリーンアップ・ユーティリティのオプション

オプション	構文	説明
-d	-d	一時テーブルおよび一時ファイルを削除します。すべてのフローチャート・ファイルがスキャンされ、その結果に基づいて一時ファイルおよび一時テーブルが判別されます。
-f	-f <log file name>	エラーが記録されるファイルの名前を指定します。このファイルは、 <PARTITION_HOME>/logs ディレクトリにあります。デフォルトでは、このファイルの名前は unica_acclean.log です。ログ・ファイルの名前を変更することは可能ですが、別の場所を指定することは現時点ではサポートされていません。
-h	-h	使用方法のヘルプを表示します。無効なコマンド・ラインの呼び出しでもヘルプは表示されます。
-i	-i <clean file name>	削除される項目をリストしているファイルを指定します。ベスト・プラクティスは、-o オプションを使用してクリーンアップ・ツールによって生成されたファイルと同じファイルを使用することです。
-l	-l {low medium high all}[-f <logFileName>]	ロギング・レベルおよびログ・ファイルの名前を指定します。レベルを指定しないと、デフォルトでは medium が使用されます。
-n	-n <partition name>	このオプションは、パーティションの名前を指定するために使用します。パーティション名が指定されていない場合は、デフォルトの「パーティション 1」が使用されます。
-o	-o <listfilename>	指定されたファイルにテーブルおよびファイルのリストを出力します。ただし、削除は行いません。

表 43. Campaign クリーンアップ・ユーティリティーのオプション (続き)

オプション	構文	説明
-P	-p	テーブル・マッピングをコンソールに出力します。
-p	-p <password>	-u オプションが使用される場合には、このオプションも使用する必要があります。このオプションは、-u オプションを使って指定したユーザーのパスワードを指定するために使用します。
-r	-r	このオプションは、campaignfolder オブジェクトまたは sessionfolder オブジェクトのいずれかで、-w オプションとの併用のみ可能です。 フォルダーがクリーンアップ対象として指定され、-r オプションが追加されると、unica_acclean ツールは指定されたフォルダーのすべてのサブディレクトリーに対して操作を実行します。フォルダーで -w オプションだけが使用される場合、unica_acclean は最上位フォルダーに対してのみ操作を実行します。
-S	-S <dataSource>	処理が行われるオブジェクトのデータ・ソースの名前を指定します。 -U <database_user> および -P <database_password> オプションと一緒に使用します。これらのオプションによって、Marketing Platform に保存された資格情報をオーバーライドしたり、ASMSaveDBAuthentication が FALSE に設定されているデータ・ソースに認証を提供したりできます。

表 43. Campaign クリーンアップ・ユーティリティのオプション (続き)

オプション	構文	説明
-s	-s <criteria>	-w オプションとともに使用して、クリーンアップの基準を定義します。これは SQL 照会として指定されます。SQL の LIKE 演算子を使用して、ワイルドカードに基づいて検索を行うことができます。 指定されたオブジェクトのデータ・テーブル列はすべて基準として使用できます。 • キャンペーン・フォルダーまたはセッション・フォルダーをオブジェクトとして指定する場合、条件は UA_Folder テーブルの列に基づきます。 • キャンペーンをオブジェクトとして指定する場合、条件は UA_Campaign テーブルの列に基づきます。 • フローチャートをオブジェクトとして指定する場合、条件は UA_Flowchart テーブルの列に基づきます。 • セッションをオブジェクトとして指定する場合、条件は UA_Session テーブルの列に基づきます。
-U	-U <DBUserName>	-S オプションによって指定されたデータ・ソースのユーザー・ログインを指定します。 -P オプション (このデータベース・ユーザーのデータベース・パスワードを指定する) と一緒に使用します。
-u	-u <user name>	-p オプションが使用される場合には、このオプションも使用する必要があります。このオプションは、ユーティリティを実行しているユーザーの IBM Unica Marketing ユーザー名を指定するために使用します。
-v	-v	クリーンアップ・ユーティリティに関するバージョン情報と著作権情報を表示します。

表 43. Campaign クリーンアップ・ユーティリティーのオプション (続き)

オプション	構文	説明
-w	-w {flowchart campaign session sessionfolder campaignfolder orphan} -s <criteria> [-r]	orphan オプションとともに使用される場合を除き、指定された条件に基づいて、指定されたオブジェクト・タイプに関連付けられている一時ファイルおよび一時テーブルを検索します。 orphan とともに使用される場合のみ、孤立した一時ファイルおよび一時テーブルを求めてシステム全体を検索します。 「orphan」を除くすべてのオプションで -s <criteria> が必須です。詳しくは、-s を参照してください。 オプションで、サブフォルダーを再帰的に検索する場合は、-r オプションを使用します。詳しくは、-r を参照してください。

Campaign レポート生成ユーティリティー (unica_acgenrpt)

unica_acgenrpt は、指定されたフローチャートからフローチャート・セル・レポートをエクスポートするためのコマンド・ライン・レポート生成ユーティリティーです。レポートは、フローチャートの .ses ファイルから生成されます。以下のタイプのセル・レポートを生成したりエクスポートしたりするには、unica_acgenrpt ユーティリティーを使用します。

- セル・リスト
- セル変数プロファイル
- セル変数クロス集計
- セル・コンテンツ

これらのレポートについて詳しくは、「*IBM Unica Campaign ユーザー・ガイド*」を参照してください。

エクスポート・ファイルのデフォルト・ファイル名は、フローチャート名に基づく固有のものです。指定されたディレクトリーに保存されます。その名前のファイルが既に存在する場合は上書きされます。デフォルトのファイル・フォーマットは、タブ区切りです。

注: エクスポート・ファイルには、フローチャートの .ses ファイルからの現行データが含まれます。unica_acgenrpt ユーティリティー実行時にフローチャートが .ses ファイルに書き込まれる場合、結果として生成されるレポート・ファイルに含まれるデータは、そのフローチャートの前回実行時のものである可能性があります。on-success トリガーを使用して unica_acgenrpt ユーティリティーを呼び出している場合、unica_acgenrpt の実行前に、フローチャートが .ses ファイルへの書き込みを完了するために必要な長さの時間を見込んだ適切な遅延が、スクリプトに含まれていなければなりません。 .ses ファイルを保存するのに必要な時間は、フローチャートのサイズや複雑度に応じて大きく異なります。

unica_acgenrpt ユーティリティーを使用するには、管理者役割のセキュリティ・ポリシー中に Run genrpt Command Line Tool の許可が必要です。セキュリティ・ポリシーと許可について詳しくは、3 ページの『第 2 章 IBM Unica Campaign でのセキュリティの管理』を参照してください。

ユースケース: フローチャート実行からのセル数の取得

時間の経過に伴うセル数を分析するには、unica_acgenrpt ユーティリティーを使用してフローチャートの実稼働実行からセル数を取得します。レポート・タイプには「セル・リスト」を指定します。

このデータ取得を自動化するには、フローチャートで on-success トリガーを使用して、unica_acgenrpt ユーティリティーを起動するスクリプトを呼び出します。
<FLOWCHARTFILENAME> トークンを使用して、フローチャートの .ses ファイルの絶対パス名を返します。データを分析で使用できるようにするには、結果として生成されるエクスポート・ファイルをテーブルにロードする別のスクリプトを使用します。

IBM Unica Campaign レポート生成ユーティリティーの構文

unica_acgenrpt ユーティリティーの構文は、以下のとおりです。

```
unica_acgenrpt -s <sesFileName> -h <partitionName> -r <reportType> [-p <name>=<value>]* [-d <delimiter>] [-n] [-i] [-o <outputFileName>] [-y <user>] [-z <password>] [-v]
```

IBM Unica Campaign レポート生成ユーティリティーのさまざまなオプション

unica_acgenrpt ユーティリティーでは、以下のオプションがサポートされています。

表 44. Campaign レポート生成ユーティリティーのさまざまなオプション

オプション	構文	説明
-s	-s <sesFileName>	処理を行う Campaign フローチャート (.ses) ファイルを指定します。ファイル名には、このフローチャート・ファイルの存在場所のパーティション (-h オプションを使用して定義されるもの) より下のパスが含まれていなければなりません。-s の有効な値の例を以下に示します。 "campaign/Campaign C00001_C00001_Flowchart 1.ses" <sesFileName> にワイルドカード文字を含めることにより、それに一致する複数のフローチャートを操作対象とすることが可能です。

表 44. Campaign レポート生成ユーティリティのさまざまなオプション (続き)

オプション	構文	説明
-h	-h <partitionName>	フローチャート・ファイル (-s によって指定される) が置かれているパーティションの名前を指定します。
-r	-r <reportType>	生成するレポートのタイプを指定します。有効な値は以下のとおりです。 • CellList (セル・リスト・レポート) • Profile (セル変数プロファイル・レポート) • XTab (セル変数クロス集計レポート) • CellContent (セル・コンテンツ・レポート)
-p	-p <name>=<value>	name=value のペアを使用して、レポートのパラメーターを指定します。 -p オプションは複数回指定可能です。それらは、-r オプションより後に指定しなければなりません。-p オプションでサポートされる有効な name=value ペアのリストについては、『unica_acgenrpt の -p オプションで使用するパラメーター』を参照してください。
-d	-d <delimiter>	出力ファイルの中で列区切りを指定します。デフォルトは TAB です。
-n	-n	出力ファイルの中で、レポート・データの前に列名を含めます。
-i	-i	出力ファイルの末尾に固有のテキスト ID を付加します。
-o	-o <outputFileName>	出力ファイルの名前を指定します。デフォルトは <sesFileName> の .ses を .csv で置き換えたものです。ワイルドカードを使用する場合、これは宛先ディレクトリーを指定します。
-y	-y <user>	Campaign のログイン・ユーザー名を指定します。
-z	-z <password>	ユーザー・ログインのためのパスワードを指定します。
-v	-v	ユーティリティのバージョン番号を表示して終了します。

unica_acgenrpt の -p オプションで使用するパラメーター

unica_acgenrpt ユーティリティの -p オプションを使用すると、セル変数プロファイル、セル変数クロス集計、およびセル・コンテンツの各レポートについて、name=value ペアを使用することにより、以下のパラメーターを指定することができます。

セル変数プロファイル・レポート

パラメーター名	使用法	説明
cell	必須	プロファイルを作成するセルの名前。
field	必須	セルのプロファイルを作成するために使用するフィールドの名前。
cell2	オプション	プロファイルを作成する付加的なセルの名前。
bins	オプション	レポートに含めるビンの数。指定する数が、異なるフィールド値の数より小さい場合、一部のフィールドが結合されて 1 個のビンになります。デフォルトは 25 です。
meta	オプション	メタタイプ別のプロファイルを作成するかどうかを指定します。有効な値は TRUE と FALSE です。デフォルトは TRUE です。

セル変数クロス集計レポート

パラメーター名	使用法	説明
cell	必須	プロファイルを作成するセルの名前。
field1	必須	セルのプロファイルを作成するために使用する最初のフィールドの名前。
field2	必須	セルのプロファイルを作成するために使用する 2 番目のフィールドの名前。
cell2	オプション	プロファイルを作成する付加的なセルの名前。
bins	オプション	レポートに含めるビンの数。指定する数が、異なるフィールド値の数より小さい場合、一部のフィールドが結合されて 1 個のビンになります。デフォルトは 10 です。
meta	オプション	メタタイプ別のプロファイルを作成するかどうかを指定します。有効な値は TRUE と FALSE です。デフォルトは TRUE です。

セル・コンテンツ・レポート

パラメーター名	使用法	説明
cell	必須	レポートに含めるセルの名前。
field	オプション	レポートに含めるフィールドの名前。付加的なフィールドを指定するには、複数回指定します。フィールドを指定しない場合、レポートにはオーディエンス・フィールドの値が表示されます。
records	オプション	レポートに含めるレコードの数。デフォルトは 100 です。

パラメーター名	使用法	説明
skipdups	オプション	ID 値が複製するレコードをスキップするかどうかを指定します。非正規化テーブルを使用している場合、このオプションを有効にすると便利です。有効な値は TRUE と FALSE です。デフォルトは FALSE です。

ActiveX クリーンアップ・ユーティリティー (uacflchk)

Campaign ActiveX クリーンアップ・ユーティリティー (uacflchk.exe) は、ユーザーが ActiveX 制御を使って Campaign ページへのアクセスを試行する際の「**オブジェクトがロードされていません / オブジェクトはこのプロパティまたはメソッドをサポートしてません**」エラーを解決するために設計されています。この問題は、ActiveX を実行するために必要なファイルが Windows Downloaded Program Files ディレクトリーにダウンロードされていないときによく起きます。

ユーティリティーは、検査モードとクリーン・モードの 2 つのモードで実行されます。まず検査モードでユーティリティーを実行して必要なアクションを確認し、その後、クリーン・モードでツールを実行します。

uacflchk.exe ファイルは Campaign インストールの下の tools\win32 ディレクトリーにあります。

ActiveX クリーンアップ・ユーティリティーの前提条件

uacflchk ユーティリティーを実行する前に、以下の要件を満たしている必要があります。

- uacflchk ユーティリティーは、クリーンアップを実行するマシンのファイル・システムとレジストリーにアクセスできなければなりません。クリーンアップを実行するマシンにそれをコピーするか、マップされたドライブからそれを実行します。
- ユーティリティーを実行する前に、すべてのブラウザーのウィンドウを閉じます。

ActiveX クリーンアップ・ユーティリティーの構文

uacflchk ユーティリティーの構文は、次のとおりです。

```
uacflchk
```

```
uacflchk /clean
```

```
uacflchk /clean /q
```

検査モードでの ActiveX クリーンアップ・ユーティリティの実行 (オプションなし)

uacflchk ユーティリティを検査モード (オプションなし) で実行すると、関連するレジストリー項目、依存関係、競合ファイル、および欠落ファイルのリストが返されます。これらのメッセージによって問題の所在が分かるので、適切なアクションを取ることができます。

まず検査モードでユーティリティを実行して必要なアクションを確認し、その後、クリーン・モードでツールを実行します。

ActiveX クリーンアップ・ユーティリティの検査モードのメッセージ

このリストは、uacflchk ユーティリティを検査モード (オプションなし) で実行したときに出力される可能性のあるメッセージと、各メッセージに対して取るべき処置を示しています。

- **メッセージ: <file> が <path> で見つかりました。**

意味: ファイルは、示されているパスに登録されています。

処置: ツールをクリーンアップ・モードで実行してください。

- **メッセージ: <path> に競合ファイルが見つかりました。**

意味: 予期しない場所にインストール済みファイルが見つかりました。

処置: これはおそらく問題にはなりませんが、情報として報告されます。

- **メッセージ: ファイル/ディレクトリーを削除できませんでした。**

意味: ファイルまたはディレクトリーの削除操作を実行できませんでした。ユーザーにファイル/ディレクトリーを削除するための十分な権限がないか、ファイル/ディレクトリーが使用中かのいずれかです。

処置: ユーザーに操作を行うための十分な権限があることを確認し、ファイルにアクセスしているアプリケーションがあれば、すべてシャットダウンしてください。

- **メッセージ: ダウンロード情報を取得できませんでした。**

意味: ダウンロード情報のレジストリーを照会しようとして、失敗しました。

処置: レジストリーにアクセスするための十分な権限がユーザーにあること、およびレジストリーが破損していないことを確認してください。

- **メッセージ: 正しくない依存関係が見つかりました。**

意味: 前のダウンロードが見つかりましたが、予期しないファイルが含まれていました。

処置: IBM Unica 技術サポートに連絡してください。

ActiveX クリーンアップ・ユーティリティのオプション

オプションを何も付けずに **uacflchk** ユーティリティを実行することもできますし (検査モード)、以下のオプションを指定して実行することもできます。

オプション	説明
/clean	ActiveX コンポーネントを求めて Windows レジストリー項目およびファイル・システムを検索します。 %WINDIR%Downloaded Program Files の下のレジストリー項目およびファイルを削除するかどうかを尋ねます。他のファイルも報告されますが、おそらく問題の原因にはならないので、削除されません。 /q オプションを指定して使用すると、プロンプトなしで削除します。
/q	プロンプトなしでファイルおよびレジストリー項目を削除します。 /clean オプションとともに使用されます。

データベース・テスト・ユーティリティ

Campaign は、以下のコマンド・ライン・データベース・テスト・ユーティリティをサポートしています。これを使用して、ターゲット・データベースへの接続をテストしたり、照会を実行したり、さまざまなタスクを実行したりすることができます。

- 『cxntest ユーティリティ』
- 197 ページの『odbctest ユーティリティ』
- 199 ページの『db2test ユーティリティ』
- 200 ページの『oratest ユーティリティ』

これらのユーティリティは、Campaign サーバー上の /Campaign/bin ディレクトリーにあります。

cxntest ユーティリティ

cxntest ユーティリティでは、ターゲット・データベースへの接続をテストすることができます。接続が確立された後、さまざまなコマンドを発行することができます。

cxntest ユーティリティを使用するには

1. Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、cxntest ユーティリティを実行します。
2. cxntest ユーティリティは、プロンプトから起動されます。プロンプトで以下の情報を入力する必要があります。
 - a. データベースの接続ライブラリーの名前
 - b. データ・ソースの名前
 - c. データベース・ユーザー ID
 - d. データベース・ユーザー ID に関連付けられたパスワード

ユーティリティは、選択の確認を求めるプロンプトは出しません。

3. 接続が成功した場合、プロンプトで次のコマンドを入力できます。

- `bprint[pattern]`

テーブルのリストの配列の取り出しを実行します (一度に 500 個)。オプションで、検索 *pattern* を指定することもできます。

- `describetable`

指定された *table* について説明します。各列名とそれに対応するデータ型、ストレージの長さ、精度、およびスケールを返します。

- `exit`

データベース接続を強制終了して、終了します。

- `help`

サポートされているコマンドのリストを表示します。

- `print [pattern]`

テーブルのリストを返します。オプションで、検索 *pattern* を指定することもできます。

- `quit`

データベース接続を強制終了して、終了します。

- `SQL_command`

1 つの有効な SQL コマンド、または一連の SQL コマンドを実行します。

odbctest ユーティリティー

odbctest ユーティリティーを使用すると、ターゲット・データベースへの Open DataBase Connectivity (ODBC) 接続をテストすることができます。接続が確立された後、さまざまなコマンドを発行することができます。これは、AIX、Solaris、Windows、および HP-UX システムでサポートされています (32 ビットのみ)。

注: Oracle データベースおよび DB2® データベースについては、それぞれ固有のユーティリティーを使用してください。

odbctest ユーティリティーを使用するには

1. Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、odbctest ユーティリティーを実行します。

odbctest ユーティリティーは、次のような接続可能データベースのリストを返します。

Registered Data Sources:

MS Access Database (Microsoft Access Driver (*.mdb))
dBASE Files (Microsoft dBase Driver (*.dbf))
Excel Files (Microsoft Excel Driver (*.xls))

2. odbctest ユーティリティーは、プロンプトから起動されます。プロンプトで以下の情報を正確に入力する必要があります。

- a. 接続先のデータベースの名前 (登録済みデータ・ソースのリストから取られる)。
- b. データベース・ユーザー ID
- c. データベース・ユーザー ID に関連付けられたパスワード

ユーティリティーは、選択の確認を求めるプロンプトは出しません。

3. データベースに正常に接続した後、`odbctest` ユーティリティーは次のようなメッセージを出力し、コマンド・プロンプトを表示します。

```
Server ImpactDemo conforms to LEVEL 1.
Server's cursor commit behavior: CLOSE
Transactions supported: ALL
Maximum number of concurrent statements: 0
For a list of tables, use PRINT.
```

4. プロンプトで以下のコマンドを入力できます。

- `bulk [number_of_records]`

返すレコードの数を設定します (`number_of_records` によって指定される)。デフォルトは 1 です。

- `descresSQL_command`

`SQL_command` によって指定された SQL コマンドによって返される列について説明します。

- `describepattern`

`pattern` によって指定されたテーブル (複数可) について説明します。対応するタイプ、データ型、ストレージの長さ、精度、およびスケールを返します。

- `exit`

データベース接続を強制終了して、終了します。

- `help`

サポートされているコマンドのリストを表示します。

- `print [pattern]`

テーブルのリストを返します。オプションで、検索 `pattern` を指定することもできます。

- `quit`

データベース接続を強制終了して、終了します。

- `SQL_command`

1 つの有効な SQL コマンド、または一連の SQL コマンドを実行します。

- `typeinfo`

サポートされているデータベースのデータ型のリストを返します。

db2test ユーティリティー

db2test ユーティリティーを使用すると、DB2 データベースへの接続をテストすることができます。接続が確立された後、さまざまなコマンドを発行することができます。

db2test ユーティリティーを使用するには

1. Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、db2test ユーティリティーを実行します。

db2test ユーティリティーは、接続可能なデータベース (登録済みデータ・ソース) のリストを返します。

2. db2test ユーティリティーは、プロンプトから起動されます。プロンプトで以下の情報を正確に入力する必要があります。

- 接続先のデータベースの名前 (登録済みデータ・ソースのリストから取られる)。
- データベース・ユーザー ID
- データベース・ユーザー ID に関連付けられたパスワード

ユーティリティーは、選択の確認を求めるプロンプトは出しません。

3. データベースに正常に接続した後、db2test ユーティリティーは次のようなメッセージを出力し、コマンド・プロンプトを表示します。

```
Server ImpactDemo conforms to LEVEL 1.  
Server's cursor commit behavior: CLOSE  
Transactions supported: ALL  
Maximum number of concurrent statements: 0  
For a list of tables, use PRINT.
```

4. プロンプトで以下のコマンドを入力できます。

- *describepattern*

pattern によって指定されたテーブル (複数可) について説明します。対応するタイプ、データ型、ストレージの長さ、精度、およびスケールを返します。

- *exit*

データベース接続を強制終了して、終了します。

- *help*

サポートされているコマンドのリストを表示します。

- *print [pattern]*

テーブルのリストを返します。オプションで、検索 *pattern* を指定することもできます。

- *quit*

データベース接続を強制終了して、終了します。

- *SQL_command*

1 つの有効な SQL コマンド、または一連の SQL コマンドを実行します。

- *typeinfo*

サポートされているデータベースのデータ型のリストを返します。

oratest ユーティリティ

oratest ユーティリティを使用すると、Oracle サーバーへの接続をテストすることができます。

oratest ユーティリティを使用するには

1. Campaign サーバーのコマンド・プロンプトから、oratest ユーティリティを実行します。
2. oratest ユーティリティは、プロンプトから起動します。プロンプトで以下の情報を正確に入力する必要があります。
 - a. 接続先の Oracle サーバーの名前。
 - b. データベース・ユーザー ID
 - c. データベース・ユーザー ID に関連付けられたパスワード

ユーティリティは、選択の確認を求めるプロンプトは出しません。

成功した場合、oratest ユーティリティは、「接続は正常に行われました」というメッセージを出力し、戻り値ゼロ (0) で終了します。

データベース・ロード・ユーティリティ

Campaign は、データベース・ロード・ユーティリティを使用するためのサポートを提供しています。このユーティリティを使用すると、ID リストを一時テーブルにブッシュしたりデータを再びデータベースにエクスポートしたりする際のパフォーマンスが向上します。この機能は、一般的なデータベース・ロード・ユーティリティのほとんどで作動します。ユーティリティは、データベース・ベンダーから直接入手できます。これらのユーティリティのライセンス・コピーの取得はユーザーの責任で行います。

Campaign ロード・サポートは、Marketing Platform の「構成」ページで定義される一連のプロパティによって制御されます。詳しくは、「*Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティでは、その使用時に制御ファイルを指定する必要もあります。Campaign は、構成する制御ファイル・テンプレートに基づいてファイルを動的に生成することができます。このファイルは一度構成するだけで十分です。ユーザー・インターフェースから変更を行う必要はありません。

Campaign でデータベースへのデータの取り込みを行う必要が生じた場合 (例えば、スナップショット・プロセス、またはメール・リストなどのコンタクト・プロセス、あるいは一時テーブルへの ID リストに関して)、以下を行います。

1. 一時データ・ファイルを固定幅または区切りテキストとして作成します。

LoaderControlFileTemplate プロパティで指定されている場合、データベースに送信する必要があるテンプレート・ファイルおよびフィールドのリストに基づいて一時制御ファイルが動的に作成されます。

2. LoaderCommand プロパティで指定されているコマンドを発行します。これは、データベース・ロード・ユーティリティーの実行可能ファイルの直接呼び出しの場合と、データベース・ロード・ユーティリティーを起動するスクリプトの呼び出し場合があります。
3. 一時データ・ファイルおよび一時制御ファイルをクリーンアップします。

この機能により、新規または空のデータベース表にデータをロードしたり、既存のデータベース表にデータを追加したりできるようになります。

注: Campaign は、既存のデータベース表内のレコードを更新するためのロード・ユーティリティーはサポートしていません。

高速ローダーで繰り返されるトークン

LoaderControlFileTemplate または LoaderControlFileTemplateForAppend を作成する際、アウトバウンド・テーブルのフィールドごとに一度ずつ、特別なトークンのリストが繰り返されます。次の表で、利用できるトークンが説明されています。

表 45. 高速ローダーで繰り返されるトークン

トークン	説明
<CONTROLFILE>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメーターで指定されたテンプレートに応じて Campaign が生成する一時制御ファイルへの絶対パスおよびファイル名に置き換えられます。
<DSN>	このトークンは、DSN プロパティの値に置換されます。DSN プロパティが設定されていない場合、<DSN> トークンは、このデータ・ソースのカテゴリ名で使われるデータ・ソース名に置換されます (<DATABASE> トークンの置換に使用されるのと同じ値)。
<DATABASE>	このトークンは、Campaign がデータをロードしているデータ・ソースの名前で置き換えられます。これは、このデータ・ソースのカテゴリ名で使われるのと同じデータ・ソース名です。
<DATAFILE>	このトークンは、ロード・プロセス中に Campaign によって作成される一時データ・ファイルへの絶対パスおよびファイル名で置き換えられます。このファイルは、Campaign の一時ディレクトリ UNICA_ACTMPDIR にあります。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<TABLE>	このトークンは廃止されていますが、後方互換のためにサポートされています。 <TABLENAME> を参照してください。バージョン 4.6.3 現在、<TABLE> の代わりにそれが使用されています。
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign がデータをロードしているデータベース表名で置き換えられます。これは、スナップショット・プロセスのターゲット・テーブルか、Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。

表 45. 高速ローダーで繰り返されるトークン (続き)

トークン	説明
<USER>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ソースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

これらの特別なトークンに加えて、すべての行に他の文字が含まれています。最後の行を除くすべての行に単一の文字を組み込む場合は、文字を不等号括弧で囲みます。この機能では、不等号括弧 (< >) 文字で単一の文字だけを囲むことができます。

これは、一般的には、フィールドのリストをコンマで区切るために使用されます。例えば、次の構文は、フィールド名のコンマ区切りリストを生成します。

```
<FIELDNAME><,>
```

コンマを囲む不等号括弧 (< >) 文字は、最後の行を除く、各行のすべての挿入フィールド名の末尾にコンマが存在している必要があることを示します。

どの文字シーケンスもこの要件に適合しないと、最後の行を含め、これが毎回繰り返されます。それで例えば、括弧付きの、各フィールド名の先頭にコロンを付けたフィールド名のコンマ区切りリストを生成するには、次の構文を使用します。

```
(
: <FIELDNAME><,>
)
```

コロンは不等号括弧 (< >) 文字で囲まれていないので、これは各行で繰り返されます。しかし、コンマは最後の行を除く各行に現れます。次のような出力が生成されます。

```
(
:FirstName,
:LastName,
:Address,
:City,
:State,
:ZIP
)
```

コンマは最後のフィールド名 (ZIP) の末尾には現れていませんが、コロンはすべてのフィールド名の先頭に現れています。

第 16 章 IBM Coremetrics と Campaign の統合

IBM Coremetrics® と Campaign が統合されると、IBM Coremetrics にあるオンライン・セグメントと関連データは、Campaign にあるオフライン・プロフィール・データと結合されます。Campaign ユーザーは、IBM Coremetrics で定義されたセグメントを選択して、Web アクティビティと行動を基に、マーケティング・キャンペーンのターゲットにできます。

統合システムを使用すると、次のような利点があります。

- Web アナリストは、Campaign によってターゲット設定されるセグメントを定義することにより、オンラインで把握できるトレンドを迅速にフォローアップできます。
- キャンペーン・マネージャーは、キャンペーン戦術をマーケティング担当者の要求に合わせて調整できます。
- ビジネス・マーケティング担当者は、クロスチャネル・キャンペーンの成功と ROI を測定することにより、キャンペーン戦術の追跡とフォローアップを行えます。
- オプションの eMessage とクリック後の分析ツールを構成すると、マーケティング・アナリストは、E メール・キャンペーンで顧客と見込み顧客をターゲット設定した後、それらのターゲットの動作を追跡できます。

IBM Coremetrics と Campaign を統合する方法

このトピックでは IBM Coremetrics と Campaign の統合方法を説明しています。これにより、IBM Coremetrics 製品で定義されたオンライン・セグメントをキャンペーンの中で使用できます。

IBM Coremetrics と Campaign の間の統合は、以下のような幾つかの構成要素に依存します。

- IBM Coremetrics API にアクセスできるようにして 2 つの製品間の統合点の役割を持つ統合サービス。
- どの IBM Coremetrics キーがどの Campaign オーディエンス ID に対応するかを Campaign に認識させるための変換テーブル。
- Campaign で統合サービスにアクセスするために必要な資格情報を使って構成された Marketing Platform ユーザー・アカウント。
- 統合サービス、変換テーブル、および資格情報について Campaign に通知するための構成設定。

以下の表は、必要なすべての構成要素を構成する方法を説明しています。

表 46. IBM Coremetrics と Campaign の統合

作業	詳細	資料
ユーザーが製品間で容易にナビゲートできるように、オプションで SSO を構成する。	シングル・サインオン (SSO) を使用すると、ユーザーが IBM Unica Marketing ユーザー・インターフェース内から IBM Coremetrics にアクセスするときに、ログインのプロンプトが表示されません。	IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド
IBM Coremetrics キーを Campaign オーディエンス ID に変換するための変換テーブルを構成する。	通常、この作業は、IT 担当者などの技術担当者によって行われます。 変換テーブルは、少なくとも 2 列で構成されています。1 つの列は IBM Coremetrics の registrationid (オンライン・キー) で、さらに Campaign オーディエンス ID (オフライン・キー) ごとに 1 つ以上の列があります。変換テーブルは、Campaign で選択が行われるユーザー・データ・ソースに対して構成する必要があります。 Campaign 構成設定でテーブル名を指定する必要があるため、それをメモしておいてください。	207 ページの『変換テーブルについて』
セグメント統合を構成する	統合を使用可能にする Campaign パーティションごとに、「設定」>「構成」> Campaign partition partition[n] Coremetrics を選択し、以下の設定を構成します。 • ServiceURL: 統合サービスを指定します (https://export.coremetrics.com/eb/segmentapi/1.0/api.do)。 • CoremetricsKey: 変換テーブルで使用する値を指定します (registrationid)。 • ClientID: お客様の会社に割り当てられる固有の IBM Coremetrics ID。 • TranslationTableName: 変換テーブルの名前。 • ASMUserForCredentials: 統合サービスにアクセスすることを許可された Marketing Platform アカウント。デフォルトは asm_admin です。 • ASMDatasourceForCredentials: ASMUserForCredentials 設定で指定された Marketing Platform アカウントに割り当てられるデータ・ソース。デフォルトは UC_CM_ACCESS です。	369 ページの『Campaign パーティション パーティション[n] Coremetrics』

表 46. IBM Coremetrics と Campaign の統合 (続き)

作業	詳細	資料
Marketing Platform アカウントに資格情報を割り当てる	「設定」>「ユーザー」を選択し、ASMUserForCredentials 構成設定で定義されているユーザーを選択し、「データ・ソースの編集」リンクをクリックしてから新しいデータ・ソースを追加します。 - データ・ソース名は、構成設定で定義された ASMDatasourceForCredentials と厳密に一致する必要があります (例えば、UC_CM_ACCESS など)。 「データ・ソース・ログイン」と「データ・ソース・パスワード」は、IBM Coremetrics クライアント ID に関連付けられている資格情報です。 この「データ・ソース」は、統合サービスにアクセスできるようにする資格情報を格納するために Marketing Platform が使用するメカニズムです。	IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド
変換テーブルをマップする。	IBM Coremetrics のデータを Campaign でアクセスできるようにする手段として、テーブルをマップします。 「設定」>「Campaign 設定」>「テーブル・マッピングの管理」を選択してからプロンプトに従い、ユーザー・テーブルが存在するユーザー・データベースに対応するデータ・ソース (ASMDatasourceForCredentials 用に定義した「データ・ソース」ではありません) を指定します。 変換テーブル、テーブル・フィールド、およびオーディエンス・レベルを選択します。 テーブル・マッピングをすべてのフローチャートでできるようにする場合は、それをデフォルトのカatalog (default.cat) に保管します。	209 ページの『変換テーブルのマッピング』

表 46. IBM Coremetrics と Campaign の統合 (続き)

作業	詳細	資料
フローチャートの中でどの Campaign ユーザーが IBM Coremetrics セグメントを使用できるかを指定する。	「設定」>「ユーザーの役割」&「権限」>「Campaign」>「partition[n]」>「Global Policy」を選択します。「役割の追加と権限の割り当て」をクリックしてから、「権限の保存と編集」をクリックします。「キャンペーン」の下にある「Coremetrics セグメントへのアクセス」のアクセス権限を調整します。 デフォルトでは、「フォルダー所有者」、「所有者」、および「管理」の各役割に対するアクセス権限は「付与」になり、「実行」、「設計」、および「レビュー」の各役割に対しては「付与しない」になります。 注: アクセス権限を決定するとき、SSO は考慮されません。シングル・サインオンを使用している場合でも、Campaign ユーザーが IBM Coremetrics セグメントにアクセスできるように設定するには、「グローバル・ポリシー」を設定してセグメントへのアクセス権限を付与する必要があります。	11 ページの『セキュリティ・ポリシーの実装』
Campaign の個々のパーティションに対して統合をオンにする。	「設定」>「構成」> Campaign partition partition[n] server internal UC_CM_integration を選択します。このオプションが「はい」に設定されている場合、「選択」プロセス・ボックスに、「IBM Coremetrics セグメント」を入力として使用するオプションが表示されます。	364 ページの『Campaign パーティション パーティション[n] サーバー (server) 内部 (internal)』
IBM Coremetrics 製品での権限を構成する。	Campaign 関連の権限が設定されていない場合、Campaign フローチャートの「選択」プロセス・ボックスで「IBM Coremetrics セグメント」を入力として使用できません。	IBM Coremetrics の製品資料。
IBM Coremetrics でセグメントを定義してそれらを Campaign で使用できるようにする。	以下の適切な IBM Coremetrics 製品を使用してセグメントを Campaign にエクスポートします。 • Web Analytics • Explore • Export	IBM Coremetrics の製品資料。

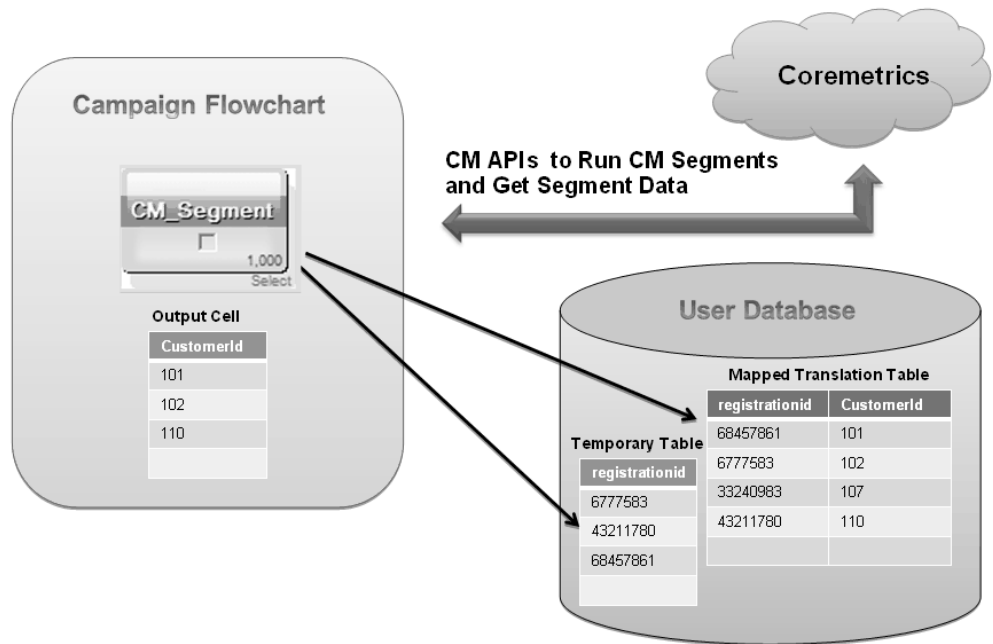
表 46. IBM Coremetrics と Campaign の統合 (続き)

作業	詳細	資料
フローチャートの中で Campaign ユーザーが IBM Coremetrics セグメントの使用を開始できるようになる。	「選択」プロセス・ボックスをフローチャートに追加し、「IBM Coremetrics セグメント」を「入力」として選択します。「クライアント ID」とセグメントを選択し、日付範囲を指定してからフローチャートを実行します。 「選択」プロセスが実行されたときに、次のようになります。 - 統合サービスを介してデータが IBM Coremetrics からプルされます。セグメント・データは、登録 ID のリストに過ぎません。 - マップされた変換テーブルを使用すると、登録 ID は Campaign オーディエンス ID に変換されます。 - これでオーディエンス ID は、ダウンストリーム・プロセスで使用できるようになります。	Campaign ユーザー・ガイド

変換テーブルについて

通常、変換テーブルの構成作業は、IBM Coremetrics と Campaign の統合の初期構成時に、IT 担当者などの技術担当者によって行われます。

変換テーブルは、どの IBM Coremetrics ID がどの Campaign オーディエンス ID に対応するかを Campaign に示す役割があります。変換テーブルは、入力として IBM Coremetrics セグメントが含まれるフローチャートを実行するときに必要です。このテーブルがなければ、Campaign は製品同士の間で ID を変換する方法が分からないためです。



変換テーブルは、以下のガイドラインに従う必要があります。

- 変換テーブルは、Campaign で選択が行われるユーザー・データ・ソースに対して構成する必要があります。このデータ・ソースでは、テーブル作成権限を許可する必要があります。これにより、Campaign は、セグメント定義を満たす ID のリストの一時テーブルを作成できます。
- 変換テーブルは、少なくとも 2 列で構成されています。1 つの列は IBM Coremetrics キーで、それに対応する Campaign オーディエンス ID として 1 つ以上の列があります。
- このリリースでは、IBM Coremetrics キーは、registrationid の値そのものにする必要があります。
- 変換テーブルの registrationid のデータ型は、Coremetrics の registrationID に対して定義されているものと同じデータ型である必要があります。例えば、いずれも VARCHAR である、など。
- Campaign オーディエンス ID は、統合の構成時にお客様によって定義されます。例えば、CustomerID などです。
- Campaign プライマリー・オーディエンスが複数の物理キー（複合キー）で構成される場合、変換テーブルに含まれる列は、そのオーディエンスと同数でなければなりません。例えば、プライマリー・オーディエンスがキー CustomerID と AccountID から構成されている場合、変換テーブルには、(1) IBM Coremetrics キー、(2) CustomerID、(3) AccountID の 3 つの列が必要です。この要件は、複合オーディエンスに対してマッピングしている場合に関係します。

注: パフォーマンスと保管時の利便性を考慮すると、ベスト・プラクティスは単一キー・オーディエンスを使用することです。

- 変換テーブル名とそのテーブルで定義される IBM Coremetrics キー (registrationid) は、必ず Campaign 構成設定で指定しておく必要があります。

変換テーブルで使用される値は、構成設定で定義される値と厳密に一致する必要があります。 369 ページの『Campaign | パーティション | パーティション[n] | Coremetrics』を参照してください。

- 変換テーブルにデータを設定する方法は、それぞれのお客様の具体的な要件と構成によって異なります。どの IBM Coremetrics 登録 ID がどの Campaign オーディエンス ID と一致するかを特定できるようにするための共通ロジックを決定する必要があります。このプロセスは、実装を行うパートナーに支援してもらうことができます。
- 変換テーブルは、Campaign でマップされていなければなりません。『変換テーブルのマッピング』を参照してください。
- フローチャートが実行されるとき、Campaign は、マップされた変換テーブルにおいて IBM Coremetrics キーの数と Campaign オーディエンス ID の数の間に不一致があれば検出します。この不一致状態は、例えば ETL ルーチンがまだ実行中の場合に起こることがあります。このような場合、Campaign は、マップされた変換テーブルに更新済みレコードが含まれることを検証するように求めるメッセージをフローチャート・ログ・ファイルに書き込みます。この状態を解決するには、社内ポリシーに従ってオンライン・キーとオフライン・キーを (再度) 一致させ、変換テーブルに最新のデータを再設定します。ユーザーは、マップされた変換テーブルが更新された後に、フローチャートを再実行する必要があります。

変換テーブルのマッピング

変換テーブルをマップすると、IBM Coremetrics のセグメント・データに Campaign でアクセスできるようになります。テーブル・マッピングにより、Campaign が使用するデータ・ソース、変換テーブルの名前と場所、テーブル・フィールド、オーディエンス・レベル、およびデータが識別されます。

テーブルをマップする前に、変換テーブルを構成し、統合設定を構成し、Marketing Platform アカウントに資格情報を割り当てる必要があります。手順については、203 ページの『IBM Coremetrics と Campaign を統合する方法』を参照してください。

通常、この作業は、IBM Coremetrics と Campaign の統合の初期構成時に、IT 担当者などの技術担当者によって行われます。ただし、適切な権限を持つユーザーであれば誰でも、任意の時点でテーブルのマッピングもしくは再マッピングを行うことができます。

1. 必要なユーザー・テーブルにアクセスできるように Campaign が正しく構成されていることを確認します。28 ページの『ユーザー・テーブルのアクセスをテストする方法』を参照してください。
2. 32 ページの『ユーザー・テーブルの作業』の手順とガイドラインに従って、変換テーブルをマップします。

要約すると、新しいベース・レコード・テーブルをマップして、フローチャートのプロセスからデータにアクセスできるようにします。新しいベース・レコード・テーブルは、フローチャートを編集するときにマップ (作成) できます (「管理」>「テーブル」を使用)。あるいは、「設定」>「Campaign 設定」>「テーブル・マッピングの管理」を選択してマップすることもできます。

3. テーブル・カタログにマッピング情報を保存して再利用できるようにします。このようにすると、テーブル・マッピングの作業は 1 回行うだけで済むので、IBM Coremetrics セグメントを組み込む Campaign ユーザーは、保存されたカタログをロードしてマッピング情報を直接取得することができます。この情報をすべてのフローチャートで使えるように設定するには、それをデフォルトのカタログ (default.cat) に保管します。 49 ページの『テーブル・カタログの作業』を参照してください。
4. 物理テーブルが変更されたとき (例えば、列の追加や削除などが行われたとき) には、テーブルを再マップする必要があります。テーブルを再マップしなかった場合、IBM Coremetrics セグメントを使用するフローチャートの実行時に、テーブル・スキーマが変更されたことを示すエラーが返されます。

重要: テーブルをマップまたは再マップするとき、テーブル定義ウィザードで割り当てられた「**IBM Unica Campaign テーブル名**」は、Campaign 構成設定で定義された TranslationTableName と厳密に一致する必要があります (369 ページの『Campaign | パーティション | パーティション[n] | Coremetrics』を参照してください)。テーブル定義ウィザードを使用するときにテーブル名を編集しなければ、名前は一致します。

第 17 章 Campaign を非 ASCII データ用に構成する

Campaign および PredictiveInsight は、ローカライズされたデータと米国以外のロケールの使用をサポートします。同じ IBM Unica アプリケーション・インストール済み環境の中で、ユーザーに合わせて複数のロケールを使用できます。非 ASCII データ、米国以外のロケール、またはユーザー指定のロケールを正しく処理するようアプリケーションを確実にセットアップするには、特定の構成タスクをいくつか実行する必要があります。実際のデータとロケールに適合するようシステムを完全に構成して検査を完了するまでは、IBM Unica アプリケーションを使用しないよう強くお勧めします。アプリケーションの新規インストール時にこれらの構成手順を実行することをお勧めします。

非 ASCII データまたは非 US ロケールの使用について

構成手順のいずれかを実行する前に、IBM Unica Marketing アプリケーションのデータとロケールの構成に適用されている基本概念を理解する必要があります。このセクションには、以下のトピックが含まれます。

- 『文字エンコードについて』。
- 『非 ASCII データベースとの相互作用について』。
- 213 ページの『複数ロケール・フィーチャーについて』。

文字エンコードについて

文字エンコードは、人間の言語をコンピューター上で表すための手段です。異なる言語を表すことを目的として、さまざまなエンコードが使用されます。非 ASCII 言語を扱うように IBM Unica アプリケーションを構成するためには、テキスト・データを保管するファイルとデータベースの両方について、使用される文字エンコードを理解する必要があります。テキスト形式によっては、文字エンコードに特殊ケースが存在します。詳しくは、212 ページの『文字ベースのフィールド内のテキストのエンコード』を参照してください。

サポートされるエンコードは、387 ページの『Campaign での文字エンコード』にリストされています。

非 ASCII データベースとの相互作用について

アプリケーションがデータベースと通信する場合、アプリケーションとデータベース間のいくつかの言語依存領域を理解する必要があります。これには、以下の領域が含まれます。

- 日時フィールドの形式
- 文字ベースのフィールド内のテキストのエンコード
- SQL SELECT ステートメントの ORDER BY 節で必要なソート順

Campaign と PredictiveInsight はデータベース・クライアントと直接通信し、クライアントがデータベースと通信します。データベースごとに言語依存データの扱いが

異なります。ご使用のデータベース・サーバーおよびクライアントで使われるエンコードと日付形式を理解し、これらの設定に応じて IBM Unica アプリケーションを正しく構成する必要があります。

日時フィールドの形式

日付フィールドの形式には、以下のようなさまざまな特性があります。

- 日、月、年の順序
- 日、月、年の間の区切り文字
- 完全に記述した日付の表記
- カレンダーのタイプ (グレゴリオまたはユリウス)
- 曜日の省略名と完全な名前
- 月の省略名と完全な名前

時刻フィールドの形式には、以下のようなさまざまな特性があります。

- 時間形式 (例えば、12 時間形式または 24 時間形式)
- 分と秒の表記
- 午前/午後を表すロケール固有の標識

重要: 複数ロケール・フィーチャーを使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用すべきではありません。その代わり、月を表すために数値を使用する区切り形式または固定形式を使用するようにしてください。日付形式について詳しくは、392 ページの『日付と時刻の形式』を参照してください。複数ロケール・フィーチャーについて詳しくは、213 ページの『複数ロケール・フィーチャーについて』を参照してください。

日付と時刻の形式は、SQL ステートメントの中や、データベースによって返されるデータ (結果セットと呼ばれる) の中に現れることがあります。データベース・クライアントによっては、SQL ステートメント (出力) と結果セット (入力) で異なる形式をサポートしたり必要としたりするものもあります。Campaign の「構成」ページには、さまざまな形式それぞれのパラメーター (DateFormat、DateOutputFormatString、DateTimeFormat、DateTimeOutputFormatString) があります。

文字ベースのフィールド内のテキストのエンコード

CHAR や VARCHAR などのテキスト・ベースのフィールドのデータには、特定の文字エンコードが使用されます。データベースが作成されると、データベース全体で使用されるエンコードが指定される場合があります。さまざまな文字エンコードのうちの 1 つをデータベース全体規模で使用するよう Campaign と PredictiveInsight を構成することができます。列ごとのエンコードはサポートされていません。

最新のデータベースによく見られる 1 つの特徴として、データベースのエンコードとアプリケーションが使用するエンコード間のトランスコードをデータベース・クライアントが行うという点が挙げられます。これは、アプリケーションが何らかの形式の Unicode を使用し、一方データベースは言語固有のエンコードを使用する場合によく行われます。

複数ロケール・フィーチャーについて

Campaign は、単一インストールで複数の言語とロケールをサポートします。

Campaign には、インストール時にデフォルトの言語とロケールが設定されますが、必要に応じて IBM Unica Marketing でユーザーごとに個別のロケール設定を設定できます。

ユーザーのロケール設定を設定することはオプションです。ユーザーの優先ロケールが IBM Unica Marketing で明示的に設定されない限り、そのユーザー・レベルの「優先」ロケールは存在しません。そのユーザーがログインすると、Campaign は IBM Unica Marketing で設定されたスイート・レベルのロケールを使用します。

ユーザーの優先ロケールが明示的に設定された場合、その設定はスイート・レベルの設定をオーバーライドします。このユーザーが Campaign にログインすると、そのユーザーの優先する言語とロケールでユーザー・インターフェースが表示されます。この設定は、セッションが終了する（つまり、ユーザーがログアウトする）まで適用されます。したがって、複数ロケール・フィーチャーは、複数のユーザーが Campaign にログインして、それぞれの優先する言語とロケールで同時に作業することを可能にします。IBM Unica Marketing でのユーザー・ロケール設定の設定について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

複数ロケール機能のシステムを構成するには、221 ページの『複数ロケール用の Campaign の構成』を参照してください。そのセクションのタスクは、Campaign を非 ASCII 言語または非 US ロケール用に構成した後に行います。

重要: 複数ロケール・フィーチャーを使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用すべきではありません。代わりに、月を表す数値が含まれる区切り形式または固定形式を使用してください。

ユーザー・ロケール設定の影響を受けない領域

Campaign での表示のすべての領域がユーザー・ロケール設定で制御されるわけではありません。以下の領域は、ユーザー・ロケール設定の影響を受けません。

- Campaign インターフェースのうち、ユーザー・コンテキストのない部分 (例えば、ユーザーがログインする前に表示されるログイン・ページ)。インターフェースのこのような部分は、Campaign のデフォルト言語で表示されます。
- ユーザー・インターフェース内のユーザー定義項目は、ユーザー・データベースから読み取られる場合 (例えば、カスタム属性や外部属性)、その元のデータベース言語でのみ表示されます。
- データ入力 -- Unicode エンコードを指定してシステム・テーブルが正しくセットアップされていれば、ロケール・セットアップに関係なく、任意の言語でデータを Campaign に入力できます。
- Campaign コマンド・ライン・ツール -- これらは Campaign のデフォルト言語で表示されます。Campaign のデフォルト言語は、システムの LANG 環境変数で指定した言語でオーバーライドできます。LANG 環境変数を変更した場合、変更を有効にするためには、以下の Campaign プログラムを新たに起動する必要があります。

– install_license

- svrstop
- unica_aclsnr
- unica_sesutil
- unica_actrg
- unica_svradm

注: Windows では、言語の設定と地域の設定が一致しなければなりません。地域の設定は Windows のすべての非 Unicode プログラムに影響するので、明示的に設定する必要があります。

複数ロケール・フィーチャーの制限

複数ロケール・フィーチャーには、以下の制限があります。

- 日本語オペレーティング・システムではサポートされません。単一ロケールを指定して Campaign を日本語 OS 上にインストールする場合は、IBM Unica 技術サポートにお問い合わせください。

注: 日本語以外のオペレーティング・システム環境にインストールされた複数ロケール・フィーチャーは、ユーザー・ロケール設定として ja を適切にサポートします。

- これはすべての IBM Unica アプリケーションによってサポートされるわけではありません。複数ロケールのサポートについては、各アプリケーションの資料を参照してください。
- Campaign の複数ロケール・インストールでは、ファイル名が混合言語になっている場合や、コマンド・シェル言語 (エンコード) がファイル名のエンコードと一致しない場合は、コマンド・ラインに表示されるファイル名が文字化けする可能性があります。
- Windows プラットフォーム上の Campaign の複数ロケール・インストールは、NTFS ドライブ上でのみサポートされます。FAT32 は Unicode 文字セットをサポートしないためです。
- セル・プロファイル・レポートはローカライズされません。ロケールに関係なく英語のままです。

非 ASCII 言語または米国以外のロケール用に Campaign を構成する

ローカライズされたデータまたは非 ASCII ロケール用に Campaign を構成するには、まず、211 ページの『非 ASCII データまたは非 US ロケールの使用について』をすべてお読みください。次に、以下のリストにあるタスクをすべて完了します。それぞれの手順は、このセクションの後の部分で詳しく説明されています。

1. 215 ページの『オペレーティング・システムの言語と地域の設定』。
2. 216 ページの『Web アプリケーション・サーバーのエンコード・パラメーターの設定 (WebSphere のみ)』。
3. 216 ページの『Campaign の言語とロケールのプロパティ値の設定』。
4. 217 ページの『システム・テーブルのマップ解除と再マップ』。
5. 217 ページの『データベースおよびサーバーの構成の検査』。

重要: これらのタスクおよび手順のどれもスキップしないでください。手順をスキップした場合、誤った構成または不完全な構成になる可能性があり、エラーやデータ破損の原因となることがあります。

オペレーティング・システムの言語と地域の設定

Campaign Sever を実行しているサーバー、および Campaign Web アプリケーションがデプロイされているシステムで、オペレーティング・システムの言語と地域の設定を構成します。

注: さらに、データベースによっては、データベースがインストールされているマシン上でオペレーティング・システムの言語とロケールを設定する必要があることがあります。それがどうかどうか判別するには、データベースの資料を参照してください。

UNIX での言語とロケールの設定について

UNIX システムでは、適切な言語がインストールされている必要があります。必要な言語が AIX、HP、または Solaris マシンでサポートされているかどうか判別するには、以下のコマンドを使用します。

```
# locale -a
```

このコマンドにより、システムでサポートされるすべてのロケールが戻されます。なお、Campaign では X Fonts およびトランスレーションのサポートをインストールする必要がないことに注意してください。

必要な言語がまだインストールされていない場合、以下の情報源を使用して、サポートされる UNIX バリエーションを構成し、特定の言語を扱うようにします。

- Solaris 9 International Language Environments Guide (<http://docs.sun.com/app/docs/doc/806-6642>)
- AIX 5.3 ナショナル・ランゲージ・サポート・ガイドおよびリファレンス (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/pseries/v5r3/index.jsp?topic=/com.ibm.aix.nls/doc/nlsgdrf/nlsgdrf.htm>)
- HP-UX 11 Internationalization Features White Paper (<http://docs.hp.com/en/5991-1194/index.html>)

Windows での言語とロケールの設定について

Windows システムの地域と言語のオプションで、必要な言語がまだ構成されていない場合は、直ちにそれを行ってください。Windows の言語設定についての情報が必要な場合、<http://www.microsoft.com/globaldev/handson/user/xpintlsetup.msp> を参照してください。

このタスクを完了するにはシステム・インストール CD が必要になることがあります。

注: 言語設定を変更した後、Windows システムを必ず再始動してください。

Web アプリケーション・サーバーのエンコード・パラメーターの設定 (WebSphere のみ)

WebSphere® の場合に限り、非 ASCII エンコードで Campaign を使用する場合には、アプリケーション・サーバーでエンコード用に UCS Transformation Format を使用させるために、JVM 引数として `-Dclient.encoding.override=UTF-8` を設定する必要があります。

これを行う詳しい方法については、IBM WebSphere の資料を参照してください。

Campaign の言語とロケールのプロパティ値の設定

以下のタスクを Campaign で実行する方法を制御する構成パラメーター値を設定するには、Marketing Platform を使用します。

- テキスト・ファイルおよびログ・ファイルのデータの読み取り/書き込み
- データベース内の日付、時間、およびテキスト・フィールドの読み取り/書き込み
- データベースから受け取ったテキストの処理

Campaign Web アプリケーションの構成内容は、翻訳された Campaign メッセージ (例えば Campaign ユーザー・インターフェースのテキスト)、およびアプリケーションの Web ページ上の日付形式、数値、通貨記号で使われる言語とロケールを決定します。また、フローチャート・エディターの初期化で表示言語が使用されるため、非 ASCII テキストでフローチャートを表示できるようにするためにも、これが重要です。

注: Campaign では非 ASCII の列名、テーブル名、データベース名がサポートされます。ただし、NCHAR、NVARCHAR などの列は SQL Server データベースでのみサポートされます。DB2 では、NCHAR および NVARCHAR 形式の列は通常のテキスト・フィールドのように扱われます。Oracle では、数値フィールドとして扱われます。

Marketing Platform にログインして、以下のプロパティを構成します。今後の参考のために、これらの値を記録してください。これらのプロパティについては、「*Campaign インストール・ガイド*」を参照してください。

- キャンペーン > `currencyLocale`
- キャンペーン > `supportedLocales`
- キャンペーン > `defaultLocale`
- Campaign > `partitions` > `partition[n]` > `dataSources` > `[data_source_name]` > `DateFormat`
- Campaign > `partitions` > `partition[n]` > `dataSources` > `[data_source_name]` > `DateOutputFormatString`
- Campaign > `partitions` > `partition[n]` > `dataSources` > `[data_source_name]` > `DateTimeFormat`
- Campaign > `partitions` > `partition[n]` > `dataSources` > `[data_source_name]` > `DateTimeOutputFormatString`
- Campaign > `partitions` > `partition[n]` > `dataSources` > `[data_source_name]` > `EnableSelectOrderBy`

- Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > ODBCUnicode
- Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name]> StringEncoding
- Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name]> SuffixOnCreateDateField
- Campaign > partitions > partition[n] > server > encoding > stringEncoding
- Campaign > partitions > partition[n] > server > encoding > forceDCTOneBytePerChar
- キャンペーン > unicaACLListener > logStringEncoding
- キャンペーン > unicaACLListener > systemStringEncoding

システム・テーブルのマップ解除と再マップ

言語依存のいずれかのパラメーターが正しく設定されていない場合、Campaign の「管理」領域でシステム・テーブルをマップするときにシステム・テーブルを構成するのが難しくなる可能性があります。ベスト・プラクティスとしては、すべてのパラメーターを設定した後、データ・ソース内のすべてのテーブルをマップ解除して、ログアウトし、再びログインしてすべてのテーブルを再びマップするのが適切です。Campaign では、データ・ソースがもはや使用されなくなるまで (つまりマップ解除されるまで)、データ・ソースに関する既存の設定が保持されます。

データベースおよびサーバーの構成の検査

キャンペーンその他のオブジェクトを作成し始める前に、データベースとサーバーの設定が正しく構成されていることを確認する必要があります。

正しく構成されていることを確認するには、以下の検査を実行してください。

- 『データベース構成の検査』
- 218 ページの『属性テーブルが正しく構成されていることの検査』
- 218 ページの『ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むキャンペーンおよびフローチャートの検査』
- 219 ページの『ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むフローチャート入出力の検査』
- 220 ページの『正しい言語ディレクトリーが使用されることの検査』
- 220 ページの『カレンダー・レポートでの日付形式の検査』
- 220 ページの『ロケールの通貨記号が正しく表示されることの検査』

データベース構成の検査

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。「キャンペーン設定」ページが表示されます。
2. 「データ・ソース・アクセスの表示」を選択します。
3. 「データベース・ソース」ダイアログで、データ・ソース名を選択します。

データベースのタイプと構成設定を含む、データ・ソースの詳細情報が表示されます。

4. 「StringEncoding」プロパティまでスクロールダウンして、その値が、Marketing Platform の構成ページの「dataSources」>「StringEncoding」で設定した値と同じであることを確認します。
5. 想定されるエンコードでない場合は、データベース表を再マップして、この検査を再び実行してください。

属性テーブルが正しく構成されていることの検査

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。
「キャンペーン設定」ページが表示されます。
2. 「テーブル・マッピングの管理」を選択します。
3. 「テーブル・マッピング」ダイアログ内の Unica システム・テーブルのリストで、属性定義テーブル (UA_AttributeDef) を選択して「参照」をクリックします。
4. 「属性定義テーブル」ウィンドウで、非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。

ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むキャンペーンおよびフローチャートの検査

1. Campaign では、次のようなガイドラインに従ってキャンペーンを作成してください。
 - ・ 名前には ASCII 文字だけを使用しますが、他のフィールド（「説明」、「目的」などのフィールド）には非 ASCII 文字を使用します。
 - ・ 「期間」フィールドに表示されるデフォルトの日付は、ロケールの日付形式で示される必要があります。カレンダー・ツールを使用して、それぞれの「期間」フィールドで新しい日付を選択してください。その際、「日」が間違っても「月」として表示されてもすぐに識別できるよう、「12」より大きい「日」を選択します。
 - ・ カレンダー・ツールを使って選択した日付が、フィールドに正しく表示されることを確認します。
 - ・ カスタム・キャンペーン属性が既に存在する場合、デフォルトのロケールやユーザー・ロケールとは無関係に、データベースのエンコード方式でそれらのフィールド・ラベルが表示される必要があります。
2. 基本的なキャンペーン・フィールドが完成したら、「保存とフローチャートの追加」をクリックします。
3. デフォルトのフローチャート名を受け入れますが、「フローチャートの説明」フィールドでは非 ASCII 文字を使用します。
4. 「保存とフローチャートの編集」をクリックします。
5. キャンペーンとフローチャートが正常に保存されていることを確認します。また、キャンペーンやフローチャートのラベルに非 ASCII 文字が含まれる場合、それらが正しく表示されることを確認します。
6. キャンペーンの「サマリー」タブで「編集」をクリックして、非 ASCII 文字を使用するようキャンペーン名を変更します。
7. 「変更の保存」をクリックして、非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。

8. 作成したばかりのフローチャートを選択し、「編集」をクリックして、非 ASCII 文字を使ってフローチャートの名前を変更します。
9. 「変更の保存」をクリックして、非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。

ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むフローチャート入出力の検査

1. 218 ページの『ASCII 文字と非 ASCII 文字を含むキャンペーンおよびフローチャートの検査』で作成したテスト・フローチャートの中で、「編集」をクリックします。
2. フローチャートに選択プロセスを追加し、以下のガイドラインに従ってそれを構成します。
 - ・「入力」フィールドで、マップされるユーザー・テーブルを選択します。選択したテーブルにある使用可能なフィールドが「選択可能なフィールド」領域に表示されます。
 - ・非 ASCII 文字を含んでいることが分かっているフィールドを 1 つ選択して、「プロファイル」をクリックします。
 - ・非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。
3. 同じ選択プロセス構成で、別の検査を次のように行います。今回は非 ASCII 文字を含むフラット・ファイルを入力として使用します。
 - ・「入力」フィールドで、非 ASCII 文字を使用しているフラット・ファイルを選択します。選択したファイルにある使用可能なフィールドが「選択可能なフィールド」領域に表示されます。
 - ・非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。
4. 「選択プロセス設定」ウィンドウの「全般」タブの「プロセス名」フィールドで、デフォルトの名前から非 ASCII 文字を含む名前に置き換えて「OK」をクリックします。
5. プロセスで、非 ASCII のプロセス名が正しく表示されることを確認します。
6. フローチャートにスナップショット・プロセスを追加して、既存の選択プロセスから入力を受け入れるようにそれを接続します。
7. 「エクスポート先」でファイルにエクスポートするようスナップショット・プロセスを構成します。
8. 「選択」>「スナップショット」フローチャートを実行して、指定された出力ファイルを見つけます。
9. 出力の表示が正しいことを確認します。
10. フローチャートにスケジュール・プロセスを追加して、カスタム実行を次のように構成します。
 - ・「プロセス構成」ウィンドウで、「実施頻度」フィールドから「カスタム設定」を選択します。
 - ・「カレンダー」を使って日時を指定します。日付では、「日」が間違っても「月」として表示されてもすぐに識別できるよう、「12」より大きい「日」を選択してください。
 - ・カレンダー・ツールを閉じる前に日時を保存するために、先に「適用」をクリックした後、「OK」をクリックします。
11. 「日時指定」フィールドで日時が正しく表示されることを確認します。

12. 「プロセス構成」ウィンドウを閉じて「保存して終了」をクリックします。
13. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ページが表示されます。
14. 「テーブル・マッピングの管理」を選択します。
15. 「テーブル・マッピング」ウィンドウ内の Unica システム・テーブルのリストで、UA_Campaign テーブルを選択して「参照」をクリックします。
16. 「キャンペーン・テーブル」ウィンドウで、非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。
17. 「テーブル・マッピング」ウィンドウで UA_Flowchart テーブルを選択して、非 ASCII 文字が正しく表示されることを確認します。
18. この検査が正常に完了したら、テスト用のキャンペーンとフローチャート、および検査に使ったファイルをすべて削除してください。

正しい言語ディレクトリーが使用されることの検査

1. Campaign で、「分析」>「カレンダー・レポート」>「キャンペーン・カレンダー」を選択します。

キャンペーンのカレンダーが表示されます。レポートの右側に縦に表示される時間描写セクター (日/週/2 週/月) がイメージであることに注意してください。

2. イメージを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
3. イメージの「プロパティ」ウィンドウで、イメージのアドレス (URL) を調べます。

アドレスは、例えば次のとおりです。

`http://localhost:7001/Campaign/de/images/calendar_nav7.gif`

これは言語とロケールの設定がドイツ語 (de) であることを示しています。

4. 言語とロケールの設定が、デフォルトのアプリケーション設定またはユーザー・ロケール設定 (存在する場合) のいずれかに一致することを確認します。

カレンダー・レポートでの日付形式の検査

1. Campaign で、「分析」>「カレンダー・レポート」>「キャンペーン・カレンダー」をクリックします。
2. 右側の「日」、「週」、「2 週」、「月」の各タブをクリックして、このレポートでの日付形式が正しいことを確認します。

ロケールの通貨記号が正しく表示されることの検査

1. 「設定」>「キャンペーン設定」を選択します。

「キャンペーン設定」ウィンドウが表示されます。

2. 「オファー・テンプレートの定義」を選択します。
3. 新規作成します。「新規オファー・テンプレート (手順 2/3)」ページで、「使用可能な標準属性およびカスタム属性」リストから「オファー当たりのコスト」を選択して、それを「選択した属性」リストに移動します。

4. 「次へ」をクリックして、「新規オファー・テンプレート (手順 3/3)」ページで、「パラメーター化された属性」の下にある「オファー当たりのコスト」属性フィールドを調べます。ロケールに適した通貨記号が括弧の中に正しく表示されることを確認します。
5. この検査が正常に完了したら、オファー・テンプレートを作成する必要はないため、「キャンセル」をクリックしてください。

複数ロケール用の Campaign の構成

複数のロケール用に Campaign を構成するには、複数のロケールをサポートするようシステム・テーブルを構成する必要があります。まず、システム・テーブルの作成時に適切なユニコード・バージョンのデータベース作成スクリプトを実行します。次に、データベースの種類に応じて特定のエンコード・プロパティー、日時の形式、環境変数などを構成します。

始める前に: Campaign がインストールされている必要があります

このセクションの残りの部分では、次のような想定のもとで情報が記載されています: (1) Campaign が既にインストールされている、しかも (2) データベース・タイプに適切なユニコード・バージョンのデータベース作成スクリプトを使って Campaign システム・テーブルが作成された。ユニコード・バージョンは <CAMPAIGN_HOME>%ddl¥unicode ディレクトリーの中にあります。

SQL Server での複数ロケールの構成

IBM Unica Marketing にログインして、以下の表にリストされているエンコード・プロパティーを構成します。ここに示されているようにプロパティー値を設定してください。

プロパティー	値
Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > StringEncoding	WIDEUTF-8
Campaign > partitions > partition[n] > server > encoding > stringEncoding	UTF-8
キャンペーン > unicaACListener > logStringEncoding	UTF-8
キャンペーン > unicaACListener > systemStringEncoding	UTF-8。必要に応じて複数のエンコードをコンマで区切って設定できます。ただし一連のエンコードの中で UTF-8 を常に最初に保ってください。例えば UTF-8,ISO-8859-1,CP950 とします。
Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > ODBCUnicode	UCS-2

日時の形式を指定する構成プロパティーでは、デフォルト値を受け入れます。

Oracle での複数ロケールの構成

複数ロケール用に構成するとき、システム・テーブルが Oracle である場合には、エンコード・プロパティ、日時の設定、環境変数、および Campaign Listener の始動スクリプトを構成します。

エンコード・プロパティの構成 (Oracle)

Marketing Platform にログインして、以下の表にリストされているエンコード・プロパティを構成します。ここに示されているようにプロパティ値を設定してください。

プロパティ	値
キャンペーン > パーティション > パーティション[n] > dataSources > [data_source_name] > StringEncoding	UTF-8
キャンペーン > パーティション > パーティション[n] > サーバー > エンコーディング > stringEncoding	UTF-8
キャンペーン > unicaACListener > logStringEncoding	UTF-8
キャンペーン > unicaACListener > systemStringEncoding	UTF-8

日時の設定の構成 (Oracle)

プロパティ	値
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateFormat	DELIM_Y_M_D
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateOutputFormatString	%Y-%m-%d
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateTimeOutputFormatString	DT_DELIM_Y_M_D
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateTimeOutputFormatString	%Y-%m-%d %H:%M:%S 日本語のデータベースの場合、時間部分の区切り文字はピリオド (.) でなければなりません。したがって、日本語のデータベースでは値を次のように設定します。 %Y/%m/%d %H.%M.%S
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > SQLOnConnect	ALTER SESSION SET NLS_LANGUAGE='American' NLS_TERRITORY='America' NLS_TIMESTAMP_FORMAT='YYYY-MM-DD hh24:mi:ss' NLS_DATE_FORMAT='YYYY- MM-DD'

環境変数の構成 (Oracle)

Campaignクライアント・マシン上で、NLS_LANG 変数の値を次のように設定します。

AMERICAN_AMERICA.UTF8

以下に例を示します。

```
set NLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.UTF8
```

cmpServer.bat ファイルの構成 (Oracle)

Campaign クライアント・マシン上で、Campaign Listener の始動スクリプトを次のように変更します。

Windows の場合

<CAMPAIGN_HOME>/bin ディレクトリーにある cmpServer.bat ファイルに、以下の行を追加します。

```
set NLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.UTF8
```

UNIX の場合

<CAMPAIGN_HOME>/bin ディレクトリーにある rc.unica_ac ファイルに、以下の行を追加します。

```
NLS_LANG=AMERICAN_AMERICA.UTF8
```

```
export NLS_LANG
```

(オペレーティング・システムによって構文が異なります。)

DB2 での複数ロケールの構成

システム・テーブルが DB2 の場合、IBM Campaign を複数ロケール用に構成するには、エンコード・プロパティー、日時の設定、環境変数、およびアプリケーション・サーバーの始動スクリプトを調整する必要があります。

まず、DB2 データベース・コード・セットおよびコード・ページを識別します。ローカライズされた環境の場合、DB2 データベースの構成は以下のようになる必要があります。

- データベース・コード・セット = UTF-8
- データベース・コード・ページ = 1208

Campaign を構成する場合は、以下の調整を行ってください。

- StringEncoding プロパティーを DB2 データベース・コード・セットの値 (UTF-8) に、および
- DB2CODEPAGE DB2 環境変数を DB2 データベース・コード・ページの値に設定します。

これら 2 つの値の調整については、続くセクションで説明されています。

エンコード・プロパティーの構成 (DB2)

Marketing Platform にログインして、以下の表にリストされているエンコード・プロパティーを構成します。ここに示されているようにプロパティー値を設定してください。

重要な情報については、271 ページの『Campaign 構成プロパティ』にあるプロパティの説明を参照してください。

プロパティ	値
Campaign > partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > StringEncoding	UTF-8
Campaign > partitions > partition[n] > server > encoding > stringEncoding	UTF-8
キャンペーン > unicaACListener > logStringEncoding	UTF-8
キャンペーン > unicaACListener > systemStringEncoding	UTF-8

日時の設定の構成 (DB2)

Marketing Platform の構成ページで、以下の日時プロパティに次のような値を設定します。

プロパティ	値
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateOutputFormatString	%Y-%m-%d
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateTimeFormat	DT_DELIM_Y_M_D
Campaign > partitions > partition[n] > [data_source_name] > DateTimeOutputFormatString	%Y-%m-%d %H:%M:%S 日本語のデータベースの場合、時間部分の区切り文字はピリオド (.) でなければなりません。したがって、日本語のデータベースでは値を次のように設定します。 %Y/%m/%d %H.%M.%S

環境変数の構成 (DB2)

DB2 の環境変数を構成するには、DB2 データベース・コード・ページを識別し、同じ値を DB2CODEPAGE DB2 環境変数に設定します。ローカライズされた環境の場合、DB2 データベース・コード・ページは 1208 でなければなりません。

以下の手順を実行して、DB2CODEPAGE DB2 環境変数を 1208 に設定します。

- Windows の場合は、Campaign リスナーの始動スクリプト (<CAMPAIGN_HOME>%bin%cmpServer.bat) に以下の行を追加します。

```
db2set DB2CODEPAGE=1208
```

- UNIX の場合は以下のようにします。

- DB2 が始動した後で、システム管理者は DB2 インスタンス・ユーザーから以下のコマンドを入力する必要があります。

```
$ db2set DB2CODEPAGE=1208
```

この手順を終えた後は、管理者が再び DB2 インスタンス・ユーザーから `db2set DB2CODEPAGE=1208` コマンドを実行する必要はありません。なぜなら、その値が DB2 インスタンス・ユーザーに登録されるからです。root ユーザーには必要なアクセス権がない可能性があるため、root ユーザーはコマンドを実行できません。

- b. 設定を検査するには、以下のコマンドを入力して 1208 という出力が得られることを確認します。

```
$ db2set DB2CODEPAGE
```

- c. DB2CODEPAGE 設定が root ユーザーで作動するかどうかを確認するには、`$CAMPAIGN_HOME/bin` ディレクトリーで以下のコマンドを入力して 1208 という出力が得られることを確認します。

```
# . ./setenv.sh
```

```
# db2set DB2CODEPAGE
```

- d. Campaign リスナーを始動するには、以下のコマンドを実行します。

```
./rc.unica_ac start
```

アプリケーション・サーバー始動スクリプトの構成 (DB2)

224 ページの『環境変数の構成 (DB2)』の説明に従ってコード・ページ変数を設定した場合は、以下のタスクを完了してください。設定しなかった場合は、以下の変更は必要ありません。

Weblogic または WebSphere 用の始動スクリプトを変更します。JAVA_OPTIONS の下に次のように追加してください。

```
-Dfile.encoding=utf-8
```

以下に例を示します。

```
${JAVA_HOME}/bin/java ${JAVA_VM} ${MEM_ARGS} ${JAVA_OPTIONS}  
-Dfile.encoding=utf-8 -Dweblogic.Name=${SERVER_NAME}  
-Dweblogic.ProductionModeEnabled=${PRODUCTION_MODE}  
-Djava.security.policy="${WL_HOME}/server/lib/weblogic.policy" weblogic.Server
```

付録 A. 構成ページの構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの構成プロパティーについて取り上げます。

Marketing Platform 構成プロパティー

このセクションでは、「構成」ページの Marketing Platform 構成プロパティーについて取り上げます。

全般 | ナビゲーション (Navigation)

セキュア接続用の TCP ポート (TCP port for secure connections)

説明

Marketing Platform がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの SSL ポートを指定します。このプロパティーは、IBM 製品間での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

標準接続用の TCP ポート (TCP port for standard connections)

説明

Marketing Platform がデプロイされる Web アプリケーション・サーバーの HTTP ポートを指定します。このプロパティーは、IBM 製品間での通信に内部的に使用されます。

デフォルト値

7001

Unica URL

説明

IBM Unica Marketing で使用する URL を指定します。インストール時に設定され、通常は変更すべきではありません。この URL には、以下の例に示されているようにドメイン・ネームを含めます。

```
protocol://machine_name_or_IP_address.domain_name:port_number/  
context-root
```

マシン名は localhost にしないでください。

デフォルト値

定義されていません

例

SSL が構成されている環境では、URL は次のようになります。

全般 | データのフィルター操作 (Data filtering)

デフォルト表名 (Default table name)

説明

このプロパティは使用されません。

デフォルト・オーディエンス名 (Default audience name)

説明

このプロパティは使用されません。

全般 | パスワード設定 (Password settings)

このカテゴリのプロパティは、IBM Unica Marketing パスワードに適用されるポリシーを指定します。これらのパスワード・オプションのほとんどは、(Marketing Platform 内で作成された) 内部ユーザーのパスワードにのみ適用され、(外部システムからインポートされた) 外部ユーザーには適用されません。例外はログイン失敗時に許容される最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed) プロパティで、このプロパティは内部ユーザーと外部ユーザーの両方に影響を及ぼします。またこのプロパティは、外部システムの同様の制約事項を無効にするわけではありません。

ログイン失敗時に許容される最大試行回数 (Maximum failed login attempts allowed)

説明

ユーザーがログインする際に、パスワードが無効であっても入力可能となる最大回数を指定します。最大回数になると、ユーザーは IBM Unica Marketing システムを利用できなくなり、そのユーザーとしてだれもログインできなくなります。

ゼロ以下に設定すると、システムでは、何度でも連続して失敗することが許容されます。

デフォルト値

3

有効な値

任意の整数

パスワード履歴数 (Password history count)

説明

システムがユーザーのために保存する古いパスワード数を指定します。この古いパスワードのリストにあるパスワードをユーザーが再使用することはできません。値をゼロ以下に設定すると、履歴は全く保存されず、ユーザーは同じパスワードを繰り返し再使用できます。パスワード履歴数には、ユーザー・アカウントを作成した際に割り当てられた初期パスワードは含まれません。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

有効期間 (日数)(Validity (in days))

説明

ユーザーのパスワードの有効期限が切れるまでの日数を指定します。

値がゼロ以下の場合、パスワードは有効期限が切れることはありません。

値がゼロより大きいと、ユーザーは最初にログインする際にパスワードの変更が必要となり、その最初のログイン日付を起点として有効期限間隔がカウントされます。

ユーザーとパスワードを作成後にこの値を変更すると、既存のユーザーが次にパスワードを変更する際に新しい有効期限が施行されます。

デフォルト値

30

有効な値

任意の整数

許容される空白パスワード (Blank passwords allowed)

説明

空白パスワードが許容されるかどうかを指定します。このプロパティを True に設定する場合、最大文字長 (Minimum character length)=0 も設定する必要があります。

デフォルト値

true

有効な値

true | false

同一のユーザー名とパスワードの許可 (Allow identical user name and password)

説明

ユーザーのパスワードをユーザーのログイン名と同じにすることを許容するかどうかを指定します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

最小文字数 (Minimum number of letter characters)

説明

パスワードに必要な最小文字数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はなくなります。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

最小数字数 (Minimum number of numeric characters)

説明

パスワードに必要な最小数字数を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はなくなります。

デフォルト値

0

有効な値

任意の整数

最小文字長 (Minimum character length)

説明

パスワードの最小長を指定します。値がゼロ以下の場合、最小要件はなくなります。0 より大きな値に設定する場合、許容される空白パスワード (Blank passwords allowed)=false も設定する必要があります。

デフォルト値

4

有効な値

任意の整数

全般 | その他 (Miscellaneous)

このカテゴリーのプロパティは、内部的に使用される値、およびロケールに応じて設定しなければならないことがある値を指定します。

TokenLifetime

説明

Marketing Platform が生成するトークンが有効な期間を秒単位で指定します。これは、Suite サインオン実装の一部で、この値を変更してはなりません。

デフォルト値

15

有効な値

任意の正整数

デフォルトの地域 (Default region)

説明

Marketing Platform のデフォルトのロケールを指定します。Campaign をインストールする予定の場合、この値は、Campaign の defaultLocale プロパティで Campaign 用に設定したロケールと同じでなければなりません。

デフォルト値

en_US

有効な値

サポートされるロケール

有効にされたトラステッド・アプリケーション (Trusted application enabled)

説明

この値を「True」に設定する場合、Marketing Platform を SSL ポートのある環境でデプロイし、「全般」>「ナビゲーション (Navigation)」カテゴリの「Unica URL」プロパティで HTTPS を使用するように設定しなければなりません。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Platform

地域設定 (Region setting)

説明

IBM Unica Marketing ユーザーのロケール設定を指定します。「構成」ページでこのプロパティを設定すると、その適用する設定が IBM Unica Marketing のすべてのユーザーのデフォルトの設定となります。ただし、Marketing Platform の「ユーザー」ページで個別にロケール設定を指定するユーザーは例外です。個別のユーザーにこのプロパティを設定する場合には、そのユーザーに適用する設定がデフォルトの設定よりも優先されます。

この設定は、IBM Unica Marketing アプリケーションの言語、時間、数値、日付の表示に影響を及ぼします。

ロケールの使用可能性は IBM Unica Marketing アプリケーションによって異なる場合があります。すべての IBM Unica アプリケーションが Marketing Platform のロケール設定をサポートしているわけではありません。地域設定 (Region setting) プロパティを使用できてサポートされているかどうかについては、固有の製品資料を参照してください。

デフォルト値

英語 (米国)

ヘルプ・サーバー (Help server)

説明

IBM Unica ホスト・オンライン・ヘルプがインストールされているサーバーの URL です。IBM Unica Marketing ユーザーがインターネットにアクセスできる場合、デフォルト値を変更しないでください。デフォルト値は、IBM Unica が保守/更新しているオンライン・ヘルプ・サーバーを指しています。

デフォルト値

ホスト・ヘルプ・サーバーの URL です。

有効な値

IBM Unica ホスト・ヘルプがインストールされているサーバー。

IBM Unica Marketing Operations - Campaign 統合

説明

Marketing Operations と Campaign を一緒にインストールして統合するかどうかを示すフラグです。この統合の構成については、「*IBM Unica Marketing Operations* および *Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

IBM Unica Marketing Operations - オファー統合

説明

Marketing Operations と Campaign を統合するシステムにおいて、このフラグは、オファー統合も有効になるかどうかを示します。オファー統合を使用すると、Marketing Operations を使用してオファー・ライフサイクル管理タスクを行う機能が有効になります。この統合の構成については、「*IBM Unica Marketing Operations* および *Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

開始ページ (Start page)

説明

ユーザーが IBM Unica Marketing にログインする際に表示されるページの URL です。デフォルトは、デフォルトのダッシュボードになります。

デフォルト値

デフォルトのダッシュボード。

有効な値

任意の IBM Unica Marketing URL。フォーム送信ページ、編集ページ、検索結果ページは除きます。

ドメイン・ネーム (Domain name)

説明

IBM Unica Marketing がインストールされているドメインの名前です。この値は、インストール時に設定されます。ドメイン・ネームを変更しない限りは、この値を変更してはなりません。

デフォルト値

定義されていません

ページ・タグ付けの無効化 (Disable Page Tagging)

説明

デフォルト値の False に設定すると、IBM Unica は Marketing Platform のインストール時に入力したサイト ID コードを使用して、製品全体の使用傾向を追跡する基本的な統計を収集します。こうした統計は、IBM Unica 製品の開発や向上に使用されます。こうした情報が収集されることを望まない場合には、このプロパティを True に設定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Platform | Scheduler

クライアントのポーリング間隔 (Client polling interval)

説明

Campaign は、ミリ秒単位で指定されたこの値が示す周期的間隔で、ジョブについて IBM Scheduler をポーリングします。デフォルト値は 60 秒です。このプロパティの値を 10000 (10 秒) 未満にしないでください。10000 未満にすると、キャンペーン・パフォーマンスが低下する恐れがあります。

デフォルト値

60000

クライアントの初期遅延 (Client initialization delay)

説明

Campaign が最初に始動した際に、Campaign スケジューラー・スレッドがジョブに関して IBM Scheduler をポーリングするまでに待機するミリ秒単位の期間です。この値は、少なくとも、ご使用のシステム上で Campaign が始動するための十分な時間を確保できる長さに設定してください。デフォルト値は 5 分です。

デフォルト値

300000

有効な値

任意の整数

Platform | Scheduler | 反復定義 (Recurrence definitions)

このカテゴリのプロパティは、IBM Scheduler の反復パターンを設定します。反復パターンは、スケジュールを作成する際に反復パターンを設定する場合に使用するダイアログ・ボックスに表示されます。反復テンプレートを使用すると、有効な任意の Cron 式により独自の反復パターンを作成できます。

毎時

説明

ジョブは、毎時トリガーされます。

デフォルト値

0 0 0/1 * * ?

毎日

説明

ジョブは 24 時間、毎時トリガーされます。

デフォルト値

0 0 0 * * ?

毎週 [曜日] の午前 12:00 (Every [day of week] at 12:00 am)

説明

ジョブは、指定された曜日の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 月 - 0 0 0 ? * MON
- 火 - 0 0 0 ? * TUE
- 水 - 0 0 0 ? * WED
- 木 - 0 0 0 ? * THU
- 金 - 0 0 0 ? * FRI
- 土 - 0 0 0 ? * SAT
- 日 - 0 0 0 ? * SUN

毎月の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every month at 12:00 am)

説明

ジョブは、毎月の指定された日 (初日または最終日) の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎月の初日 - 0 0 0 1 * ?
- 毎月の最終日 - 0 0 0 L * ?

各四半期の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every quarter at 12:00 am)

説明

ジョブは、カレンダーの四半期における指定された日（初日または最終日）の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 各四半期の初日 - 0 0 0 1 * JAN, APR, JUL, OCT
- 各四半期の最終日 - 0 0 0 L * MAR, JUN, SEP, DEC

毎年の [初日|最終日] の午前 12:00 ([First|Last] day of every year at 12:00 am)

説明

ジョブは、毎年の指定された日（初日または最終日）の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎年の初日 - 0 0 0 1 ? JAN *
- 毎年の最終日 - 0 0 0 L ? DEC *

毎年 [月] の午前 12:00 (Every [month] at 12:00 am)

説明

ジョブは、指定された月の初日の午前 0 時にトリガーされます。

デフォルト値

- 毎年 1 月 - 0 0 0 1 ? JAN *
- 毎年 2 月 - 0 0 0 1 ? FEB *
- 毎年 3 月 - 0 0 0 1 ? MAR *
- 毎年 4 月 - 0 0 0 1 ? APR *
- 毎年 5 月 - 0 0 0 1 ? MAY *
- 毎年 6 月 - 0 0 0 1 ? JUN *
- 毎年 7 月 - 0 0 0 1 ? JUL *
- 毎年 8 月 - 0 0 0 1 ? AUG *
- 毎年 9 月 - 0 0 0 1 ? SEP *
- 毎年 10 月 - 0 0 0 1 ? OCT *
- 毎年 11 月 - 0 0 0 1 ? NOV *
- 毎年 12 月 - 0 0 0 1 ? DEC *

Platform | Scheduler | スケジュール登録 (Schedule registrations) | キャンペーン | [オブジェクト・タイプ (Object type)]

IBM Scheduler でスケジュール可能なオブジェクト・タイプごとに異なるカテゴリーが存在します。これらのカテゴリーのプロパティを、通常は変更すべきではありません。

実行プログラムのクラス名 (Executor class name)

説明

フローチャートまたはメール配信の実行をトリガーするために IBM Scheduler が使用するクラスです。

デフォルト値

ステータスのポーリング間隔 (Status polling interval)

説明

ステータスがレポートされていないスケジュール済みオブジェクトの実行ステータスを探すために、IBM Scheduler は Campaign を定期的にポーリングします。ここではこの間隔を、ミリ秒単位で指定します。デフォルト値は 10 分です。ポーリング間隔がより頻繁になるように (小さい値に) 設定すると、システムのパフォーマンスに影響を及ぼします。ポーリング間隔の頻度が少なくなるように (大きな値に) 設定すると、システムへのロードが減少します。例えば、完了までに 10 分を超える Campaign フローチャートが大量にある場合には、ポーリング間隔の頻度が少なくなるように設定することもできます。

デフォルト値

600000

Platform | Scheduler | スケジュール登録 (Schedule registrations) | キャンペーン | [オブジェクト・タイプ (Object type)] | [スロットル・グループ (Throttling group)]

デフォルトの制限グループ (スロットル・グループ) が、IBM Unica Scheduler でスケジュール可能なオブジェクト・タイプごとに存在します。制限グループ・テンプレートを使用すると、さらにグループを作成できます。

スロットルしきい値 (Throttling threshold)

説明

同時に実行可能な、対象のグループに関連付けられたスケジュールの最大数です。構成されているスケジューラー・グループは、スケジュールを作成および編集するために、Scheduler ユーザー・インターフェースの「スケジューラー・グループ」ドロップダウン・リストに表示されます。デフォルトのスロットル・グループは 999 で、この場合、無制限となります。どのスケジュールであってもいずれかのスロットル・グループに属していなければならないので、この値を変更しないで、スロットル対象としないスケジュールがこのグループに割り当てられるようにします。

デフォルト値

有効な値

任意の正整数。

Platform | セキュリティー

ログイン方式 (Login method)

説明

一緒にインストールおよび構成されているすべての IBM Unica Marketing 製品の認証モードを、次のように指定します。

- 値を Windows 統合ログイン (Windows integrated login) に設定すると、IBM Unica Marketing 製品では認証に Windows Active Directory が使用されます。
- この値を Unica Marketing Platform に設定すると、IBM Unica Marketing 製品では認証と許可に Marketing Platform が使用されます。
- 値を LDAP に設定すると、IBM Unica Marketing 製品では認証に LDAP サーバーが使用されます。
- 値を Web アクセス制御 (Web access control) に設定すると、IBM Unica Marketing 製品では認証に Web アクセス制御ソフトウェアが使用されます。

デフォルト値

Unica Marketing Platform

有効な値

Windows 統合ログイン (Windows integrated login) | Unica Marketing Platform | LDAP | Web アクセス制御 (Web access control)

Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | Windows 統合ログイン (Windows integrated login)

ドメイン (Domain)

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー `jcifs.smb.client.Domain` の値を設定します。SMB URL でドメインが指定されていない場合に使用されるドメインを指定します。この値は、Windows ドメイン・ネームに設定してください。ほとんどの環境では、このプロパティーまたはドメイン・コントローラー (Domain Controller) プロパティーのどちらかを設定します。

デフォルト値

定義されていません。

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

クライアントのタイムアウト (Client Timeout)

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティ

`jcifs.smb.client.soTimeout` の値を設定します。クライアントとサーバーの間でアクティビティーがない場合、ソケットが閉じるまでの期間をミリ秒単位で指定します。この数値は可能な限り短くしなければなりません、プロトコル・ハンドシェイクが完了する十分な長さを確保する必要があります。その長さはネットワーク特性によって異なります。

デフォルト値

1000

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

キャッシュ・ポリシー (Cache Policy)

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティ

`jcifs.netbios.cachePolicy` の値を設定します。重複する名前照会を減らすために NetBIOS 名をキャッシュに入れる期間を秒単位で指定します。この値を 0 に設定すると、キャッシングは行われません。値を -1 に設定すると、キャッシュはクリアされません。このプロパティは、SMB 署名が有効で、Windows 2003 ドメインで必要な場合に使用されます。

デフォルト値

0

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

ドメイン・コントローラー (Domain Controller)

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティ

`jcifs.http.domainController` の値を設定します。(NtlmHttpFilter および NetworkExplorer で使用される) HTTP クライアントを認証するために使用する必要があるサーバーの IP アドレスを指定します。Domain プロパティで指定したドメインのワークステーションの IP アドレスを使用することも可能です。ほとんどの環境では、このプロパティまたは Domain プロパティのどちらかを設定します。

デフォルト値

定義されていません。

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

WINS サーバーの IP (IP of the WINS server)

説明

JCIFS SMB クライアント・ライブラリー・プロパティー
jcifs.netbios.wins の値を設定します。WINS サーバーの IP アドレスを指定します。複数の IP アドレスをコンマで区切って入力することもできます (例: 192.168.100.30,192.168.100.31)。WINS サーバーの照会が、Domain プロパティーで指定したドメインをドメイン・コントローラーの IP アドレスに解決するために必要となります。このプロパティーは、(ドメイン・コントローラーの名前が異なるなど) 別のサブネット上のホストにアクセスする際に WINS サーバーが使用可能であることが強く推奨される環境が必要です。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

ドメインのストリップ (Strip Domain)

説明

ユーザーが IBM Unica Marketing にアクセスする際に、Marketing Platform がユーザーのログイン名からドメインを削除するかどうかを指定します。ご使用の Windows 構成においてユーザーのログイン時にユーザーのログイン名にドメインを含める必要がある場合、この値は False に設定してください。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

認証障害時に再試行 (Retry on Authentication Failure)

説明

この値が True に設定されている場合、ユーザーがログインに失敗しても、システムではさらにログインを試行できます。複数回のログイン試行を行えないようにするには、False に設定します。

デフォルト値

True

有効な値

True | False

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory サーバーと統合するよう構成されていて、Windows 統合ログインが使用可能な場合にのみ使用されます。

Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | LDAP

LDAP サーバー・ホスト名 (LDAP server host name)

説明

LDAP サーバーの名前または IP アドレスを指定します。この値は、LDAP サーバーのマシン名または IP アドレスに指定してください。例:
machineName.companyDomain.com

Windows Active Directory と統合する場合、DNS 名ではなくサーバー名を使用します。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP サーバー・ポート (LDAP server port)

説明

LDAP サーバーが listen するポートを指定します。適切なポート番号にこの値を設定してください。通常、ポート番号は 389 になります (SSL を使用する場合には 636)。

デフォルト値

389

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザー検索フィルター (User search filter)

説明

ユーザーの検索に使用するフィルターを指定します。任意の有効な LDAP 検索フィルター (RFC 2254 を参照) が有効な値です。この値の XML 文字に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。

通常、ユーザー・ログイン属性の値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory サーバーの場合には sAMAccountName です。

LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーにおけるこの値を確認する

必要があります。LDAP サーバーが Windows Active Directory の場合には、このプロパティのデフォルト値を uid ではなく sAMAccountName に変更しなければなりません。以下に例を示します。

```
(&(|(objectClass=user)(objectClass=person))(sAMAccountName={0}))
```

デフォルト値

```
(&(|(objectClass=user)(objectClass=person))(uid={0}))
```

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

Unica に格納されている資格情報を使用

説明

(ログイン時の) ユーザー認証中に LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを検索する際、Marketing Platform が Marketing Platform データベースの資格情報を使用するかどうかを指定します。

この値が true の場合、Marketing Platform は Marketing Platform データベースの資格情報を使用するので、このカテゴリの LDAP 資格情報の Unica ユーザー (Unica user for LDAP credentials) プロパティと LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティに適切な値を設定する必要があります。

LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセスが許可されない場合には、この値を true に設定してください。

この値が false の場合、Marketing Platform は LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーを匿名で介して接続します。LDAP サーバーまたは Windows Active Directory サーバーで匿名アクセスが許可される場合には、この値を false に設定できます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報の Unica ユーザー

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM Unica Marketing ユーザーの名前を指定します。このカテゴリの Unica に格納された資格情報を使用 (Use credentials stored in Unica) プロパティを true に設定した場合には、この値を設定してください。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Unica Marketing ユーザーに作成したユーザー名に、このプロパティの値を設定してください。このプロパティは、このカテゴリの LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティと連動しています。

デフォルト値

asm_admin

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定します。このカテゴリの Unica に格納された資格情報を使用 (Use credentials stored in Unica) プロパティを true に設定した場合には、この値を設定してください。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Unica Marketing ユーザーに作成したデータ・ソース名に、このプロパティの値を設定してください。このプロパティは、このカテゴリの LDAP 資格情報の Unica ユーザー (Unica user for LDAP credentials) プロパティと連動しています。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

基本 DN (Base DN)

説明

LDAP ディレクトリー構造のルートを示す基本識別名 (DN) を指定します。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

任意の有効な DN (RFC 1779、RFC 2253 を参照)

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 接続に SSL が必要 (Require SSL for LDAP connection)

パス

Platform | セキュリティー | LDAP

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを認証する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を true に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | Web アクセス制御 (Web access control) ユーザー名パターン (Username pattern)

説明

Web アクセス制御ソフトウェアの HTTP ヘッダー変数からユーザー・ログインを抽出するために使用する Java™ 正規表現です。この正規表現の XML 文字に関しては XML エスケープ処理を行う必要があります。SiteMinder および Tivoli® Access Manager の推奨値は \w* です。

デフォルト値

未定義

有効な値

任意の Java 正規表現。

使用可能性

このプロパティーは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェアと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

Web アクセス制御のヘッダー変数 (Web access control header variable)

説明

Web アクセス制御ソフトウェアで構成されている HTTP ヘッダー変数を指定します。これは、Web アプリケーション・サーバーに送信されます。デフォルトでは、SiteMinder は sm_user を使用し、Tivoli Access Manager (TAM) は iv-user を使用します。TAM の場合、この値を IBM HTTP ストリングではなく、IBM Raw ストリングのユーザー名コンポーネントに設定します。

デフォルト値

未定義

有効な値

任意のストリング

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Web アクセス制御ソフトウェアと統合するように構成されている場合にのみ使用されます。

Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | LDAP 同期 (LDAP synchronization)

LDAP 同期有効 (LDAP sync enabled)

説明

LDAP または Active Directory の同期を有効にする場合には、true に設定します。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期間隔 (LDAP sync interval)

説明

ここで指定する秒数の周期的間隔で、Marketing Platform が LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーと同期します。値がゼロ以下の場合、Marketing Platform は同期しません。値が正整数の場合、新しい値は再始動しなくても 10 分以内に有効になります。その後に変更した場合は、構成された間隔内に有効になります。

デフォルト値

600、または 10 分

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期遅延 (LDAP sync delay)

説明

これは、Marketing Platform の開始後に、LDAP サーバーとの周期的同期が開始される時刻 (24 時形式) です。例えば、LDAP 同期遅延 (LDAP sync delay) が 23:00 で LDAP 同期間隔 (LDAP sync interval) が 600 の場合、Marketing Platform が開始されると、周期的同期は午後 11:00 に実行を開始され、その後 10 分 (600 秒) ごとに実行されます。

デフォルト値

23:00、または 11:00pm

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期タイムアウト (LDAP sync timeout)

説明

LDAP 同期タイムアウト・プロパティは、同期の開始後、Marketing Platform がプロセスに終了済みのマークを付けるまでの最大時間を分単位で指定します。Platform で実行できるのは、一度に 1 つの同期プロセスだけです。同期が失敗すると、正常に完了したかどうかに関係なく、終了済みのマークが付けられます。

デフォルト値

600 (600 分、または 10 時間)

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 同期スコープ (LDAP sync scope)

説明

一群のユーザーを取り出すための初期照会のスコープを制御します。ほとんどの LDAP サーバーとの同期の場合、デフォルトの SUBTREE のままにしてください。

デフォルト値

SUBTREE

有効な値

値は、標準の LDAP 検索スコープ条件です。

- OBJECT - 基本 DN のエントリーだけを検索し、戻されるのもそのエントリーのみです。
- ONE_LEVEL - 基本 DN の 1 つ下のレベルのすべてのエントリーを検索します。ただし、基本 DN は対象外です。
- SUBTREE - 特定の基本 DN とその下のすべてのレベルにある全エントリーを検索します。

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP プロバイダー URL (LDAP provider URL)

説明

ほとんどの実装環境では、以下のいずれかの形式で、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーの LDAP URL に設定します。

- `ldap://IP_address:port_number`
- `ldap://machineName.domain.com:port_number`

LDAP サーバーの場合、ポート番号は通常 389 になります (SSL を使用している場合には 636)。

IBM Unica Marketing を Active Directory サーバーと統合する場合、Active Directory 実装環境でサーバー未使用のバインドが使用されているときには、このプロパティの値を Active Directory サーバーの URL に設定してください。その際、次の形式を使用します。

```
ldap:///dc=example,dc=com
```

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 接続に SSL が必要 (Require SSL for LDAP connection)

パス

Platform | セキュリティー (Security) | LDAP 同期 (LDAP synchronization)

説明

Marketing Platform が LDAP サーバーに接続してユーザーを同期する際に SSL を使用するかどうかを指定します。値を `true` に設定すると、接続は SSL を使用して保護されます。

デフォルト値

`false`

有効な値

`true` | `false`

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP config Unica グループ区切り文字 (LDAP config Unica group delimiter)

説明

Unica グループへの LDAP 参照のマップ (LDAP reference to Unica group map) カテゴリで、1 つの LDAP グループまたは Active Directory グループを複数の Marketing Platform グループにマップする場合には、ここで指定する区切り文字を使用します。名前の分離に使用されていない任意の単一文字にできます。

デフォルト値

; (セミコロン)

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 参照 config 区切り文字 (LDAP reference config delimiter)

説明

SEARCHBASE コンポーネントと FILTER コンポーネントを区切る区切り文字を指定します。これらのコンポーネントは、LDAP または Active Directory 参照を構成します。

FILTER はオプションで、省略すると、LDAP ユーザー参照属性名の値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

デフォルト値

; (セミコロン)

有効な値

名前の分離に使用されていない任意の単一文字。

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報の Unica ユーザー (Unica user for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者ログイン資格情報が付与された IBM Unica Marketing ユーザーの名前を指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Unica Marketing ユーザーに作成したユーザー名に、このプロパティの値を設定してください。このプロパティは、このカテゴリの LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials) プロパティと連動しています。

デフォルト値

asm_admin

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP 資格情報のデータ・ソース (Data source for LDAP credentials)

説明

LDAP 管理者資格情報の Marketing Platform データ・ソースを指定します。

LDAP 統合を構成した場合には、IBM Unica Marketing ユーザーに作成したデータ・ソース名に、このプロパティの値を設定してください。このプロパティは、このカテゴリの LDAP 資格情報の Unica ユーザー (Unica user for LDAP credentials) プロパティと連動しています。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

LDAP ユーザー参照属性名 (LDAP user reference attribute name)

説明

LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーがグループ・オブジェクトのユーザー属性に使用する名前を指定します。通常、この値は LDAP サーバーでは `uniquemember` となり、Windows Active Directory サーバーの場合には `member` になります。

AM ユーザーの LDAP 参照の作成 (LDAP references for AM user creation) セクションおよび AM グループへの LDAP 参照のマップ (LDAP references to AM group map) セクションで FILTER 参照を省略すると、この値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。そのため、LDAP サーバーや Active Directory サーバーでのこの値を確認する必要があります。

デフォルト値

`member`

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザー・ログイン (User login)

説明

IBM Unica Marketing ユーザーのログインを、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。ユーザ

ー・ログイン (User login) は唯一の必須マッピングです。通常、この属性の値は LDAP サーバーでは uid で、Windows Active Directory サーバーの場合には sAMAccountName です。LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーにおけるこの値を確認する必要があります。

デフォルト値

uid

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

名 (First name)

説明

Marketing Platform における名 (First Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

givenName

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

姓 (Last name)

説明

Marketing Platform における姓 (Last Name) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

sn

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザー・タイトル (User title)

説明

Marketing Platform におけるタイトル (Title) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

title

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

部門 (Department)

説明

Marketing Platform における部門 (Department) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

会社 (Company)

説明

Marketing Platform における会社 (Company) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

国

説明

Marketing Platform における国ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

ユーザーの E メール (User email)

説明

Marketing Platform における E メール・アドレス (Email Address) 属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

mail

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

アドレス 1 (Address 1)

説明

Marketing Platform におけるアドレス・ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

勤務先電話 (Work phone)

説明

Marketing Platform における勤務先電話 (Work Phone) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

telephoneNumber

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

携帯電話 (Mobile phone)

説明

Marketing Platform における携帯電話 (Mobile Phone) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

自宅電話 (Home phone)

説明

Marketing Platform における自宅電話 (Home Phone) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

代替ログイン (Alternate login)

説明

Marketing Platform における代替ログイン (Alternate Login) ユーザー属性を、LDAP サーバーまたは Active Directory サーバーで相当するユーザー属性にマップします。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

Platform | セキュリティー | ログイン方式の詳細 (Login method details) | LDAP 同期 (LDAP synchronization) | Unica グループへの LDAP 参照のマップ (LDAP reference to Unica group map)

LDAP 参照のマップ (LDAP reference map)

説明

ここで指定する LDAP グループまたは Active Directory グループのメンバーのユーザーは、Unica グループ (Unica group) プロパティで指定された Marketing Platform グループにインポートされます。

次の構文を使用して、このプロパティの値を設定します。SEARCHBASE DELIMITER FILTER ここで、

SEARCHBASE は、オブジェクトの識別名 (DN) です。

DELIMITER は、LDAP config AM グループ区切り文字 (LDAP config AM group delimiter) プロパティの値です。

FILTER は、LDAP または Active Directory の属性フィルターです。FILTER はオプションで、省略すると、LDAP ユーザー参照属性名 (LDAP user reference attribute name) プロパティの値に基づいて Marketing Platform サーバーによって動的にフィルターが作成されます。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

Unica グループ (Unica group)

説明

LDAP 参照グループ (LDAP reference group) プロパティで指定された LDAP グループまたは Active Directory グループのメンバーのユーザーは、ここで指定する Marketing Platform グループにインポートされます。

デフォルト値

未定義

使用可能性

このプロパティは、Marketing Platform が Windows Active Directory またはその他の LDAP サーバーと統合するよう構成されている場合にのみ使用されます。

レポート作成の構成プロパティ

レポート作成の場合、IBM Unica Marketing Suite は、サード・パーティーのビジネス・インテリジェンス・アプリケーションである IBM Cognos と統合します。IBM Unica インストール済み環境で使用される IBM Cognos システムを指定するときには、Cognos プロパティを使用します。また、Campaign、eMessage、Interact については、レポート作成スキーマをセットアップしてカスタマイズする際に使用する追加の構成プロパティがあります。

レポート | 統合 | Cognos [バージョン]

このページには、この IBM Unica システムで使用される IBM Cognos システムの URL および他のパラメーターを指定するプロパティが表示されます。

統合名 (Integration Name)

説明

読み取り専用です。レポートを表示するために IBM Unica Marketing によって使用されるサード・パーティーのレポート作成/分析ツールが IBM Cognos となるように指定します。

デフォルト値

Cognos

ベンダー (Vendor)

説明

読み取り専用です。IBM Cognos が、「統合名 (Integration Name)」プロパティーで指定したアプリケーションを提供する会社名であることを示します。

デフォルト値

Cognos

バージョン

説明

読み取り専用です。「統合名 (Integration Name)」プロパティーによって指定されるアプリケーションの製品バージョンを示します。

デフォルト値

<バージョン>

有効 (Enabled)

説明

Suite で IBM Cognos を有効にするかどうかを指定します。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

統合クラス名 (Integration Class Name)

説明

読み取り専用です。「統合名 (Integration Name)」プロパティーで指定されたアプリケーションに接続する際に使用する統合インターフェースを作成する Java クラスの完全修飾名を示します。

デフォルト値

com.unica.report.integration.cognos.CognosIntegration

ドメイン (Domain)

説明

Cognos サーバーが実行されている、完全修飾の会社ドメイン・ネームを示します。例: myCompanyDomain.com

会社でサブドメインを使用している場合には、このフィールドの値には該当するサブドメインも含める必要があります。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

1024 文字未満のストリング。

ポータル URL (Portal URL)

説明

IBM Cognos Connection ポータルの URL を指定します。**Domain** プロパティで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例: `http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com/cognos<version>/cgi-bin/cognos.cgi`

この URL は、IBM Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で表示できます。

デフォルト値

`http://[CHANGE ME]/cognos<バージョン>/cgi-bin/cognos.cgi`

有効な値

適切な形式の URL。

ディスパッチ URL (Dispatch URL)

説明

IBM Cognos Content Manager の URL を指定します。Domain プロパティで指定したドメイン・ネーム (および該当する場合にはサブドメイン) を含めた完全修飾ホスト名を使用します。例: `http://MyReportServer.MyCompanyDomain.com:9300/p2pd/servlet/dispatch`

この URL は Cognos Configuration の「ローカル構成 (Local Configuration)」>「環境 (Environment)」で表示できます。

デフォルト値

`http://[変更してください]:9300/p2pd/servlet/dispatch`

Cognos Content Manager のデフォルトのポート番号は 9300 です。指定したポート番号が、Cognos インストール済み環境で使用されているポート番号と同じであることを確認してください。

有効な値

適切な形式の URL。

認証モード (Authentication mode)

説明

IBM Cognos アプリケーションで IBM Unica Authentication Provider を使用するかどうか、つまり認証を Marketing Platform で行うかどうかを指定します。

デフォルト値

`anonymous`

有効な値

- 匿名 (anonymous): 認証は無効です。
- authenticated: IBM Unica システムと Cognos システムの間の通信がマシン・レベルで保護されていることを意味します。1 人のシステム・ユーザーを構成し、そのユーザーが適切なアクセス権限を持つように構成します。規則により、このユーザーの名前は「cognos_admin」となります。
- authenticatedPerUser: システムによって、個別のユーザー資格情報が評価されます。

認証名前空間 (Authentication namespace)

説明

読み取り専用です。IBM Unica Authentication Provider の名前空間です。

デフォルト値

Unica

認証ユーザー名 (Authentication user name)

説明

レポート作成システム・ユーザーのログイン名を指定します。IBM Unica アプリケーションは、Cognos が Unica Authentication Provider を使用するよう構成されている場合に、このユーザーとして Cognos にログインします。このユーザーは、IBM Unica Marketing へのアクセス権も持っていることに注意してください。

この設定は、「認証モード」プロパティが **authenticated** に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

cognos_admin

認証データ・ソース名 (Authentication datasource name)

説明

Cognos ログイン資格情報を保持するレポート作成システム・ユーザーのデータ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

Cognos

フォーム認証の有効化 (Enable form authentication)

説明

フォームに基づく認証を有効にするかどうかを指定します。次のいずれかに当てはまる場合に、このプロパティを **True** に設定します。

- IBM Unica Marketing が IBM Cognos アプリケーションと同じドメインにインストールされていない場合。
- IBM Unica Marketing アプリケーションと IBM Cognos の両方が同じマシンにインストールされている場合であっても、IBM Cognos が (IBM Unica Marketing アプリケーションへのアクセスに使用されている) 完全

修飾ホスト名の代わりに、(同じネットワーク・ドメイン内の) IP アドレスを使用してアクセスされている場合。

ただし、値が `True` の場合には、Cognos Connection へのログイン・プロセスによってログイン名とパスワードが平文で渡されるため、IBMCognos と IBM Unica Marketing で SSL 通信を使用するように構成されていないと、機密保護機能がない状態になってしまいます。

SSL が構成されている場合であっても、表示されたレポートでソースを表示すると、ユーザー名とパスワードが HTML ソース・コードに平文として表示されます。このため、IBM Cognos と IBM Unica Marketing は同じドメインにインストールしてください。

デフォルト値

`False`

有効な値

`True` | `False`

レポート | スキーマ (Schemas) | [製品] | [スキーマ名 (schema name)] | SQL 構成 (SQL Configuration) テーブル/ビュー名 (Table/View Name)

説明

このレポート作成スキーマに生成される SQL スクリプトによって作成されることになるビューまたはテーブルの名前を指定します。標準またはデフォルトのテーブル名/ビュー名を変更しないのが、ベスト・プラクティスとなります。変更する場合には、IBM Cognos Framework Manager の Cognos モデルにあるビューの名前も変更する必要があります。

新しいオーディエンス・レベルに新しいレポート作成スキーマを作成する場合には、新しいレポート作成テーブル/ビューすべての名前を指定しなければなりません。

デフォルト値

スキーマによって異なります。

有効な値

以下の制約事項を満たすストリング。

- 18 文字より長くすることはできません。
- すべて大文字を使用する必要があります。

以下に使用しなければならない命名規則を記します。

- 名前の先頭は「UAR」でなければなりません。
- IBM Unica Marketing アプリケーションを表す 1 文字のコードを追加します。コードのリストについては、後続部分を参照してください。
- 下線文字を追加します。
- テーブル名を追加します。テーブル名には、オーディエンス・レベルを示す 1 つ以上の文字コードを含めます。
- 末尾は、下線文字にします。

SQL ジェネレーターは、適切な場合には時間ディメンション・コードを追加します。コードのリストについては、後続部分を参照してください。

例えば、UARC_COPERF_DY は Campaign のオファー・パフォーマンス (Offer Performance) の日単位のレポート作成ビューまたはテーブルの名前です。

以下に、IBM Unica Marketing アプリケーション・コードのリストを示します。

- Campaign: C
- eMessage: E
- Interact: I
- Distributed Marketing: X
- Marketing Operations: P
- Leads: L

以下に、ジェネレーターによって追加される時間ディメンション・コードのリストを示します。

- 時間: HR
- 日: DY
- 週: WK
- 月: MO
- 四半期: QU
- 年: YR

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン 入力データ・ソース (JNDI)(Input Datasource (JNDI))

説明

Campaign データベース、特にシステム・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。SQL 生成ツールを使用してレポート作成テーブルを作成するスクリプトを生成する場合には、このデータ・ソースがなければなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、Campaign ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | オファー・パフォーマンス (Offer Performance)

オファー・パフォーマンス・スキーマでは、すべてのオファーに関する、およびキャンペーンごとのオファーに関するコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。デフォルトでは、このスキーマは、すべての期間における「サマリー」ビュー (またはテーブル) を生成するように構成されています。

オーディエンス・キー (Audience Key)

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例
: ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_Dt1ContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

期間のバリエーション (Over Time Variations)

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | [スキーマ名 (schema name)] | 列 | [コンタクト指標 (Contact Metric)]

このフォームは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオファー・パフォーマンス・レポート作成スキーマにコンタクト指標を追加する場合に使用します。

列名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

関数 (Function)

説明

コンタクト指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力列名 (Input Column Name)

説明

このレポート作成スキーマに追加するコンタクト指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

コンタクト履歴テーブルおよび詳細コンタクト履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ (Control Treatment Flag)

説明

サンプルの IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのコンタクト・メトリック (コンタクト指標) には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのメトリックを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのメトリックを表しま

す。「制御処理フラグ (Control Treatment Flag)」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | [スキーマ名 (schema name)] | 列 | [レスポンス指標 (Response Metric)]

このフォームは、キャンペーン・パフォーマンス・レポート作成スキーマまたはオファーク・パフォーマンス・レポート作成スキーマに、レポートに含めるレスポンス指標を追加する場合に使用します。

列名

説明

「入力列名 (Input Column Name)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

関数 (Function)

説明

レスポンス指標の判別または計算の方法を指定します。

デフォルト値

count

有効な値

count、count distinct、sum、min、max、average

入力列名 (Input Column Name)

説明

このレポート作成スキーマに追加するレスポンス指標が入っている列の名前です。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

レスポンス履歴テーブルの列の名前。

制御処理フラグ (Control Treatment Flag)

説明

標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを作成する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス・メトリック (レスポンス指標) には 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロール・グループのレスポンスを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンスを表します。

「制御処理フラグ (Control Treatment Flag)」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | パフォーマンス

キャンペーン・パフォーマンス・スキーマでは、キャンペーン、キャンペーン・オファー、キャンペーン・セルの各レベルにおけるコンタクトとレスポンスの履歴指標が提供されます。

オーディエンス・キー (Audience Key)

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例:
: ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

期間のバリエーション (Over Time Variations)

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

日、月

有効な値

日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | オファー・レスポンスの詳細 (Offer Response Breakout)

このスキーマは、キャンペーン詳細レスポンスを、レスポンス・タイプとオファー・データごとに詳細化したレポート作成をサポートしています。このスキーマ・テンプレートでは、カスタムのレスポンス・タイプごとに、キャンペーンと、キャンペーンによってグループ化されたオファーに関して別々のレスポンス数が提供されます。

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | オファー・レスポンスの詳細 (Offer Response Breakout) | [レスポンス・タイプ (Response Type)]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・レスポンス・タイプを追加する場合に使用します。

列名

説明

「レスポンス・タイプ・コード」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

レスポンス・タイプ・コード

説明

指定したレスポンス・タイプのレスポンス・タイプ・コードです。この値は、UA_UsrResponseType テーブルの ResponseTypeCode 列で保持されます。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

レスポンス・タイプ・コードの例を次に示します。

- EXP (調査)
- CON (考慮)
- CMT (コミット)
- FFL (実行)
- USE (使用)
- USB (アンサブスクライブ)
- UKN (不明)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのレスポンス・タイプ・コードもさらに使用できます。

制御処理フラグ (Control Treatment Flag)

説明

IBM Unica Marketing Reports Pack で提供されている標準の IBM Cognos レポートを使用する場合、またはコントロール・グループが含まれるカスタム・レポートを使用する場合には、レポート作成スキーマのそれぞれのレスポンス・タイプには 2 つの列がなければなりません。1 つの列はコントロ

ール・グループのレスポンス・タイプを表し、もう 1 つの列はターゲット・グループのレスポンス・タイプを表します。「制御処理フラグ (Control Treatment Flag)」の値によって、ビューの列がコントロール・グループを表すのか、ターゲット・グループを表すのかが示されます。

レポートにコントロール・グループが含まれない場合には、コントロール・グループ用の 2 番目の列は不要です。

デフォルト値

0

有効な値

- 0: ターゲット・グループを表す列
- 1: コントロール・グループを表す列

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスによるブレイクアウト (Campaign Offer Contact Status Breakout)

このスキーマは、キャンペーン詳細コンタクトを、コンタクト・ステータスとオファー・データごとに詳細化したレポート作成をサポートしています。このスキーマ・テンプレートでは、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプごとに、キャンペーンと、キャンペーンによってグループ化されたオファーに関して別々のコンタクト数が提供されます。

デフォルトでは、このスキーマを使用する Campaign レポートのサンプルは存在しません。

オーディエンス・キー (Audience Key)

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例: ColumnX,ColumnY

コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのコンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ContactHistory

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | キャンペーン・オファーのコンタクト・ステータスによるブレイクアウト (Campaign Offer Contact Status Breakout) | [コンタクト・ステータス・コード]

列名

説明

「コンタクト・ステータス (Contact Status)」フィールドで指定した列に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

コンタクト・ステータス (Contact Status)

説明

コンタクト・ステータス・コードの名前です。この値は、UA_ContactStatus テーブルの ContactStatusCode 列で保持されます。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

コンタクト・ステータス・タイプの例を次に示します。

- CSD (キャンペーン送信)
- DLV (配信済み)
- UNDLV (未配信)
- CTR (制御)

ご使用の Campaign インストール済み環境では、カスタムのコンタクト・ステータス・タイプもさらに使用できます。

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | カスタム属性 | 列 | [キャンペーン・カスタム列 (Campaign Custom Column)]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・キャンペーン属性を追加する場合に使用します。

列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があり、スペースを入れることはできません。

属性 ID

説明

UA_CampAttribute テーブルの属性の AttributeID 列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

キャンペーン属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このキャンペーン属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。

このキャンペーン属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | カスタム属性 | 列 | [オファー・カスタム列 (Offer Custom Column)]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・オファー属性を追加する場合に使用します。

列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があります、スペースを入れることはできません。

属性 ID

説明

UA_OfferAttribute テーブルの属性の **AttributeID** 列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

オファー属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

このオファー属性に通貨値を入れる場合、NumberValue を選択してください。

このオファー属性の「フォーム要素タイプ」を Campaign で「選択ボックス - 文字列」に設定した場合、StringValue を選択します。

レポート | スキーマ (Schemas) | キャンペーン | カスタム属性 | 列 | [カスタム列のセル (Cell Custom Column)]

このフォームは、レポート作成スキーマに、レポートに含めるカスタム・セル属性を追加する場合に使用します。

列名

説明

「属性 ID」フィールドで識別される属性に関して、レポート作成ビューまたはテーブルで使用する名前を指定します。

デフォルト値

[変更してください]

有効な値

名前は 18 文字を超えてはならず、すべて大文字にする必要があります、スペースを入れることはできません。

属性 ID

説明

「**UA_CellAttribute**」テーブルの属性の「**AttributeID**」列の値です。

デフォルト値

0

値タイプ

説明

セル属性のデータ型です。

デフォルト値

StringValue

有効な値

StringValue、NumberValue、DatetimeValue

レポート | スキーマ (Schemas) | インタラクト (Interact)

Interact レポート作成スキーマは、設計時、実行時、学習の 3 つの異なるデータベースを参照します。このページのプロパティは、これらのデータベースのデータ・ソースの JNDI 名を指定する場合に使用します。

SQL レポート生成ツールを使用してレポート作成テーブルを作成するスクリプトを生成する場合には、このページで指定するデータ・ソースがなければなりません。SQL 生成ツールは、こうしたデータ・ソースがなくともレポート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

データ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなければなりません。

Interact 設計データ・ソース (Interact Design Datasource (JNDI))

説明

Interact 設計時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このデータベースは、Campaign システム・テーブルでもあります。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Interact 実行時データ・ソース (Interact Runtime Datasource (JNDI))

説明

Interact 実行時データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

InteractRTDS

Interact 学習データ・ソース (Interact Learning Datasource (JNDI))

説明

Interact 学習データベースを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。

デフォルト値

レポート | スキーマ (Schemas) | インタラクト (Interact) | インタラクト・パフォーマンス (Interact Performance)

インタラクト・パフォーマンス・スキーマは、チャンネル、チャンネル・オファー、チャンネル・セグメント、チャンネル・インタラクション・ポイント、対話式セル、対話式セル・オファー、対話式セル・インタラクション・ポイント、対話式オファー、対話式オファー・セル、対話式オファー・インタラクション・ポイントの各レベルにおいて、コンタクトとレスポンスの履歴指標を生成します。

オーディエンス・キー (Audience Key)

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされているオーディエンス・レベルのオーディエンス・キーとなる列の名前を指定します。

デフォルト値

CustomerID

有効な値

255 文字未満のストリング値。

キーに複数の列が含まれる場合、列名の間にコンマを使用してください。例
: ColumnX,ColumnY

詳細コンタクト履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルの詳細コンタクト履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_DtlContactHist

レスポンス履歴テーブル

説明

このレポート作成スキーマによってサポートされるオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルの名前を指定します。

デフォルト値

UA_ResponseHistory

期間のバリエーション (Over Time Variations)

説明

このスキーマでサポートされる「期間」レポートで使用されるカレンダー期間を指定します。

デフォルト値

時間、日

有効な値

時間、日、週、月、四半期、年

レポート | スキーマ (Schemas) | eMessage

eMessage トラッキング・データ・ソース (eMessage Tracking Datasource (JNDI))

説明

eMessage トラッキング・テーブルを示す JNDI データ・ソースの名前を指定します。このトラッキング・テーブルは、Campaign システム・テーブル内にあります。SQL レポート生成ツールを使用して、レポート作成テーブルを作成するスクリプトを検証する場合には、このデータ・ソースがなければなりません。SQL 生成ツールは、このデータ・ソースがなくてもレポート作成ビューを作成するスクリプトを生成できますが、スクリプトの検証を実行できません。

このデータ・ソースのデータベース・タイプは、ビューまたはレポート作成のテーブルに SQL スクリプトを生成する際に選択したデータベース・タイプと同じでなければなりません。

デフォルト値

campaignPartition1DS

Campaign 構成プロパティ

このセクションでは、「構成」ページの Campaign 構成プロパティについて取り上げます。

Campaign

これらの構成プロパティは、ご使用の Campaign インストール環境でサポートされるコンポーネント・アプリケーションとロケールを指定します。

currencyLocale

説明

currencyLocale プロパティは、表示ロケールに関係なく Campaign Web アプリケーションでの通貨表示方法を制御するグローバル設定です。

重要: (複数ロケール機能が実装されていて、ユーザー指定のロケールに基づいて表示ロケールの変更が行われる場合など) 表示ロケールが変更されても、Campaign では通貨変換は行われません。ロケールを切り替える場合には注意が必要です。例えば、通貨額が US\$10.00 などと表記される「英語 (米国)」から「フランス語」ロケールに変更する場合、ロケールと一緒に通貨記号を変更しても通貨額 (10,00) は変更されません。

デフォルト値

en_US

supportedLocales

説明

`supportedLocales` プロパティは、Campaign でサポートするロケールまたは言語ロケールのペアを指定します。このプロパティの値は、ユーザーが Campaign をインストールする際にインストーラーによって設定されます。

デフォルト値

Campaign がローカライズされているすべての言語/ロケール。

defaultLocale

説明

`defaultLocale` プロパティは、`supportedLocales` プロパティで指定されたロケールのうち、Campaign のデフォルトの表示ロケールとするロケールを指定します。このプロパティの値は、ユーザーが Campaign をインストールする際にインストーラーによって設定されます。

デフォルト値

en

acoInstalled

パス

説明

`acoInstalled` プロパティは、Optimize がインストールされているかどうかを指定します。

Optimize がインストールされて構成されている場合には、この値を「はい」に設定し、Optimize プロセスがフローチャートで表示されるようにします。値が「true」で Optimize がインストールも構成もされていないと、プロセスは表示されますが、使用できません (ばかし表示)。

デフォルト値

false

有効な値

false および true

collaborateInstalled

説明

`collaborateInstalled` プロパティは、Distributed Marketing がインストールされているかどうかを指定します。Distributed Marketing がインストールされて構成されている場合、この値を「true」に設定し、Distributed Marketing 機能が Campaign ユーザー・インターフェースで表示されるようにします。

デフォルト値

false

有効な値

true | false

Campaign | コラボレーション (Collaborate)

このカテゴリのプロパティは、Distributed Marketing 構成に関連します。

CollaborateIntegrationServicesURL

説明

CollaborateIntegrationServicesURL プロパティは、Distributed Marketing のサーバーとポート番号を指定します。この URL は、ユーザーがフローチャートを Distributed Marketing に公開する際に Campaign によって使用されます。

デフォルト値

http://localhost:7001/collaborate/services/
CollaborateIntegrationServices/1.0

Campaign | ナビゲーション (navigation)

このカテゴリのプロパティの中には内部的に使用されるため、変更すべきでないものがあります。

welcomePageURI

説明

welcomePageURI プロパティは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。Campaign 索引ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

seedName

説明

seedName プロパティは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

タイプ

説明

「Campaign」>「navigation」>「タイプ」プロパティは、IBM アプリケーションによって内部的に使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

httpPort

説明

このプロパティは、Campaign Web アプリケーション・サーバーが使用するポートを指定します。Campaign インストールでデフォルト以外のポートを使用する場合、このプロパティの値を編集する必要があります。

デフォルト値

7001

httpsPort

説明

SSL が構成されている場合、このプロパティは、Campaign Web アプリケーション・サーバーがセキュア接続のために使用するポートを指定します。Campaign インストールでデフォルト以外のセキュア・ポートを使用する場合、このプロパティの値を編集する必要があります。

デフォルト値

7001

serverURL

説明

「Campaign」>「navigation」>「serverURL」プロパティは、Campaign が使用する URL を指定します。Campaign インストールでデフォルト以外の URL を使用する場合、この値を次のように編集しなければなりません。

`http://machine_name_or_IP_address:port_number/context-root`

デフォルト値

`http://localhost:7001/Campaign`

serverURLInternal

説明

serverURLInternal プロパティは、SiteMinder を使用する場合の Campaign Web アプリケーションの URL を指定します。このプロパティは、eMessage や Interact などの、他の IBM Unica Marketing アプリケーションとの内部通信用にも使用されます。このプロパティが空の場合、serverURL プロパティの値が使用されます。内部アプリケーション通信を HTTP にして、外部通信を HTTPS にする必要がある場合には、このプロパティを変更します。SiteMinder を使用する場合には、この値を、Campaign Web アプリケーション・サーバーの URL に設定する必要があります。次のようにフォーマット設定します。

`http://machine_name_or_IP_address:port_number/context-root`

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

campaignDetailPageURI

説明

campaignDetailPageURI プロパティは、IBM アプリケーションが内部的に使用します。Campaign 詳細設定ページの Uniform Resource Identifier (URI) を指定します。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

campaignDetails.do?id=

flowchartDetailPageURI

説明

flowchartDetailPageURI プロパティは、特定のキャンペーンにあるフローチャートの詳細情報にナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

flowchartDetails.do?campaignID=&id=

offerDetailPageURI

説明

offerDetailPageURI プロパティは、特定のオファーの詳細情報にナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

offerDetails.do?id=

offerlistDetailPageURI

説明

offerlistDetailPageURI プロパティは、特定のオファー・リストの詳細情報にナビゲートする URL を構成するために使用されます。この値を変更してはなりません。

デフォルト値

displayOfferList.do?offerListId=

displayName

説明

displayName プロパティは、それぞれの IBM 製品の GUI に表示されるドロップダウン・メニューの Campaign リンクに使用されるリンク・テキストを指定します。

デフォルト値

Campaign

Campaign | キャッシング (caching)

このキャッシング・カテゴリーのプロパティは、チャネル、イニシアチブ、キャンペーン、セッション、オファーのキャッシュ・データが保持される期間を指定します。

offerTemplateDataTTLSeconds

説明

`offerTemplateDataTTLSeconds` プロパティは、システムがオファー・テンプレートのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

campaignDataTTLSeconds

説明

`campaignDataTTLSeconds` プロパティは、システムが Campaign キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

sessionDataTTLSeconds

説明

`sessionDataTTLSeconds` プロパティは、システムがセッション・キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

folderTreeDataTTLSeconds

説明

`folderTreeDataTTLSeconds` プロパティは、システムがフォルダー・ツリーのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

attributeDataTTLSeconds

説明

`attributeDataTTLSeconds` プロパティは、システムがオファー属性のキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

initiativeDataTTLSeconds

説明

`initiativeDataTTLSeconds` プロパティは、システムがイニシアチブ・キャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

offerDataTTLSeconds

説明

`offerDataTTLSeconds` プロパティは、システムがオファーのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

segmentDataTTLSeconds

説明

`segmentDataTTLSeconds` プロパティは、システムがセグメントのキャッシュ・データを保持する期間 (存続時間) を秒単位で指定します。値が空の場合は、キャッシュ・データが消去されないことを意味します。

デフォルト値

600 (10 分)

Campaign | パーティション

このカテゴリには、すべての Campaign パーティション (パーティション 1 という名前のデフォルトのパーティションも含みます) を構成するためのプロパティが含まれています。それぞれの Campaign パーティションに対して 1 つのカテゴリを作成する必要があります。このセクションでは、`partition[n]` カテゴリのプロパティについて取り上げます。このカテゴリは、Campaign で構成するすべてのパーティションに適用されます。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | eMessage

このカテゴリのプロパティを使用すると、宛先リストの特性を定義したり、IBM Unica Hosted Services にリストをアップロードするリソースの場所を指定したりできます。

eMessagePluginJarFile

説明

宛先リスト・アップローダー (RLU) として作動するファイルの場所の絶対パスです。Campaign に対するこのプラグインによって、IBM がホストするリモート・サービスに OLT データと関連メタデータがアップロードされ

ます。 Campaign Web アプリケーション・サーバーをホストするマシンのファイル・システムにあるローカル・ディレクトリーの絶対パスを指定する必要があります。

IBM インストーラーを実行すると、デフォルトのパーティション用のこの設定がインストーラーによって自動的に取り込まれます。追加パーティションの場合には、このプロパティを手動で構成しなければなりません。eMessage のインストールごとに RLU は 1 つしか存在しないので、すべてのパーティションに関して RLU に同じ場所を指定する必要があります。

IBM で指示されない限り、この設定は変更しないでください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

Campaign Web サーバーをインストールしたマシンのローカル・ディレクトリーの絶対パスです。

defaultSeedInterval

説明

defaultSeedType が Distribute list の場合におけるシード・メッセージ間のメッセージ数。

デフォルト値

1000

defaultSeedType

説明

eMessage がシード・アドレスを宛先リストに挿入するために使用するデフォルトのメソッドです。

デフォルト値

Distribute IDS

有効な値

- **Distribute IDS** - 宛先リストのサイズと有効なシード・アドレスの数に基づいて ID を均等に配布し、シード・アドレスを宛先リスト全体で均等な間隔に挿入します。
- **Distribute list** - メイン・リストの defaultSeedInterval ID すべてにシード・アドレスを挿入します。宛先リストに指定の間隔で、有効なシード・アドレスのリスト全体を挿入します。挿入点の間隔を指定する必要があります。

oltTableNamePrefix

説明

出力リスト表の生成済スキーマで使います。このパラメーターを定義する必要があります。

デフォルト値

OLT

有効な値

接頭部に含めることができるのは 8 文字までの英数字または下線文字で、先頭は文字でなければなりません。

oltDimTableSupport

説明

この構成パラメーターによって制御される機能は、eMessage スキーマで作成された出力リスト表 (OLT) にディメンション表を追加する機能です。ディメンション表は、E メール の E メール・メッセージにデータ表を作成する拡張スクリプトを使用するのに必要となります。

デフォルトの設定は、False です。マーケティング担当者が eMessage プロセスを使用して宛先リストを定義する際にディメンション表を作成できるように、このプロパティを True に設定する必要があります。データ・テーブルの作成と、Eメールの拡張スクリプトの使用に関して詳しくは、「*IBM Unica eMessage ユーザー・ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

Campaign | パーティション | パーティション[n] | レポート

これらの構成プロパティは、レポートのフォルダーを定義します。

offerAnalysisTabCachedFolder

説明

offerAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の (拡張される) オファー・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']/folder[@name='cached']
```

segmentAnalysisTabOnDemandFolder

説明

segmentAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、セグメントの「分析」タブにリストされるセグメント・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']/folder[@name='cached']
```

offerAnalysisTabOnDemandFolder

説明

offerAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、オファーの「分析」タブにリストされるオファー・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='offer']
```

segmentAnalysisTabCachedFolder

説明

segmentAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ上にリストされる満杯の (拡張される) セグメント・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='segment']
```

analysisSectionFolder

説明

analysisSectionFolder プロパティは、レポート仕様を格納するルート・フォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']
```

campaignAnalysisTabOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析」タブにリストされるキャンペーン・レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']
```

campaignAnalysisTabCachedFolder

説明

campaignAnalysisTabCachedFolder プロパティは、ナビゲーション・ペインの「分析」リンクをクリックして「分析」タブに移動した際に、そのタブ

上にリストされる満杯の (拡張される) キャンペーン・レポートの仕様を入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='campaign']/folder[@name='cached']
```

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder

説明

campaignAnalysisTabEmessageOnDemandFolder プロパティは、キャンペーンの「分析」タブにリストされる eMessage レポートを入れるフォルダーの場所を指定します。パスは、XPath 表記を使用して指定されます。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='eMessage Reports']
```

campaignAnalysisTabInteractOnDemandFolder

説明

Interact レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign']/folder[@name='Interact Reports']
```

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

interactiveChannelAnalysisTabOnDemandFolder

説明

「対話式チャネル」分析タブ・レポートのレポート・サーバー・フォルダー・ストリングです。

デフォルト値

```
/content/folder[@name='Affinium Campaign - Object Specific Reports']/folder[@name='interactive channel']
```

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | partitions | partition[n] | validation

Campaign に同梱されている検証プラグイン開発キット (PDK) を使用すると、サード・パーティーはカスタム検証ロジックを開発し、Campaign で使用することができます。 partition[n] > validation カテゴリーのプロパティは、カスタム検証プログラムのクラスパスとクラス名、さらにはオプションの構成ストリングを指定します。

validationClass

説明

`validationClass` プロパティは、Campaign における検証で使用するクラス名を指定します。クラスのパスは、`validationClasspath` プロパティで指定します。クラスは、パッケージ名で完全修飾する必要があります。

以下に例を示します。

```
com.unica.campaign.core.validation.samples.SimpleCampaignValidator
```

サンプル・コードの `SimpleCampaignValidator` クラスであることを示しています。

このプロパティはデフォルトでは未定義で、Campaign ではカスタム検証は行われません。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

validationConfigString

説明

`validationConfigString` プロパティは、Campaign が検証プラグインをロードする際にそのプラグインに渡す構成ストリングを指定します。使用する構成ストリングは、使用するプラグインによって異なる可能性があります。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

validationClasspath

説明

`validationClasspath` プロパティは、Campaign におけるカスタム検証で使用するクラスのパスを指定します。

- 絶対パスか相対パスのいずれかを使用します。相対パスである場合、Campaign を実行しているアプリケーション・サーバーによって動作が異なります。WebLogic では、ドメイン作業ディレクトリーへのパスが使用されます。このパスは、デフォルトでは `c:%bea%user_projects%domains%mydomain` です。
- パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合には /、Windows の場合には円記号 ¥) になっていると、Campaign では、そのパスは、使用する必要のある Java プラグイン・クラスの場所を指すものと見なされます。
- パスの末尾がスラッシュでないと、Campaign では、Java クラスが含まれる .jar ファイルの名前と見なされます。例えば、UNIX プラットフォームでは以下の値を使用できます。 `/<Campaign_home>/devkits/validation/lib/validator.jar`。

このプロパティはデフォルトでは未定義で、このプロパティは無視されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | audienceLevels | audienceLevel

「パーティション[n]」 > 「audienceLevels」のカテゴリには、Campaign においてユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に作成されてデータが設定されるサブカテゴリとプロパティが含まれています。このカテゴリのプロパティは編集しないでください。

partition[n] > audienceLevels > audienceLevel のカテゴリに含まれるプロパティは、オーディエンス・レベルでのフィールドの数、およびオーディエンス・レベルの名前を指定します。これらのプロパティは、Campaign においてユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このカテゴリのプロパティは編集しないでください。

numFields

説明

このプロパティは、Campaign の「管理」ページで、ユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティは編集しないようにしてください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

audienceName

説明

このプロパティは、Campaign の「管理」ページで、ユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティは編集しないようにしてください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | audienceLevels | audienceLevel | フィールド[n]

このカテゴリのプロパティは、オーディエンス・レベル・フィールドを定義します。これらのプロパティは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このカテゴリのプロパティは編集しないようにしてください。

タイプ

説明

「パーティション[n]」 > 「audienceLevels」 > 「audienceLevel」 > 「フィールド[n]」 > 「タイプ」のプロパティは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティは編集しないようにしてください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

名前

説明

「パーティション[n]」>「audienceLevels」>「audienceLevel」>「フィールド[n]」>「名前」プロパティは、Campaign の「管理」ページでユーザーがオーディエンス・レベルを作成する際に設定されます。このプロパティは編集しないようにしてください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | dataSources

このカテゴリに含まれるプロパティは、Campaign がデータベース (独自のシステム・テーブルを含む) と対話する方法を構成します。これらのプロパティは、Campaign からアクセス可能なデータベース、および照会の構成方法に関する多くの面を指定します。

Campaign で追加する各データ・ソースは、partition[n] > dataSources > [DATA_SOURCE_NAME] の下のカテゴリによって表されます。

注: Marketing Platform において、各パーティションの Campaign システム・テーブル・データ・ソースの名前は UA_SYSTEM_TABLES でなければならず、Campaign のどのパーティションについても、「構成」ページに dataSources > UA_SYSTEM_TABLES のカテゴリが存在していなければなりません。

AccessLibrary

説明

Campaign は、データ・ソースのタイプに従ってデータ・ソース・アクセス・ライブラリーを選択します。例えば、Oracle の接続には libora4d.so が使用され、DB2 の接続には libdb24d.so が使用されます。ほとんどの場合、デフォルトの選択内容が適切です。しかし、Campaign の実際の環境においてデフォルト値が適切でないという場合には、AccessLibrary プロパティを変更することが可能です。例えば、64 ビット Campaign には 2 つの ODBC アクセス・ライブラリーが提供されています。1 つは unixODBC 実装 (Netezza や Teradata などへのアクセスのために Campaign が使用する libodb4d.so) と互換の ODBC データ・ソースに適したもの、もう 1 つは、DataDirect 実装 (Teradata などへのアクセスのために Campaign が使用する libodb4dDD.so) と互換のものです。

AIX 用の追加ライブラリー

説明

Campaign には、ODBC Unicode API ではなく ODBC ANSI API をサポートする AIX ODBC ドライバー・マネージャーのための 2 つの追加ライブラリーが含まれています。

- libodb4dAO.so (32 ビットおよび 64 ビット) — unixODBC 互換実装用の ANSI 専用ライブラリー

- libodb4dDDAO.so (64 ビットのみ) — DataDirect 互換実装用の ANSI 専用ライブラリー

デフォルトのアクセス・ライブラリーをオーバーライドする必要があると判断した場合には、必要に応じてこのパラメーターを設定してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

AliasPrefix

説明

AliasPrefix プロパティは、ディメンション・テーブルを使用していて新しいテーブルに書き込む際に、Campaign により自動的に作成される別名を、Campaign がどのように生成するかを指定します。

各データベースには、それぞれ ID の最大長があります。使用しているデータベースの文書を調べて、設定する値がデータベースの最大 ID 長を超えないものであることを確認してください。

デフォルト値

A

AllowBaseJoinsInSelect

説明

Select の処理において使用される (同じデータ・ソースからの) ベース・テーブルの SQL 結合の実行を Campaign が試みるかどうかを決定します。それをしない場合、それに相当する結合は Campaign サーバーにおいて実行されます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

AllowSegmentUsingSQLCase

説明

AllowSegmentUsingSQLCase プロパティは、Campaign の Segment プロセスにおいて、構成に関する特定の条件が満たされた場合に、複数の SQL ステートメントを統合して単一の SQL ステートメントにするかどうかを指定します。

このプロパティを TRUE に設定すると、以下の条件のすべてが満たされた場合に、パフォーマンスが大幅に改善されます。

- セグメントが相互に排他的である。
- すべてのセグメントが単一のテーブルに由来するものである。
- 各セグメントの基準が IBM マクロ言語に基づくものである。

この場合、Campaign は、セグメンテーションを実行した後、フィールドごとのセグメント処理を Campaign アプリケーション・サーバー上で実行するための単一の SQL CASE ステートメントを生成します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

AllowTempTables

説明

AllowTempTables プロパティは、Campaign がデータベース中に一時テーブルを作成するかどうかを指定します。一時テーブルを作成すると、キャンペーンのパフォーマンスが大幅に改善されることがあります。値が TRUE の場合、一時テーブルが有効です。

一時テーブルが有効の場合、(例えば Segment プロセスによって) データベースに対して照会が発行されるたびに、結果として生成される ID がデータベース中の一時テーブルに書き込まれます。追加の照会が発行されると、Campaign は、データベースから行を取り出すために、その一時テーブルを使用します。

一時テーブルが有効でない場合、Campaign は、選択された ID をサーバー・メモリー中に保持します。追加の照会では、データベースから ID を取り出して、サーバー・メモリー中の ID との突き合わせが実行されます。

一時テーブルの結合を制御することについて詳しくは、MaxTempTableJoinPctSelectAll および MaxTempTableJoinPctWithCondition の説明を参照してください。

一時テーブルを使用するには、データベースへの書き込むための適切な特権が付与されていないとなりません。それは、データベースへの接続時に入力するデータベース・ログイン情報によって決まります。

デフォルト値

TRUE

ASMSaveDBAuthentication

説明

ASMSaveDBAuthentication プロパティは、Campaign にログインし、それまでログインしたことのないデータ・ソース中のテーブルをマップする際に、Campaign がユーザー名とパスワードを IBM Unica Marketing に保存するかどうかを指定します。

このプロパティを TRUE に設定した場合、Campaign は、データ・ソースへのログイン時にユーザー名とパスワードを入力するためのプロンプトを表示しません。このプロパティを FALSE に設定した場合、データ・ソースにログインするたびに、毎回ユーザー名とパスワードを入力するためのプロンプトが Campaign によって表示されます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

ASMUserForDBCredentials

説明

ASMUserForDBCredentials プロパティは、Campaign システムのユーザーに割り当てられている IBM Unica Marketing ユーザー名を指定します (Campaign システム・テーブルにアクセスするために必要)。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

BulkInsertBlockSize

説明

BulkInsertBlockSize プロパティは、Campaign がデータベースに一度に渡すデータ・ブロックの最大サイズを、レコード数として定義します。

デフォルト値

100

BulkInsertRequiresColumnType

説明

BulkInsertRequiresColumnType プロパティは、Data Direct ODBC データ・ソースのサポートのためにのみ必要です。 Data Direct ODBC データ・ソースにおいて、バルク (配列) 挿入機能を使用する場合、このプロパティを TRUE に設定します。その他のほとんどの ODBC ドライバーと互換にするには、このプロパティを FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

BulkReaderBlockSize

説明

BulkReaderBlockSize プロパティは、Campaign がデータベースから一度に読むデータ・ブロックのサイズを、レコード数として定義します。

デフォルト値

2500

ConditionalSQLCloseBracket

説明

ConditionalSQLCloseBracket プロパティは、未加工 SQL カスタム・マクロ内で、条件付きセグメントの終わりを示すために使用されるブラケットのタイプを指定します。 ConditionalSQLOpenBracket プロパティと

`ConditionalSQLCloseBracket` プロパティによって指定されるブラケットで囲まれた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在する場合にのみ使用され、一時テーブルがない場合は無視されます。

デフォルト値

} (閉じ中括弧)

ConditionalSQLOpenBracket

説明

`ConditionalSQLOpenBracket` プロパティは、未加工 SQL カスタム・マクロ内で、条件付セグメントの開始を示すために使用されるブラケットのタイプを指定します。 `ConditionalSQLOpenBracket` プロパティと `ConditionalSQLCloseBracket` プロパティによって指定されるブラケットで囲まれた条件付きセグメントは、一時テーブルが存在する場合にのみ使用され、一時テーブルがない場合は無視されます。

デフォルト値

{ (開き中括弧)

ConnectionCacheSize

説明

`ConnectionCacheSize` プロパティは、Campaign においてデータ・ソースごとにキャッシュ中に維持する接続の数を指定します。

デフォルトでは N=0 であり、その場合 Campaign は、1 つの操作ごとにデータ・ソースとの新しい接続を 1 つ確立します。 Campaign で接続キャッシュが維持されていて、接続の再利用が可能なら、Campaign は、新しい接続を確立するのではなく、キャッシュに含まれる接続を使用します。

設定値が 0 でない場合、接続を利用して実行されるプロセスについて、Campaign は、指定された数の接続を、`InactiveConnectionTimeout` プロパティによって指定される時間にわたって、開かれた状態に維持します。その時間の満了後、キャッシュから接続が除去され、閉じられます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DateFormat

説明

Campaign は、Campaign マクロ言語を使用する際、または日付列からのデータを解釈する際に、`DateFormat` プロパティの値を使用することにより、さまざまな日付形式のデータの解析方法を決定します。

`DateFormat` プロパティの値は、Campaign において、このデータ・ソースから受け取る日付について予期されている形式に設定します。その値は、`select` において日付表示のためにデータベースによって使用される形式と一致するものでなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、`DateOutputFormatString` プロパティの設定値と同じです。

注: 複数ロケール・フィーチャーを使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用すべきではありません。その代わり、月を表すために数値を使用する区切り形式または固定形式を使用するようにしてください。

データベースで使用する日付形式を判別するには、下記の説明のようにして、データベースから日付を選択します。

データベースによる日付の選択

表 47. 日付形式

データベース	正しい設定値を判別する方法
DB2	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある db2test を使用して接続してから、以下のコマンドを発行します。 <pre>values current date</pre>
Netezza®	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースに接続します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある odbctest を使用して接続してから、以下のコマンドを発行します。 <pre>CREATE TABLE date_test (f1 DATE); INSERT INTO date_test values (current_date); SELECT f1 FROM date_test;</pre> 日付形式を選択する別の方法は、以下のコマンドを実行することです。 <pre>SELECT current_date FROM ANY_TABLE limit 1;</pre> ANY_TABLE は、既存のテーブルの名前です。
Oracle	Campaign サーバーの実行されているマシンからデータベースにログインします。 SQL *Plus を使用して接続し、以下のコマンドを発行します。 <pre>SELECT sysdate FROM dual</pre> 現在日付が、そのクライアントの NLS_DATE_FORMAT で返されます。
SQL Server	Campaign リスナーの実行されているマシンからデータベースに接続します。 Campaign¥bin ディレクトリーにある odbctest を使用して接続してから、以下のコマンドを発行します。 <pre>SELECT getdate()</pre>

追加の考慮事項

データベース固有の以下の説明に注意してください。

Teradata

Teradata では、列ごとに日付形式を定義できます。 dateFormat と dateOutputFormatString に加えて、SuffixOnCreateDateField を設定する必要があります。ここでのシステム・テーブルの設定値と一貫性のあるものとするには、下記を使用します。

- SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'

- DateFormat = DELIM_Y_M_D
- DateOutputFormatString = %Y-%m-%d

SQL Server

ODBC データ・ソースの構成の中で、「通貨、数値日付、および時刻の出力時に地域設定値を使用する」オプションにチェックが付いていない場合、日付形式をリセットすることはできません。一般に、この設定値のチェックを外した状態のままにして、日付形式の構成が言語ごとに変わらないようにしておくほうが簡単です。

デフォルト値

DELIM_Y_M_D

有効な値

DATE マクロの中で指定される形式のいずれか

DateOutputFormatString

説明

DateOutputFormatString プロパティは、Campaign が日付 (キャンペーンの開始日付や終了日付など) をデータベースに書き込む際に使用される日付データ型の形式を指定します。DateOutputFormatString プロパティの値は、データ・ソースにおいてタイプ date の列について予期されている形式に設定します。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は [data_source_name] > 「DateFormat」 プロパティの設定値と同じです。

DateOutputFormatString プロパティは、DATE_FORMAT マクロの中で、format_str について指定されている形式のいずれかに設定することができます。DATE_FORMAT マクロは、2 つの異なる種類の形式を受け付けます。1 つは ID (DELIM_M_D_Y や DDDMMYYYY など、DATE マクロで受け付けられるのと同じ)、そしてもう 1 つは書式ストリングです。

DateOutputFormatString プロパティの値は書式ストリングでなければなりません。DATE マクロ ID の 1 つにすることはできません。多くの場合、区切り形式の 1 つを使用します。

以下に説明されている手順に従ってテーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入することにより、正しい形式が選択されているかどうかを検証できます。

DateOutputFormatString を検証する方法

1. 「データベースによる日付の選択」の表で説明されているようにして、適切なツールを使用してデータベースに接続します。

日付がデータベースに正しく送信されていることを確認するために、データベース付属の照会ツール (SQL Server の Query Analyzer など) は使用しないでください。それらの照会ツールは、日付形式を、Campaign が実際にデータベースに送信するものとは異なる形式に変換する可能性があります。

2. テーブルを作成し、選択した形式で日付を挿入します。例えば、%m/%d/%Y を選択した場合、

```
CREATE TABLE date_test (F1 DATE)
INSERT INTO date_test VALUES ('03/31/2004')
```

INSERT コマンドがデータベースにより正常に完了した場合、選択した形式は正しいということです。

デフォルト値

%Y/%m/%d

DateTimeFormat

説明

[data_source_name] > 「DateTimeFormat」プロパティの値は、Campaign がデータベースから日時/タイム・スタンプ・データを受け取る際に予期されている形式を指定します。これは、select において日時/タイム・スタンプ・データの表示のためにデータベースによって使用される形式に一致していなければなりません。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、DateTimeOutputFormatString の設定値と同じです。

多くの場合、DateTimeFormat には、「データベースによる日付の選択」の表で説明されているようにして DateFormat の値を判別した後、その DateFormat の値の前に DT_ を付加したものを設定します。

注: 複数ロケール・フィーチャーを使用する場合は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用すべきではありません。その代わり、月を表すために数値を使用する区切り形式または固定形式を使用するようにしてください。

デフォルト値

DT_DELIM_Y_M_D

有効な値

以下の区切り形式のみサポートされています。

- DT_DELIM_M_D
- DT_DELIM_M_D_Y
- DT_DELIM_Y_M
- DT_DELIM_Y_M_D
- DT_DELIM_M_Y
- DT_DELIM_D_M
- DT_DELIM_D_M_Y

DateTimeOutputFormatString

説明

DateTimeOutputFormatString プロパティは、Campaign が、キャンペーンの開始日時や終了日実行などの日時データをデータベースに書き込む際に使用する日時データ型の形式を指定します。DateTimeOutputFormatString プロパティの値は、データ・ソースにおいてタイプ datetime の列について

予期されている形式に設定します。ほとんどのデータベースの場合、この設定値は、[data_source_name] > 「DateTimeFormat」 プロパティの設定値と同じです。

選択する形式が正しいものであることを検証する方法については、DateOutputFormatString の説明を参照してください。

デフォルト値

%Y/%m/%d %H:%M:%S

DB2NotLoggedInitially

説明

DB2NotLoggedInitially プロパティは、DB2 の一時テーブルのデータを設定する際に、Campaign が not logged initially SQL 構文を使用するかどうかを決定します。このプロパティを TRUE に設定した場合、一時テーブルへの挿入のロギングは無効になり、その結果、パフォーマンスが向上し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。

not logged initially 構文がサポートされていないバージョンの DB2 を使用している場合、このプロパティは FALSE に設定します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

DB2NotLoggedInitiallyUserTables

説明

DB2NotLoggedInitiallyUserTables プロパティは、DB2 のユーザー・テーブルへの挿入操作で、Campaign が not logged initially SQL 構文を使用するかどうかを決定します。このプロパティを TRUE に設定した場合、ユーザー・テーブルへの挿入のロギングが無効になり、その結果、パフォーマンスが向上し、データベース・リソースの消費量が少なくなります。

注: TRUE に設定した場合、ユーザー・テーブル・トランザクションが何らかの理由で失敗すると、そのテーブルは破損した状態になり、ドロップしなければならなくなります。それまでにそのテーブルに含まれていたデータは、すべて失われます。

注: DB2NotLoggedInitiallyUserTables プロパティは、Campaign のシステム・テーブルについては使用されません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DefaultScale

説明

Campaign がフラット・ファイルから数値を保存するためにデータベース・フィールドを作成するときに、スナップショット・プロセスまたはエクスポート・プロセスを使用する場合、DefaultScale プロパティが使用されます。

このプロパティは、データベース・フィールドで精度とスケールに関する情報が省略されている場合を除いて、データベース表から得られる数値には使用されません。(精度はフィールドに使用できる総桁数を示します。スケールは小数点以下に使用できる桁数を示します。例えば、6.789 の精度は 4 で、スケールは 3 です。データベース表から取得した値には、Campaign がフィールドを作成するときに使用する精度とスケールに関する情報が含まれます。)

フラット・ファイルは、精度とスケールを示しません。作成されるフィールドに対して定義する小数点以下の桁数を指定するには、DefaultScale を使用します。以下に例を示します。

- DefaultScale=0 は、小数点以下がないフィールドを作成します (整数部のみを保存できます)。
- DefaultScale=5 は、小数点以下が最大 5 桁のフィールドを作成します。

DefaultScale に対して設定された値がフィールドの精度を超えた場合は、それらのフィールドに対して DefaultScale=0 が使用されます。例えば、精度が 5 で、DefaultScale=6 の場合、値ゼロが使用されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

DefaultTextType

説明

DefaultTextType プロパティは ODBC データ・ソースのためのものです。このプロパティは、ソース・テキスト・フィールドのデータ・ソース・タイプが異なる場合に、宛先データ・ソース内にテキスト・フィールドを作成する方法を Campaign に指示します。例えば、フラット・ファイルか別のタイプの DBMS からのソース・テキスト・フィールドである可能性があります。同じタイプの DBMS からのソース・テキスト・フィールドである場合は、このプロパティは無視され、ソース・テキスト・フィールドのデータ型を使用してテキスト・フィールドが宛先データ・ソース内に作成されます。

デフォルト値

VARCHAR

有効な値

VARCHAR | NVARCHAR

DeleteAsRecreate

説明

DeleteAsRecreate プロパティは、TRUNCATE がサポートされておらず、REPLACE TABLE を実行するように出力処理が構成されている場合に、Campaign がテーブルをドロップしてから再作成するのか、それとも単にそのテーブルから削除するのみかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルをドロップしてから再作成します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DeleteAsTruncate

説明

DeleteAsTruncate プロパティは、REPLACE TABLE を実行するように出力プロセスが構成されている場合に、Campaign が TRUNCATE TABLE を使用するのか、それともテーブルから削除するのみかを指定します。

値が TRUE の場合、Campaign はテーブルからの TRUNCATE TABLE を実行します。

値が FALSE の場合、Campaign はテーブルからの DELETE FROM を実行します。

デフォルト値は、データベースのタイプに応じて異なります。

デフォルト値

- TRUE (Netezza、Oracle、および SQLServer の場合)
- FALSE (その他のデータベース・タイプの場合)

有効な値

TRUE | FALSE

DisableSyncIDsOnConnect

説明

このプロパティは、Teradata データ・ソースのみに関係しており、さらに unica_acsvr プロセスが Linux で実行されている場合のみ関係します。デフォルト値は False です。

デフォルト値

- True: Teradata への接続を確立する際に、unica_acsvr プロセスが共有ライブラリーをロードする必要がない環境でのみ、これが必須となります。
- False: Teradata への接続を確立する際に、unica_acsvr プロセスが共有ライブラリーをロードする必要がある環境では、これが必須となります。

有効な値

TRUE | FALSE

DisallowTempTableDirectCreate

説明

DisallowTempTableDirectCreate プロパティは、Campaign がデータを一時テーブルに追加する方法を指定します。

FALSE に設定されている場合、Campaign は、1 つのコマンドを使用することにより、直接的な作成およびデータ設定 SQL 構文を実行します。例えば、CREATE TABLE <table_name> AS ... (Oracle および Netezza の場合)、および SELECT <field_names> INTO <table_name> ... (SQL Server の場合) が使用されます。

TRUE に設定されている場合、Campaign は、一時テーブルを作成した後、複数の別個のコマンドを使用することにより、テーブルからテーブルにデータを直接設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

DSN

説明

このプロパティは、ODBC 構成の中で、この Campaign データ・ソースについて割り当てられているデータ・ソース名 (DSN) に設定します。デフォルトでは、この値は未定義になっています。

Campaign データ・ソース構成プロパティを使用することにより、同じ物理データ・ソースを参照する複数の論理データ・ソースを指定できます。例えば、同じデータ・ソースについて 2 つのデータ・ソース・プロパティ・セットを作成し、1 つは AllowTempTables = TRUE、もう 1 つは AllowTempTables = FALSE とすることが可能です。それらのデータ・ソースのそれぞれは、Campaign の中で異なる名前にすることができますが、それらが同じ物理データ・ソースを参照する場合、DSN 値は同じになります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

DSNUsingOSAuthentication

説明

DSNUsingOSAuthentication プロパティは、Campaign データ・ソースが SQL Server である場合にのみ適用されます。Windows の認証モードを使用するように DSN が構成されている場合、値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

EnableBaseDimSelfJoin

説明

EnableBaseDimSelfJoin プロパティは、ベース・テーブルとディメンション・テーブルが同じ物理テーブルにマップされ、ベース・テーブルの ID フィールド上でディメンションがベース・テーブルに関連付けられていない場合、Campaign データベースの動作として自己結合操作を実行するかどうかを指定します。

このプロパティのデフォルトは FALSE であり、Base テーブルとディメンション・テーブルが同じデータベース表で、かつ関係フィールドが同じ (AcctID から AcctID へ、など) であるなら、Campaign は、結合を実行しないということを想定します。

デフォルト値

FALSE

EnableSelectDistinct

説明

EnableSelectDistinct プロパティは、Campaign の ID の内部リストに対する重複解消を Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで実行するかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースによって重複解消が実行され、データベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります (該当する場合)。

```
SELECT DISTINCT key FROM table
```

値が FALSE の場合、Campaign サーバーによって重複解消が実行され、データベースに対して生成される SQL 照会は以下の形になります。

```
SELECT key FROM table
```

以下の場合には、デフォルト値 FALSE のままにしてください。 if:

- ユニーク ID (ベース・テーブルの 1 次キー) に重複がないことが既に保証済みとなるように、データベースが構成されている場合。
- Campaign アプリケーション・サーバーで重複解消を実行することにより、データベースのリソース消費量/負荷を軽減する場合。

このプロパティにどんな値を指定するかには関係なく、Campaign では、必要に応じてキーの重複解消が実行されることが自動的に保証されています。このプロパティは、単に重複解消がどの場所で実行されるか (データベース上か、それとも Campaign サーバー上か) を制御するだけです。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

EnableSelectOrderBy

説明

EnableSelectOrderBy プロパティは、Campaign の ID の内部リストのソートを、Campaign サーバーで実行するか、それともデータベースで実行するかを指定します。

値が TRUE の場合、データベースによってソートが実行され、そのデータベースに対して生成される SQL 照会以下の形になります。

```
SELECT <key> FROM <table> ORDER BY <key>
```

値が FALSE の場合、Campaign サーバーによってソートが実行され、データベースに対して生成される SQL 照会以下の形になります。

```
SELECT <key>FROM <table>
```

注: 使用されるオーディエンス・レベルが英語以外のデータベースでのテキスト・ストリングである場合、このプロパティは FALSE にのみ設定してください。その他のすべてのシナリオでは、デフォルト TRUE を使用できます。

デフォルト値

TRUE

有効な値

True | False

ExcludeFromTableDisplay

説明

ExcludeFromTableDisplay パラメーターを使用すると、Campaign におけるテーブル・マッピングにおいて、表示されるデータベース表を制限することができます。データベースから取り出されるテーブル名を少なくするわけではありません。

指定されたパターンに一致するテーブル名は表示されません。

例えば、このパラメーターの値が `sys.*` に設定されている場合、`sys.` で始まる名前のテーブルは表示されません。このパラメーターの値では、大/小文字が区別されることに注意してください。

デフォルト値

UAC_*。一時テーブルと抽出テーブルが除外されます (ExtractTablePrefix プロパティの値がデフォルト値の場合)

ExtractTablePostExecutionSQL

説明

ExtractTablePostExecutionSQL プロパティは、抽出テーブルの作成とデータ設定の直後に実行される、完成された 1 個以上の SQL ステートメントを指定するために使用します。

ExtractTablePostExecutionSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 48. *ExtractTablePostExecutionSQL* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL ステートメント

ExtractTablePrefix

説明

ExtractTablePrefix プロパティは、Campaign におけるすべての抽出テーブル名の前に自動的に付加されるストリングを指定します。

デフォルト値

UAC_EX

ForceNumeric

説明

ForceNumeric プロパティは、Campaign が数値をデータ型 double として取り出すかどうかを指定します。値が TRUE に設定されている場合、Campaign は、すべての数値をデータ型 double として取り出します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

InactiveConnectionTimeout

説明

InactiveConnectionTimeout プロパティは、非アクティブの Campaign データベース接続を開いたままにしておく秒数を指定します。指定した時間が経過した後、その接続は閉じられます。この値を 0 に設定するとタイムアウトは無効になり、接続は開いたままにされます。

デフォルト値

120

InsertLogSize

説明

InsertLogSize プロパティは、Campaign のスナップショット・プロセスの実行中、ログ・ファイルに新しいエントリーがいつ入力されるかを指定します。スナップショット・プロセスによって書き込まれるレコード数が、InsertLogSize プロパティで指定される数の倍数に達するたびに、ログ・エントリーが書き込まれます。それらのログ・エントリーは、実行中のスナップショット・プロセスの進行状況を判別するのに役立ちます。この値の設定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる場合があります。

デフォルト値

100000 (10 万レコード)

有効な値

正整数

JndiName

説明

JndiName プロパティは、Campaign システム・テーブルを構成する際のみ使用されます (カスタマー・テーブルなど、その他のデータ・ソースでは使用されません)。その値は、アプリケーション・サーバーで定義されている Java Naming and Directory Interface (JNDI) データ・ソースに設定します (WebSphere または WebLogic)。

デフォルト値

campaignPartition1DS

LoaderCommand

説明

LoaderCommand プロパティは、Campaign においてデータベース・ロード・ユーティリティを呼び出すために発行されるコマンドを指定します。このパラメーターを設定すると、スナップショット・プロセスの出力ファイルのうち、「全レコード置換」設定値で 사용되는ものすべてについて、Campaign はデータベース・ローダー・ユーティリティ・モードに入ります。また、このパラメーターは、Campaign が ID リストを一時テーブル中にアップロードする際に、データベース・ローダー・ユーティリティ・モードを呼び出します。

このプロパティの有効な値は、データベース・ロード・ユーティリティを起動するデータベース・ロード・ユーティリティ実行可能ファイルまた

はスクリプトの絶対パス名です。スクリプトを使用すると、ロード・ユーティリティを呼び出す前に、追加のセットアップを実行することができます。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティでは、正常に起動するために複数の引数が必要です。その中には、ロード元となるデータ・ファイルと制御ファイル、およびロード先となるデータベースおよびテーブルを指定するための引数が含まれることがあります。 Campaign では、以下のトークンがサポートされています。コマンド実行時に、これらは、指定された要素に置換されます。データベース・ロード・ユーティリティ呼び出しで使用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリティの文書を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

LoaderCommand で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 49. LoaderCommand で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、フローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CONTROLFILE>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメーターで指定されるテンプレートに従って Campaign によって生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。
<DATABASE>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータ・ソースの名前に置換されます。これは、このデータ・ソースのカテゴリ名で使用されるのと同じデータ・ソース名です。
<DATAFILE>	このトークンは、ロード・プロセスで Campaign によって作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。このファイルは、Campaign 一時ディレクトリー UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<DBUSER>	このトークンは、データベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<DSN>	このトークンは、DSN プロパティの値に置換されます。DSN プロパティが設定されていない場合、<DSN> トークンは、このデータ・ソースのカテゴリ名で使用されるデータ・ソース名に置換されます (<DATABASE> トークンの置換に使用されるのと同じ値)。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートの名前に置換されます。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。

表 49. LoaderCommand で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<TABLE>	このトークンは廃止されました。しかし、旧バージョンとの互換性のためにサポートされています。 <TABLENAME> を参照してください。バージョン 4.6.3 現在、<TABLE> の代わりにそれが使用されています。
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータベース表名に置換されます。これは、スナップショット・プロセスからのターゲット・テーブルまたは Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<USER>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ソースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

データベース・ロード・ユーティリティの実行可能ファイルまたはデータベース・ロード・ユーティリティを起動するスクリプトのいずれかの絶対パス名

LoaderCommandForAppend

説明

LoaderCommandForAppend パラメーターは、Campaign においてデータベース表にレコードを付加するために、データベース・ロード・ユーティリティを起動するために発行するコマンドを指定します。このパラメーターを設定すると、スナップショット・プロセスの出力ファイルのうち、「レコード付加」設定値で使用されるものすべてについて、Campaign はデータベース・ローダー・ユーティリティ・モードに入ります。

このパラメーターは、データベース・ロード・ユーティリティの実行可能ファイルまたはデータベース・ロード・ユーティリティを起動するスクリプトの絶対パス名として指定します。スクリプトを使用すると、ロード・ユーティリティを呼び出す前に、追加のセットアップを実行することができます。

ほとんどのデータベース・ロード・ユーティリティでは、正常に起動するために複数の引数が必要です。その中には、ロード元となるデータ・ファイルと制御ファイル、およびロード先となるデータベースとテーブルを指定するものが含まれることがあります。コマンドが実行されると、指定された要素によってトークンが置換されます。

データベース・ロード・ユーティリティ呼び出しで使用する正しい構文については、データベース・ロード・ユーティリティの文書を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

LoaderCommandForAppend で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 50. LoaderCommandForAppend で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、実行中のフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CONTROLFILE>	このトークンは、LoaderControlFileTemplate パラメーターで指定されるテンプレートに従って Campaign によって生成される一時制御ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。
<DATABASE>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータ・ソースの名前に置換されます。これは、このデータ・ソースのカテゴリ名で使われるのと同じデータ・ソース名です。
<DATAFILE>	このトークンは、ロード・プロセスで Campaign によって作成される一時データ・ファイルの絶対パスとファイル名に置換されます。このファイルは、Campaign 一時ディレクトリ UNICA_ACTMPDIR に入っています。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<DSN>	このトークンは、DSN プロパティの値に置換されます。DSN プロパティが設定されていない場合、<DSN> トークンは、このデータ・ソースのカテゴリ名で使われるデータ・ソース名に置換されます (<DATABASE> トークンの置換に使用されるのと同じ値)。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<NUMFIELDS>	このトークンは、テーブル中のフィールドの数に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<TABLE>	このトークンは廃止されました。しかし、旧バージョンとの互換性のためにサポートされています。 <TABLENAME> を参照してください。バージョン 4.6.3 現在、<TABLE> の代わりにそれが使用されています。
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign がデータをロードする先のデータベース表名に置換されます。これは、スナップショット・プロセスからのターゲット・テーブルまたは Campaign によって作成される一時テーブルの名前です。
<USER>	このトークンは、現在のフローチャート接続からデータ・ソースへのデータベース・ユーザーに置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

LoaderControlFileTemplate

説明

LoaderControlFileTemplate プロパティは、Campaign で構成されている制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定します。このパラメーターが設定されている場合、Campaign は、ここに指定するテンプレートに基づいて、一時制御ファイルを動的に作成します。この一時制御ファイルのパスおよび名前は、LoaderCommand パラメーターから利用可能な <CONTROLFILE> トークンから利用可能です。

Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティ・モードで使用するには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テンプレートを構成することが必要です。制御ファイル・テンプレートでは、以下のトークンがサポートされています。それらは、Campaign によって一時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルに必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユーティリティの文書を参照してください。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

LoaderControlFileTemplate で利用可能なトークンとしては、LoaderCommand プロパティについて説明されているのと同じものに加えて、アウトバウンド・テーブル内のフィールドごとに 1 回ずつ反復される以下の特殊トークンがあります。

表 51. LoaderControlFileTemplate で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBCOLUMNNUMBER>	このトークンは、データベース中の列順序に置換されます。
<FIELDLENGTH>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの長さに置換されます。
<FIELDNAME>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの名前に置換されます。
<FIELDNUMBER>	このトークンは、データベース中にロードされているフィールドの番号に置換されます。
<FIELDTYPE>	このトークンは、リテラル CHAR() に置換されます。() の中により、このフィールドの長さが指定されます。データベースでフィールド・タイプ CHAR が認識されていない場合、フィールド・タイプとして適切なテキストを手動で指定し、<FIELDLENGTH> トークンを使用することができます。例えば、SQLSVR および SQL2000 の場合、SQLCHAR(<FIELDLENGTH>) を使用します。
<NATIVETYPE>	このトークンは、このフィールドのロード先である実際のデータベースのタイプに置換されます。
<xyz>	このトークンは、指定された文字を、データベース中にロードされているフィールドのうち、最後を除くすべてに配置します。典型的な使用方法としては、<, > があります。これは、最後を除くすべてのフィールドについてコンマを繰り返します。

表 51. *LoaderControlFileTemplate* で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<^xyz>	このトークンは、指定された文字を、反復の最後の行にのみ配置します。
<!xyz>	このトークンは、指定された文字 (不等号括弧 < > を含む) を、すべての行に配置します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

LoaderControlFileTemplateForAppend

説明

`LoaderControlFileTemplateForAppend` プロパティは、Campaign において構成されている制御ファイル・テンプレートの絶対パスとファイル名を指定します。このパラメーターが設定されている場合、Campaign は、ここで指定されているテンプレートに基づいて一時制御ファイルを動的に作成します。この一時制御ファイルのパスおよび名前は、`LoaderCommandForAppend` プロパティから利用可能な `<CONTROLFILE>` トークンから利用可能です。

Campaign をデータベース・ローダー・ユーティリティー・モードで使用するには、その前に、このパラメーターによって指定される制御ファイル・テンプレートを構成することが必要です。制御ファイル・テンプレートでは、以下のトークンがサポートされています。それらは、Campaign によって一時制御ファイルが作成される際に動的に置換されます。

制御ファイルに必要な正しい構文については、データベース・ローダー・ユーティリティーの文書を参照してください。制御ファイル・テンプレートで利用可能なトークンは、`LoaderControlFileTemplate` プロパティのものと同じです。

このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

LoaderDelimiter

説明

`LoaderDelimiter` プロパティは、一時データ・ファイルが固定幅フラット・ファイルか、それとも区切りフラット・ファイルかを指定します。また、区切りファイルの場合には、Campaign が区切り文字として使用する文字を指定します。

値が未定義の場合、Campaign は、固定幅フラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であると認識されているテーブルのデータを設定するために使用されます。Campaign は、このプロパティの値を区切り文字として使用することにより、区切りフラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

文字 (必要なら二重引用符で囲むことが可能)。

LoaderDelimiterAtEnd

説明

一部の外部ロード・ユーティリティでは、データ・ファイルを区切る必要があります。また、各行は区切り文字で終わる必要があります。この要件を満たすためには、LoaderDelimiterAtEnd の値を TRUE に設定することにより、ローダーが起動して、空として認識されているテーブルのデータを設定する際に、Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

FALSE

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

LoaderDelimiterAtEndForAppend

説明

一部の外部ロード・ユーティリティでは、データ・ファイルを区切る必要があります。また、各行は区切り文字で終わる必要があります。この要件を満たすためには、LoaderDelimiterAtEndForAppend の値を TRUE に設定することにより、ローダーが起動して、空として認識されていないテーブルのデータを設定する際に、Campaign が各行の末尾に区切り文字を使用するようにします。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

LoaderDelimiterForAppend

説明

LoaderDelimiterForAppend プロパティは、Campaign の一時データ・ファイルが固定幅フラット・ファイルであるか、それとも区切りフラット・ファイルであるかを指定します。また、区切りファイルの場合には、区切りとして使用する文字または文字の集合を指定します。

値が未定義の場合、Campaign は、固定幅フラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

値を指定する場合、それは、ローダーが呼び出された時点で、空であるとは認識されていないテーブルのデータを設定するために使用されます。

Campaign は、このプロパティの値を区切り文字として使用することにより、区切りフラット・ファイルとして一時データ・ファイルを作成します。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

有効な値

文字 (必要なら二重引用符で囲むことが可能)。

LoaderUseLocaleDP

説明

LoaderUseLocaleDP プロパティは、Campaign が、データベース・ロード・ユーティリティによってロードされるファイルに数値を書き込む際に、小数点としてロケール固有の記号を使用するかどうかを指定します。

ピリオド (.) を小数点として指定するには、この値を FALSE に設定します。

ロケールにふさわしい小数点記号を使用することを指定するには、この値を TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

MaxItemsInList

説明

Campaign が SQL 中の単一リスト (WHERE 節の IN 演算子の後の値リストなど) の中に含めることのできる項目の最大数を指定します。

デフォルト値

Oracle の場合のみ 1000。その他のすべてのデータベースでは 0 (無制限)。

有効な値

整数

MaxQueryThreads

説明

MaxQueryThreads プロパティは、Campaign の単一のフローチャートから、各データベース・ソースに対して同時実行可能な照会の数の上限を指定します。

Campaign は、独立した複数のスレッドを使用してデータベース照会を実行します。Campaign のプロセスは並列実行されるため、単一のデータ・ソースに対して複数の照会を同時に実行することが少なくありません。並列実行

する照会の数がこのプロパティで指定される値を超えると、Campaign サーバーは、同時実行照会の数を、自動的にこの値まで制限します。

最大値は無制限です。 `maxReuseThreads` プロパティがゼロでない値に設定されている場合、それは `MaxQueryThreads` の値以上でなければなりません。

デフォルト値

データベースによって異なる

MaxRowFetchRecords

説明

選択された ID 数が `MaxRowFetchRecords` プロパティによって指定される値より小さい場合、Campaign は、一度に 1 つずつ、それぞれ別個の SQL 照会で ID をデータベースに渡します。この処理には、非常に長い時間がかかる場合があります。選択された ID 数がこのパラメーターで指定される値より大きい場合、Campaign は、一時テーブルを使用するか (データベース・ソースに対して可能な場合)、またはテーブルから、不要な値を除くすべての値をプルダウンします。

パフォーマンス上の理由から、この数をできるだけ低い値に保つのが最善です。

デフォルト値

100

MaxTempTableJoinPctSelectAll

説明

照会が発行されると Campaign は、その照会の結果として、ID の正確なリストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。すべてのレコードを選択する追加照会がデータベースに対して発行される場合、`MaxTempTableJoinPctSelectAll` プロパティによって、一時テーブルとの結合が実行されるかどうか指定されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

`MaxTempTableJoinPctWithCondition` プロパティの値より大きい場合、結合は実行されません。まずすべてのレコードが選択された後、不要なレコードが破棄されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

`MaxTempTableJoinPctWithCondition` プロパティの値以下の場合、まず一時テーブルとの結合が実行された後、結果としての ID がサーバーに取り出されます。

このプロパティは、`AllowTempTables` プロパティの値が `TRUE` に設定されている場合にのみ適用されます。 `useInDbOptimization` プロパティが `YES` に設定されている場合、このプロパティは無視されます。

デフォルト値

90

有効な値

0-100 の範囲の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決して使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブルのサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

例

MaxTempTableJoinPctSelectAll が 90 に設定されているとします。まず、勘定残高 (Accnt_balance) が \$1,000 より大きいカスタマー (CustID) を、データベース表 (Customer) から選択するとします。

対応する SQL 式として Select プロセスで生成されるものは、下記のようにになります。

```
SELECT CustID FROM Customer
WHERE Accnt_balance > 1000
```

Select プロセスでは、合計テーブル・サイズ 1,000,000 のうちの 10% に当たる 100,000 個の ID を取り出す可能性があります。一時テーブルが可能になっている場合、Campaign は、選択された ID (TempID) をデータベース中の一時テーブル (Temp_table) に書き込みます。

次に、選択された ID (CustID) と現在の残高 (Accnt_balance) のスナップショットを取るとします。一時テーブル (Temp_table) の相対サイズは 90% (MaxTempTableJoinPctSelectAll) より小さいため、まず一時テーブルとの結合が実行されます。スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のようになります。

```
SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer, Temp_table WHERE CustID = TempID
```

Select プロセスで取り出すものが 90% を超える場合、それより後のスナップショット・プロセスでは、すべてのレコードが取り出され、最初の ID セットとそれらが突き合わされて、不要なものが破棄されます。

スナップショット・プロセスによって生成される SQL 式は、以下のようになります。

```
SELECT CustID, Accnt_balance FROM Customer
```

MaxTempTableJoinPctWithCondition

説明

照会が発行されると Campaign は、その照会の結果として、ID の正確なリストを内容とする一時テーブルをデータベース上に作成します。制限条件を伴うレコード選択の追加照会がデータベースに対して発行される場合、MaxTempTableJoinPctWithCondition プロパティは、一時テーブルとの結合を実行するかどうかを指定します。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctWithCondition の値より大きい場合、結合は実行されません。これにより、不要なデータベースでのオーバーヘッドが回避されます。その場合、データベースに対する照会が発行され、結果として ID のリストが取り出された後、サーバー・メモリー内のリストに一致する不要なレコードが破棄されます。

一時テーブルの相対サイズ (パーセントとして指定) が

MaxTempTableJoinPctWithCondition の値以下の場合、まず一時テーブルとの結合が実行された後、結果として ID がサーバーに取り出されます。

このプロパティは、AllowTempTables プロパティの値が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。

デフォルト値

20

有効な値

0-100 の範囲の整数。値が 0 の場合、それは、一時テーブルの結合が決して使用されないことを意味します。値が 100 の場合、それは、一時テーブルのサイズには関係なく常にテーブルの結合が使用されることを意味します。

MinReqForLoaderCommand

説明

このプロパティは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定するために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値を超えると、Campaign は、LoaderCommand パラメーターに割り当てられているスクリプトを呼び出します。このプロパティの値は、書き込まれるレコードの数を表わすものではありません。

このプロパティが構成されていない場合、Campaign では、値としてデフォルト値 (ゼロ) が想定されます。このプロパティが構成されているが、値として設定されているのが負の値または非整数値である場合、Campaign は値がゼロであると想定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

整数

MinReqForLoaderCommandForAppend

説明

このプロパティは、バルク・ローダーを使用するためのしきい値を設定するために使用します。入力セル中のユニーク ID の数がここで定義される値を超えると、Campaign は、LoaderCommandForAppend パラメーターに割り当てられているスクリプトを呼び出します。このプロパティの値は、書き込まれるレコードの数を表わすものではありません。

このプロパティが構成されていない場合、Campaign では、値としてデフォルト値 (ゼロ) が想定されます。このプロパティが構成されているが、値として設定されているのが負の値または非整数値である場合、Campaign は値がゼロであると想定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

正整数

NumberOfRetries

説明

NumberOfRetries プロパティは、データベース操作での障害発生時に Campaign が自動的に再試行する回数を指定します。Campaign は、この回数だけ、データベースに対する照会を自動的に再サブミットします。この回数を超えると、データベース・エラーまたは障害が報告されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

ODBCTableTypes

説明

このプロパティはデフォルトでは空です。これは、現在サポートされているすべてのデータ・ソースに適しています。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

(空)

ODBCUnicode

説明

ODBCUnicode プロパティは、Campaign ODBC 呼び出しにおいて使用されるエンコード方式のタイプを指定します。これは、ODBC データ・ソースでのみ使用されるものであり、Oracle または DB2 のネイティブ接続で使用される場合は無視されます。

重要: このプロパティが UTF-8 または UCS-2 に設定されている場合、データ・ソースの StringEncoding 値は UTF-8 または WIDEUTF-8 に設定されていなければなりません。そうでない場合、ODBCUnicode プロパティの設定値は無視されます。

デフォルト値

disabled

有効な値

このプロパティで可能な値は、以下のとおりです。

- Disabled - Campaign は、ANSI ODBC 呼び出しを使用します。
- UTF-8 - Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR が 1 バイトであると想定します。これは DataDirect ODBC ドライバーと互換です。

- UCS-2 - Campaign は、Unicode ODBC 呼び出しを使用し、SQLWCHAR が 2 バイトであると想定します。これは Windows および unixODBC ODBC ドライバーと互換です。

ODBCv2

説明

ODBCv2 プロパティは、Campaign においてデータ・ソースのためにどの ODBC API 仕様を使用するかを指定するために使用します。

デフォルト値は FALSE であり、その場合、Campaign は v3 API 仕様を使用します。TRUE に設定した場合、Campaign は v2 API 仕様を使用します。ODBC v3 API 仕様がサポートされていないデータ・ソースでは、ODBCv2 プロパティを TRUE に設定します。

ODBCv2 プロパティが TRUE に設定されている場合、Campaign において ODBC Unicode API はサポートされず、ODBCUnicode プロパティに関して disabled 以外の値は認識されなくなります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

OwnerForTableDisplay

説明

OwnerForTableDisplay プロパティは、Campaign におけるテーブル・マッピングの表示を指定されたユーザーの所有するテーブル、または指定されたユーザーの所有するテーブルからなる 1 つ以上の集合に制限します。

1 人以上のユーザーによって所有されるテーブルだけを表示するには、コマ区切りリストを使用してデータベース・ユーザー ID を指定します。以下に例を示します。

```
<property name="OwnerForTableDisplay">user1,user2,user3</property>
```

ユーザー名に加えてテーブル名パターンを指定するには、パターンをユーザー ID に付加します。例えば、以下の設定値の場合、テーブルの表示は、user1 では ABC、user2 では XYZ で始まるテーブルに制限されます。

```
OwnerForTableDisplay=user1.ABC%,user2.XYZ%
```

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

PadTextWithSpaces

説明

PadTextWithSpaces プロパティが TRUE に設定されている場合、Campaign は、ストリングがデータベース・フィールドと同じ幅になるまで、テキスト値にスペースを埋め込みます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

PostExtractTableCreateRunScript

説明

PostExtractTableCreateRunScript プロパティは、抽出テーブルが作成されて、そのデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostExtractTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 52. PostExtractTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostSegmentTableCreateRunScript

説明

Segment 一時テーブルの作成とデータ設定の後、Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 53. PostSegmentTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostSnapshotTableCreateRunScript

説明

PostSnapshotTableCreateRunScript プロパティは、スナップショット・テーブルが作成され、そのデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 54. PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。

表 54. PostSnapshotTableCreateRunScript で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PostTempTableCreateRunScript

説明

PostTempTableCreateRunScript プロパティは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブル・データベースの中で一時テーブルが作成され、データが設定された後、Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。

PostTempTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 55. PostTempTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

PostUserTableCreateRunScript

説明

ユーザー・テーブルが作成されてデータが設定された後に Campaign が実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定します。

PostUserTableCreateRunScript で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 56. PostUserTableCreateRunScript で利用可能なトークン

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<AMUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<PASSWORD>	このトークンは、現在のフローチャートからデータ・ソースへの接続のデータベース・パスワードに置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、ユーザー・テーブルの列名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

PrefixOnSelectSQL

説明

PrefixOnSelectSQL プロパティは、Campaign によって生成される SELECT SQL 式のすべてに対して、自動的にその先頭に付加するストリングを指定するために使用します。

このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティは、構文チェックなしで自動的に SELECT SQL 式に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 57. PrefixOnSelectSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

QueryThreadSleep

説明

QueryThreadSleep プロパティは、Campaign サーバー・プロセス (UNICA_ACSVR) の CPU 使用率に影響します。値が TRUE に設定されている場合、Campaign サーバー・プロセスが照会の完了をチェックするために使用するスレッドは、チェックとチェックの間でスリープします。値が FALSE の場合、Campaign サーバー・プロセスは、照会の完了を連続的にチェックします。

デフォルト値

TRUE

ReaderLogSize

説明

ReaderLogSize パラメーターは、Campaign がデータベースからデータを読む際に、ログ・ファイル中の新しいエントリーをいつ作成するかを定義します。データベースから読み取られるレコード数が、このパラメーターによって定義される数の倍数に達するたびに、ログ・エントリーがログ・ファイルに書き込まれます。

このパラメーターは、プロセスの実行の進行状況を判別するのに役立ちます。この値の設定値が低すぎると、作成されるログ・ファイルが大きくなる場合があります。

デフォルト値

1000000 (100 万レコード)

有効な値

整数

SegmentTempTablePrefix

説明

このデータ・ソースにおいて、CreateSeg プロセスによって作成されるセグメント・テーブルの接頭部を設定します。

デフォルト値

UACS

SQLOnConnect

説明

SQLOnConnect プロパティは、各データベース接続の直後に Campaign が実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。

このプロパティによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

SQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 58. SQLOnConnect で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

StringEncoding

説明

StringEncoding プロパティは、データベースの文字エンコードを指定します。Campaign がデータベースからデータを取り出す際、指定されたエンコード方式から、Campaign の内部エンコード方式 (UTF-8) にデータが変換されます。同じように、Campaign がデータベースに照会を送信する際、内

部エンコード方式 Campaign から、StringEncoding プロパティで指定されるエンコード方式に文字データが変換されます。

このプロパティの値は、データベース・クライアントで使用されるエンコード方式に一致していなければなりません。

デフォルトとして未定義になっているのでない限り、この値をブランクのままにはしないでください。ASCII データを使用する場合、この値は UTF-8 に設定します。

注: データベース・クライアントのエンコード方式が UTF-8 として設定されている場合、この値のための望ましい設定値は WIDEUTF-8 です。WIDE-UTF-8 設定値は、データベース・クライアントが UTF-8 に設定されている場合にのみ有効です。

重要: partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > ODBCUnicode プロパティを使用する場合、このプロパティは UTF-8 または WIDEUTF-8 のいずれかに設定されます。そうでない場合、ODBCUnicode プロパティの設定値は無視されます。

サポートされているエンコード方式のリストについては、付録 C「国際化対応とエンコード方式」を参照してください。

重要な例外および追加の考慮事項については、以下のセクションを参照してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

データベース固有の考慮事項

DB2 または SQL Server においては、iconv エンコードではなくコード・ページを使用してください。Teradata の場合、デフォルトの動作の一部をオーバーライドする必要があります。このセクションでは、これらのデータベースにおいて StringEncoding プロパティに適切な値を設定する方法について説明します。

DB2

StringEncoding の正しい値を決定するには、DB2 データベースのコード・ページとコード・セットを識別します。

StringEncoding をデータベース・コード・セット値に設定します。

DB2CODEPAGE 環境変数をデータベース・コード・ページ値に設定します。

ローカライズされた環境の場合、DB2 データベースの構成を以下のようにする必要があります。

データベース・コード・セット = UTF-8

データベース・コード・ページ = 1208

ネイティブ・データベースについては、上記と共に、DB2CODEPAGE 値とコード・セット値を決定し、それに従って DB2CODEPAGE 値と StringEncoding 値を設定します。

StringEncoding プロパティに DB2 データベース用の値を設定するには、以下のコマンドを Campaign サーバーの始動スクリプトに追加します。

```
db2set DB2CODEPAGE=DB2 code page value
```

例えば、UTF-8 を使用するには、

```
db2set DB2CODEPAGE=1208
```

これは DB2 のすべてのデータ・ソースに影響します。さらに、実行中の他のプログラムにも影響することがあります。

SQL Server

SQL Server データベースにおける StringEncoding プロパティの適切な値を判別するには、サーバーのオペレーティング・システムの地域設定値に対応するコード・ページを検索してください。

例えば、コード・ページ 932 (日本語 Shift-JIS) を使用するには、

```
StringEncoding=CP932
```

Teradata

Teradata では列ごとに文字エンコードの指定がサポートされていますが、Campaign でサポートされているのはデータ・ソースごとのエンコードのみです。Teradata ODBC ドライバーのバグのため、Campaign で UTF-8 を使用することはできません。Teradata では、ログインごとにデフォルトの文字エンコードが設定されます。これは、Windows において ODBC データ・ソース構成に含まれるパラメーター、または UNIX プラットフォームにおいて `odbc.ini` に含まれるパラメーターを使用することにより、以下のようにしてオーバーライドすることができます。

```
CharacterSet=UTF8
```

Teradata テーブルのデフォルトのエンコード方式は LATIN です。Teradata の組み込みエンコード方式はごくわずかのみですが、ユーザー定義エンコード方式がサポートされています。

StringEncoding プロパティのデフォルト値は ASCII です。

重要: UTF-8 データベースの関係する多くの状況では、WIDEUTF-8 疑似エンコード方式を使用してください。それについては、WIDEUTF-8 に関するセクションで説明されています。

WIDEUTF-8

通常、Campaign は、その内部エンコード方式 UTF-8 と、データベースのエンコード方式の間のトランスコーディングをそれ自身で処理します。データベースのエンコードが UTF-8 の場合、StringEncoding の値として UTF-8 を指定することができ (SQLServer を除く)、トランスコーディングは不要です。従来、データベース内の英語以外のデータに Campaign がアクセスするための可能なモデルは、それらのみでした。

Campaign のバージョン 7.0 では、StringEncoding プロパティのための有効な値として、WIDEUTF-8 という新しいデータベース・エンコード方式が導入されています。このエンコード方式を使用することにより Campaign では、データベース・クライアントとの通信に UTF-8 を使用しながら、UTF-8

と実際のデータベースのエンコード方式との間のトランスコーディングの作業をクライアント側で実行することが可能です。変換後のテキストに十分に対応できるよう、テーブル列マッピングの幅を変更するため、このように拡張されたバージョンの UTF-8 が必要になっています。

注: WIDEUTF-8 疑似エンコード方式を使用できるのは、データベース構成の中のみです。その他の目的では使用しないでください。

注: Oracle では、クライアントによるトランスコーディングはサポートされていません。

SuffixOnAllOtherSQL

説明

SuffixOnAllOtherSQL プロパティは、Campaign によって生成されるあらゆる SQL 式のうち、SuffixOnInsertSQL、SuffixOnSelectSQL、SuffixOnTempTableCreation、SuffixOnUserTableCreation、そして SuffixOnUserBaseTableCreation のどのプロパティによってもカバーされないものに自動的に付加するストリングを指定します。

このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

SuffixOnAllOtherSQL は、Campaign によって以下のタイプの式が生成される際に使用されます。

```
TRUNCATE TABLE table
DROP TABLE table
DELETE FROM table [WHERE ...]
UPDATE table SET ...
```

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このパラメーターを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnAllOtherSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 59. SuffixOnAllOtherSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。

表 59. *SuffixOnAllOtherSQL* で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnCreateDateField

説明

SuffixOnCreateDateField プロパティは、CREATE TABLE SQL ステートメントで、DATE フィールドのすべてに Campaign によって自動的に付加されるストリングを指定します。

例えば、このプロパティを以下のように設定することができます。

```
SuffixOnCreateDateField = FORMAT 'YYYY-MM-DD'
```

このプロパティが未定義 (デフォルト) の場合、CREATE TABLE コマンドは未変更のままです。

注: *DateFormat* プロパティの説明に含まれる表を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnInsertSQL

説明

SuffixOnInsertSQL プロパティは、Campaign によって生成されるすべての INSERT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

SuffixOnInsertSQL は、Campaign によって以下のタイプの式が生成される際に使用されます。

```
INSERT INTO table ...
```

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnInsertSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 60. *SuffixOnInsertSQL* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。

表 60. *SuffixOnInsertSQL* で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnSelectSQL

説明

SuffixOnSelectSQL プロパティは、Campaign によって生成されるすべての SELECT SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用する「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnSelectSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 61. *SuffixOnSelectSQL* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnTempTableCreation

説明

SuffixOnTempTableCreation プロパティは、一時テーブルが作成される際に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。このプロパティを使用するためには、AllowTempTables プロパティが TRUE に設定されていなければなりません。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

注: Oracle データベースの場合、一時テーブル作成 SQL 式のうちテーブル名の後に構成パラメーターが付加されます。

SuffixOnTempTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 62. SuffixOnTempTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnSegmentTableCreation

説明

セグメント一時テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定します。

SuffixOnSegmentTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 63. SuffixOnSegmentTableCreation で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、セグメント一時テーブル名によって置き換えられます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL

SuffixOnSnapshotTableCreation

説明

SuffixOnSnapshotTableCreation プロパティは、スナップショット・テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用されます。

SuffixOnSnapshotTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 64. *SuffixOnSnapshotTableCreation* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL

SuffixOnExtractTableCreation

説明

`SuffixOnExtractTableCreation` プロパティは、抽出テーブルの作成時に Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。

`SuffixOnExtractTableCreation` で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 65. *SuffixOnExtractTableCreation* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。

表 65. *SuffixOnExtractTableCreation* で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、抽出テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、抽出テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、抽出テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、抽出テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL

SuffixOnUserBaseTableCreation

説明

SuffixOnUserBaseTableCreation プロパティは、ユーザーがベース・テーブルを作成する際に (抽出プロセスなど)、Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnUserBaseTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 66. *SuffixOnUserBaseTableCreation* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。

表 66. *SuffixOnUserBaseTableCreation* で利用可能なトークン (続き)

トークン	説明
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SuffixOnUserTableCreation

説明

SuffixOnUserTableCreation プロパティは、ユーザーが一般のテーブルを作成する際に (スナップショット・プロセスなど)、Campaign によって生成される SQL 式に自動的に付加されるストリングを指定するために使用します。このプロパティは Campaign により生成された SQL にのみ適用され、選択プロセスで使用される「未加工 SQL」式の SQL には適用されません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

SuffixOnUserTableCreation で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 67. *SuffixOnUserTableCreation* で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

SystemTableSchema

説明

Campaign システム・テーブルで使用するスキーマを指定します。

デフォルト値はブランクです。このパラメーターは、UA_SYSTEM_TABLES データ・ソースにのみ関係するものです。

UA_SYSTEM_TABLES データ・ソースに複数のスキーマが含まれるという場合 (例えば、複数のグループで使用する Oracle データベースの場合) 以外は、この値をブランクのままにしてください。 (この文脈で「スキーマ」という語は、X.Y という形式の「修飾」テーブル名の先頭部分のことを指します (dbo.UA_Folder など)。ただし、この形式のうち X はスキーマ、Y は修飾なしのテーブル名です。この構文に関しては、Campaign でサポートされているさまざまな異なるデータベース・システムの間で異なる用語が使用されています。)

システム・テーブル・データベースの中に複数のスキーマが存在する場合、この値は、Campaign システム・テーブル作成時のスキーマの名前に設定してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

TempTablePostExecutionSQL

説明

TempTablePostExecutionSQL プロパティは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブル・データベースでの一時テーブルの作成直後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用します。データ・ソースで一時テーブルを作成できるようにするには、AllowTempTables プロパティを TRUE に設定する必要があります。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

TempTablePostExecutionSQL プロパティでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。SQL ステートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメントとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバックスラッシュ (円記号) を使用してください。

注: TempTablePostExecutionSQL プロパティでストアード・プロシージャを使用している場合は、データベースに対して正しい構文が使用されてい

ることを確認してください。以下に示すのは、Oracle においてストアド・プロシージャを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号) を使用しています。 `begin dbms_stats.collect_table_stats(); end;`

TempTablePostExecuteSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 68. TempTablePostExecuteSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、一時テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

TableListSQL

説明

TableListSQL プロパティは、マップに使用可能なテーブルのリストにシノニムを含めるために使用する SQL 照会を指定するために使用します。

デフォルト値はブランクです。データ・ソースが SQL Server の場合に、返されるテーブル・スキーマの中でシノニムをマップできるようにするためには、このプロパティが必須です。その他のデータ・ソースにおいて、標準的な方法 (ODBC 呼び出しやネイティブ接続など) を使用して取り出したテーブル・スキーマ情報の代わりに (またはそれに加えて)、特定の SQL 照会を使用する場合、このプロパティはオプションです。

注: キャンペーンにおいて SQL Server のシノニムが正常に動作するには、ここで説明されているこのプロパティの設定に加えて、UseSQLToRetrieveSchema プロパティを TRUE に設定する必要があります。

有効な SQL 照会でこのプロパティを設定する場合、Campaign により、マッピング用のテーブルのリストを取り出すための SQL 照会が発行されます。その照会から 1 個の列が返される場合、それは名前の列として扱われ

ます。その照会から 2 個の列が返される場合、最初の列は所有者の名前の列であると想定され、2 番目の列はテーブル名の列であると見なされます。

SQL 照会がアスタリスク (*) で始まっていない場合、Campaign は、通常の方法で (ODBC 呼び出しやネイティブ接続などにより) 取り出されるテーブルのリストとこのリストをマージします。

SQL 照会がアスタリスク (*) で始まる場合、その SQL から返されるリストは、通常のリストにマージされるのではなく、それを置き換えるものとなります。

デフォルト値

なし

有効な値

有効な SQL 照会

例

データ・ソースが SQL Server の場合、通常環境では、キャンペーンで使われる ODBC API 呼び出しから返されるのはテーブルとビューのリストであり、シノニムではありません。シノニムのリストも含めるには、TableListSQL を以下の例に示すように設定します。

```
select B.name AS oName, A.name AS tName
from sys.synonyms A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B
on A.schema_id = B.schema_id ORDER BY 1, 2
```

ODBC API をまったく使用しないでテーブル、ビュー、およびシノニムのリストを取り出すには、TableListSQL を以下の例に示すように設定します。

```
*select B.name AS oName, A.name AS tName from
(select name, schema_id from sys.synonyms UNION
select name, schema_id from sys.tables UNION select name,
schema_id from sys.views) A LEFT OUTER JOIN sys.schemas B on
A.schema_id = B.schema_id ORDER BY 1, 2
```

データ・ソースが Oracle の場合は、ALL_OBJECTS ビューを調べるネイティブ接続方式を使用してデータを取り出す代わりに、以下のような照会を使用することにより、テーブル、ビュー、およびシノニムのリストを取り出すことができます。

```
*select OWNER, TABLE_NAME from (select OWNER, TABLE_NAME
from ALL_TABLES UNION select OWNER, SYNONYM_NAME AS TABLE_NAME
FROM ALL_SYNONYMS UNION select OWNER,
VIEW_NAME AS TABLE_NAME from ALL_VIEWS) A ORDER BY 1, 2
```

UOSQLOnConnect

説明

SQLOnConnect プロパティは、各データベース接続の直後に Campaign が実行する、完成された 1 個の SQL ステートメントを定義します。

UOSQLOnConnect プロパティはこれによく似ていますが、それは特に Optimize 適用されます。

このプロパティによって生成される SQL ステートメントは、構文チェックなしで自動的にデータベースに渡されます。このプロパティを使用する

場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

このプロパティーは、デフォルトでは未定義です。

UOSQLOnConnect で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 69. UOSQLOnConnect で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

UseSQLToRetrieveSchema

説明

このデータ・ソースにおいてテーブル・スキーマとして使用するスキーマを取り出すには、ODBC やネイティブ API 呼び出しではなく、SQL 照会を使用します。

このプロパティーのデフォルト値は FALSE です。これは、Campaign が標準的な方法 (ODBC やネイティブ接続など) を使用してスキーマを取り出すよう指示するものです。このプロパティーを TRUE に設定すると、Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すために `select * from <table>` のような SQL 照会を準備することになります。

これは、各データ・ソース固有の利点を提供するものとなります。例えば、一部のデータ・ソース (Netezza、SQL Server) の場合、デフォルトの ODBC またはネイティブ接続では SQL のシノニム (`create synonym` 構文を使用して定義されるデータベース・オブジェクトの代替名) のレポートが正しく作成されません。このプロパティーを TRUE に設定することにより、Campaign 内でのデータ・マッピングのための SQL シノニムが取り出されます。

以下のリストは、いくつかのデータ・ソースに対するこのプロパティーの設定値の動作を説明したものです。

- Netezza においてシノニムのサポートを可能にするには、このプロパティーを TRUE に設定する必要があります。このプロパティーを TRUE に

設定すると、Campaign は、テーブル・スキーマを取り出すための SQL 照会を準備することになります。Netezza データ・ソースにおいて、シノニム・サポートのために、それ以外の設定や値は必要ありません。

- SQL Server の場合、シノニムのサポートを可能にするには、このプロパティを TRUE に設定し、**かつ**、このデータ・ソースの TableListSQL プロパティに有効な SQL を入力する必要があります。詳しくは、TableListSQL プロパティの説明を参照してください。
- Oracle データ・ソースの場合にこのプロパティを TRUE に設定すると、Campaign はテーブル・スキーマを取り出すための SQL 照会を準備することになります。結果セットでは NUMBER フィールド (精度/有効桁数の指定がないため Campaign では問題が発生する) が、NUMBER(38) として識別されるため、問題発生を回避できます。
- その他のデータ・ソースの場合、このプロパティを TRUE に設定することにより、前述のデフォルトの SQL select 照会を使用したり、またはデフォルトとして使用される ODBC API やネイティブ接続の代わりに (またはそれらに加えて) 使用する有効な SQL を TableListSQL プロパティで指定したりすることができます。詳しくは、TableListSQL プロパティの説明を参照してください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

例

Campaign で Netezza または SQL Server シノニムが正常に動作するためには、

```
UseSQLToRetrieveSchema=TRUE
```

UserTablePostExecuteSQL

説明

UserTablePostExecuteSQL プロパティは、ユーザー・データ・ソースまたはシステム・テーブル・データベースにおけるユーザー・テーブルの作成直後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用します。

テーブル名および列名はキャンペーン実行中に動的に生成されるため、この SQL ステートメントでそれらを置換するためのトークン (<TABLENAME> および <KEYCOLUMNS>) を使用することが望ましい場合があるかもしれません。

このプロパティは、構文を確認せずに SQL 式に自動的に追加されます。このプロパティを使用する場合は、有効な式であることを確認してください。ストリングは引用符で囲むこともできますが、これは必須ではありません。

UserTablePostExecuteSQL プロパティでは、セミコロンが、複数の SQL ステートメントを実行するための区切り文字として扱われます。SQL ステートメントにセミコロンが含まれていて、その全体を 1 つのステートメン

トとして実行するには、そのセミコロンの直前にエスケープ文字としてバックスラッシュ (円記号) を使用してください。

注: UserTablePostExecuteSQL プロパティーでストアード・プロシージャを使用している場合は、データベースに対して正しい構文が使用されていることを確認してください。以下に示すのは、Oracle においてストアード・プロシージャを呼び出す例ですが、セミコロンのエスケープにバックスラッシュ (円記号) を使用しています。 `begin dbms_stats.collect_table_stats()
()¥; end¥;`

UserTablePostExecuteSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 70. UserTablePostExecuteSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、ユーザー・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、ユーザー・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、ユーザー・テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、ユーザー・テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

UseTempTablePool

説明

注: このプロパティーは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のすべてのデータベースでは、このオプションを FALSE に設定してください。

UseTempTablePool プロパティーが TRUE に設定されている場合、一時テーブルがデータベースからドロップされません。一時テーブルは、切り捨てられた上で、Campaign によって維持されているテーブルのプールから再利用されます。FALSE に設定されている場合、一時テーブルはドロップされ、フローチャートが実行されるたびに毎回再作成されます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

SegmentTablePostExecuteSQL

説明

SegmentTablePostExecuteSQL プロパティは、セグメント一時テーブルが作成され、データが設定された後に Campaign によって実行される、完成された 1 つの SQL ステートメントを指定するために使用されます。

SegmentTablePostExecuteSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 71. SegmentTablePostExecuteSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、セグメント一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、セグメント一時テーブルの作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、セグメント一時テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、セグメント一時テーブル名によって置き換えられます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL ステートメント

SnapshotTablePostExecuteSQL

説明

SnapshotTablePostExecuteSQL プロパティは、スナップショット・テーブルが作成され、データが設定された直後に実行される、完成された 1 個以上の SQL ステートメントを指定するために使用します。

SnapshotTablePostExecuteSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 72. SnapshotTablePostExecuteSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、スナップショット・テーブルの作成対象となったフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成の対象となったフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、スナップショット・テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、スナップショット・テーブル作成に関連するフローチャートの名前に置換されます。
<KEYCOLUMNS>	このトークンは、スナップショット・テーブルの列名に置換されます。
<TABLENAME>	このトークンは、スナップショット・テーブルの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL ステートメント

TempTablePrefix

説明

TempTablePrefix パラメーターは、Campaign によって作成されるすべての一時テーブルの名前の先頭に、自動的に付加されるストリングを指定します。このパラメーターを使用すると、一時テーブルの識別と管理のために役立ちます。また、このプロパティを使用することによって、一時テーブルを特定の場所に作成することができます。

例えば、ユーザー・トークンがスキーマと一致している場合、次のように設定できます。

```
TempTablePrefix="<USER>"
```

そして、すべての一時テーブルが、データ・ソースに接続されているあらゆるユーザーのスキーマで作成されます。

TempTablePrefix で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 73. TempTablePrefix で利用可能なトークン

トークン	説明
<AMUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連する IBM Unica Marketing ユーザー名に置換されます。
<CAMPAIGNCODE>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンのコードに置換されます。
<CAMPAIGNNAME>	このトークンは、一時テーブルが作成されたフローチャートに関連するキャンペーンの名前に置換されます。
<DBUSER>	このトークンは、一時テーブルが作成されたデータベースのデータベース・ユーザー名に置換されます。
<FLOWCHARTNAME>	このトークンは、一時テーブルの作成と関連するフローチャートの名前に置換されます。
<USER>	このトークンは、フローチャートを実行しているユーザーの Campaign ユーザー名に置換されます。

注: トークンの解決後の最終一時テーブル名が、データベース固有の名前長の制限を超えていないことを確認する必要があります。

注: TempTablePrefix に使用されるトークンで、データベース表名のために有効でない文字があれば、それらはすべてスキップされます。トークンの解決後、結果として得られる一時テーブル接頭部は、先頭の文字が英字でなければならず、残りは英数字または下線文字でなければなりません。正しくない文字があれば、警告が出されることなく除去されます。結果として得られる一時テーブル接頭部の先頭文字が英字でない場合、Campaign は接頭部の前に U の文字を付加します。

デフォルト値

UAC

TempTablePreTruncateExecutionSQL

説明

注: このプロパティは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティを設定しないようにしてください。

TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティは、一時テーブル切り捨ての前に実行する SQL 照会を指定するために使用します。指定する照会は、TempTablePostExecutionSQL プロパティで指定される SQL ステートメントの効果を打ち消すために使用できます。

例えば、TempTablePostExecutionSQL プロパティを使用することにより、索引作成のための以下の SQL ステートメントを指定できます。

```
CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>
```

その上で、TempTablePreTruncateExecutionSQL プロパティに、索引をドロップするための以下の照会を指定します。

```
DROP INDEX <TABLENAME>Idx_1 ON <TABLENAME>
```

デフォルト値

定義されていません

有効な値

有効な SQL 照会

TempTablePreTruncateRunScript

説明

注: このプロパティは、Teradata データ・ソースによってのみサポートされています。サポートされているその他のどのデータベースにおいても、このプロパティを設定しないようにしてください。

TempTablePreTruncateRunScript プロパティは、一時テーブルの切り捨ての前に実行するスクリプトまたは実行可能ファイルを指定するために使用します。指定するスクリプトは、PostTempTableCreateRunScript プロパティで指定される SQL ステートメントの効果を打ち消すために使用することができます。

例えば、PostTempTableCreateRunScript プロパティを使用することにより、索引作成のための以下の SQL ステートメントを含むスクリプトを指定することができます。

```
CREATE INDEX <TABLENAME>Idx_1 (<KEYCOLUMNS>) ON <TABLENAME>
```

その上で、TempTablePreTruncateRunScript プロパティに、索引をドロップするための以下のステートメントを含む別のスクリプトを指定します。

```
DROP INDEX <TABLENAME>Idx_1 ON <TABLENAME>
```

デフォルト値

定義されていません

有効な値

シェル・スクリプトまたは実行可能ファイルのファイル名

TeradataDeleteBeforeDrop

説明

TeradataDeleteBeforeDrop パラメーターは、Teradata データ・ソースにのみ適用されます。これは、テーブルをドロップする前にレコードを削除するかどうかを指定します。

テーブルをドロップする前に、テーブルからすべてのレコードを削除する場合は、この値を TRUE に設定します。

注: 何らかの理由で Campaign がレコードを削除できなかった場合、テーブルはドロップされません。

最初にすべてのレコードを削除することなく、テーブルをドロップする場合は、この値を FALSE に設定します。

デフォルト値

TRUE

TruncateSQL

説明

TruncateSQL プロパティは、DB2 データ・ソースで使用可能であり、テーブルの切り捨てのための代替 SQL を指定するために使用します。このプロパティは、DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合にのみ適用されます。DeleteAsTruncate が TRUE に設定されている場合、このプロパティにカスタム SQL が指定されているなら、テーブルの切り捨てには、それが使用されます。このプロパティが設定されていない場合、Campaign は、TRUNCATE TABLE <TABLENAME> の構文を使用します。このパラメーターは、デフォルトでは未定義です。

TruncateSQL で利用可能なトークンは、以下のとおりです。

表 74. TruncateSQL で利用可能なトークン

トークン	説明
<TABLENAME>	このトークンは、Campaign が切り捨てるデータベース表名に置換されます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

タイプ

説明

partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > type
プロパティは、このデータ・ソースのデータベース・タイプを指定します。

デフォルト値

デフォルト値は、データ・ソース構成を作成するために使用されるデータベース・テンプレートに応じて異なります。

有効な値

システム・テーブルで有効な値は、以下のとおりです。

- SQLServer
- DB2
- DB2ODBC
- ORACLE
- ORACLE8
- ORACLE9

カスタマー・テーブルで有効な値には、さらに以下のものが含まれます。

- TERADATA
- NETEZZA

UseExceptForMerge

説明

Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操作が実行される場合、デフォルトとして次のような「NOT EXISTS」の構文が使用されます。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS  
(SELECT * FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)
```

UseExceptForMerge が TRUE に設定されていて、かつ、「NOT IN」を使用できない場合（これを使用できなくなるのは、UseNotInForMerge が無効になっているか、またはオーディエンス・レベルが複数のフィールドで構成されていてデータ・ソースが Oracle でないときです）、この構文は以下のように変更になります。

Oracle

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable  
MINUS (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

その他

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable  
EXCEPT (SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UseMergeForTrack

説明

トラッキング・プロセスのパフォーマンス向上のため、SQL MERGE 構文を実装します。DB2、Oracle、SQL Server 2008、および Teradata 12 では、UseMergeForTrack プロパティを TRUE に設定できます。SQL MERGE ステートメントをサポートするその他のデータベースでも使用できます。

デフォルト値

TRUE (DB2 および Oracle) | FALSE (その他すべて)

有効な値

TRUE | FALSE

UseNonANSIJoin

説明

UseNonANSIJoin プロパティは、このデータ・ソースで非 ANSI の結合構文を使用するかどうかを指定します。データ・ソースのタイプが Oracle7 または Oracle8 に設定されている場合、UseNonANSIJoin の値が TRUE に設定されているなら、データ・ソースにおいて Oracle に該当する非 ANSI の結合構文が使用されます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UseNotInForMerge

説明

Campaign によりマージ・プロセスまたはセグメント・プロセスでの排他操作が実行される場合、デフォルトとして次のような「NOT EXISTS」の構文が使用されます。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE NOT EXISTS (SELECT *  
FROM ExcludeTable WHERE IncludeTable.ID = ExcludeTable.ID)
```

UseNotInForMerge が有効 (値が TRUE に設定されている) の場合で、しかも (1) オーディエンス・レベルが単一 ID フィールドで構成されているか、または (2) データ・ソースが Oracle であるかのいずれかなら、構文は以下のように変更されることになります。

```
SELECT IncludeTable.ID FROM IncludeTable WHERE IncludeTable.ID NOT IN  
(SELECT ExcludeTable.ID FROM ExcludeTable)
```

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

UseSQLToProfile

説明

UseSQLToProfile プロパティは、("SELECT *field*, count(*) FROM *table* GROUP BY *field*" を使用して) プロファイルを計算するのに、レコードを取り出す代わりに、データベースに対して SQL 照会 GROUP BY をサブミットするよう、Campaign を構成するために使用します。

- 値が FALSE (デフォルト) の場合、Campaign は、テーブル中の全レコードについてフィールド値を取り出してフィールドのプロファイルを作成し、異なる各値のカウントを追跡します。
- 値が TRUE の場合、Campaign は、以下のような照会を発行することにより、フィールドのプロファイルを作成します。

```
SELECT field, COUNT(*) FROM table GROUP BY field
```

これは、データベースに負荷をかけることになります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | パーティション | パーティション[n] | systemTableMapping

systemTableMapping カテゴリのプロパティには、システム・テーブルを再マップしたり、コンタクト履歴テーブルまたはレスポンス履歴テーブルをマップしたりする場合に自動的にデータが追加されます。このカテゴリのプロパティは編集しないでください。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー(server) | systemCodes

このカテゴリのプロパティは、Campaign において可変長コードを許容するかどうか、キャンペーンとセル・コードの形式とジェネレーター、オファー・コードを表示するかどうか、さらにはオファー・コードの区切り文字を指定します。

offerCodeDelimiter

説明

offerCodeDelimiter プロパティは、複数のコード・パーツを連結する場合 (例えば、Campaign 生成済みフィールドの「OfferCode」フィールドを出力する場合) や、Campaign レスポンス・プロセスの着信オファー・コードを複数のパーツに分割する場合に内部的に使用されます。値は、単一文字のみでなければなりません。

今回のバージョンの Campaign の場合、「NumberOfOfferCodesToUse」パラメーターは既に存在しないことに注意してください。現在ではこの値は、オファー・テンプレートから取得されます (オファー・テンプレートそれぞれのオファー・コード数は異なる可能性があります)。

デフォルト値

-

allowVariableLengthCodes

説明

allowVariableLengthCodes プロパティは、可変長コードが Campaign で許容されるかどうかを指定します。

値が TRUE で、コード形式の末尾部分が x の場合、コードの長さは可変になります。例えば、コード形式が nnnnxxxx の場合、コード長が 4 文字から 8 文字までのコードが可能です。これは、キャンペーン、オファー、バージョン、トラッキング、セルの各コードに適用されます。

値が FALSE の場合には、可変長コードは許容されません。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

displayOfferCodes

説明

`displayOfferCodes` プロパティは、Campaign GUI でオファー・コードの名前の横にオファー・コードを表示するかどうかを指定します。

値が `TRUE` の場合、オファーコードは表示されます。

値が `FALSE` の場合、オファー・コードは表示されません。

デフォルト値

`FALSE`

有効な値

`TRUE` | `FALSE`

cellCodeFormat

説明

`cellCodeFormat` プロパティは、キャンペーン・コード・ジェネレーターが、デフォルトのセル・コード・ジェネレーターによって自動的に作成されるセル・コードの形式を定義するために使用されます。

有効値のリストについては、`campCodeFormat` を参照してください。

デフォルト値

`Annnnnnnnn`

campCodeFormat

説明

`campCodeFormat` プロパティは、キャンペーン・コード・ジェネレーターが、ユーザーによるキャンペーン作成時にデフォルトのキャンペーン・コード・ジェネレーターによって自動的に生成されるキャンペーン・コードの形式を定義するために使用されます。

デフォルト値

`Cnnnnnnnnnn`

有効な値

有効値は以下のとおりです。

- `A` から `Z` または任意の記号 - 定数として扱われます
- `a` - `A` から `Z` までのランダムな文字 (大文字のみ)
- `c` - `A` から `Z` までのランダムな文字または `0` から `9` までの数値
- `n` - `0` から `9` までのランダムな数字
- `x` - `0` から `9` または `A` から `Z` までの任意の単一の ASCII 文字。生成されたキャンペーン・コードを編集し、Campaign が「x」に関して置換した ASCII 文字をさらに任意の ASCII 文字に置き換えて、Campaign が代わりにその文字を使用するようにできます。

cellCodeGenProgFile

説明

`cellCodeGenProgFile` プロパティは、セル・コード・ジェネレーターの名前を指定します。ジェネレーターが、Campaign によって提供されるデフォ

ルトのジェネレーターである場合には、サポートされるオプションも指定します。生成されたコードの形式を制御するプロパティは、`cellCodeFormat` プロパティで設定します。サポートされるオプションのリストについては、`campCodeGenProgFile` を参照してください。

独自のセル・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プログラムの絶対パスでデフォルト値を置換してください。絶対パスには、UNIX の場合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥) を使用してファイル名と拡張子を含めます。

デフォルト値

`uaccampcodegen` (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

`campCodeGenProgFile`

説明

`campCodeGenProgFile` プロパティは、キャンペーン・コード・ジェネレーターの名前を指定します。ジェネレーターが Campaign によって提供されるデフォルトのジェネレーターである場合には、サポートされるオプションも指定します。

生成されたコードの形式を制御するプロパティは `campCodeFormat` プロパティで設定します。

独自のキャンペーン・コード・ジェネレーターを作成する場合、そのカスタム・プログラムの絶対パスでデフォルト値を置換してください。絶対パスには、UNIX の場合にはスラッシュ (/)、Windows の場合には円記号 (¥) を使用してファイル名と拡張子を含めます。

デフォルトのキャンペーン・コード・ジェネレーターでは、以下のオプションを指定して呼び出す操作が可能です。

- `-y` 年 (4 桁の整数)
- `-m` 月 (1 桁または 2 桁の整数。値を 12 より大きくできません)
- `-d` 日 (1 桁または 2 桁の整数。値を 31 より大きくできません)
- `-n` キャンペーン名 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)
- `-o` キャンペーン所有者 (任意のストリング。64 文字を超えることはできません)
- `-u` キャンペーン・コード (任意の整数)。アプリケーションに生成させるのではなく、ユーザーが正確なキャンペーン ID を指定できます。
- `-f` デフォルトを指定変更する場合のコード形式。「`campCodeFormat`」で指定された値になります。
- `-i` 他の整数。
- `-s` 他のストリング。

デフォルト値

`uaccampcodegen` (Campaign 提供のコード・ジェネレーター)

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー (server) | エンコード (encoding)

このカテゴリのプロパティは、ファイルに書き込まれる値に関して、英語以外のデータをサポートするテキスト・エンコードを指定します。

stringEncoding

説明

partition[n] > server > encoding > stringEncoding プロパティは、Campaign がフラット・ファイルを読み込む方法と書き込み方法を指定します。すべてのフラット・ファイルで使用するエンコードが同じでなければなりません。どこにも構成しないと、フラット・ファイル・エンコードのデフォルトの設定になります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルトでは、値は何も指定されず、出力テキスト・ファイルは Campaign のデフォルトのエンコードである UTF-8 としてエンコードされます。

使用する値が暗黙のデフォルトと同じ UTF-8 であっても、システムに適切なエンコードにこの値を明示的に設定するのがベスト・プラクティスとなります。

注: StringEncoding プロパティの値を dataSources カテゴリのデータ・ソースで設定しないと、この stringEncoding プロパティの値がデフォルト値として使用されます。これにより、不要な混乱が生じる可能性があります。dataSources カテゴリでは、必ず StringEncoding プロパティを明示的に設定してください。

サポートされるエンコードのリストについては、「*Campaign 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

forceDCTOneBytePerChar

説明

forceDCTOneBytePerChar プロパティは、Campaign が UTF-8 にトランスコーディングするための十分なスペースを確保するために予約済みの拡張可能なフィールド幅ではなく、出力ファイルの元のフィールド幅を用いるかどうかを指定します。

テキスト値の長さは、表記に使用するエンコードによって異なる場合があります。stringEncoding プロパティが ASCII でも UTF-8 でもないデータ・ソースに由来するテキスト値の場合、Campaign は UTF-8 にトランスコーディングするための十分なスペースを確保するためにフィールド幅の 3 倍を予約します。例えば、stringEncoding プロパティが LATIN1 に設定され、データベースのフィールドが VARCHAR(25) と定義されている場合、Campaign はトランスコーディングされた UTF-8 値を保持するために 75

バイトを予約します。元のフィールド幅を用いる場合には、
forceDCTOneBytePerChar プロパティを TRUE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー (server) | タイムアウト (timeout)

このカテゴリのプロパティは、ユーザーが切断してすべての実行作業が完了した後に Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数、および Campaign サーバー・プロセスがエラーを報告するまでに外部サーバーからの応答を待機する秒数を指定します。

waitForGracefulDisconnect

説明

waitForGracefulDisconnect プロパティは、Campaign サーバー・プロセスではユーザーが切断するまでは確実に実行を継続するのか、ユーザーに切断する意思があるかどうかに関係なく終了するのかを指定します。

値がデフォルトの TRUE の場合、サーバー・プロセスは、ユーザーが終了する意思があるかどうかははっきりするまで実行を継続します。このオプションを使用すると、変更内容が失われることがなくなりますが、サーバー・プロセスが累積してしまう恐れがあります。

値が FALSE の場合、サーバー・プロセスはシャットダウンするので累積することはありませんが、ネットワーク中断が生じたり、正常に終了するために推奨されている操作手順に従わなかったりする場合には、作業内容が失われる可能性があります。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

urlRequestTimeout

説明

urlRequestTimeout プロパティは、Campaign サーバー・プロセスが外部サーバーからの応答を待機する秒数を指定します。現在、この設定は Campaign を使用して作動する IBM Unica Marketing サーバーと eMessage コンポーネントに対する要求に適用されます。

Campaign サーバー・プロセスがこの期間内に応答を受け取らないと、通信タイムアウト・エラーが報告されます。

デフォルト値

60

delayExitTimeout

説明

delayExitTimeout プロパティは、ユーザーが切断してすべての実行作業が完了した後に、Campaign フローチャートが終了するまでに待機する秒数を指定します。

このプロパティを「0」以外の値に設定すると、後続の Campaign フローチャートでは新しいインスタンスを開始するのではなく、既存のインスタンスを使用できるようになります。

デフォルト値

10

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー | コラボレーション (collaborate)

collaborateInactivityTimeout

説明

collaborateInactivityTimeout プロパティは、unica_acsvr プロセスが、Distributed Marketing 要求にサービス提供を終了してから閉じるまでの待機時間を秒単位で指定します。この待機期間によって、フローチャートを実行する前に Distributed Marketing が一連の要求を行うという一般的なシナリオにおいて、このプロセスを使用可能な状態のままにしておくことができます。

最小値は 1 です。このプロパティを 0 に設定すると、デフォルトの 60 になります。

デフォルト値

60

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー (server) | 権限

このカテゴリのプロパティは、Campaign によって作成されるフォルダーに設定される権限、および「プロファイル」ディレクトリーに入れるファイルに設定される UNIX グループと権限を指定します。

userFileGroup (UNIX のみ)

説明

userFileGroup プロパティは、ユーザー生成 Campaign ファイルに関連付けるグループを指定します。このグループが設定されるのは、ユーザーが指定のグループのメンバーである場合のみです。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

catalogFolderPermissions

説明

catalogFolderPermissions プロパティは、「保管テーブル・カタログ」>「フォルダー作成」ウィンドウを使用して Campaign によって作成されるディレクトリーの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには実行/読み取りアクセス権があります)

templateFolderPermissions

説明

templateFolderPermissions プロパティは、「テンプレート」>「フォルダー作成」ウィンドウを使用して、Campaign によって作成されるテンプレート・ディレクトリーの権限を指定します。

デフォルト値

755 (所有者には読み取り/書き込み/実行アクセス権があり、グループとワールドには読み取り/実行アクセス権があります)

adminFilePermissions (UNIX のみ)

説明

adminFilePermissions プロパティは、「プロファイル」ディレクトリーに入るファイルの権限ビット・マスクを指定します。

デフォルト値

660 (所有者とグループには読み取り/書き込みアクセス権のみがあります)

userFilePermissions (UNIX のみ)

説明

userFilePermissions プロパティは、ユーザー生成 Campaign ファイル (例えば、ログ・ファイル、サマリー・ファイル、エクスポート済みフラット・ファイル) の権限ビット・マスクを指定します。

デフォルト値

666 (サーバーで Campaign によって作成されるファイルはすべてのユーザーが読み取りおよび書き込みできます)

adminFileGroup (UNIX のみ)

説明

adminFileGroup プロパティは、「プロファイル」ディレクトリーに入るファイルと関連付ける UNIX 管理グループを指定します。

このプロパティは、デフォルトでは未定義です。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー(server) | flowchartConfig

このカテゴリのプロパティは、Campaign 生成済みフィールドの動作、複製セル・コードが許可されるかどうか、および「コンタクト履歴テーブルに記録」オプションのデフォルトを有効にするかどうかを指定します。

allowDuplicateCellcodes

説明

allowDuplicateCellcodes プロパティは、Campaign スナップショット・プロセスのセル・コードで複製値を許可するかどうかを指定します。

値が FALSE の場合、Campaign サーバーでは固有のセル・コードが強制されます。

値が TRUE の場合、Campaign サーバーでは固有のセル・コードは強制されません。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

allowResponseNDaysAfterExpiration

説明

allowResponseNDaysAfterExpiration プロパティは、すべてのオファーの有効期限後に応答を追跡可能な最大日数を指定します。こうした戻りの遅い応答は、パフォーマンス・レポートに含められる可能性があります。

デフォルト値

90

agfProcessnameOutput

説明

agfProcessnameOutput プロパティは、リスト、最適化、応答、スナップショットの各プロセスにおける Campaign 生成済みフィールド (UCGF) の出力動作を指定します。

値が PREVIOUS の場合、UCGF には着信セルに関連するプロセス名が入ります。

値が CURRENT の場合、UCGF は使用しているプロセスのプロセス名を保持します。

デフォルト値

PREVIOUS

有効な値

PREVIOUS | CURRENT

logToHistoryDefault

説明

logToHistoryDefault プロパティは、Campaign コンタクト・プロセスの「ログ」タブにある「コンタクト履歴テーブルおよびトラッキング・テーブルに記録 (Log to Contact History and Tracking Tables)」オプションをデフォルトで有効にするかどうかを指定します。

値が TRUE の場合、このオプションは有効になります。

値が FALSE の場合、このオプションは新しく作成されるコンタクト・プロセスではすべて無効になります。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

defaultBehaviorWhenOutputToFile

説明

ファイルへの出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの動作を指定します。このプロパティが適用されるのは、現行パーティションのみです。設定時のデフォルトの動作の適用対象となるのは、フローチャートに新しく追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャートに追加されると、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

デフォルト値

レコード置換

有効な値

- データ追記
- 新規ファイル作成
- レコード置換

defaultBehaviorWhenOutputToDB

説明

データベース表への出力時における、Campaign のコンタクト・プロセスの動作を指定します。このプロパティが適用されるのは、現行パーティションのみです。設定時のデフォルトの動作の適用対象となるのは、フローチャートに新しく追加される際のプロセスのみです。プロセスがフローチャートに追加されると、出力動作はプロセス構成で変更が可能です。

デフォルト値

レコード置換

有効な値

- データ追記
- レコード置換

replaceEmbeddedNames

説明

replaceEmbeddedNames が TRUE である場合、Campaign は照会テキストに組み込まれているユーザー変数と UCGF 名を実際の値に置き換えますが、それらの名前はアンダースコアなどの非英数字で区切られている必要があります (例えば、ABC_UserVar.v1 は置換されますが、ABCUserVar.v1 は置換されません)。Campaign 7.2 以前との後方互換性を持たせるには、このプロパティを TRUE に設定してください。

FALSE に設定すると、Campaign が実際の値に置換するのは識別可能なユーザー変数と UCGF 名 (IBM Unica Marketing 式および未加工の SQL 式) のみです。Campaign 7.3 以降との後方互換性を持たせるには、このプロパティを FALSE に設定してください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー(server) | flowchartSave

このカテゴリのプロパティは、新しい Campaign フローチャートの自動保存プロパティとチェックポイント・プロパティのデフォルトの設定を指定します。

checkpointFrequency

説明

checkpointFrequency プロパティは、新しい Campaign フローチャートのチェックポイント・プロパティのデフォルトの設定を分単位で指定します。これは、クライアント側の「拡張設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成できます。チェックポイント機能により、リカバリーのために実行中のフローチャートのスナップショットを取得できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

任意の整数

autosaveFrequency

説明

autosaveFrequency プロパティは、新しい Campaign フローチャートの自動保存プロパティのデフォルトの設定を分単位で指定します。これは、クライアント側の「拡張設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成できます。自動保存機能によって、編集および構成中のフローチャートの強制保存が実行されます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

有効な値

任意の整数

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー (server) | dataProcessing

このカテゴリのプロパティは、Campaign がフラット・ファイル内のストリング比較と空フィールドを処理する方法、およびマクロ `STRING_CONCAT` の動作を指定します。

longNumericIdsAsText

説明

`longNumericIdsAsText` プロパティは、Campaign マクロ言語が、15 桁を超える数値 ID をテキストとして扱うかどうかを指定します。

値を `yes` に設定すると、15 桁を超える数値 ID はテキストとして処理されます。

値を `no` に設定すると、15 桁を超える数値 ID は数値として処理されるので、切り捨てや丸めが行われると精度や固有性が失われる可能性があります。

注: この設定は、対象のデータ・ソースに由来するフィールドで `partitions > partition[n] > dataSources > [data_source_name] > ForceNumeric` プロパティを `TRUE` に設定すると無効になります。

デフォルト値

`no`

有効な値

`yes` | `no`

stringConcatWithNullsNull

説明

`stringConcatWithNullsNull` プロパティは、Campaign マクロ `STRING_CONCAT` の動作を制御します。

値が `yes` の場合、`STRING_CONCAT` のいずれかの入力がある場合、`NULL` を返します。

値が `no` の場合、`STRING_CONCAT` は `NULL` 以外のすべてのプロパティを連結した値を返します。その場合、`STRING_CONCAT` のすべての入力がある場合、`NULL` だけを返します。

デフォルト値

`yes`

有効な値

`yes` | `no`

performCaseInsensitiveComparisonAs

説明

performCaseInsensitiveComparisonAs プロパティは、compareCaseSensitive プロパティが no に設定されている場合 (つまり、大/小文字を区別しない比較の場合)、Campaign がデータ値を比較する方法を指定します。compareCaseSensitive の値が yes の場合には、このプロパティは無視されます。

値が UPPER の場合、Campaign はすべてのデータを大文字に変換してから比較を行います。

値が LOWER の場合、Campaign はすべてのデータを小文字に変換してから比較を行います。

デフォルト値

LOWER

有効な値

UPPER | LOWER

upperAllowsDate

説明

upperAllowsDate プロパティは、UPPER データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を no に設定します。これらのデータベースでは、UPPER 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

compareCaseSensitive

説明

compareCaseSensitive プロパティは、Campaign データ比較において英字の大/小文字 (UPPER と lower) を区別するかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign では、データ値の比較の際に大/小文字の違いが無視され、バイナリーのテキスト・データは大/小文字を区別しない方法でソートされます。英語データを使用する場合には、この設定を強くお勧めします。

値が yes の場合、Campaign は大/小文字を区別してデータ値を識別し、それぞれの文字の実際のバイナリー値比較を行います。英語以外のデータを使用する場合には、この設定を強くお勧めします。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

lowerAllowsDate

説明

lowerAllowsDate プロパティは、LOWER データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server または Oracle の場合には、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 または Teradata の場合には、値を no に設定します。これらのデータベースでは、LOWER 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけですが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

substrAllowsDate

説明

substrAllowsDate プロパティは、SUBSTR/SUBSTRING データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが Oracle または Teradata の場合には、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、SUBSTR/SUBSTRING 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが SQL Server または DB2 の場合には、値を no に設定します。これらのデータベースでは、SUBSTR/SUBSTRING 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

ltrimAllowsDate

説明

ltrimAllowsDate プロパティは、LTRIM データベース関数で DATE/DATETIME パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるのかどうかを指定します。

データベースが SQL Server、Oracle、Teradata の場合には、値を yes に設定します。これらのデータベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメーターを使用できます。

データベースが DB2 の場合には、値を no に設定します。このデータベースでは、LTRIM 関数で DATE/DATETIME パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに no の値が推奨されている場合は、値を no に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに yes の値が推奨されている場合は、値を yes に設定します。通常、顧客のサイトで使用されているデータベース・タイプは 1 つだけですが、複数のデータベース・タイプが使用されているインストール環境もあります。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

rtrimAllowsDate

説明

`rtrimAllowsDate` プロパティは、`RTRIM` データベース関数で `DATE/DATETIME` パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが `SQL Server`、`Oracle`、`Teradata` の場合には、値を `yes` に設定します。これらのデータベースでは、`RTRIM` 関数で `DATE/DATETIME` パラメーターを使用できます。

データベースが `DB2` の場合には、値を `no` に設定します。このデータベースでは、`RTRIM` 関数で `DATE/DATETIME` パラメーターの使用は許可されていません。

これは、グローバルの設定であり、データ・ソース単位の設定ではないことに注意してください。使用しているいずれかのデータ・ソースに `no` の値が推奨されている場合は、値を `no` に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに `yes` の値が推奨されている場合は、値を `yes` に設定します。

デフォルト値

`yes`

有効な値

`yes` | `no`

`likeAllowsDate`

説明

`likeAllowsDate` プロパティは、`LIKE` データベース関数で `DATE/DATETIME` パラメーターが許可されるかどうか、その結果としてデータベースで操作を実行できるのか、Campaign サーバーで操作を実行する必要があるかどうかを指定します。

データベースが `SQL Server` または `Oracle` の場合には、値を `yes` に設定します。これらのデータベースでは、`LIKE` 関数で `DATE/DATETIME` パラメーターを使用できます。

データベースが `DB2` または `Teradata` の場合には、値を `no` に設定します。これらのデータベースでは、`LIKE` 関数で `DATE/DATETIME` パラメーターの使用は許可されていません。

注: これはグローバルの設定で、データ・ソース単位の設定ではありません。使用しているいずれかのデータ・ソースに `no` の値が推奨されている場合は、値を `no` に設定します。使用しているすべてのデータ・ソースに `yes` の値が推奨されている場合は、値を `yes` に設定します。

デフォルト値

`yes`

有効な値

`yes` | `no`

`fileAllSpacesIsNull`

説明

fileAllSpacesIsNull プロパティは、フラット・ファイル内のすべてのスペース値を NULL 値と見なすかどうかを指定することによって、Campaign がマップ済みフラット・ファイル内の空フィールドをインタープリットする方法を指定します。

値が yes の場合、すべてのスペース値は NULL 値と見なされます。Campaign は <field> is null のような照会を突き合わせますが、<field> = "" などの照会では失敗します。

値が no の場合、すべてのスペース値は NULL ではない空ストリングとして処理されます。Campaign は <field>= "" のような照会を突き合わせますが、<field> is null という照会では失敗します。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー(server) | 最適化

このカテゴリのプロパティは、Campaign サーバーのパーティションの最適化を制御します。

注: このカテゴリのパラメーターは、Optimize には関連しません。

maxVirtualMemory

説明

maxVirtualMemory プロパティは、新しい Campaign フローチャートの Affinium 仮想メモリー使用量 (Affinium Virtual Memory Usage) プロパティのデフォルト設定を指定します。これは、クライアント側の「拡張設定」ウィンドウからフローチャートごとに構成できます。単位は、M バイトです。

デフォルト値

128

useInDbOptimization

説明

useInDbOptimization プロパティは、Campaign が、Campaign サーバーではなくデータベースで可能な限り多くの操作の実行を試行するかどうかを指定します。

値が「いいえ」の場合、Campaign では、Campaign サーバーにある ID のリストが常時維持されます。

値が「はい」の場合、Campaign では ID リストのプルを可能な限り行わないようにします。

デフォルト値

いいえ

有効な値

はい | いいえ

maxReuseThreads

説明

`maxReuseThreads` プロパティは、サーバー・プロセス (`unica_acsvr`) が再使用するためにキャッシュに入れるオペレーティング・システム・スレッドの数を指定します。デフォルトでは、このプロパティが 0 に設定され、キャッシュは無効になります。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減する場合、またアプリケーションの依頼に応じてスレッドを解放できないようにするオペレーティング・システムの場合は、キャッシュを使用します。

`maxReuseThreads` プロパティがゼロ以外の値の場合、設定値を `MaxQueryThreads` の値以上にしなければなりません。

デフォルト値

0 (ゼロ)。キャッシュが無効になります

threadStackSize

説明

`threadStackSize` は、各スレッドのスタックに割り当てられるバイト数を決定します。このプロパティは、IBM からの指示がある場合以外には変更しないでください。最小値は 128 K です。最大値は 8 MB です。

デフォルト値

1048576

tempTableDataSourcesForSegments

説明

`tempTableDataSourcesForSegments` プロパティは、セグメント作成プロセスが永続セグメント一時表を作成できるデータ・ソースのリストを定義します。コンマ区切りリストになります。

デフォルトでは、このプロパティはブランクです。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

doNotCreateServerBinFile

説明

戦略セグメントのパフォーマンスを改善するには、このオプションを `TRUE` に設定します。このオプションを `TRUE` に設定すると、戦略セグメントによって Campaign サーバー上にバイナリー・ファイルは作成されません。代わりに、戦略セグメントによってデータ・ソース内にセグメント一時表が作成されます。値を `TRUE` に設定する場合、セグメント化プロセスの構成で、少なくとも 1 つの有効な一時テーブルのデータ・ソースを指定する必要があります。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

forceViewForPreOptDates

説明

デフォルト値 (TRUE) は、Optimize からオファーが割り当てられたメール・リスト・プロセスで、パラメーター化されたオファー属性ビューを強制的に作成します。値 FALSE は、メール・リストが少なくとも 1 つのパラメーター化されたオファー属性をエクスポートする場合にのみ、パラメーター化されたオファー属性ビューを作成します。

この値を FALSE に設定すると、(ソースが最適化セッションである) 抽出プロセスから入力値を取得するよう構成されたメール・リスト・プロセスが、パラメーター化された開始日と終了日がオファーに組み込まれている場合であっても、UA_Treatment テーブルに対して EffectiveDate と ExpirationDate に NULL 値を書き込む可能性があります。この場合は、TRUE に設定し直します。

デフォルト値

TRUE

有効な値

TRUE | FALSE

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー (server) | ロギング (logging)

このカテゴリのプロパティは、Campaign サーバーで標準および Windows のイベント・ロギングを有効にするかどうか、ロギング・レベルとカテゴリ、およびその他のロギング動作を指定します。

enableWindowsEventLogging

説明

enableWindowsEventLogging プロパティは、Windows イベント・ログに対する Campaign サーバー・ロギングを有効にするか無効にするかを指定します。

値が yes の場合、Windows イベント・ログへのロギングが有効になります。

値が no の場合には、Windows イベント・ログへのロギングは無効です。無効の場合、windowsEventLoggingLevel と windowsEventLoggingCategory の設定は無視されます。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

logFileBufferSize

説明

logFileBufferSize プロパティは、keepFlowchartLogOpen プロパティの値が yes の場合に使用されます。設定するこのログ・メッセージ数の上限に達した後に、メッセージはファイルに書き込まれます。

値が 1 の場合、それぞれのログ・メッセージはすぐにファイルに書き込まれ、事実上バッファリングは不要になりますが、パフォーマンスに悪影響を及ぼします。

このプロパティは、keepFlowchartLogOpen の値が no に設定されている場合には無視されます。

デフォルト値

5

keepFlowchartLogOpen

説明

keepFlowchartLogOpen プロパティは、ログ・ファイルに行が書き込まれるたびに、フローチャート・ログ・ファイルを Campaign が開いて閉じるかどうかを指定します。

値が no の場合、Campaign はフローチャート・ログ・ファイルを開いてから閉じます。

値が yes の場合、Campaign は一度だけフローチャート・ログ・ファイルを開き、その後、フローチャートのサーバー・プロセスが終了する際にのみフローチャート・ログ・ファイルを閉じます。リアルタイム・フローチャートの場合、値を yes にするとパフォーマンスが向上する場合があります。yes 設定を使用する副作用としては、ログに記録されたばかりのメッセージがログ・ファイルに直ちに表示されないことがあります。Campaign がログ・メッセージをファイルにフラッシュするのは、内部バッファが満杯になったか、ログ・メッセージ数が logFileBufferSize プロパティの値と等しくなった場合だけだからです。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

logProcessId

説明

logProcessId プロパティは、Campaign サーバー・プロセスのプロセス ID (PID) をログ・ファイルに記録するかどうかを制御します。

値が yes の場合、プロセス ID はログに記録されます。

値が no の場合には、プロセス ID は記録されません。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

logMaxBackupIndex

説明

logMaxBackupIndex プロパティは、Campaign サーバーのバックアップ・ログ・ファイルのうち最も古いログ・ファイルを削除するまでに、保持しておくバックアップ・ログ・ファイル数を指定します。

値が 0 (ゼロ) の場合、バックアップ・ファイルは作成されず、logFileMaxSize プロパティで指定されたサイズに達するとログ・ファイルは切り捨てられます。

ゼロより大きい値である n の場合、ファイル {File.1, ..., File.n-1} は {File.2, ..., File.n} に名前変更されます。また File は File.1 と名前変更されて閉じられます。次のログ出力を受信する場合に備え、新しい File が作成されます。

デフォルト値

1 (バックアップ・ログ・ファイルが 1 つ作成されます)

loggingCategories

説明

loggingCategories プロパティは、Campaign サーバー・ログ・ファイルに書き込まれるメッセージのカテゴリを指定します。このプロパティは、すべての選択したカテゴリの重大度に基づいてログに記録するメッセージを判別する loggingLevels と連動します。コンマ区切りリストに複数のカテゴリを指定できます。特殊カテゴリ all を使用すると、すべてのロギング・カテゴリを素早く指定できます。

デフォルト値

ALL

有効な値

サポートされているカテゴリは次のとおりです。

- ALL
- BAD_ORDER
- CELL_ACCESS
- CONFIG
- DATA_ERRORS
- DBLOAD
- FILE_ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS

- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT
- SYSQUERY
- TABLE_ACCESS
- TABLE_MAPPING
- TABLE_IO
- WEBPROC

loggingLevels

説明

loggingLevels プロパティは、重大度に基づいて、Campaign サーバー・ログ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く (最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。フローチャート内の「ツール」>「ログ・オプション」メニューを使用して、これらの設定を調整できます。

注: 診断のために Campaign からのロギング出力を最大限取得するには、構成やテストの際に loggingLevels プロパティを ALL に設定することもできます。この設定にすると大量のデータが生成されるので、実稼働操作にはお勧めできない場合があります。

windowsEventLoggingCategories

説明

windowsEventLoggingCategories プロパティは、Campaign サーバーの Windows イベント・ログに書き込まれるメッセージのカテゴリを指定します。このプロパティは、すべての選択したカテゴリの重大度に基づいてログに記録するメッセージを判別する windowsEventLoggingLevels と連動します。

コンマ区切りリストに複数のカテゴリを指定できます。特殊カテゴリ all を使用すると、すべてのロギング・カテゴリを素早く指定できます。

デフォルト値

ALL

有効な値

- ALL
- BAD_ORDER
- CELL_ACCESS
- CONFIG
- DATA_ERRORS
- DBLOAD
- FILE_ACCESS
- GENERAL
- COMMANDS
- MEMORY
- PROCRUN
- QUERY
- SORT
- SYSQUERY
- TABLE_ACCESS
- TABLE_MAPPING
- TABLE_IO
- WEBPROC

logFileMaxSize

説明

logFileMaxSize プロパティは、Campaign サーバー・ログ・ファイルに許可されるバイト単位の最大サイズを指定します。このサイズに達すると、バックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

説明

windowsEventLoggingLevels プロパティは、Campaign サーバーの Windows イベント・ログに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

LOW は、詳細度が最も低く (最も重大なエラーのみ)、ALL の場合にはトレース・メッセージが含まれ、主に診断を目的としています。

enableLogging

説明

enableLogging プロパティは、Campaign サーバー・ロギングをセッション始動時に有効にするかどうかを指定します。

値が yes の場合、ロギングが有効になります。

値が no の場合、ロギングは無効です。

デフォルト値

yes

有効な値

yes | no

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー(server) | flowchartRun

このカテゴリのプロパティは、Campaign スナップショットのエクスポートで許容されるエラー数、フローチャートの保存時に保存されるファイル、およびテスト実行の最上位プロセスごとの最大 ID 数を指定します。

maxDataErrorsAllowed

説明

maxDataErrorsAllowed プロパティは、Campaign スナップショットのエクスポートで許容されるデータ変換エラーの最大数を指定します。

デフォルト値

0 (ゼロ)。エラーは許容されません。

saveRunResults

説明

saveRunResults プロパティは、ユーザーが Campaign フローチャートを保存する際に保存されるファイルを指定します。

値がはいの場合にはアンダースコア付きのファイルが保存され、useInDbOptimization の値がはいの場合にはデータベース一時表が保持されます。

値がいいえの場合、保存されるのは .ses ファイルだけで、フローチャートを再ロードしても中間結果は表示できません。

デフォルト値

はい

有効な値

はい | いいえ

testRunDefaultSize

説明

`testRunDefaultSize` プロパティは、Campaign テスト実行における最上位プロセスごとの最大 ID 数のデフォルトを指定します。値が 0 (ゼロ) の場合、ID 数に制限はありません。

デフォルト値

0 (ゼロ)

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー (server) | プロファイル

このカテゴリーのプロパティは、数値およびテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリー数を指定します。

profileMaxTextCategories

説明

`profileMaxTextCategories` プロパティと `profileMaxNumberCategories` プロパティは、テキスト値と数値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリー数をそれぞれ指定します。

ユーザーに表示される bin 数の設定 (ユーザー・インターフェースで変更可能です) によって、これらの値は異なります。

デフォルト値

1048576

profileMaxNumberCategories

説明

`profileMaxNumberCategories` プロパティと `profileMaxTextCategories` プロパティは、数値とテキスト値のプロファイル作成時に Campaign で作成される最大カテゴリー数をそれぞれ指定します。

ユーザーに表示される bin 数の設定 (ユーザー・インターフェースで変更可能です) によって、これらの値は異なります。

デフォルト値

1024

Campaign | パーティション | パーティション[n] | サーバー (server) | 内部 (internal)

このカテゴリーのプロパティは、選択された Campaign パーティションの統合設定と `internalID` 限度を指定します。Campaign インストール済み環境に複数のパーティションが存在する場合、影響が及ぶようにするパーティションごとにこれらのプロパティを設定します。

internalIdLowerLimit

説明

`internalIdUpperLimit` プロパティと `internalIdLowerLimit` プロパティは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も使用できます。

デフォルト値

0 (ゼロ)

internalIdUpperLimit

説明

`internalIdUpperLimit` プロパティと `internalIdLowerLimit` プロパティは、Campaign 内部 ID を指定の範囲に制限します。それらのプロパティでは境界上の値が含まれるので、Campaign は上限と下限のどちらの値も使用できます。Distributed Marketing がインストールされている場合は、値を 2147483647 に設定してください。

デフォルト値

4294967295

eMessageInstalled

説明

eMessage がインストールされていることを示します。`yes` を選択すると、eMessage 機能が Campaign インターフェースで使用できます。

IBM インストーラーは、eMessage インストールのデフォルトのパーティションに関してこのプロパティを `yes` に設定します。eMessage をインストールした追加パーティションについては、このプロパティを手動で構成する必要があります。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

interactInstalled

説明

Interact 設計環境をインストール後、この構成プロパティを `yes` に設定し、Campaign で Interact 設計環境を有効にしてください。

Interact をインストールしていない場合、`no` に設定してください。このプロパティを `no` に設定しても、Interact メニューとオプションがユーザー・インターフェースから削除されることはありません。メニューとオプションを削除するには、`configTool` ユーティリティーを使用して Interact を手動で登録抹消しなければなりません。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

MO_UC_integration

説明

このパーティションで Marketing Operations と統合できるようにします。以下の 3 つのオプションのいずれかを Yes に設定する予定がある場合、**MO_UC_integration** を Yes に設定する必要があります。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

MO_UC_BottomUpTargetCells

説明

このパーティションで、ターゲット・セル・スプレッドシートのボトムアップ・セルを許可します。Yes に設定すると、トップダウン・ターゲット・セルとボトムアップ・ターゲット・セルの両方が表示されますが、ボトムアップ・ターゲット・セルは読み取り専用になります。**MO_UC_integration** を有効にする必要がある点に注意してください。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Legacy_campaigns

説明

MO_UC_integration プロパティが Yes に設定されていると、**Legacy_campaigns** プロパティによって、統合が有効になる前に作成されたキャンペーン (Campaign 7.x で作成されたキャンペーンおよび Plan 7.x プロジェクトにリンクされたキャンペーンを含む) にアクセスできるようになります。この統合の構成について詳しくは、「*IBM Unica Marketing Operations および Campaign 統合ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

IBM Unica Marketing Operations - オファターの統合

説明

Marketing Operations を使用してこのパーティションでオファター・ライフサイクル管理タスクを行う機能を有効にします。(MO_UC_integration を有効にする必要があります。また、「設定」>「構成」>「Unica」>「Platform」で、「キャンペーンの統合」を有効にする必要もあります。) この統合の構成について詳しくは、「IBM Unica Marketing Operations and Campaign 統合ガイド」を参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

UC_CM_integration

説明

Campaign パーティションにおいて、IBM Coremetrics オンライン・セグメントの統合を有効にします。このオプションを yes に設定すると、フローチャートの「選択」プロセス・ボックスに、入力として「IBM Coremetrics セグメント」を選択するオプションが示されます。パーティションごとに統合を構成するには、「設定」>「構成」>「Campaign」|「パーティション」|「パーティション[n)」|「Coremetrics」を選択します。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

Campaign | パーティション | パーティション[n) | サーバー(server) | fileDialog

このカテゴリーのプロパティーは、Campaign の入力および出力のデータ・ファイルのデフォルトのディレクトリーを指定します。

defaultOutputDirectory

説明

defaultOutputDirectory プロパティーは、「Campaign File Selection」ダイアログを初期設定するために使用するパスを指定します。

defaultOutputDirectory プロパティーは、出力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しないと、パスは環境変数 UNICA_ACDFDIR から読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

defaultInputDirectory

説明

defaultInputDirectory プロパティは、「Campaign File Selection」ダイアログを初期設定するために使用するパスを指定します。
defaultInputDirectory プロパティは、入力データ・ファイルが Campaign にマップされる際に使用されます。値を指定しないと、パスは環境変数 UNICA_ACDFDIR から読み取られます。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | パーティション | パーティション[n] |

offerCodeGenerator

このカテゴリのプロパティは、オファー・コード・ジェネレーター、およびターゲット・セル・スプレッドシートのセルにコンタクト・プロセスを割り当てる際に使用するセル・コード・ジェネレーターのクラス、クラスパス、構成ストリングを指定します。

offerCodeGeneratorClass

説明

offerCodeGeneratorClass プロパティは、オファー・コード・ジェネレーターとして使用するクラス Campaign の名前を指定します。クラスは、パッケージ名で完全修飾する必要があります。

デフォルト値

表示のために改行が追加されています。

```
com.unica.campaign.core.codegenerator.samples.  
ExecutableCodeGenerator
```

offerCodeGeneratorConfigString

説明

offerCodeGeneratorConfigString プロパティは、オファー・コード・ジェネレーターのプラグインが Campaign によってロードされる際にそのプラグインに渡されるストリングを指定します。デフォルトでは、ExecutableCodeGenerator (Campaign に同梱) によってこのプロパティが使用され、実行する実行可能プログラムのパス (Campaign アプリケーションのホーム・ディレクトリーへの相対パス) が示されます。

デフォルト値

```
./bin
```

defaultGenerator

説明

defaultGenerator プロパティは、セル・コードのジェネレーターを指定します。セル・コードはコンタクト・スタイル・プロセス・ボックスに表示され、ターゲット制御スプレッドシートのセルにセルを割り当てるのに使用

されます。ターゲット制御スプレッドシートは、キャンペーンとフローチャートにおけるセルとオファーのマッピングを管理します。

デフォルト値

uacoffercodegen.exe

offerCodeGeneratorClasspath

説明

offerCodeGeneratorClasspath プロパティは、オファー・コード・ジェネレーターとして使用するクラス Campaign のパスを指定します。絶対パスでも相対パスでも構いません。

パスの末尾がスラッシュ (UNIX の場合はスラッシュ / 、Windows の場合には円記号 ¥) になっていると、Campaign では、使用すべき Java プラグイン・クラスが含まれるディレクトリーのパスだと見なされます。パスの末尾がスラッシュではないと、Campaign では、Java クラスが含まれる jar ファイルの名前と見なされます。

相対パスの場合には、Campaign アプリケーションのホーム・ディレクトリーに対して相対であると Campaign は見なします。

デフォルト値

codeGenerator.jar (Campaign.war ファイルにパッケージ)

Campaign | パーティション | パーティション[n] | Coremetrics

このカテゴリーのプロパティは、選択された Campaign パーティションの IBM Coremetrics および Campaign の統合設定を指定します。Campaign インストール済み環境に複数のパーティションが存在する場合、影響が及ぶようにするパーティションごとにこれらのプロパティを設定します。これらのプロパティを有効にするには、(partition | partition[n] | server | internal の下で) そのパーティションの UC_CM_integration を Yes に設定する必要があります。

ServiceURL

説明

ServiceURL は、IBM Coremetrics と Campaign の間の統合点となる IBM Coremetrics 統合サービスの場所を指定します。

デフォルト値

<https://export.coremetrics.com/eb/segmentapi/1.0/api.do>

有効な値

このリリースでサポートされる値は、上記のデフォルト値のみです。

CoremetricsKey

説明

Campaign では、CoreMetricsKey を使用して、IBM Coremetrics からエクスポートされた ID を、Campaign の対応するオーディエンス ID にマップします。このプロパティに定義される値は、変換テーブルで使用される値と厳密に一致する必要があります。

デフォルト値

registrationid

有効な値

このリリースでサポートされる値は、registrationid のみです。

ClientID

説明

この値を、お客様の会社に割り当てられる固有の IBM Coremetrics クライアント ID に設定します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

TranslationTableName

説明

IBM Coremetrics キーを Campaign オーディエンス ID に変換するために使用される変換テーブルの名前を指定します。例えば、Cam_CM_Trans_Table のようにします。テーブル名を指定しない場合、入力として IBM Coremetrics セグメントを使用するフローチャートをユーザーが実行すると、エラーが発生します。テーブル名がなければ、Campaign は製品同士の間で ID をマップする方法が分からないためです。

注: 変換テーブルをマップまたは再マップするとき、テーブル定義ダイアログで割り当てられる「**IBM Unica テーブル名**」は、ここで定義された TranslationTableName と厳密に (大/小文字も含めて) 一致する必要があります。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

ASMUserForCredentials

説明

このプロパティは、どの IBM Unica Marketing アカウントが IBM Coremetrics 統合サービスにアクセスできるかを指定します。追加情報については、下記を参照してください。

値が指定されない場合、Campaign は、データ・ソースとして ASMDatasourceForCredentials の値が指定されているかどうかを確認するために、現在ログインしているユーザーのアカウントを検査します。指定されている場合には、アクセスが許可されます。指定されていない場合には、アクセスは拒否されます。

デフォルト値

asm_admin

ASMDatasourceForCredentials

説明

このプロパティは、**ASMUserForCredentials** 設定で指定された Marketing Platform アカウントに割り当てられるデータ・ソースを指定します。デフォルトは **UC_CM_ACCESS** です。この「資格情報のデータ・ソース」は、統合サービスにアクセスできるようにする資格情報を格納するために Marketing Platform が使用するメカニズムです。

UC_CM_ACCESS のデフォルト値は指定されていますが、その名前のデータ・ソースは提供されていませんし、その名前を使用する必要があるわけでもありません。

重要: 「設定」>「ユーザー」を選択し、ASMUserForCredentials で指定されたユーザーを選択し、「データ・ソースの編集」リンクをクリックしてから、ここで定義された値と名前が厳密に一致する新しいデータ・ソース (**UC_CM_ACCESS** など) を追加する必要があります。「データ・ソース・ログイン」と「データ・ソース・パスワード」には、IBM Coremetrics クライアント ID に関連付けされた資格情報を使用します。データ・ソース、ユーザー・アカウント、およびセキュリティについては、「*IBM Unica Marketing Platform 管理者ガイド*」を参照してください。

デフォルト値

UC_CM_ACCESS

Campaign | モニター

このカテゴリーのプロパティは、操作モニター機能を有効にするかどうか、操作モニター・サーバーの URL、およびキャッシング動作を指定します。操作モニター機能ではアクティブなフローチャートが表示されて、それらを制御できます。

cacheCleanupInterval

説明

cacheCleanupInterval プロパティは、フローチャート・ステータス・キャッシュの自動クリーンアップ間隔を秒単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティは使用できません。

デフォルト値

600 (10 分)

cacheRunCompleteTime

説明

cacheRunCompleteTime プロパティは、完了済み実行タスクがキャッシュに入れられて、「モニター」ページに表示される期間を分単位で指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティは使用できません。

デフォルト値

4320

monitorEnabled

説明

monitorEnabled プロパティは、モニター機能を有効にするかどうかを指定します。

Campaign バージョン 7.0 より前のバージョンでは、このプロパティは使用できません。

デフォルト値

はい

serverURL

説明

「キャンペーン」>「モニター」>「serverURL」プロパティは、操作モニター・サーバーの URL を指定します。これは必須設定で、操作モニター・サーバー URL がデフォルト以外の場合には、値を変更してください。

Campaign が Secure Sockets Layer (SSL) 通信を使用するように構成されている場合には、HTTPS を使用するようにこのプロパティの値を設定します。例えば、次のようにします。 serverURL=https://host:SSL_port/Campaign/OperationMonitor ここで、それぞれの意味は次のとおりです。

- *host* は、Web アプリケーションがインストールされているマシンの名前または IP アドレスです。
- *SSL_Port* は Web アプリケーションの SSL ポートです。

URL の https に注意してください。

デフォルト値

http://localhost:7001/Campaign/OperationMonitor

monitorEnabledForInteract

説明

「はい」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーが Interact で使用可能になります。Campaign には JMX セキュリティーはありません。

「いいえ」に設定すると、Campaign JMX コネクター・サーバーに接続できません。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

False

有効な値

True | False

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

プロトコル (protocol)

説明

`monitorEnabledForInteract` が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・プロトコルです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

JMXMP

有効な値

JMXMP | RMI

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

ポート

説明

`monitorEnabledForInteract` が「はい」に設定されている場合、Campaign JMX コネクター・サーバーのリスニング・ポートです。

この JMX モニターは、Interact コンタクトとレスポンスの履歴モジュール専用です。

デフォルト値

2004

有効な値

1025 から 65535 までの整数。

使用可能性

このプロパティは、Interact をインストールしてある場合のみ適用可能です。

Campaign | ProductReindex

オファーの作成者は、対象のオファーと関連付ける製品を指定できます。オファーと関連付けることのできる製品リストが変更される場合、オファー/製品の関連付けを更新する必要があります。Campaign > ProductReindex カテゴリのプロパティは、その更新頻度、および最初に更新を実行する時刻を指定します。

startTime

説明

`startTime` プロパティは、オファー/製品の関連付けが最初に更新される時刻を指定します。最初の更新日付は Campaign サーバーを始動した後の日付となり、その後の更新は間隔パラメーターで指定した間隔で行われます。HH:mm:ss という形式で、24 時間クロックが使用されます。

Campaign を初めて始動する場合、以下の規則に従って、startTime プロパティーが使用されます。

- startTime で指定される時刻が将来の場合、最初のオファー/製品関連付けの更新は現在の startTime の日付で行われます。
- startTime が現在の日付で既に過ぎている場合、最初の更新は翌日の startTime か、現在時刻から間隔分経過した時刻のどちらか早い時刻に行われます。

デフォルト値

12:00:00 (正午)

間隔

説明

間隔プロパティーは、オファー/製品の関連付けの更新間隔を分単位で指定します。更新は、Campaign サーバーを開始した後の日付で、startTime パラメーターで指定された時刻が初めて来ると行われます。

デフォルト値

3600 (60 時間)

Campaign | unicaACListener

「Campaign | unicaACListener」プロパティーは、ロギング・レベル、特定のアクセス権、言語エンコーディング方式、オペレーティング・システム・スレッド数、および Campaign リスナーのプロトコル、ホストおよびポートを指定します。これらのプロパティーを設定する必要があるのは、それぞれの Campaign インスタンスについて一度限りです。各パーティションに関して設定する必要はありません。

enableWindowsImpersonation

説明

enableWindowsImpersonation プロパティーは、Windows 偽装を Campaign で有効にするかどうかを指定します。

Windows 偽装を使用している場合は、値を TRUE に設定します。ファイル・アクセスに関して、Windows レベルのセキュリティー許可の仕組みを利用したい場合は、Windows 偽装を別個に構成する必要があります。

Windows 偽装を使用していない場合は、値を FALSE に設定します。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

enableWindowsEventLogging

説明

「Campaign」>「UnicaACListener」>「EnableWindowsEventLogging」プロパティは、Windows イベント・ログへのロギングを制御します。このプロパティを TRUE に設定すると、Windows イベント・ログにログが記録されます。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE | FALSE

serverHost

説明

serverHost プロパティは、Campaign リスナーがインストールされているマシンの名前または IP アドレスを指定します。Campaign リスナーが、IBM Unica Marketing がインストールされているのと同じマシン上にインストールされていない場合、Campaign リスナーがインストールされているマシンのマシン名または IP アドレスにこの値を変更してください。

デフォルト値

localhost

logMaxBackupIndex

説明

logMaxBackupIndex プロパティは、保持可能なバックアップ・ファイル数を指定します。このファイル数を超えると、最も古いバックアップ・ファイルが削除されます。このプロパティを 0 (ゼロ) に設定すると、Campaign ではバックアップ・ファイルは作成されず、logMaxFileSize プロパティで指定したサイズに達するとログ・ファイルでロギングが停止します。

このプロパティに数値 (N) を指定すると、logMaxFileSize プロパティで指定したサイズにログ・ファイル (File) が達すると、Campaign は既存のバックアップ・ファイル (File.1 ... File.N-1) の名前を File.2 ... File.N に名前変更し、現在のログ・ファイル File.1 も名前変更してから閉じ、File という名前の新しいログ・ファイルを開始します。

デフォルト値

1 (バックアップ・ファイルが 1 つ作成されます)

logStringEncoding

説明

logStringEncoding プロパティは、すべてのログ・ファイルで使用するエンコードを制御します。この値は、オペレーティング・システムで使用するエンコードと同じでなければなりません。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 が優先設定となります。

この値を変更する場合、複数のエンコードが 1 つのファイルに書き込まれることがないように、空にするか、すべての関連するログ・ファイルを削除する必要があります。

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効な値

「*Campaign* 管理者ガイド」の「*Campaign* での文字エンコード」を参照してください。

systemStringEncoding

説明

systemStringEncoding プロパティは、ファイル・システム・パスやファイル名など、オペレーティング・システムとやり取りする値を解釈するために *Campaign* がどのエンコードを使用するかを示します。ほとんどの場合、この値は native に設定できます。複数のロケールを使用する環境では、UTF-8 を使用します。

以下に示す例のように、コンマで区切って複数のエンコードを指定できます。

UTF-8,ISO-8859,CP950

注: WIDEUTF-8 はこの設定ではサポートされていません。

デフォルト値

native

有効な値

「*Campaign* 管理者ガイド」の「*Campaign* での文字エンコード」を参照してください。

loggingLevels

説明

「*Campaign*」 > 「unicaACListener」 > 「loggingLevels」 プロパティは、ログ・ファイルに書き込む詳細度を制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH

maxReuseThreads

説明

「*Campaign*」 > 「unicaACListener」 > 「maxReuseThreads」 プロパティは、*Campaign* リスナー・プロセス (unica_aclsnr) が再使用するためにキャッシュに入れるオペレーティング・システム・スレッドの数を設定します。

スレッドの割り振りによって生じるオーバーヘッドを削減する場合や、アプリケーションの依頼に応じてスレッドを解放できないようにする可能性のあるオペレーティング・システムの場合には、キャッシュを使用するのがベスト・プラクティスと言えます。

デフォルト値

0 (ゼロ)。キャッシュが無効になります

logMaxFileSize

説明

logMaxFileSize プロパティは、ログ・ファイルの最大サイズをバイト単位で指定します。このサイズを超えると、ログ・ファイルはバックアップ・ファイルにロールオーバーされます。

デフォルト値

10485760 (10 MB)

windowsEventLoggingLevels

説明

windowsEventLoggingLevels プロパティは、Windows イベント・ログ・ファイルに書き込む詳細度を重大度に基づいて制御します。

デフォルト値

MEDIUM

有効な値

- LOW
- MEDIUM
- HIGH
- ALL

ALL レベルには、診断のためのトレース・メッセージが含まれます。

serverPort

説明

serverPort プロパティは、Campaign リスナーがインストールされるポートを指定します。

デフォルト値

4664

useSSL

説明

useSSL プロパティは、Campaign リスナーと Campaign Web アプリケーションの間の通信に Secure Sockets Layer を使用するかどうかを指定します。

このカテゴリの serverPort2 プロパティの説明も参照してください。

デフォルト値

no

有効な値

yes | no

serverPort2

説明

serverPort2 プロパティは、同じカテゴリーに属する useSSLForPort2 プロパティと組み合わせると、Campaign のリスナーとフローチャート・プロセスとの間の通信に SSL を使用することを指定できます。これは、同カテゴリーの serverPort プロパティおよび useSSL プロパティによって指定される Campaign の Web アプリケーションとリスナーとの間の通信とは別個に指定されます。

Campaign コンポーネント間のすべての通信 (Web アプリケーションとリスナーの間の通信とリスナーとサーバーの間の通信) は、以下のいずれかの条件の下で useSSL プロパティによって指定されるモードを使用します。

- serverPort2 がデフォルト値 0 に設定されている場合、または
- serverPort2 が serverPort と同じ値に設定されている場合、または
- useSSLForPort2 が useSSL と同じ値に設定されている場合

このような場合、2 番目のリスナー・ポートは有効にならず、Campaign のリスナーとフローチャート (サーバー) プロセスとの間の通信、およびリスナーと Campaign の Web アプリケーションとの間の通信は、useSSL プロパティの値に応じて、同じモード (いずれも非 SSL、またはいずれも SSL) を使用します。

リスナーは、次の条件がいずれも満たされるときに、2 つの異なる通信モードを使用します。

- serverPort2 が serverPort の値と異なる 0 以外の値に設定されており、かつ
- useSSLForPort2 が useSSL の値とは異なる値に設定されている

この場合、2 番目のリスナー・ポートが有効になり、リスナーとフローチャート・プロセスは useSSLForPort2 で指定された通信モードを使用します。

Campaign Web アプリケーションは、リスナーと通信するとき、常に useSSL によって指定された通信モードを使用します。

SSL が Campaign のリスナーとフローチャート・プロセスとの間の通信に対して有効である場合、このプロパティ (serverPort2) の値を適切なポートに設定します。

デフォルト値

0

useSSLForPort2

説明

このカテゴリーの serverPort2 プロパティの説明を参照してください。

デフォルト値

FALSE

有効な値

TRUE、FALSE

キープアライブ (keepalive)

説明

キープアライブ (keepalive) プロパティを使用して、Campaign Web アプリケーション・サーバーがキープアライブ・メッセージを送信する頻度を秒単位で指定します。その送信時以外は、Campaign リスナーへのソケット接続は非アクティブな状態になります。

キープアライブ (keepalive) 構成パラメーターを使用すると、Web アプリケーションとリスナー（例えば、ファイアウォール）との間で非アクティブな接続は閉じるように設定されている環境で、アプリケーションが非アクティブな状態にある期間であっても、ソケット接続を開いたままにすることができます。

ソケットにアクティビティが存在すると、キープアライブ期間は自動的にリセットされます。Web アプリケーション・サーバーの DEBUG ログ・レベルの場合、campaignweb.log では、キープアライブ・メッセージがリスナーに送信する際にそのことが表示されます。

デフォルト値

0。キープアライブ機能は無効です

有効な値

正整数

Campaign | サーバー (server)

このカテゴリのプロパティは、内部的に使用される URL を指定するので、変更する必要はありません。

fullContextPath

説明

fullContextPath プロパティは内部的に使用され、オプションの値を指定します。アプリケーション・サーバーのリスナー・プロキシと通信するために ActiveX 制御が使用する URL を指定します。

このプロパティはデフォルトでは未定義で、システムがこの URL を動的に判別します。

デフォルト値

デフォルト値が定義されていません。

Campaign | ロギング (logging)

このカテゴリのプロパティは、Campaign ログ・プロパティ・ファイルの場所を指定します。

log4jConfig

説明

log4jConfig プロパティは、Campaign ログ特性ファイル `campaign_log4j.properties` の場所を指定します。Campaign ホーム・ディレクトリーに対する相対パスを、ファイル名を含めて指定します。UNIX の場合にはスラッシュ (/) を使用し、Windows の場合には円記号 (¥) を使用します。

デフォルト値

`./conf/campaign_log4j.properties`

付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字

Campaign のオブジェクトの名前に関して、特定の要件がある場合があります。特殊文字のいくつかは、Campaign オブジェクト名としてサポートされていません。加えて、オブジェクトの中には特定の命名上の制約があるものもあります。

注: オブジェクト名をデータベースに渡す場合 (例えば、フローチャート名を含むユーザー変数を使用する場合)、特定のデータベースでサポートされている文字だけでオブジェクト名が構成されていることを確認する必要があります。そうしないと、データベース・エラーを受け取ります。

サポートされていない特殊文字

次のオブジェクトの名前には、その下の表でリストされている文字を使用しないでください。

- キャンペーン
- フローチャート
- フォルダー
- オファー
- オファー・リスト
- セグメント
- セッション

表 75. サポートされていない特殊文字

文字	説明
%	パーセント
*	アスタリスク
?	疑問符
	パイプ (垂直バー)
:	コロン
,	コンマ
<	より小記号
>	より大記号
&	アンパーサンド
\	円記号
/	スラッシュ
“	二重引用符

命名上の制約を持たないオブジェクト

Campaign の次のオブジェクトには、その名前に使用される文字に関する制約がありません。

- オーディエンス・レベル (オーディエンス・レベルのフィールド 名には命名上の制約があります)
- カスタム属性の表示 名 (カスタム属性の内部 名には命名上の制約があります)
- オファー・テンプレート

特定の命名上の制約を持つオブジェクト

Campaign の次のオブジェクトには、その名前に関する特定の制約があります。

- カスタム属性の内部 名 (カスタム属性の表示 名には命名上の制約がありません)
- オーディエンス・レベルのフィールド 名 (オーディエンス・レベルの名前には命名上の制約がありません)
- セル
- ユーザー定義フィールド
- ユーザー・テーブルおよびフィールド名

これらのオブジェクトについては、名前に関する次の制約があります。

- 英字、数字、下線 (_) 文字だけで構成される
- 英字で始まる

ローマ字を使用しない言語の場合、Campaign は構成済みのストリングのエンコーディングでサポートされている文字をすべてサポートします。

注: ユーザー定義フィールド名には、追加の制約があります。詳しくは、『ユーザー定義フィールドの命名上の制約』を参照してください。

ユーザー定義フィールドの命名上の制約

ユーザー定義フィールド名には、次の制約があります。

- 次のタイプの名前のいずれかと同じにすることができない。
 - データベース・キーワード (INSERT、UPDATE、DELETE、WHERE など)
 - マップされたデータベース・テーブル内の項目
 - データベース・キーワード (INSERT、UPDATE、DELETE、WHERE など)
 - マップされたデータベース表内のフィールド
- Yes または No というワードを使用できない。

これらの命名上の制約に従わない場合、ユーザー定義フィールドが呼び出されたときにデータベース・エラーが出されたり、切断されたりする可能性があります。

注: ユーザー定義フィールド名には文字に関する固有の制限があります。詳しくは、381 ページの『付録 B. Campaign オブジェクト名での特殊文字』を参照してください。

付録 C. ユーザー・テーブルにおいてサポートされるデータ型

このトピックでは、それぞれのサポート対象データベースで作成されたユーザー・テーブルにおいて Campaign がサポートするデータ型をリストします。ここにリストされていない他のデータ型は、サポートされません。 Campaign 内のユーザー・テーブルをマッピングする前に、サポートされるデータ型だけがテーブルで使用されていることを確認してください。

DB2

bigint

char

date

decimal

double

float

int

numeric

real

smallint

timestamp

varchar

Netezza

bigint

byteint

char(n) [1]

date

float(p)

int

nchar(n) [2]

numeric(p, s)

nvarchar(n) [2]

smallint

timestamp

varchar(n) [1]

1. 同じテーブル内で nchar または nvarchar と共に使用する場合はサポートされません。
2. 同じテーブル内で char または varchar と共に使用する場合はサポートされません。

Oracle

DATE

FLOAT (p)

NUMBER [(p , s)] [1]

TIMESTAMP

VARCHAR2(size BYTE)

1. Campaign > partitions > partitionN > dataSources > [dataSourceName] > UseSQLToRetrieveSchema データ・ソース・プロパティを TRUE に設定していない場合には、NUMBER を使用する際に精度が必要になります。精度を指定せず、このデータ・ソース・プロパティも設定しない場合、Campaign は 15 桁の精度を保持するデータ型に値を保管できると想定します。このとき、15 桁を超える精度の値がフィールドに保持されている場合には、その値が Campaign に渡されるときに精度が失われるため、問題となります。

SQL Server

bigint

bit

char(n) [1]

datetime

decimal

float

int

nchar [2]

numeric

nvarchar [2]

real

smallint

text

tinyint

varchar(n) [1]

1. 同じテーブル内で nchar または nvarchar と共に使用する場合はサポートされません。
2. 同じテーブル内で char または varchar と共に使用する場合はサポートされません。

Teradata

bigint

byteint

char

date

decimal

float

int

numeric

smallint

timestamp

varchar

付録 D. 国際化対応およびエンコード

このセクションには、文字エンコードに関する情報およびデータベースの言語依存考慮事項に関する情報と、Campaign および PredictiveInsight によってサポートされるエンコードのリストが記載されています。

Campaign での文字エンコード

ほとんどのオペレーティング・システムで、Campaign は GNU iconv ライブラリーを使用します。IBM Unica には、AIX インストール済み環境用の iconv が付属していないことに注意してください。AIX システムの場合は、適切な文字セットを入手する必要があります。リストについては、以下の「ナショナル・ランゲージ・サポート・ガイドおよびリファレンス」を参照してください。

- http://moka.ccr.jussieu.fr/doc_link/en_US/a_doc_lib/aixprgdd/nlsgdrf/iconv.htm#d722e3a267mela
- <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/pseries/v5r3/index.jsp?topic=/com.ibm.aix.nls/doc/nlsgdrf/nlsgdrf.htm>

このセクションには、Campaign でサポートされるエンコードがリストされています。これらのリストで示される値は、216 ページの『Campaign の言語とロケールのプロパティ値の設定』に記載した Campaign 国際化対応パラメーターを設定する場合に有効な値です。以下の点に注意してください。

- エンコード・グループ内の各箇条書きは、同じエンコードを表す異なる名前をスペース区切りでリストしたものです。名前が複数リストされた箇条書きに含まれる各名前は、グループ内の他のエンコードの別名です。システムでのエンコードの使用状況に応じて、Campaign 構成パラメーターをグループ内の値のいずれかに設定できます。
- Campaign StringEncoding 構成パラメーターの値を設定する際、ほとんどの場合は疑似エンコードの WIDEUTF-8 が推奨値です。ただし、以下のリストに記載されたエンコードのいずれかを使用できます。また、データベースが DB2 または SQL Server の場合は、このリストに記載されたエンコードのいずれかではなく、コード・ページを使用する必要があります。詳しくは、コンテキスト・ヘルプまたは「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。
- Campaign は、他のエンコードとは扱いが少し異なる 2 つの文字エンコード（「ASCII」および「UTF-8」）を使用します。両方とも大/小文字の区別があります。これらのエンコードは、AIX を含め、すべてのプラットフォームで受け入れられます。Campaign におけるこれらのエンコードの性質は、テーブル・マッピング時の列幅とトランスコーディング操作に関して少し異なります。

西ヨーロッパ

- CP819 IBM819 ISO-8859-1 ISO-IR-100 ISO8859-1 ISO_8859-1 ISO_8859-1:1987 L1 LATIN1 CSISOLATIN1
- CP1252 MS-ANSI WINDOWS-1252
- 850 CP850 IBM850 CSPC850MULTILINGUAL

- MAC MACINTOSH MACROMAN CSMACINTOSH
- NEXTSTEP
- HP-ROMAN8 R8 ROMAN8 CSHPROMAN8

Unicode エンコード

- ISO-10646-UCS-2 UCS-2 CSUNICODE
- UCS-2BE UNICODE-1-1 UNICODEBIG CSUNICODE11
- UCS-2LE UNICODELITTLE
- ISO-10646-UCS-4 UCS-4 CSUCS4
- UTF-8
- UCS-4BE
- UCS-4LE
- UTF-16
- UTF-16BE
- UTF-16LE
- UTF-32
- UTF-32BE
- UTF-32LE
- UNICODE-1-1-UTF-7 UTF-7 CSUNICODE11UTF7
- UCS-2-INTERNAL
- UCS-2-SWAPPED
- UCS-4-INTERNAL
- UCS-4-SWAPPED
- JAVA
- C99

アラビア語

- ARABIC ASMO-708 ECMA-114 ISO-8859-6 ISO-IR-127 ISO8859-6 ISO_8859-6 ISO_8859-6:1987 CSISOLATINARABIC
- CP1256 MS-ARAB WINDOWS-1256
- MACARABIC
- CP864 IBM864 CSIBM864

アルメニア語

- ARMSCII-8

バルト海沿岸語

- CP1257 WINBALTRIM WINDOWS-1257
- CP775 IBM775 CSPC775BALTIC
- ISO-8859-13 ISO-IR-179 ISO8859-13 ISO_8859-13 L7 LATIN7

ケルト語

- ISO-8859-14 ISO-CELTIC ISO-IR-199 ISO8859-14 ISO_8859-14 ISO_8859-14:1998 L8 LATIN8

中央ヨーロッパ

- ISO-8859-2 ISO-IR-101 ISO8859-2 ISO_8859-2 ISO_8859-2:1987 L2 LATIN2 CSISOLATIN2CP1250 MS-EE WINDOWS-1250
- MACCENTRALEUROPE
- 852 CP852 IBM852 CSPCP852
- MACCROATIAN

中国語 (簡体字および繁体字)

- ISO-2022-CN CSISO2022CN
- ISO2022CNISO-2022-CN-EXT

中国語 (簡体字)

- CN GB_1988-80 ISO-IR-57 ISO646-CN CSISO57GB1988
- CHINESE GB_2312-80 ISO-IR-58 CSISO58GB231280
- CN-GB-ISOIR165 ISO-IR-165
- CN-GB EUC-CN EUCCN GB2312 CSGB2312
- CP936 GBK
- GB18030
- HZ HZ-GB-2312

中国語 (繁体字)

- EUC-TW EUCTW CSEUCTWB
- IG-5 BIG-FIVE BIG5 BIGFIVE CN-BIG5 CSBIG5
- CP950
- BIG5-HKSCS BIG5HKSCS

キリル文字

- CYRILLIC ISO-8859-5 ISO-IR-144 ISO8859-5 ISO_8859-5 ISO_8859-5:1988 CSISOLATINCYRILLIC
- CP1251 MS-CYRL WINDOWS-1251
- MACCYRILLIC
- KOI8-R CSKOI8R
- KOI8-U
- KOI8-RU
- KOI8-T
- 866 CP866 IBM866 CSIBM866
- 855 CP855 IBM855 CSIBM855

- CP1125 ("PC, Cyrillic, Ukrainian")
- MACUKRAINE

英語

- ANSI_X3.4-1968 ANSI_X3.4-1986 ASCII CP367 IBM367 ISO-IR-6 ISO646-US ISO_646.IRV:1991 US US-ASCII CSASCII
- 437 CP437 IBM437 CSPC8CODEPAGE437

グルジア語

- GEORGIAN-ACADEMY
- GEORGIAN-PS

ギリシャ語

- CP1253 MS-GREEK WINDOWS-1253
- ECMA-118 ELOT_928 GREEK GREEK8 ISO-8859-7 ISO-IR-126 ISO8859-7 ISO_8859-7 ISO_8859-7:1987 CSISOLATINGREEK
- MACGREEK
- CP737869 CP-GR CP
- 869 IBM869 CSIBM869

ヘブライ語

- HEBREW ISO-8859-8 ISO-IR-138 ISO8859-8 ISO_8859-8 ISO_8859-8:1988 CSISOLATINHEBREW
- CP1255 MS-HEBR WINDOWS-1255
- 862 CP862 IBM862 CSPC862LATINHEBREW
- MACHEBREW

アイスランド語

- MACICELAND
- 861 CP-IS CP861 IBM861 CSIBM861

日本語

- JISX0201-1976 JIS_X0201 X0201 CSHALFWIDTHKATAKANA
- ISO-IR-87 JIS0208 JIS_C6226-1983 JIS_X0208 JIS_X0208-1983 JIS_X0208-1990 X0208 CSIS087JISX0208
- ISO-IR-159 JIS_X0212 JIS_X0212-1990 JIS_X0212.1990-0 X0212 CSIS0159JISX02121990
- EUC-JP EUCJP EXTENDED_UNIX_CODE_PACKED_FORMAT_FOR_JAPANESE CSEUCPKDFMTJAPANESE
- MS_KANJI SHIFT-JIS SHIFT_JIS SJIS CSSHIFTJI
- ISO-IR-14 ISO646-JP JIS_C6220-1969-RO JP CSIS014JISC6220RO
- CP932

- ISO-2022-JP CSIS02022JP
- ISO-2022-JP-1
- ISO-2022-JP-2 CSIS02022JP2

韓国語

- EUC-KR EUCKR CSEUCKR
- CP949 UHC
- ISO-IR-149 KOREAN KSC_5601 KS_C_5601-1987 KS_C_5601-1989 CSKSC56011987
- CP1361 JOHAB
- ISO-2022-KR CSIS02022KR

ラオ語

ラオ語はタイ語と同じアルファベットを使用することに注意してください。

- MULELAO-1
- CP1133 IBM-CP1133

北ヨーロッパ

- ISO-8859-4 ISO-IR-110 ISO8859-4 ISO_8859-4 ISO_8859-4:1988 L4 LATIN4 CSISOLATIN4
- ISO-8859-10 ISO-IR-157 ISO8859-10 ISO_8859-10 ISO_8859-10:1992 L6 LATIN6 CSISOLATIN6

ルーマニア語

- MACROMANIA

南ヨーロッパ

- ISO-8859-3 ISO-IR-109 ISO8859-3 ISO_8859-3 ISO_8859-3:1988 L3 LATIN3 CSISOLATIN3
- CP853

タイ語

- MACTHAI
- ISO-IR-166 TIS-620 TIS620 TIS620-0 TIS620.2529-1 TIS620.2533-0 TIS620.2533-1
- CP874 WINDOWS-874

トルコ語

- CP1254 MS-TURK WINDOWS-1254
- MACTURKISH
- 857 CP857 IBM857 CSIBM857
- ISO-8859-9 ISO-IR-148 ISO8859-9 ISO_8859-9 ISO_8859-9:1989 L5 LATIN5 CSISOLATIN5

ベトナム語

- CP1258 WINDOWS-1258
- TCVN TCVN-5712 TCVN5712-1 TCVN5712-1:1993
- VISCII VISCII1.1-1 CSVISCII

その他

- ISO-8859-15 ISO-IR-203 ISO8859-15 ISO_8859-15 ISO_8859-15:1998
- ISO-8859-16 ISO-IR-226 ISO8859-16 ISO_8859-16 ISO_8859-16:2000
- CP858(IBM: "Multilingual with euro")
- 860 (IBM: "Portugal - Personal Computer")CP860 IBM860 CSIBM860
- 863 (IBM: "Canadian French - Personal Computer") CP863 IBM863 CSIBM863
- 865 (IBM: "Nordic - Personal Computer")CP865 IBM865 CSIBM865

日付と時刻の形式

日付と時刻の形式の構成プロパティー (DateFormat、DateOutputFormatString、DateTimeFormat、および DateTimeOutputFormatString) の構成方法を判別するには、以下のセクションの情報を利用してください。

DateFormat および DateTimeFormat の形式

Campaign を複数ロケール用に構成しない場合は、DateFormat 構成パラメーターおよび DateTimeFormat 構成パラメーターの値を、DATE マクロで指定される形式のいずれかに設定することができます (次の表を参照)。

ただし、Campaign を複数ロケール用に構成する必要がある場合 (ユーザーの言語とロケールがさまざまである場合) は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用しないでください。代わりに、月を表す数値を使う区切り形式または固定形式を使用してください。複数ロケール・フィーチャーについて詳しくは、213 ページの『複数ロケール・フィーチャーについて』を参照してください。

表 76. 日付形式

形式	説明	例
MM	月 (2 桁)	01, 02, 03, ..., 12
MMDD	月 (2 桁) と日 (2 桁)	3 月 31 日は 0331
MMDDYY	月 (2 桁)、日 (2 桁)、年 (2 桁)	1970 年 3 月 31 日は 033170
MMDDYYYY	月 (2 桁)、日 (2 桁)、年 (4 桁)	1970 年 3 月 31 日は 03311970
DELIM_M_D DateTimeFormat の場合は次を使用: DT_DELIM_M_D	月と日 (区切り文字付き)	March 31、3/31、または 03-31

表 76. 日付形式 (続き)

形式	説明	例
DELIM_M_D_Y DateTimeFormat の場合は次 を使用: DT_DELIM_M_D_Y	月、日、年 (区切り文字付き)	March 31, 1970 または 3/31/70
DELIM_Y_M DateTimeFormat の場合は次 を使用: DT_DELIM_Y_M	年と月 (区切り文字付き)	1970 March、70-3、1970/3
DELIM_Y_M_D DateTimeFormat の場合は次 を使用: DT_DELIM_Y_M_D	年、月、日 (区切り文字付き)	1970 Mar 31 または 70/3/31
YYMM	年 (2 桁) と月 (3 文字)	70MAR
YYMMDD	年 (2 桁)、月 (3 文字)、日 (2 桁)	70MAR31
YY	年 (2 桁)	70
YYMM	年 (2 桁) と月 (2 桁)	7003
YYMMDD	年 (2 桁)、月 (2 桁)、日 (2 桁)	700331
YYYYMM	年 (4 桁) と月 (3 文字)	1970MAR
YYYYMMDD	年 (4 桁)、月 (3 文字)、日 (2 桁)	1970MAR31
YYYY	年 (4 桁)	1970
YYYYMM	年 (4 桁) と月 (2 桁)	197003
YYYYMMDD	年 (4 桁)、月 (2 桁)、日 (2 桁)	19700331
DELIM_M_Y DateTimeFormat の場合は次 を使用: DT_DELIM_M_Y	月と年 (区切り文字付き)	3-70、3/70、Mar 70、March 1970
DELIM_D_M DateTimeFormat の場合は次 を使用: DT_DELIM_D_M	日と月 (区切り文字付き)	31-3、31/3、31 March

表 76. 日付形式 (続き)

形式	説明	例
DELIM_D_M_Y DateTimeFormat の場合は次を使用: DT_DELIM_D_M_Y	日、月、年 (区切り文字付き)	31-MAR-70、31/3/1970、31 03 70
DD	日 (2 桁)	31
DDMMM	日 (2 桁) と月 (3 文字)	31MAR
DDMMYY	日 (2 桁)、月 (3 文字)、年 (2 桁)	31MAR70
DDMMYYYY	日 (2 桁)、月 (3 文字)、年 (4 桁)	31MAR1970
DDMM	日 (2 桁) と月 (2 桁)	3103
DDMMYY	日 (2 桁)、月 (2 桁)、年 (2 桁)	310370
DDMMYYYY	日 (2 桁)、月 (2 桁)、年 (4 桁)	31031970
MMYY	月 (2 桁) と年 (2 桁)	0370
MMYYYY	月 (2 桁) と年 (4 桁)	031970
MMM	月 (3 文字)	MAR
MMDD	月 (3 文字) と日 (2 桁)	MAR31
MMDDYY	月 (3 文字)、日 (2 桁)、年 (2 桁)	MAR3170
MMDDYYYY	月 (3 文字)、日 (2 桁)、年 (4 桁)	MAR311970
MMYY	月 (3 文字) と年 (2 桁)	MAR70
MMYYYY	月 (3 文字) と年 (4 桁)	MAR1970
MONTH	月	January、February、March など、または Jan、Feb、Mar など
WEEKDAY	曜日	Sunday、Monday、Tuesday など (Sunday = 0)
WKD	曜日の省略名	Sun、Mon、Tues など (Sun = 0)

DateOutputFormatString および DateTimeOutputFormatString の形式

Campaign を複数ロケール用に構成しない場合は、DateOutputFormat 構成パラメーターおよび DateTimeOutputFormat 構成パラメーターの値を、DATE_FORMAT マクロの format_str に指定される形式のいずれかに設定することができます (次の表を参照)。

ただし、Campaign を複数ロケール用に構成する必要がある場合 (つまり、ユーザーの言語とロケールがさまざまである場合) は、3 文字の月 (MMM)、%b (月の省略名)、または %B (月の完全な名前) が含まれる日付形式を使用しないでください。代わりに、月を表す数値を使う区切り形式または固定形式のどちらかを使用する必要があります。複数ロケール・フィーチャーについて詳しくは、213 ページの『複数ロケール・フィーチャーについて』を参照してください。

%a - 曜日の省略名

%A - 曜日の完全な名前

%b - 月の省略名

%B - 月の完全な名前

%c - ロケールに適合した日時表記

%d - 月内の日 (01 - 31)

%H - 24 時間形式の時間 (00 - 23)

%I - 12 時間形式の時間 (01 - 12)

%j - 年間通算日 (001 - 366)

%m - 月番号 (01 - 12)

%M - 分 (00 - 59)

%p - 現行ロケールの 12 時間クロックのための午前/午後の標識

%S - 秒 (00 - 59)

%U - 日曜日を最初の曜日とした年間通算週 (00 - 51)

%w - 曜日 (0 - 6: 日曜日が 0)

%W - 月曜日を最初の曜日とした年間通算週 (00 - 51)

%x - 現行ロケールの日付表記

%X - 現行ロケールの時間表記

%y - 年 (2 桁: 00 - 99)

%Y - 年 (4 桁)

%z, %Z - タイム・ゾーンの名前または略語。タイム・ゾーンが不明の場合は出力なし。

%% - % 記号

注: 形式の一部であり、かつ先頭にパーセント記号 (%) のない文字は、そのまま出力ストリングにコピーされます。フォーマット設定ストリングは 16 バイト以下に収まらなければなりません。先行 0 を除去するには、# 文字を使用します。例え

ば、%d では (01 - 31) の範囲の 2 桁の数値が生成されますが、%#d にすると、必要に応じて 1 桁または 2 桁の数値 (1 - 31) が生成されます。同様に、%m では (01 - 12) が生成されますが、%#m にすると (1 - 12) が生成されます。

付録 E. Campaign のエラー・コード

Campaign は 2 つのサーバーといくつかの環境変数を使用するクライアント/サーバー・アプリケーションであり、このアプリケーションが適切に機能するためにはサーバーと環境変数を構成する必要があります。

Campaign は、コード番号とエラー・テキストから成るエラー・メッセージのあるエラー・イベントが発生すると、そのエラー・イベントをユーザーに通知します。

ユーザー・アクセス権限が無効であるというエラー・メッセージが表示された場合は、そのアクションを実行するための正しい特権が Marketing Platform で割り当てられていない可能性があります。詳しくは、「Marketing Platform 管理者ガイド」を参照してください。

Campaign を使用中にエラーが発生した場合は、IBM Unica 技術サポートに連絡を取る前に、このセクションの記述を読み、解決策を実施してみてください。エラーがここに記載されていない場合、または解決策が失敗した場合は、管理者に問い合わせるか、IBM Unica 技術サポートにご連絡ください。

Campaign エラー・コード

次の表は、Campaign によって生成されるエラー・メッセージをリストしたものです。

表 77. Campaign のエラー・コード

コード	エラーの説明
301	要求されたメモリーを割り当てることができません。
303	名前が組み込み関数名、演算子、またはキーワードと競合します。
304	名前が長すぎるか、無効な文字が含まれています。
305	名前付き変数に値が割り当てられていません。
306	式に構文エラーがあります。
308	保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました (レンジ・メモリー)。
309	保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました (不明な関数)。
310	保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました (ランダム・オブジェクト)。
311	保存されたオブジェクトをファイルからロードするときにエラーが発生しました (無効な ID)。
312	保存された式をファイルからロードするときにエラーが発生しました (スタック)。
314	オブジェクトをファイルに保存中にエラーが発生しました (無効な ID)。
315	式をファイルに保存中にエラーが発生しました (レンジ・メモリー)。
316	式の中で演算子が連続しています。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
317	演算子の構文エラーです。
318	括弧がありません。
319	括弧の組み合わせが不適切です。
320	不明な式です。
321	名前が付けられていません。
322	等号の右側に式がありません。
323	フィールド名を特定できません。
324	2^16 点を超えるソートはできません。
325	仮想メモリーにアクセス中にエラーが発生しました (stat=0)。
328	行列積のディメンションが一致しません。
329	行列積のディメンションが大きすぎます。
330	特異行列エラーです。
331	引数の数が無効です。
332	引数はスカラー数値でなければなりません。
333	引数は 0 より大きくなければなりません。
334	引数の値が無効です。
335	引数の値は -1 から 1 の範囲になければなりません。
336	関数の引数のディメンションが無効です。
338	同じ長さの引数を指定する必要があります。
339	同じディメンションの引数を指定する必要があります。
341	標準偏差またはその他の統計的計算が無効です。
342	最初の引数として指定できるのはベクトルだけです。
343	整数の引数を指定する必要があります。
345	算術式が定義されていません。
346	トレーニング・パターンを取得できません。
348	この関数に対して適切でないキーワードを指定しました。
349	浮動小数点値のオーバーフロー・エラー。
350	負の数値の平方根を求めようとしています。
353	関数から返された文字列の合計サイズが大きすぎます。
354	1 つまたは複数の引数で許可されない文字列型を使用しています。
356	行/列のインデックスが無効です。
357	数字とテキスト列の混在は許可されません。
358	文字列の引用符が一致しません。
359	式が複雑すぎます。
360	文字列が長すぎます。
361	数値解析コードが無効です。
362	この関数は数値を処理できません。
363	文字列の引用符が一致しないか不足しています。
364	この関数から生成されるデータが多すぎます。
365	この関数の出力が多すぎます。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
367	再帰的な式での複数列の出力は許可されません。
368	再帰関数が未知の値 (関数から生じない値) にアクセスしようとしています。
369	最初の行の入力にエラーが含まれています。
370	出力する列が長すぎます。
371	アルゴリズムの入出力のディメンションが壊れています。
372	再帰的な変数が無効です。
373	内部のみ: 解析ツリーが NULL です。
377	代入する値が不明です
381	変数の型を解釈しているときにエラーが見つかりました: '金額'
382	変数の型を解釈しているときにエラーが見つかりました: '電話'
383	変数の型を解釈しているときにエラーが見つかりました: '日付'
384	変数の型を解釈しているときにエラーが見つかりました: '時刻'
393	ブール式は 1 または 0 のみと比較できます。
394	1 つまたは複数の引数に範囲外の値があります。
395	CountOf 以外の任意のキーワードを使用して数値列を指定する必要があります。
396	BETWEEN の構文は次のとおりです: <値> BETWEEN <値 1> AND <値 2>
397	SUBSTR[ING] の構文は次のとおりです: SUBSTR[ING](<文字列><オフセット><サイズ>)
398	オプション [OutputValue] は、MinOf、MaxOf、および MedianOf キーワードを指定した場合のみ使用できます。
399	NULL 値が見つかりました。
450	ファイルの権限を変更できません (chmod)。
451	ファイル属性を取得できません (stat)。
452	ファイルを削除できません。
453	メモリー・オブジェクトを作成できません。メモリーまたはファイルのエラーが発生していないかログ・ファイルを確認してください。
454	メモリー・オブジェクト・ページをロックできません。メモリーまたはファイルのエラーが発生していないかログ・ファイルを確認してください。
455	メモリー・オブジェクトをロードできません。メモリーまたはファイルのエラーが発生していないかログ・ファイルを確認してください。
456	I/O オブジェクトを作成できません。メモリーまたはファイルのエラーが発生していないかログ・ファイルを確認してください。
457	入出力オブジェクトを作成できません。メモリーのエラーが発生していないかログ・ファイルを確認してください。
458	無効なサポート・ファイル拡張子です。ファイルが破損している可能性があります。
459	無効な UTF-8 文字が見つかりました。
460	ワイド文字をネイティブ・エンコーディングに変換することはできません。
461	ネイティブ・エンコーディングをワイド文字に変換することはできません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
462	ディレクトリを作成できません。
463	ディレクトリを削除できません。
500	内部解析ツリー構造のエラー。
600	内部エラー: 構成ルートが指定されていません。
601	構成サーバーの URL が指定されていません。
602	指定された構成カテゴリーが見つかりません。
603	指定された構成プロパティーには、絶対ファイル・パスが必要です。
604	構成サーバーからの応答が無効です。
605	内部エラー: 要求した構成パスは、現在のルートと異なります。
606	構成カテゴリーおよび構成プロパティーの名前を空にすることはできません。
607	構成カテゴリーの名前にスラッシュを含めることはできません。
608	指定された構成プロパティーには、相対ファイル・パスが必要です。
609	内部エラー: パーティション名が指定されていません。
610	デフォルトのパーティションを特定できません。
611	指定された名前のパーティションは存在しません。
612	パーティションが定義されていません。
614	config.xml に無効なパラメーターが指定されています。
620	内部エラー: セキュリティー・マネージャーは既に初期化されています。
621	内部エラー: セキュリティー・マネージャーを初期化できませんでした。パラメーターが無効です。
622	内部エラー: 無効な結果セット名が指定されています。
623	ユーザーはどのパーティションにもマップされていません。
624	ユーザーが複数のパーティションにマップされています。
625	ユーザーは指定されたパーティションにマップされていません。
626	ユーザーはアプリケーションへのアクセスを許可されていません。
700	メモリーが不足しています。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
701	ファイルを開くことができません。 考えられる原因: [非 ASCII ファイル名をトランスコードできませんでした。] [指定されたファイルが見つかりませんでした。] [ファイルを適切に開くことができません。] [非 ASCII ファイル名をトランスコードできませんでした。] [ファイルを開くことができなかったため、ファイルをコピーできませんでした。] 推奨される解決方法: [必要な場所にファイルが存在することを確認します。] [ログ・ファイルでエラーを引き起こしているファイル名をチェックします。] [システム管理者に問い合わせます。]
702	ファイルのシーク・エラー。
703	ファイルの読み取りエラー。
704	ファイルの書き込みエラー。
710	フローチャート・ファイル・データが破損しています。
711	ファイルの作成エラー。
723	この関数に入力する 1 つまたは複数の変数にエラーがあります。
761	ディスク領域が不足しています。
768	ファイルの保存中にエラーが発生しました。
773	アクセスが拒否されました。
774	内部 HMEM エラー: スワップが許可されていないときはメモリーをフラッシュできません。
778	数値エラー: 不明な浮動小数点エラー。
779	数値エラー: 明示的な生成。
780	数値エラー: 無効な数字。
781	数値エラー: 非正規化。
782	数値エラー: 0 による除算。
783	数値エラー: 浮動小数点オーバーフロー。
784	数値エラー: 浮動小数点アンダーフロー。
785	数値エラー: 浮動小数点の丸め。
786	数値エラー: 浮動小数点がエミュレートされていません。
787	数値エラー: 負の数値の平方根。
788	数値エラー: スタック・オーバーフロー。
789	数値エラー: スタック・アンダーフロー。
790	内部エラー。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
967	データ・ディクショナリーに無効な定義が含まれています。
997	内部エラー: GIO スタック・オーバーフロー。
998	オブジェクトのロード・エラー: サイズ・チェックが失敗しました。
999	拡張エラー
1400	指定した行の行オフセットが見つかりません。
1500	この操作を実行するためのメモリーが不足しています。
1501	ヒストグラムの最大範囲を超過しています
1550	内部エラー 1550:
1649	ベクトルを引数として使用することはできません。
1650	COL キーワードを使用した場合は、最初のパラメーターでベクトルを使用できません。
1709	クライアント/サーバーのバージョンが一致しません。
1710	ソケットを初期化できません。
1711	ソケットを作成できません。
1712	指定したサーバーに接続できません。 考えられる原因: [ご使用のブラウザーが Campaign サーバーに接続できません。] [ご使用のブラウザーがホスト名の解決に失敗しました。] 推奨される解決方法: [ネットワーク管理者に依頼し、サーバー・マシンとクライアント・マシンの間で相互に 'ping' を実行し、応答が返るかどうかをチェックしてもらいます。] [他のアプリケーション用に Campaign リスナー・プロセスに割り当てられたポートが Campaign サーバー・マシンで使用されていないか確認するよう、Campaign 管理者に依頼します。] [エラーが発生した手順をもう一度試します。再びエラーが発生した場合は、クライアント・マシンをリブートした上で、システム管理者に Campaign サーバー・マシンをリブートするよう依頼します。]
1713	ソケット・データを送信できません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
1714	ソケット・データを受信できません。 考えられる原因: [ソケットからの受信バイト数が、想定されたバイト数と一致しません。] [ソケットからのデータの待機中に Campaign がタイムアウトしました。] [メッセージの送信中にソケット・エラーが発生しました。] 推奨される解決方法: [ネットワーク管理者に依頼し、サーバー・マシンとクライアント・マシンの間で相互に 'ping' を実行し、応答が返るかどうかをチェックしてもらいます。] [他のアプリケーション用に Campaign リスナー・プロセスに割り当てられたポートが Campaign サーバー・マシンで使用されていないか確認するよう、Campaign 管理者に依頼します。 [エラーが発生した手順をもう一度試します。再びエラーが発生した場合は、クライアント・マシンをリブートした上で、システム管理者に Campaign サーバー・マシンをリブートするよう依頼します。]
1715	指定したポートにソケットをバインドできません。
1716	ソケットの listen を実行できません。
1717	通信要求がタイムアウトになりました。
1719	内部エラー: 通信要求がタイムアウトになりました。
1729	クライアント/サーバー・ライブラリー: ドライブ情報の取得中にエラーが発生しました。
1731	内部エラー: 指定した引数インデックスが無効です。
1733	リスナーはセマフォを作成できません。
1734	リスナー: ファイル・ブロック・サーバー・ポートが無効です。
1735	リスナーは指定したコマンドを起動できません。
1736	リスナー: UDME サーバー・ポートが無効です。
1737	リスナー: Shannon サーバー・ポートが無効です。
1738	リスナー: サーバー・プロセスと通信できません。
1739	リスナー: 内部データ整合性エラー。
1741	スレッドを作成できません。
1742	スレッドを待機できません。
1743	クライアント/サーバー・ライブラリー: プロセスが無効です。考えられる原因: プロセス (トリガー、バルク・ローダー、UDI サーバーなど) が存在しません。推奨される解決方法: いずれかのプロセスが異常終了していないかログ・ファイルをチェックします。 Campaign 管理者に依頼して、異常終了したプロセスを再始動してもらいます。再びエラーが発生するようであれば、システム管理者に問い合わせます。
1744	クライアント/サーバー・ライブラリー: セマフォが無効です。
1745	クライアント/サーバー・ライブラリー: ミューテックスが無効です。
1746	クライアント/サーバー・ライブラリー: メモリーが不足しています。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
1747	内部エラー: クライアント/サーバー・ライブラリー: タイムアウトが経過し、オブジェクトにシグナルが送られませんでした。
1748	クライアント/サーバー・ライブラリー: オブジェクトの待機が失敗しました。
1749	クライアント/サーバー・ライブラリー: 指定したディレクトリーが無効です。
1750	内部エラー: 要求したサーバー機能はサポートされません。
1751	サーバーをシャットダウンします。要求が拒否されました。
1773	UDMEsvr: 削除要求したフローチャートは使用中です。
1783	他のユーザーが既に編集モードまたは実行モードで使用しています。
1784	実行が完了するまで編集は許可されません。
1785	要求したフローチャートは別のユーザーに対してアクティブです。
1786	サーバー・プロセスは終了しています。 考えられる原因: Campaign リスナーが Campaign サーバー・プロセスを開始できません。 推奨される解決方法: システム管理者に問い合わせます。
1787	最大数のフローチャート・インスタンスが既に使用されています。
1788	要求したフローチャートは Distributed Marketing に対してアクティブです。
1789	要求したフローチャートは Campaign ユーザーが使用中です。
1790	ユーザーを認証できません。 考えられる原因: [指定されたパスワードは、Marketing Platform に格納されているパスワードと一致しません。] [データベースなどのオブジェクトにアクセスするために必要な、Marketing Platform のユーザー名フィールドまたはパスワード・フィールドに何も指定されていません。] [データベースなどのオブジェクトにアクセスするために必要な、Marketing Platform のユーザー名フィールドまたはパスワード・フィールドに何も指定されていません。] 推奨される解決方法: [指定したユーザー名およびパスワードが正しいかどうかをチェックします。] [ユーザー名とパスワードが正しく Marketing Platform に保存されているかどうかを Campaign 管理者にチェックしてもらいます。]
1791	無効なグループ名を指定しました。
1792	無効なファイル・モードを指定しました。
1793	内部エラー: アクティブなプロセスの終了ステータスを要求しました。
1794	評価期間は終了しました。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
1795	ライセンス・コードが無効です。
1796	作成者によってフローチャート名が変更されました。
1797	作成者によってフローチャート名が変更されました。
1823	内部エラー: 要求パラメーターの数が一致しません。
1824	内部エラー: 要求のパラメーターの型が一致しません。
1825	内部エラー: 要求のスカラー数またはベクトル数が一致しません。
1830	サポートされていないプロトコル・タイプが検出されました。
1831	無効な API です。
1832	指定された実行に対するサーバー・プロセスが見つかりません。実行が既に完了している可能性があります。
2000	HTTP セッション・オブジェクトが無効です。
2001	HTTP 接続オブジェクトが無効です。
2002	HTTP 要求オブジェクトが無効です。
2003	HTTP 要求ヘッダーの追加中にエラーが発生しました。
2004	HTTP プロキシ資格情報の設定中にエラーが発生しました。
2005	HTTP サーバー資格情報の設定中にエラーが発生しました。
2006	HTTP 要求の送信中にエラーが発生しました。
2007	HTTP 応答の受信中にエラーが発生しました。
2008	HTTP レスポンス・ヘッダーの照会中にエラーが発生しました。
2009	HTTP レスポンス・データの読み取り中にエラーが発生しました。
2010	HTTP レスポンスで返されたエラー・ステータス。
2011	HTTP 認証スキームの照会中にエラーが発生しました。
2012	一致する HTTP 認証スキームがありません。
2013	プロキシ・サーバー認証エラー。 Marketing Platform で「proxy」という名前のデータ・ソースに有効なプロキシ・サーバー・ユーザー名およびパスワードを指定した後に、Campaign へのログインを再試行する必要があります。
2014	Web サーバー認証エラー。 Marketing Platform で「webserver¥」という名前のデータ・ソースに有効な Web サーバー・ユーザー名およびパスワードを指定した後に、Campaign へのログインを再試行する必要があります。
2015	PAC ファイル認証エラー後の HTTP 要求エラー。
2016	PAC ファイル・スキーム・エラー後の HTTP 要求エラー。
10001	内部エラー。
10022	内部エラー: プロセスが見つかりません。
10023	内部エラー: 接続が見つかりません。
10024	内部エラー: プロセスが見つかりません。
10025	内部エラー: 接続が見つかりません。
10026	内部エラー: 関数タグが不明です。
10027	フローチャートにサイクルが含まれています。
10030	内部エラー: GIO からメモリー・バッファーを取得できません。
10031	フローチャートは実行中です。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10032	内部エラー: コピー状態が不明です。
10033	システム・テーブルの変更中にエラーが発生しました。
10034	1 つまたは複数のプロセスが構成されていません。
10035	プロセスに複数のスケジュールが入力されています。
10036	内部エラー: プロセスが見つかりません。
10037	貼り付けられた 1 つまたは複数のプロセスにユーザー定義フィールドが定義されています。再定義が必要になる可能性があります。
10038	ブランチの外部に 1 つまたは複数の入力プロセスがあります。
10039	フローチャート DOM 作成エラー。
10040	フローチャート DOM 解析エラー。
10041	フローチャートを自動保存ファイルからリカバリーしました。
10042	この実行に必要なグローバル抑制セグメントを作成するフローチャートが現在実行されています。
10043	グローバル抑制セグメントがありません。
10044	グローバル抑制セグメントが不正なオーディエンス・レベルに設定されています。
10046	このタイプで指定できるプロセス・ボックスは 1 つだけです。
10047	指定できるブランチは 1 つだけです。
10048	フローチャートは、対話プロセス・ボックスで開始する必要があります。
10049	処理キャッシュに処理が見つかりません。
10116	内部エラー: プロセスが登録されていません。
10119	内部エラー: 関数タグが不明です。
10120	プロセスは実行中です。
10121	プロセスの実行結果が失われます。
10122	内部エラー。
10125	プロセスは構成されていません。
10126	プロセス入力の準備ができていません。
10127	プロセス名が一意ではありません。
10128	内部エラー: 無効なプロセス・インデックス。
10129	内部エラー: 無効なレポート ID。
10130	内部エラー: 無効なテーブル ID。
10131	内部エラー: 無効なフィールド・インデックス。
10132	内部エラー: 無効なセル ID。
10133	内部エラー: 無効なフィールド・インデックス。
10134	内部エラー: 無効な登録プロセス。
10136	プロセスの実行がユーザーによって停止されました。
10137	プロセスがキューに入っている間の変更は許可されません。
10138	プロセスの実行中の変更は許可されません。
10139	後続のプロセスが実行中の変更、またはキューに入っている間の変更は許可されません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10140	プロセスのソースが変更されました。ユーザー定義フィールドおよび後続のプロセスの再構成が必要になる場合があります。
10141	選択した 1 つまたは複数のテーブルが存在しません。
10142	フローチャートの実行中の変更は許可されません。
10143	プロセスの DOM 作成エラー。
10144	プロセスの DOM 解析エラー。
10145	不明なプロセス・パラメーターです。
10146	プロセス名に無効な文字が含まれています。
10147	出力セル名が空です。
10148	スケジュール・プロセスをキューに対して実行するには、ID の蓄積オプションをオフにする必要があります。
10149	リーダー・モードではコマンドを使用できません。
10150	セグメント・データ・ファイルを開くことができません。
10151	セグメント・データ・ファイルのエラー: 無効なヘッダー。
10152	内部エラー: 無効なセグメント (データ・ファイル名が空白)。
10153	定義されていないユーザー変数をパスで参照しています。
10154	重大なエラーが発生しました。
10155	前のプロセスは実稼働モードで実行されていません。
10156	フローチャートでセル名の競合が検出されました。
10157	フローチャートでセル・コードの競合が検出されました。
10158	トップダウン・ターゲット・セルが複数回リンクされています。
10159	リンクされるトップダウン・セルがないか、既に別のものにリンクされています。
10161	無効なフィールド名です。
10162	ターゲット・セルは、実稼働での実行を承認されていません。
10163	実稼働で実行するためには、このプロセスのすべての入力セルを TCS のセルにリンクする必要があります。
10164	このプロセスでは、制御セルであるトップダウン・セル、または制御セルを持つトップダウン・セルを処理できません。
10165	セグメント一時テーブルを開くことができません。
10166	内部エラー: 無効なセグメント (セグメント一時テーブル・データベースが空白)。
10167	内部エラー: 無効なセグメント (セグメント一時テーブル名が空白)。
11167	入力のオーディエンス・レベルが異なります。
11168	指定したフローチャート・テンプレートがシステムにありません。
11169	Interact ベース・テーブル・マッピングが見つかりません。
10200	内部エラー: 無効な 'From' プロセス
10201	内部エラー: 無効な 'To' プロセス
10206	内部エラー: 無効な 'From' プロセス
10207	内部エラー: 無効な 'To' プロセス
10208	内部エラー: 無効な接続インデックス。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10209	内部エラー: DOM 作成エラー。
10210	内部エラー: DOM 解析エラー。
10211	競合するセル・コードは無視されます。
10300	ServerComm のメモリーが不足しています。
10301	内部エラー: クラスの関数が登録されていません。
10302	内部エラー: 要求した関数はサポートされません。
10303	他のフローチャート接続が確立されています。再接続は許可されません。
10304	UNICA_ACSVR.CFG で指定した範囲の通信ポートはすべて使用中です。
10305	要求したフローチャートは既に使用中です。
10306	リーダー・モードではコマンドを使用できません
10307	フローチャートは使用中です。所有権を移す権限はありません。
10350	内部エラー: フローチャートが実行されていません。
10351	内部エラー: クライアントがフローチャートに接続しています。
10352	コマンドを認識できません。
10353	構文が無効です。
10354	内部エラー: 実行の中断が進行中です。
10355	影響するセッションはありません。現時点では操作を実行できません。フローチャートのログを調べて原因を究明し、後でもう一度試してください。
10356	新しい接続が無効になりました。管理者は unica_svradm の UNCAP コマンドを使用して再度有効にする必要があります。
10357	フローチャートの実行が完了しましたが、エラーがあります。
10358	キャッシュ・データが見つかりません。
10359	絶対パス名ではなく、IBM Unica Marketing が提供する中央構成リポジトリで定義された partitionHome プロパティに対する相対パス名でフローチャートを指定する必要があります。
10401	内部エラー: クライアントは既に接続しています。
10402	クライアントはサーバーに接続されていません。
10403	サーバーとの接続が失われました。再試行しますか?

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10404	サーバー・プロセスと通信できません。終了している可能性があります。 考えられる原因 [Campaign サーバー・プロセスで次の問題が生じています。] • [ログイン時またはフローチャートの作成/オープン時にプロセスを起動できません。] • [サーバーに再接続したときには既にプロセスが終了されていました。] • [プロセスが異常終了しました。] 推奨される解決方法 [次の点を確認するよう Campaign 管理者に依頼します。] • [Campaign リスナー・プロセスが実行されていること。] • [システム上で同じバージョンの Campaign Web アプリケーション、リスナー、およびサーバーが実行されていること。] • [Marketing Platform が提供する中央構成リポジトリでポート番号が適切に構成されていること。] このエラーに関して、より詳細な情報が必要な場合は、システム管理者にシステム・ログをチェックするよう依頼してください。
10405	サーバー・プロセスから応答がありません。再試行して待つか、キャンセルして切断します。
10406	内部エラー: サーバーとの通信が既に実行されています。
10407	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを中断しました。
10408	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを強制終了しました。
10409	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを停止しました。
10410	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを削除しました。
10411	接続が切断されました。管理者がこのフローチャートを管理しています。
10412	HTTP セッション ID が無効であるか、HTTP セッションがタイムアウトになりました。
10440	Windows の偽装エラー。
10441	Windows 認証メッセージの送信を続ける
10442	Windows 認証メッセージの送信を停止する
10443	TYPE-1 メッセージを生成できませんでした
10444	TYPE-2 メッセージを生成できませんでした
10445	TYPE-3 メッセージを生成できませんでした
10450	サーバー・プロセスから応答がありません。この時点では接続できません。
10451	サーバー・プロセスから応答がありません。この時点では指定されたすべてのフローチャートにトリガーを送信できません。
10452	サーバー・プロセスから応答がありません。この時点では再接続できません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10453	サーバー・プロセスから応答がありません。この時点では要求された操作を完了できません。 考えられる原因 Campaign サーバーは別の要求の処理でビジー状態です。 推奨される解決方法 Campaign サーバー・マシンの CPU リソースまたはメモリー・リソースが十分であることを確認するようシステム管理者に依頼してください。
10454	サーバー・プロセスがフローチャート・データを更新しています。この時点では要求された操作を完了できません。
10501	内部エラー: SRunMgr RunProcess スレッドは既に実行中です。
10502	プロセスの実行は、実行マネージャーの破棄によってキャンセルされました。
10530	キャンペーン・コード形式が無効です。
10531	オファー・コード形式が無効です。
10532	キャンペーン・コードを生成できませんでした。
10533	オファー・コードを生成できませんでした。
10534	処理コード形式が無効です。
10535	処理コードを生成できませんでした。
10536	セル・コード形式が無効です。
10537	セル・コードを生成できませんでした。
10538	バージョン・コード形式が無効です。
10539	バージョン・コードを生成できませんでした。
10540	キャンペーン・コード形式に無効な文字が含まれています。
10541	セル・コード形式に無効な文字が含まれています。
10542	処理コード形式に無効な文字が含まれています。
10550	HTTP 通信エラー。
10551	ASM サーバーからの応答が無効です。
10552	ASM サーバー: 不明なエラー。
10553	ASM サーバー: ログインが無効です。
10554	ASM サーバー: データベースへの挿入中にエラーが発生しました。
10555	ASM サーバー: ASM オブジェクトをマップしようとしてエラーが発生しました。
10556	ASM サーバー: オブジェクトが既に存在するためエラーが発生しました。
10557	ASM サーバー: パスワードが期限切れです。
10558	ASM サーバー: パスワードが短すぎます。
10559	ASM サーバー: パスワード形式が正しくありません。
10560	内部エラー: ASM サーバーから返されたデータを解析しています。
10561	ASM サーバー: 有効なログインが必要です。
10562	ASM サーバー: グループ名が必要です。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10563	ASM サーバー: サポートされない操作です。
10564	ASM サーバー: パスワードの最大許容試行回数を超過しました。
10565	ASM サーバー: パスワードに最小限必要な数の数値が含まれていません。
10566	ASM サーバー: ログインと同じパスワードは使用できません。
10567	ASM サーバー: 以前と同じパスワードは再使用できません。
10568	ASM サーバー: ユーザー・ログインが無効になりました。
10569	ASM サーバー: パスワードに最小限必要な数の文字が含まれていません。
10570	ASM サーバー: 空白のパスワードは使用できません。
10571	ASM サーバー: パスワードが正しくありません。
10572	この操作を実行するには適切な権限が必要です。
10573	ASM サーバー: 内部システム・エラー。
10576	内部エラー: ASM クライアント・モジュールが初期化されていません。
10577	データベース資格情報の照会を実行するには、ログインする必要があります。
10578	セキュリティ・データ整合性エラー。
10580	HTTP 通信エラー
10581	eMessage サーバーからの応答が無効です
10582	eMessage サーバー: 不明なエラー
10583	eMessage サーバー: 内部システム・エラー
10584	eMessage サーバーの URL が設定されていません。
10585	内部エラー: eMessage サーバーから返されたデータを解析しています。
10586	eMessage サーバーからエラーが返されました。
10590	setuid が失敗しました。
10591	setgid が失敗しました。
10600	内部エラー: セルは既に初期化されています。
10601	内部エラー: ソース・セルが初期化されていません。
10603	内部エラー: 無効なセル ID。
10604	内部エラー: 無効なフィールド・インデックス。
10605	オーディエンス ID フィールドが定義されていません。
10606	内部エラー: テーブル・マネージャーが見つかりません。
10607	無効なテーブル ID です。
10608	セルへのアクセス中の操作は許可されません。
10612	内部エラー: ユーザー定義フィールドが見つかりません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10613	フィールドが見つかりません。 考えられる原因: [テーブル・マッピングが変更されています。現在そのフィールドは存在しません。] [オーディエンス・レベルが変更されました。] [そのフィールドは削除されました。] 推奨される解決方法: 異なるフィールドを参照するようにプロセス・ボックスの構成を変更します。
10616	内部エラー: 派生変数が初期化されていません。
10617	内部エラー: 式から複数の列が返されます。
10619	内部エラー: 無効な行インデックスです。
10620	フィールド名を特定できません。
10621	内部エラー: 選択したフィールドがまだ計算されていません。
10624	内部エラー: アクセス・オブジェクトが無効になりました。
10625	内部エラー: 未加工 SQL 照会のデータ・ソースが選択されていません。
10629	Campaign サーバーの一時ファイルの書き込み中にエラーが発生しました。
10630	異なるオーディエンス・レベルに対する操作は許可されません。
10632	保存された照会への参照が見つかりません。
10633	内部エラー: 派生変数にデータを含めることはできません。
10634	適合しないソート順が検出されました。 dbconfig.lis で ¥enable_select_order_by=FALSE¥ を設定してください。
10635	保存された照会への参照を解決できません: 保存された照会テーブルがマップされていません。
10636	ユーザー変数が定義されていません。
10637	セルの結果がありません。前のプロセスを再度実行する必要があります。
10638	「カウント」フィールドの値が無効です。
10639	内部エラー: STCell _Select の状態が正しくありません。
10641	派生変数の名前が既存の永続的なユーザー定義フィールドの名前と競合します。
10642	一時テーブルを <TempTable> トークンに使用できません。
10643	一時テーブルに格納されている行が多すぎます。
10644	一時テーブルに十分な行が存在しません。
10645	<OutputTempTable> トークンが使用されていますが、データ・ソースの構成では一時テーブルは許可されていません。
10646	システム・データベースに一時テーブルを作成できません。データ・ソース構成で一時テーブルが許可され、一括挿入またはデータベース・ローダーが有効になっていることを確認してください。
10661	インスタンス・マネージャーとの HTTP 通信エラー
10700	フィールド・タイプまたはデータ長が適合しません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
10800	カスタム・マクロのパラメーター名が複製しています。
10801	カスタム・マクロのパラメーター名がありません。
10802	カスタム・マクロのパラメーター数が正しくありません。
10803	カスタム・マクロのパラメーター名が正しくありません。
10804	既存のカスタム・マクロと名前が競合します。
10805	カスタム・マクロのパラメーターがありません。
10806	パラメーター名は予約語です。
10807	カスタム・マクロ名が無効です。
10808	既存の IBM マクロと名前が競合します。
10809	カスタム・マクロ式の中で使用されているパラメーターがマクロ定義に含まれていません。
10810	選択した ACO セッションで、オーディエンス・レベルが定義されていません。
10811	選択した ACO セッションで、推奨コンタクト・テーブルが定義されていません。
10812	選択した ACO セッションで、推奨オファー属性テーブルが定義されていません。
10813	選択した ACO セッションで、最適化済みコンタクト・テーブルが定義されていません。
10820	動的キャスト内部エラー
10821	ODS キャンペーンの構成が無効です。
11001	内部エラー: SendMessage エラー。
11004	内部エラー。
11005	内部エラー: 不明なレポート・タイプ。
11006	フローチャートには別のユーザーがアクセスしています。
11100	メモリー割り当てエラー。
11101	内部エラー: 関数タグが不明です。
11102	内部エラー: IDtoPtr に不明なクラス名があります。
11104	内部エラー: SCampaignContextConfig のマジック番号が正しくありません。
11105	ファイル名が指定されていません。
11107	サーバー・キャンペーン・コンテキストの内部エラー。
11108	内部エラー: レポートをロックできません。
11109	テーブルが定義されていません。
11110	環境変数が設定されていません。
11111	内部エラー: フィールド情報の取得中にエラーが発生しました。
11112	パスワードが無効です。
11113	フローチャート名が一意でないか空白です。
11114	キャンペーン・コードが一意ではありません。
11115	アクティブなフローチャートを削除することはできません。
11116	指定したファイルは Campaign フローチャート・ファイルではありません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11117	古いフローチャート・ファイルの削除はサポートされません。手動で削除してください。
11119	一時ディレクトリーの unica_tbmgr.tmp ファイルの書き込みができません。
11120	conf ディレクトリーの unica_tbmgr.bin の名前を変更できません。
11121	unica_tbmgr.tmp を unica_tbmgr.bin ファイルにコピーできません。
11122	conf ディレクトリーの unica_tbmgr.bin ファイルを読み取れません。
11128	構成で許可されていない操作です。
11131	無効なテンプレート・ファイル形式です。
11132	XML 初期化エラー。
11133	DOM 作成エラー。
11134	DOM 解析エラー。
11135	内部エラー: 不明なユーザー変数
11136	サーバー・キャンペーン・コンテキストのセル・ロック・エラー。
11137	サーバー・キャンペーン・コンテキストのファイル・オープン・エラー。
11138	指定されたユーザーは既に存在します。
11139	admin. セッションにユーザー・リスト・テーブルがマップされていません。
11140	ユーザーが見つかりません。
11141	パスワードが正しくありません。
11142	ファイルの読み取りエラー。
11143	ユーザー変数が空白です。
11144	フローチャート名とキャンペーン・コードが一意ではありません。
11145	unica_acsvr.cfg ファイルに authentication_server_url がありません。
11146	無効なユーザー変数です。
11147	ユーザー変数が見つかりません。
11148	仮想メモリ設定への変更は許可されません。
11150	フォルダー・ファイルを作成できません。ご使用の OS の特権を確認してください。
11151	フォルダー・ファイルを削除できません。ご使用の OS の特権を確認してください。
11152	フォルダー/キャンペーン/セッション・ファイルの名前を変更できません。ご使用のオペレーティング・システムの特権を確認してください。
11153	キャンペーン/セッション・ファイルを作成できません。ご使用の OS の特権を確認してください。
11154	キャンペーン/セッション・ファイルを削除できません。ご使用の OS の特権を確認してください。
11155	フォルダー/キャンペーン/セッション・ファイルを移動できません。ご使用の OS の特権を確認してください。
11156	データ・ソースの認証に失敗しました。
11157	開始日が終了日より後の日付になっています。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11158	キャンペーン/セッション・ファイルを開けません。ご使用の OS の特権を確認してください。
11159	ログ・ファイルを読み込めません。ご使用の OS の特権を確認してください。
11160	ログを表示できません。ログ・ファイル名が指定されていません。
11161	フローチャートの実行中の操作は許可されません。
11162	ログ・ファイルが存在しません。より詳細なログ情報が必要な場合は、ログのレベルを変更してください。
11163	ファイル・システムにキャンペーン/セッション・ファイルが存在しません。
11164	サーバーに保存されたリストの内部エラー。
11165	保存されたリストの関数タグが不明です。
11166	セキュリティー・ポリシーが無効です。
11201	コンテナー内部エラー (1)。
11202	コンテナー内部エラー (2)。
11203	コンテナー・データのロード・エラー。
11230	指定したエンコーディングと UTF-8 間のトランスコーダーを作成できません。
11231	テキスト値をトランスコードできません。
11232	ローカル・ホストの名前を特定できません。
11251	新しいパスワードが一致しません。再入力してください。
11253	ソート操作時にスタック・オーバーフローが発生しました。
11254	コマンド・ライン・パーサーに渡された引数が多すぎます。
11255	コマンドまたは構成ファイル・パラメーターの引用符が一致しません。
11256	追加のためのフローチャート・ログ・ファイルを開くことができません。
11257	フローチャート・ログ・ファイルへの書き込みができません。
11258	フローチャート・ログ・ファイルの名前を変更できません。
11259	無効なマルチバイトまたは Unicode 文字が見つかりました。
11260	キャンペーン・コードが正しくないか、複製しています。
11261	古いパスワードが無効です。
11262	新しい読み取り/書き込みパスワードが一致しません。
11263	新しい読み取り専用パスワードが一致しません。
11264	読み取り/書き込みパスワードが無効です。
11265	読み取り専用パスワードが無効です。
11266	パスワードは少なくとも 6 文字以上である必要があります。
11267	レポートが登録されました。
11268	レポート名がありません。
11269	新しいパスワードが一致しません。
11270	クライアント・コンピューター上に一時ファイルを作成できません。
11271	クライアント・コンピューター上の一時ファイルの読み取り中にエラーが発生しました。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11272	クライアント・コンピュータ上の一時ファイルの書き込み中にエラーが発生しました。
11273	新しい構成をデフォルトに設定しますか?
11274	選択したテーブルのマッピングを解除しますか?
11275	フィールドが選択されていません。
11276	フローチャート名がありません。チェックポイントは実行されません。
11280	サーバーはクライアントよりも新しいバージョンを使用しています。インストールされているクライアントをアップグレードしますか?
11281	サーバーはクライアントよりも古いバージョンを使用しています。インストールされているクライアントをダウングレードしますか?
11282	インストールの実行ファイルを取得しましたが、実行できません。
11283	フローチャート・ログを消去します。本当によろしいですか?
11284	ヘルプ・トピックが見つかりません。
11285	ヘルプ・トピック・ファイルの解析中にエラーが発生しました。
11286	フローチャートを自動保存ファイルからリカバリーしました。
11287	ビットマップのロード中にエラーが発生しました。
11288	設定が変更されました。今すぐカタログを保存しますか?
11289	フローチャートは既に関われています。現在のユーザーの接続を切断して接続しますか?
11290	この操作を処理するには、まずフローチャートを保存する必要があります。
11300	無効なフィールド名です。無効なフィールド名については、メッセージの末尾を参照してください。 考えられる原因: [テーブル・マッピングが変更されています。現在そのフィールドは存在しません。] [オーディエンス・レベルが変更されました。] [そのフィールドは削除されました。] 推奨される解決方法: 異なるフィールドを参照するようにプロセス・ボックスの構成を変更します。 無効なフィールド名=
11301	無効なフィールド・インデックスです。
11302	これ以上レコードがありません。
11303	テーブルへのアクセス中の操作は許可されません。
11304	ロックされたテーブルは削除できません。
11305	無効なテーブル ID です。
11306	解析ツリー・コンテキストは使用中です。
11307	解析ツリーによるベース・テーブルのランダム・アクセスは許可されません。
11308	無効なテーブル・インデックスです。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11309	無効なキー・インデックスです。
11310	インデックス・キーが初期化されていません。
11311	ディメンション・テーブルでエントリーが見つかりません。
11312	ID フィールドが指定されていません。
11313	無効なテーブル・アクセスです。
11314	データは既にインポートされています。
11315	内部エラー: VFSYSTEM がありません。
11316	入力ファイルが指定されていません。
11317	データがありません。
11318	変更がまだ開始されていません。
11319	インデックス・フィールドのエントリーが一意ではありません。
11320	conf ディレクトリーにロック・ファイルを作成できません。 考えられる原因: Campaign サーバーが dummy_lock.dat ファイルをロックできません。 推奨される解決方法: ファイルが他のプロセスによってロックされていないかシステム管理者に確認を依頼します。ファイルが他のプロセスによってロックされていない場合は、Campaign サーバーをリブートし、ロックを削除するよう Campaign 管理者に依頼します。
11321	内部テーブル・エラー
11322	不明な関数タグ
11323	データ・ディクショナリー・ファイル名が指定されていません。
11324	関数または操作がサポートされていません。
11325	'dbconfig.lis' ファイルが見つかりません。
11326	ディメンション・テーブルにキー・フィールドがありません。
11327	新バージョンの ID が既存バージョンの ID と競合します。
11328	テーブル・カタログ・ファイルを開くことができません。
11329	複製する ID が多すぎてテーブル結合を実行できません。
11330	テンプレート・ファイルを削除できません。
11331	カタログ・ファイルを削除できません。
11332	データ・ディクショナリー・ファイルの解析でエラーが発生しました: 無効な形式です。
11333	テキスト・データを数値に変換しているときにエラーが発生しました。
11334	フィールド幅が小さすぎて変換後の数値を保持できません。
11335	フィールド幅が小さすぎてソース・テキスト・データを保持できません。
11336	アクセスしたテーブルはマップされていません。
11337	正規化されたテーブルで複製する ID が見つかりました。
11338	内部エラー: 無効な一時テーブルです。
11339	オーディエンス定義の不適合: フィールド数が正しくありません。
11340	オーディエンス定義の不適合: 種類が一致しません。
11341	新バージョンの名前が既存バージョンの名前と競合します。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11342	フィールドが見つかりません。データ・ディクショナリーが変更されています。
11343	XML テーブル・カタログ・ファイルが無効です。
11344	ローダー・コマンドがエラー・ステータスで終了しました。
11345	テーブル・スキーマが変更されています。テーブルを再マップしてください。
11346	キュー・テーブルの結果がありません。
11347	内部エラー: 戻り値の形式が正しくありません。
11348	カタログのロード中に内部エラーが発生しました。
11349	カタログはロードされていません。
11350	テーブルへの接続中に内部エラーが発生しました。
11351	テーブルに接続されていません。
11352	dbconfig.lis ファイルのキーワードが無効です。
11353	無効な UDI 接続です。
11354	内部エラー: ベース・テーブルが設定されていません。
11355	無効なテーブル名です。
11356	DOM 作成エラー。
11357	DOM 解析エラー。
11358	複製するシステム・テーブル・エントリはインポートできません。
11359	システム・テーブルをロックできません。
11360	パック 10 進数フィールド・タイプはエクスポートでのみサポートされません。
11361	この操作はサポートされていません。
11362	SQL 式によって返されるフィールドが多すぎます。
11363	SQL 式によって返されるデータ・フィールドがユーザーの指定と一致しません。
11364	未加工 SQL カスタム・マクロで不明なデータベースが指定されています。
11365	このコンテキストでは、ID リストだけを返す未加工 SQL カスタム・マクロを使用できません。
11366	セグメントが見つかりません。
11367	一時テーブルを <TempTable> トークンに使用できません。
11368	このオーディエンス・レベルに対するコンタクト履歴テーブルが未定義です。
11369	このオーディエンス・レベルのレスポンス履歴テーブルが定義されていません。
11370	ディメンション要素式がありません。
11371	bin 定義を特定できません。
11372	カスタム・マクロが不正な数のフィールドを返しました。
11373	カスタム・マクロの結果フィールドが現在のオーディエンス・レベルと一致しません。
11374	ディメンション要素名がすべてのレベルを通じて一意ではありません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11375	不明なディメンション名。
11376	不明なディメンション要素。
11377	未加工 SQL カスタム・マクロのデータベース指定がありません。
11378	キャンペーン・コードが一意ではありません。
11379	XML ファイルのルート・ディメンション要素がありません。
11380	日付の形式を変換するときにエラーが発生しました。
11381	ディメンションで未加工 SQL を使用する権限がありません。
11382	構文エラー: AND/OR 演算子がありません。
11383	構文エラー: 選択基準の末尾に余分な AND/OR 演算子があります。
11384	フィールドの不適合: 数値フィールドが必要です。
11385	フィールドの不適合: 日付フィールドが必要です。
11386	UDI サーバーがエラーを返しました。
11387	内部 ID が制限を超過する可能性があります。
11388	セグメント・データ・ファイルを開くことができません。
11389	セグメント・データ・ファイルのエラー: 無効なヘッダー。
11390	内部エラー: 無効なセグメント (データ・ファイル名が空白)。
11391	セグメント・データへのアクセス・エラーです。
11392	テーブル結合を行うには、テーブルが同じデータベース上に存在する必要があります。
11393	非永続的なキューにはエントリーを追加できません。
11394	オーディエンス・レベルは予約されています。追加できません。
11395	オーディエンス・レベルは予約されています。削除できません。
11396	内部エラー: 最適化済みコンタクト・テーブル名が無効です。
11397	フィールド・データが、テーブル・マッピングでこのフィールドに割り当てられているデータ長を超過しました。テーブルを再マップし、フィールド幅を手動で増やしてからフローチャートを実行してください。
11398	事後一時テーブル作成実行スクリプトが完了しましたが、エラーがあります。
11399	アロケーターがビジー状態であるため、新しいオブジェクトに ID を割り当てるできません。
11400	一時テーブルを <OutputTempTable> トークンに使用できません。
11401	オーディエンス・レベル定義が無効です。
11402	オーディエンス・フィールド定義がありません。
11403	オーディエンス・フィールド名が無効であるか、存在しません。
11404	オーディエンス・フィールド名が複製しています。
11405	オーディエンス・フィールド・タイプが無効であるか、存在しません。
11408	内部エラー: ID が無効です。
11409	内部エラー: DAO タイプが正しくありません。
11410	DAO 内部エラー。
11411	内部エラー: システム DAO ファクトリーが初期化されていません。
11412	内部エラー: 不明な DAO 実装が要求されました。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11413	内部エラー: DAO 転送で無効な種類が検出されました。
11414	挿入操作は単一のテーブルでのみサポートされます。
11415	更新操作は単一のテーブルでのみサポートされます。
11416	削除操作は単一のテーブルでのみサポートされます。
11417	一意のレコードが予期された SQL 照会で複数のレコードが返されました。
11418	コンタクト・ステータス・テーブルにデフォルトのコンタクト・ステータスが見つかりませんでした。
11419	コンタクト履歴テーブルは詳細コンタクト履歴テーブルより前にマップする必要があります。
11420	システムにオファーが見つかりません。
11500	内部エラー: 有効なデータベース・テーブルではありません。
11501	内部エラー: テーブルが選択されていません。
11502	選択したテーブルにはフィールド・エントリーがありません。
11503	無効な列インデックス。
11504	無効な列名。
11505	無効なデータ・ソース。
11506	選択したテーブルが無効であるか、破損しています。
11507	メモリーが不足しています。
11508	データベース行の削除エラー。
11509	SQL 照会の処理中にエラーが発生しました。
11510	データが返されていません - 照会を確認してください。
11511	照会結果には一致する行が見つかりませんでした。
11512	データベースにはこれ以上の行がありません。
11513	データベース表に行を挿入中にエラーが発生しました。
11514	データベース ID 列が正しくありません。
11515	データベース表の更新中にエラーが発生しました。
11516	新しいデータベース表の作成中にエラーが発生しました。
11517	列の数がこの照会タイプに対して不適切です。
11518	データベース接続エラー。
11519	データベースから結果を取得中にエラーが発生しました。
11520	データ・ソースに対して不明なデータベース・タイプです。
11521	内部エラー: 照会結果の状態が正しくありません。
11522	無効なデータベース接続 (ユーザーがデータベースにログインしていません)。
11523	最初の一意な ID が設定されていません。
11524	この列のデータ型が正しくありません。
11525	照会に FROM 節がありません。
11526	照会で別名を使用しています。
11527	内部エラー: データベース一時テーブルのエラー。
11528	データベース・エラー。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
11529	内部エラー: 照会の実行に使用できるスレッドがありません。
11530	データ・ソースに対してプロパティが無効です。
11531	カタログ/テンプレートに異なるデータベース・ログインが含まれています。
12000	コンタクト履歴テーブルが指定されていません。
12001	Customer ID が指定されていません。
12002	オファー ID が指定されていません。
12003	チャンネル・フィールドが指定されていません。
12004	日付フィールドが指定されていません。
12005	推奨コンタクト・テーブルのテンプレートがありません。
12006	テンプレートに使用できるテーブルがありません。テンプレート・テーブルは、顧客レベルでマップし、必須のオファー・フィールド、チャンネル・フィールド、および日付フィールドを含める必要があります。
12007	オプトイン/オプトアウト・テーブルに使用できるテーブルがありません。オプトイン/オプトアウト・テーブルは、顧客レベルでマップされている必要があります。
12008	オプトイン/オプトアウト・テーブルが指定されていません。 "顧客選択...規則" を使用できなくなります。
12009	オファー・テーブルが指定されていません。
12010	オファー名フィールドが指定されていません。表示用にオファー ID が使用されます。
12011	チャンネル・テーブルが指定されていません。
12012	チャンネル名フィールドが指定されていません。表示用にチャンネル ID が使用されます。
12015	テンプレート・テーブル内のオファー・オーディエンス・レベルのフィールド名がコンタクト履歴テーブルと一致しません。
12016	オファー・テーブル内のオファー・オーディエンス・レベルのフィールド名がコンタクト履歴テーブルと一致しません。
12017	オファー・テーブルに使用できるテーブルがありません。オファー・テーブルはオファー・レベルでマップされている必要があります。
12018	チャンネル・テーブルに使用できるテーブルがありません。チャンネル・テーブルはチャンネル・レベルでマップされている必要があります。
12019	サーバー・プロセスを強制終了すると、前回の保存以降に行ったすべての作業が失われます。本当によろしいですか?
12020	ウィンドウの作成に失敗しました。
12021	このオーディエンス・レベルに関連付けられている次のテーブルを削除しますか?
12022	選択したディメンション階層を削除しますか?
12023	フローチャートは使用中です。続行しますか? 「はい」をクリックすると、他のユーザーによる変更内容が失われます。
12024	選択したオーディエンス・レベルを削除しますか?
12025	オーディエンス名は既に存在します。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
12026	このフローチャートは、他のユーザーによって変更または削除されました。すぐに「概要」タブに切り替わります。前回の保存以降のすべての変更内容が破棄されます。
12027	このフローチャートは更新する必要があります。今すぐ更新するには、「OK」をクリックします。更新が完了したら、最後に行った操作をやり直す必要があります。
12028	オブジェクトは初期化中であるか、初期化に失敗しました。この操作をやり直してください。
12029	選択した項目を削除しますか?
12030	Campaign システム・テーブルへの接続をキャンセルすることを選択しました。すぐに「概要」タブに切り替わります。
12031	Campaign システム・テーブルに接続しないと続行できません。
12032	このテーブルは、Interact がインストールされている場合にのみサポートされます。
12033	フローチャートをロードできませんでした。再試行しますか?
12034	HTTP セッションがタイムアウトになりました。再度ログインするには「OK」をクリックします。
12035	フローチャート制御に互換性がありません。以前のバージョンをダウンロードするには、ブラウザを閉じる必要があります。これ以外のブラウザをすべて閉じてから、「OK」をクリックしてこのブラウザを閉じてください。ブラウザを再始動する際に、制御が自動的にダウンロードされます。
12036	起動しているブラウザがあります。ブラウザをすべて閉じてから「OK」をクリックしてください
12037	フィールド名に無効な文字が含まれています。
12038	オーディエンス・レベル名が指定されていません。
12039	オーディエンス・フィールドが指定されていません。
12040	フローチャート構成にエラーは検出されませんでした。
12041	実行中のこのフローチャートは、別のユーザーによって一時停止されています。
12206	上のディレクトリーに移動できません: ルート・ディレクトリーです。
12207	ディレクトリーを作成できません。詳細なエラー情報についてはログ・ファイルを確認してください。
12301	マージ・プロセスの内部エラー。
12303	マージ・プロセスの接続元プロセス・エラー。
12304	マージ・プロセスのセル・ロック・エラー。
12305	マージ・プロセスがユーザーによって停止されました。
12306	マージ・プロセスのセル操作エラー。
12307	マージ・プロセスのソース・セル取得エラー。
12308	マージ・プロセスが構成されていません。
12309	入力セルが選択されていません。
12310	入力セルが使用されていません。
12311	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
12312	ソース・セルがありません。入力の接続が正しくない可能性があります。
12401	実行内部エラー (1)
12600	内部エラー: SReport
12601	レポートは使用中です。削除できません。
12602	内部エラー: 無効なレポート ID です。
12603	内部エラー: 無効なレポート・タイプが保存されています。
12604	内部エラー: 無効なレポート・セル ID です。
12605	内部エラー: 実行する前にレポートが初期化されません。
12606	内部エラー: 値がありません。
12607	内部エラー: レポートをロックできません。
12608	内部エラー: 無効なフィールドが指定されています。
12609	セルがないとレポートを作成できません。
12610	内部エラー: 使用可能なセル・レコードがこれ以上ありません。
12611	レポート名が他の登録済みレポート名と競合します。
12612	HTML ファイルを書き込み用に開くことはできません。
12613	フィールド・タイプが内部設定と一致しません。テーブルを再マップする必要があります。
12614	レポート名が空白です。
12615	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13000	Web アプリケーションからの応答を解析中にエラーが発生しました。
13001	Web アプリケーションからの応答にクライアント ID がありません。
13002	Web アプリケーションからの応答に解決 ID がありません。
13003	Web アプリケーションからの応答の iscomplete フラグの値が正しくありません。
13004	Web アプリケーションから不明なエラー・コードが返されました。
13005	HTTP 通信エラー
13006	応答で iscomplete フラグが必要でしたが、欠落しています。
13101	内部エラー
13104	セル・ロック・エラー。
13110	プロセスが構成されていません。
13111	不明な関数タグ。
13113	レポート・ロック・エラー。
13114	プロファイル・レポート生成エラー。
13115	テーブル・ロック・エラー。
13116	入力セルがありません。
13117	入力を選択されていません。
13118	選択基準がありません。
13119	データ・ソースが選択されていません。
13120	選択したテーブルのオーディエンス・レベルが異なります。
13121	オーディエンス・レベルが指定されていません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13122	DOM 作成エラー。
13123	DOM 解析エラー。
13124	不明なパラメーターです。
13125	無効なパラメーター値です。
13131	データベース認証が必要です。
13132	文字列への変換でエラーが発生しました。
13133	抽出フィールドが選択されていません。
13134	抽出フィールドのサンプル名が複製しています。
13135	複製するフィールドのスキップが選択されていません。
13136	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13137	ソース・テーブルが選択されていません。
13138	ディメンション階層に基づく選択時のエラー: 選択したセグメントのオーディエンス・レベルにテーブルがマップされていません。
13139	選択した最適化セッションのテーブル・マッピングが指定されていません。
13140	CustomerInsight 選択で指定が行われていません。
13141	CustomerInsight 選択で選択した内容が有効ではありません。
13145	NetInsight 選択で指定が行われていません。
13146	NetInsight 選択で選択した内容が有効ではありません。
13200	コンタクト・プロセスのメモリー割り当てエラー。
13201	コンタクト・プロセスの内部エラー。
13203	コンタクト・プロセスの接続元プロセス・エラー。
13204	コンタクト・プロセスのセル・ロック・エラー。
13205	コンタクト・プロセスがユーザーによって停止されました。
13206	コンタクト・プロセスのコンタクト・テーブル・ロック・エラー。
13207	コンタクト・プロセスのバージョン・テーブル・ロック・エラー。
13208	コンタクト・プロセスのセル情報取得エラー。
13209	コンタクト・プロセスのテーブル情報取得エラー。
13210	コンタクト・プロセスのテーブル・ロック・エラー。
13211	コンタクト・プロセスの不明な関数タグ・エラー。
13212	コンタクト・プロセスの GIO オープン・エラー。
13213	コンタクト・プロセスのレポート・ロック・エラー。
13214	創造的部分にはさらに情報が必要です。
13215	変動費項目を 1 つだけ選択する必要があります。
13216	変動費項目が競合します。
13217	バージョンにはさらに情報が必要です。
13218	創造的部分を少なくとも 1 つ選択する必要があります。
13219	レスポンス・チャンネルを少なくとも 1 つ選択する必要があります。
13220	コンタクト・チャンネルを 1 つ選択する必要があります。
13221	選択された ID は一意ではありません。
13223	コンタクト ID が一意ではありません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13224	処理ページ: ソース・セルがありません。
13225	処理ページ: コンタクト ID が選択されていません。
13226	処理ページ: バージョンが選択されていません。
13227	コンタクト・リスト・ページ: エクスポート・テーブルが選択されていません。
13228	コンタクト・リスト・ページ: サマリー・ファイルが選択されていません。
13229	コンタクト・リスト・ページ: エクスポート・フィールドが選択されていません。
13230	トラッキング・ページ: 更新の頻度が選択されていません。
13231	トラッキング・ページ: モニター期間をゼロにすることはできません。
13232	レスポnder・ページ: レスポnder・テーブルが選択されていません。
13233	到達不能ページ: 到達不能テーブルが選択されていません。
13234	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するテーブルが選択されていません。
13235	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するフィールドが選択されていません。
13236	ログ・ページ: レスポnderのログを記録するテーブルが選択されていません。
13237	ログ・ページ: レスポnderのログを記録するフィールドが選択されていません。
13238	ログ・ページ: 到達不能のログを記録するテーブルが選択されていません。
13239	ログ・ページ: 到達不能のログを記録するフィールドが選択されていません。
13240	コンタクト・プロセスのセル・フィールド情報取得エラー。
13241	コンタクト・リスト・ページ: トリガーが指定されていません。
13242	コンタクト・リスト・ページ: ソート・フィールドが選択されていません。
13244	無効なフィールドです。
13246	double 型から string 型への変換エラー。
13248	コンタクト・リスト・ページ: エクスポート・ファイルが選択されていません。
13249	コンタクト・リスト・ページ: 区切り記号が指定されていません。
13250	選択したテーブルのオーディエンス・レベルが異なります。
13251	コンタクト・リスト・ページ: エクスポート・ディクショナリー・ファイルが選択されていません。
13252	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するファイルが選択されていません。
13253	ログ・ページ: コンタクトの区切り記号が指定されていません。
13254	ログ・ページ: コンタクトのディクショナリー・ファイルが指定されていません。
13255	ログ・ページ: レスポnderのログを記録するファイルが選択されていません。
13256	ログ・ページ: レスポnderの区切り記号が指定されていません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13257	ログ・ページ: レスポンダーのディクショナリー・ファイルが指定されていません。
13258	ログ・ページ: 到達不能のログを記録するファイルが選択されていません。
13259	ログ・ページ: 到達不能の区切り記号が指定されていません。
13260	ログ・ページ: 到達不能のディクショナリー・ファイルが指定されていません。
13261	コンタクト・リスト・ページ: 選択したデータ・エクスポート・ファイル名に無効なパスが含まれています。
13262	コンタクト・リスト・ページ: エクスポート・ファイル用に選択したデータ・ディクショナリーに無効なパスが含まれています。
13263	コンタクト・リスト・ページ: 複製するフィールドのスキップが選択されていません。
13264	コンタクト・リスト・ページ: レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
13265	ログ・ページのコンタクト: レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
13266	ログ・ページのレスポンダー: レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
13267	ログ・ページの到達不能: レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
13268	トラッキング・ページ: トリガーが指定されていません。
13269	レスポンダー・ページ: レスポンダー照会が指定されていません。
13270	レスポンダー・ページ: データ・ソースが選択されていません。
13271	到達不能ページ: 到達不能照会が指定されていません。
13272	到達不能ページ: データ・ソースが選択されていません。
13273	選択したソース・セルのオーディエンス・レベルが異なります。
13274	コンタクト・プロセスのパラメーターが不明です。
13275	コンタクト・プロセスのパラメーター値が無効です。
13276	バージョン名が一意ではありません。
13277	セル・コードが空白であるか、複製しています。
13278	他のフローチャートで使用されるバージョンを変更しようとしています。
13279	ログ・ページのコンタクト: 複製するフィールドのスキップが選択されていません。
13280	ログ・ページのレスポンダー: 複製するフィールドのスキップが選択されていません。
13281	ログ・ページ到達不能: 複製するフィールドのスキップが選択されていません。
13282	コンタクト・プロセスの DOM 作成エラー。
13283	データ・ソースが選択されていません。
13284	コンタクト・リスト・ページ: 選択したデータ・ディクショナリー・ファイルが存在しません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13285	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するフィールドが選択されていません。
13286	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13301	内部エラー
13304	セル・ロック・エラー。
13310	プロファイル・レポート生成エラー。
13311	不明な関数タグ。
13312	レポート・ロック・エラー。
13313	入力を選択されていません。
13314	フィールドが選択されていません。
13315	照会が指定されていません。
13316	データ・ソースが指定されていません。
13317	名前が一意ではありません。
13318	テーブルが選択されていません。
13320	不明なパラメーターです。
13321	無効なパラメーター値です。
13322	名前が指定されていません。
13323	無効な名前です。
13324	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13400	スケジュール・プロセスのメモリー割り当てエラー。
13401	スケジュール・プロセスの内部エラー。
13403	接続元プロセス・エラー。
13404	セル・ロック・エラー。
13405	プロセスがユーザーによって停止されました。
13408	日付形式のエラー。
13409	時刻形式のエラー。
13410	全スケジュール期間が 0 です。
13411	実行するスケジュールが選択されていません。
13412	時刻で実行するには時刻が必要です。
13413	トリガーで実行するにはトリガーが必要です。
13414	出力トリガーが必要です。
13415	経過時間が 0 です。
13416	追加待機時間には、最初の 3 つの実行オプションのいずれかを使用する必要があります。
13417	スケジュール実行時間がスケジュール期間外です。
13418	無効な時刻形式です。
13419	カスタム実行オプションを少なくとも 1 つ選択する必要があります。
13420	遅延時間が全スケジュール期間を超過しています。
13421	無効な時刻です。開始時刻の期限が切れています。
13422	入力キュー・テーブルが選択されていません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13423	選択したキュー・テーブルが無効です。
13424	このプロセスで「プロセスの実行」は使用できません。
13501	サンプル・プロセスの内部エラー。
13503	サンプル・プロセスの接続元プロセス・エラー。
13504	サンプル・プロセスのセル・ロック・エラー。
13505	サンプル・プロセスがユーザーによって停止されました。
13506	サンプル・プロセスのサンプル・テーブル・ロック・エラー。
13507	サンプル・プロセスのバージョン・テーブル・ロック・エラー。
13508	サンプル・プロセスのソース・セル取得エラー。
13510	サンプル・プロセスの不明な関数タグ。
13511	サンプル・プロセスが構成されていません。
13512	サンプル・プロセスの出力セル・サイズが入力セル・サイズを超過しています。
13513	ソース・セルが選択されていません。
13514	ソート・フィールドが選択されていません。
13515	名前が一意ではありません。
13516	サンプル・プロセスのパラメーターが不明です。
13517	サンプル・プロセスのパラメーター値が無効です。
13518	サンプル名が指定されていません。
13519	無効なサンプル名です。
13520	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13521	サンプル・サイズが指定されていません。
13601	内部エラー
13602	GIO オープン・エラー。
13603	指定したトリガーは存在しません。
13604	トリガー名が指定されていません。
13605	トリガーが完了しましたが、エラーがあります。
13701	スコア・プロセスの内部エラー。
13703	スコア・プロセスの接続元プロセス・エラー。
13704	スコア・プロセスのセル・ロック・エラー。
13705	スコア・プロセスがユーザーによって停止されました。
13706	スコア・プロセスのセル操作エラー。
13707	モデル数を 0 にすることはできません。
13708	スコア・プロセスの GIO オープン・エラー。
13709	環境変数が設定されていません。
13716	スコア・フィールドのプレフィックスがありません。
13717	内部モデルが選択されていません。
13718	外部モデルが選択されていません。
13719	モデル変数が完全に一致していません。
13720	入力を選択されていません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13721	モデル数が 0 です。
13723	スコア・フィールドのプレフィックスが一意ではありません。
13724	外部モデル (rtm) ファイルは、現在のスコア構成との互換性がありません。
13725	無効なフィールドです。
13726	dbscore プロセスが完了しましたが、エラーがあります。
13727	スコア・プロセスのパラメーターが不明です。
13728	外部モデル・ファイルが見つかりません。
13729	モデル情報を取得できません。モデル・ファイルが無効である可能性があります。
13730	リーダー・モードではコマンドを使用できません
13801	「オプションの選択」プロセスの内部エラー。
13803	「オプションの選択」プロセスの接続元プロセス・エラー。
13804	「オプションの選択」プロセスのセル・ロック・エラー。
13805	「オプションの選択」プロセスがユーザーによって停止されました。
13806	「オプションの選択」プロセスのセル操作エラー。
13807	「オプションの選択」プロセスのテーブル・ロック・エラー。
13809	「オプションの選択」プロセスのレポート・ロック・エラー。
13812	dbscore プロセスが完了しましたが、エラーがあります。
13825	複製するパーソナライズ・フィールド名が指定されています。
13833	パーソナライズ・フィールド表示名が空白です。
13834	パーソナライズ・フィールド表示名に無効な文字が含まれています。
13901	内部エラー
13903	接続元プロセス・エラー。
13904	セル・ロック・エラー。
13905	プロセスがユーザーによって停止されました。
13906	セル操作エラー。
13907	テーブル・ロック・エラー。
13909	不明な関数タグ・エラー。
13910	レポート・ロック・エラー。
13911	入力を選択されていません。
13912	エクスポート・テーブルが選択されていません。
13913	エクスポートするフィールドが選択されていません。
13914	ソート・フィールドが選択されていません。
13915	無効なフィールド名です。
13917	無効なフィールド名です。
13918	エクスポート・ファイルが選択されていません。
13921	文字列への変換でエラーが発生しました。
13923	選択したセルのオーディエンス・レベルが異なります。
13924	区切り記号が指定されていません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
13925	エクスポートするデータ・ディクショナリー・ファイル名が指定されていません。
13926	選択したデータ・エクスポート・ファイル名に無効なパスが含まれています。
13927	エクスポート・ファイル用に選択したデータ・ディクショナリーに無効なパスが含まれています。
13928	複製するフィールドのスキップが選択されていません。
13929	レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
13930	スナップショット・プロセスの DOM 作成エラー。
13931	スナップショット・プロセスのパラメーターが不明です。
13932	スナップショット・プロセスのパラメーター値が無効です。
13933	セル・コードが空白であるか、複製しています。
13934	選択したデータ・ディクショナリー・ファイルが存在しません。
13935	リーダー・モードではコマンドを使用できません
14001	モデル・プロセスの内部エラー。
14003	モデル・プロセスの接続元プロセス・エラー。
14004	モデル・プロセスのセル・ロック・エラー。
14005	モデル・プロセスがユーザーによって停止されました。
14006	モデル・プロセスのセル操作エラー。
14008	モデル・プロセスのレポート・ロック・エラー。
14009	レスポnder・セルが選択されていません。
14010	非レスポnder・セルが選択されていません。
14013	モデル・ファイル名が選択されていません。
14014	モデル・プロセスで少なくとも 1 つの変数を使用する必要があります。
14015	レスポnder・セルおよび非レスポnder・セルが選択されていません。
14016	udmerun プロセスが完了しましたが、エラーがあります。
14017	選択したモデル・ファイル名に無効なパスが含まれています。
14018	リーダー・モードではコマンドを使用できません
14101	「オプションの評価」プロセスの内部エラー。
14103	「オプションの評価」プロセスの接続元プロセス・エラー。
14104	「オプションの評価」プロセスのセル・ロック・エラー。
14105	「オプションの評価」プロセスがユーザーによって停止されました。
14106	「オプションの評価」プロセスのセル操作エラー。
14107	「オプションの評価」プロセスのテーブル・ロック・エラー。
14108	「オプションの評価」プロセスの不明な関数タグ。
14110	「オプションの評価」プロセスのレポート・ロック・エラー。
14111	レスポnder・セルが選択されていません。
14112	非レスポnder・セルが選択されていません。
14113	レスポnder・フィールドが選択されていません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
14114	非レスポnder・フィールドが選択されていません。
14115	「オプションの評価」プロセスのパラメーターが不明です。
14116	セット番号が指定されていません。
14117	セット番号が範囲外です。
14118	セット名が空白です。
14119	サポートされるオプションではありません。
14120	リーダー・モードではコマンドを使用できません
14202	セグメントへのデータ挿入の内部エラー。
14203	セグメントへのデータ挿入のセル・ロック・エラー。
14204	PopulateSeg プロセスの不明な関数タグ。
14205	入力を選択されていません。
14206	指定されたフォルダー内のセグメント名が一意ではありません。
14207	セグメント名が指定されていません。
14208	セグメント名が無効です。
14209	セキュリティ・ポリシーが無効です。
14210	セキュリティ・ポリシーが指定されていません。
14301	「オプションのテスト」プロセスの内部エラー。
14303	「オプションのテスト」プロセスの接続元プロセス・エラー。
14304	「オプションのテスト」プロセスのセル・ロック・エラー。
14305	「オプションのテスト」プロセスがユーザーによって停止されました。
14306	「オプションのテスト」プロセスのセル操作エラー。
14307	「オプションのテスト」プロセスのテーブル・ロック・エラー。
14308	ソース・セルが選択されていません。
14309	最適化されるテストの数がゼロです。
14310	収支の 1 つが構成されていません。
14317	レポート・ロック・エラー。
14319	選択したフィールド・インデックスの取得エラー。
14320	確率フィールド値が 1.0 を超えています。
14321	無効なフィールドです。
14322	確率フィールドが選択されていません。
14323	処理が選択されていません。
14324	リーダー・モードではコマンドを使用できません
14501	カスタム・マクロの内部エラー。
14502	カスタム・マクロ式が指定されていません。
14503	カスタム・マクロ名が空白です。
14504	カスタム・マクロ式がありません。
14505	カスタム・マクロの不明な関数タグ。
14701	保存されたフィールドの内部エラー。
14703	変数名が指定されていません。
14704	式が指定されていません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
14705	同名のユーザー定義フィールドが既に保存されています。
14706	保存されたフィールドの不明な関数タグ。
14901	リスト・ボックス選択エラー
14902	選択した項目が多すぎます。
14903	項目が選択されていません。
14905	選択項目が見つかりません。
14906	ツリー・ビュー操作を認識できません。
14907	コスト情報が選択されていません。
14908	ダイアログ初期化エラー
14909	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
14912	創造的 ID には英数字とアンダースコアだけを含めることができます。
14913	出力セル名が一意ではありません。
14914	現行情報に上書きしますか?
15101	ダイアログ初期化エラー
15201	リスト・ボックス選択エラー
15202	ダイアログ初期化エラー
15203	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
15204	無効なセル・サイズ制限です。
15301	ダイアログ初期化エラー
15501	文字列が見つかりません。
15502	最低率 > 最高率
15503	ダイアログ初期化エラー
15504	無効な出力セル名
15701	ダイアログ初期化エラー
15702	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
15801	選択した文字列が見つかりません。
15802	ツリー展開エラー
15803	ダイアログ初期化エラー
15804	セグメント名が指定されていません。
15805	セグメント名を指定できません
15901	選択した文字列が見つかりません。
15903	ダイアログ初期化エラー
15904	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
15905	リスト・ボックス選択エラー
15906	無効なセル/レコード・サイズ制限です。
15907	テーブルおよびフィールドに基づいた既存の式は失われます。
15908	ディメンション階層に基づいた既存の基準は失われます。
16001	ダイアログ初期化エラー
16002	リスト・ボックス選択項目が見つかりません。
16051	保存されたトリガーの内部エラー。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
16053	トリガー名が空白です。
16054	トリガー・コマンドが空白です。
16055	同名のトリガーが既に定義されています。
16056	保存されたトリガーの不明な関数タグ。
16101	選択エラー
16102	複数選択エラー
16103	項目が選択されていません。
16104	選択スタイル・エラー
16105	選択項目が見つかりません。
16106	ダイアログ初期化エラー
16201	ダイアログ初期化エラー
16202	リスト・ボックス選択エラー
16203	指定したセル名 (プロセス名 + 出力セル名) が長すぎます。
16302	ソース・テーブルがマップされていません。
16303	ディメンション情報の内部エラー: 不明な関数です。
16304	ディメンション情報の内部エラー。
16305	レベル数が無効です。
16306	ソース・テーブルに必須フィールドがありません。再マップする必要があります。
16400	データベース・ソースが定義されていません。
16401	テーブルが選択されていません。
16402	内部エラー: テーブル・マネージャーがありません。
16403	Campaign テーブルのインデックスが正しくありません。
16404	内部エラー
16405	内部エラー: 新しいテーブルに不明な関数があります。
16406	ファイル名が指定されていません。
16407	データ・ディクショナリーが指定されていません。
16408	選択したテーブルには定義済みのフィールドがありません。
16409	内部エラー: テーブルが作成されていません。
16410	新規テーブルの名前が指定されていません。
16411	データベースのユーザー名とパスワードが必要です。
16412	現在サポートされていないデータベース・タイプです。
16413	テーブルがベース・テーブルではありません -- リレーションは許可されません。
16414	フィールド・インデックスが正しくありません。
16415	レコード・テーブル ID が指定されていません。
16416	内部エラー: この名前のディメンション・テーブルがありません。
16417	テーブルがディメンションまたは通常のテーブルではありません。
16418	内部エラー: この名前のベース・テーブルがありません。
16419	この操作のエントリー・ポイントが無効です。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
16420	既存テーブルへのマッピングは、この操作では無効です
16421	新しいフラット・ファイルの作成中にエラーが発生しました
16422	エラー - ファイル/テーブル・オプションが選択されていません
16423	エラー - データベースが選択されていません
16424	エラー - 選択したテーブルが無効です
16425	エラー - キー・フィールド・インデックスが正しくありません
16426	エラー - キー・フィールド名が空白です
16427	エラー - テーブル名が複製しているか、無効です。
16428	フィールド名は文字で始める必要があります。英数字とアンダースコアーだけを含めることができます。
16429	ディメンション・テーブル ID が指定されていません
16430	複製するフィールド名が指定されています
16431	テーブル名は文字で始める必要があります。英数字とアンダースコアーだけを含めることができます
16432	エラー - ディメンション名が複製しているか、無効です。
16433	エラー - フォルダーが見つかりません
16501	ユーザー定義フィールドの内部エラー。
16503	ユーザー定義フィールドの不明な関数タグ・エラー。
16504	ユーザー定義フィールドが存在しません。
16505	ユーザー定義フィールドのレポート・ロック・エラー。
16506	ユーザー定義フィールドのテーブル・ロック・エラー。
16507	ユーザー定義フィールドのセル・ロック・エラー。
16508	ユーザー定義フィールドが既に存在します。
16509	ユーザー定義フィールドですべてのフィールド情報の取得時にエラーが発生しました。
16601	内部エラー。
16603	許可されたプロセスのスケジュール期間が期限切れになりました。
16701	選択した文字列が見つかりません。
16702	親ウィンドウが見つかりません
16703	ファイル名が指定されていません
16704	フィールドが選択されていません
16705	ダイアログ初期化エラー
16706	指定したソース・ファイルが存在しません
16707	システム・テーブルを再マップします。本当によろしいですか?
16708	古い定義を上書きしますか?
16709	構文チェックは OK です
16710	現在の式への変更を破棄しますか?
16711	指定したディクショナリー・ファイルが存在しません
16712	派生変数名が指定されていません
16713	照会名が指定されていません

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
16714	トリガー名が指定されていません。
16715	フィールドが選択されていません
16716	フィールド名が正しくありません
16717	無効な名前: 名前は文字で始める必要があります。英数字と '_' だけを含めることができます。
16718	エントリーを削除しますか?
16719	フォルダーを削除しますか? すべてのフォルダー情報 (サブフォルダーなど) が失われます。
16720	名前が指定されていません
16721	無効なデータ・ディクショナリー・ファイルです。ディレクトリーである可能性があります。
16722	データ・ディクショナリー・ファイルが存在します。上書きしますか?
16723	ファイルが見つかりません
16724	既存のファイルを上書きしますか?
16725	オーディエンス・レベルが指定されていません
16726	オーディエンス ID フィールドが指定されていません
16727	複製するオーディエンス ID フィールドがあります
16728	無効な実行状態 - 操作を終了します
16729	テーブルが選択されていません
16730	セルが選択されていません
16731	選択したテーブルのオーディエンス・レベルが異なります
16732	選択したセルのオーディエンス・レベルが異なります
16733	オーディエンス・レベルはテーブルのプライマリー・オーディエンスとして既に定義済みです
16734	このテーブルのオーディエンス・レベルは既に定義済みです
16735	ベース・テーブルの関連フィールドがディメンション・テーブルのキー・フィールドに適合しません
16736	ファイル・パス長さが許容制限を超えました
16737	フィールドがチェックされていません
16738	テーブルまたはフィールド名が指定されていません
16739	派生変数名が Campaign 生成済みフィールドと競合します
16740	必要な値がありません。
16741	既存の式をポイント & クリック・モード用に変換できません。空白の式で再開しますか?
16742	式をポイント & クリック・モード用に変換できません。テキスト・ビルダー・モードに切り替えますか?
16743	現在の式は有効ではありません。このまま テキスト・ビルダー・モードへの切り替えを続行しますか?
16744	ツリー展開エラー
16745	フォルダーが既に存在します。
16746	トリガー・コマンドを実行します。本当によろしいですか?

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
16747	派生変数の名前が既存の永続的なユーザー定義フィールドの名前と競合します
16748	区切り記号が指定されていません。
16750	派生変数の名前が指定されていません。
16751	選択したセグメントのオーディエンス・レベルが異なります
16752	フィールド名が正しくありません。ユーザー変数の値は選択プロセスでのみ設定できます。
16753	名称が長すぎます。
16754	新規テーブルを作成するためには、管理者はオーディエンス・レベルを少なくとも 1 つ定義する必要があります。
16755	最適化されたリスト・テーブルの再マップは許可されません。
16756	オーディエンス ID フィールドの不適合: 種類が一致しません。
16757	出力セル名が長すぎます。
16758	プロセス名が長すぎます。
16759	出力セル名が空です。
16760	セキュリティー・ポリシーが指定されていません。
16761	セキュリティー・ポリシーは元のポリシーに復元されました。
16762	開始日または終了日が指定されていません。
16763	指定した日付は無効です。
16764	日付が選択されていません。
16765	終了日には、開始日よりも前の日付を指定できません。
16769	データ・パッケージ内部エラー。
16770	パッケージ名が指定されていません。
16771	ログ・エントリーにアクセスするには、ログの表示権限が必要です。
16772	ディクショナリー・ファイル名をデータ・ファイル名と同じにすることはできません。
16773	データ・パッケージ・フォルダーが既に存在します。そのフォルダー内の既存のコンテンツは削除されます。
16901	テンプレートの内部エラー。
16903	テンプレート名が空白です。
16906	テンプレートの関数タグが不明です。
16908	Templates ディレクトリーが存在しません。
16909	Templates ディレクトリーが無効です。
16910	同じ名前で保存されたテンプレートがすでに存在します。
17001	保存されたカタログの内部エラー。
17003	カタログ名が空白です。
17006	保存されたカタログの関数タグが不明です。
17008	Catalogs ディレクトリーが存在しません。
17009	Catalogs ディレクトリーが無効です。
17012	カタログ・ファイルの拡張子が無効です。'cat' および 'xml' のみ使用できます。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17013	ターゲット・カタログ・ファイルの拡張子が元のファイルの拡張子と異なります。
17014	Campaign データ・フォルダーの識別子が空白です。
17015	Campaign データ・フォルダーのパスが空白です。
17016	Campaign データ・フォルダーの識別子が複製しています。
17017	同じ名前で保存されたカタログがすでに存在します。
17018	カタログ名が、他のセキュリティ・ポリシーの既存のカタログと競合します。他の名前を選択してください。
17101	グループ・プロセスの内部エラー。
17102	入力を選択されていません。
17103	オーディエンスが選択されていません。
17104	照会文字列がありません。
17105	フィルター照会文字列がありません。
17106	基になる関数が選択されていません。
17107	基になるフィールドが選択されていません。
17108	レベルが選択されていません。
17109	カウント演算子が選択されていません。
17110	グループ・プロセスのセル・ロック・エラー。
17112	グループ・プロセスの不明な関数タグ。
17113	グループ・プロセスのレポート・ロック・エラー。
17114	選択したオーディエンスは選択したテーブルに存在しません。
17115	無効なオーディエンス・レベルが選択されています。
17116	オーディエンス・プロセスのパラメーターが不明です。
17117	リーダー・モードではコマンドを使用できません
17201	リスト・ボックス選択エラー
17202	ダイアログ初期化エラー
17203	ツリー展開エラー
17204	コンボ・ボックスの挿入エラー
17205	無効なセル・サイズ制限です。
17302	最適化プロセスの内部エラー。
17303	最適化プロセスのセル・ロック・エラー。
17304	最適化プロセスのテーブル・ロック・エラー。
17306	最適化プロセスの不明な関数タグ・エラー。
17307	最適化プロセスのレポート・ロック・エラー。
17308	入力を選択されていません。
17309	エクスポートするフィールドが選択されていません。
17310	無効なフィールド名です。
17311	文字列への変換でエラーが発生しました。
17312	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。
17313	セル・コードが空白であるか、複製しています。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17314	選択した Optimize セッションで、推奨コンタクト・テーブルが定義されていません。
17315	選択した Optimize セッションで、データベース・ソースが定義されていません。
17316	推奨コンタクト・テーブルで必須フィールドが見つかりません。
17317	選択した Optimize セッションは現在実行中です。
17318	データベース認証が必要です。
17319	Optimize セッションが選択されていません。
17321	コンタクト日が無効です。
17322	コンタクト日が期限切れです。
17323	リーダー・モードではコマンドを使用できません
17324	選択したオファーが見つかりません。
17325	選択したオファーのチャンネルが見つかりません。
17326	セルのオファーの割り当てがありません。
17327	内部エラー: オファーがありません。
17328	内部エラー: チャンネルがありません。
17329	スコア・フィールドが指定されていません。
17330	オファーまたはオファー・リストがないか、回収になっていることが検出されました。
17331	関連する Optimize セッションの実行中にフローチャートを実行しようとしてしました。
17332	推奨属性テーブルへの書き込みに失敗しました。
17333	エクスポート・フィールドのマッピングが解除されました。
17334	関連する Optimize セッションの実行中に、最適化プロセス・ボックスを削除しようとしてしました。
17351	選択エラー
17352	選択項目が見つかりません。
17402	セグメント化プロセスの内部エラー。
17403	セグメント化プロセスのセル・ロック・エラー。
17404	セグメント化プロセスの不明な関数タグ。
17405	入力を選択されていません。
17406	指定されたフォルダー内のセグメント名が一意ではありません。
17407	セグメント名が指定されていません。
17408	セグメント名が無効です。
17409	セキュリティー・ポリシーが無効です。
17410	セキュリティー・ポリシーが指定されていません。
17411	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。
17412	bin ファイルの作成が無効になっており、一時テーブル DS なしが指定されています。
17413	セグメント一時テーブルのデータ・ソース名が無効です
17452	セグメント名が指定されていません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17502	内部エラー
17503	セル・ロック・エラー
17504	テーブル・ロック・エラー。
17505	不明な関数タグ・エラー。
17507	レポート・ロック・エラー。
17509	入力を選択されていません。
17510	実現ページ: エクスポート・テーブルが選択されていません。
17511	パーソナライズ・ページ: エクスポート・フィールドが選択されていません。
17512	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するテーブルが選択されていません。
17513	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するフィールドが選択されていません。
17514	セル・フィールド情報取得エラー。
17515	トリガーが指定されていません。
17516	パーソナライズ・ページ: ソート・フィールドが選択されていません。
17518	無効なフィールド名です。
17519	double 型から string 型への変換エラー。
17521	実現ページ: エクスポート・ファイルが選択されていません。
17522	コンタクト・リスト・ページ: 区切り記号が指定されていません。
17523	実現ページ: エクスポート・ディクショナリーが選択されていません。
17524	ログ・ページ: コンタクトのログを記録するファイルが選択されていません。
17525	ログ・ページ: コンタクトの区切り記号が指定されていません。
17526	ログ・ページ: コンタクトのディクショナリー・ファイルが指定されていません。
17527	実現ページ: 選択したデータ・エクスポート・ファイル名に無効なパスが含まれています
17528	実現ページ: エクスポート・ファイル用に選択したデータ・ディクショナリーに無効なパスが含まれています。
17529	パーソナライズ・ページ: 複製するフィールドのスキップが選択されていません。
17530	実現ページ: レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
17531	ログ・ページのコンタクト: レコードを更新するには、入力と同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
17532	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。
17533	セル・コードが空白であるか、複製しています。
17534	ログ・ページ: 複製するフィールドのスキップが選択されていません。
17535	実現ページ: 選択したデータ・ディクショナリー・ファイルが存在しません。
17538	オファー・コードが一意ではありません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17539	リーダー・モードではコマンドを使用できません
17540	eMessage 文書のオファー ID が無効です。
17541	オーディエンス・レベルが空白です。
17542	オファーが選択されていません。
17544	セルのオファーの割り当てがありません。
17549	実行中に eMessage サーバーからエラーが返されました。
17550	内部エラー: 不明な eMessage ステータスです。
17552	リスト・ボックス選択エラー
17553	選択項目が見つかりません。
17554	オファーの名前またはコードが空白です。
17555	指定したレコードは、コンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴テーブル、および処理テーブルから消去されます。
17557	このプロセスによって作成されたすべてのコンタクト履歴を完全に削除しようとしています。続行してよろしいですか?
17558	無効な有効期限が指定されています。
17559	文書の設定が eMessage サーバーから更新されました。
17560	複製する追跡コードは許可されません。
17561	トラッキング・オーディエンス・レベルを特定できません。
17562	無効なコンタクト数です
17563	無効なレスポンス数です
17564	開始/終了日付が無効であるか、指定されていません
17565	開始日に終了日より後の日付が指定されています
17566	このプロセスによって作成されたコンタクト履歴を選択して完全に削除しようとしています。続行してよろしいですか?
17567	このプロセスによって作成されたコンタクト履歴はありません。
17568	このプロセスのレコードがコンタクト履歴テーブル、詳細コンタクト履歴テーブル、および処理テーブルから消去されます。
17570	文書 PF に対するフィールドの割り当てがありません。
17571	オファー・パラメーターに対するフィールドの割り当てがありません。
17572	トラッキング・フィールドに対するフィールドの割り当てがありません。
17573	eMessage ディレクトリーが無効です。
17574	コンテンツ・タイプに対するフィールドの割り当てがありません。
17575	eMessage は最後の操作をまだ完了していません。後でもう一度試してください。
17576	eMessage 文書が選択されていません。
17577	不明なパラメーターです。
17578	無効なパラメーターです。
17579	DOM 作成エラー。
17580	複数のセルが選択されています。選択したすべてのセルに割り当て条件が適用されます。
17581	内部エラー: オファーがありません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17582	内部エラー: チャンネルがありません。
17583	異なるオーディエンス・レベルでコンタクト履歴がトラッキングされています。すべてのオーディエンス ID フィールドを指定する必要があります。
17584	出力キューが選択されていません。
17585	出力キューが見つかりません。
17586	出力キューで必須フィールドが見つかりません。
17587	ログ・ページ: このオーディエンス・レベルに対するコンタクト履歴テーブルが未定義です。
17588	出力ページの拡張設定: このオーディエンス・レベルに対するコンタクト履歴テーブルが未定義です。
17589	出力ページの拡張設定: このオーディエンス・レベルに対するレスポンス履歴テーブルが未定義です。
17590	プロセス・ボックスが構成されたため、オファーの URL の 1 つに、新しいオファー・パラメーター名が追加されました。このオファー・パラメーターにフィールドをマップしないと実行を開始できません。
17591	eMessage の文書でパーソナライズ・フィールドが変更されたため、プロセス・ボックスを再構成する必要があります。
17592	オファーまたはオファー・リストがないか、回収になっていることが検出されました。
17593	割り当て済みオファー・リストにオファーが含まれていません。
17595	コンタクト履歴を消去できません。選択した処理にレスポンス履歴が存在します。
17596	コンタクト履歴レコードが見つかりません。
17597	現在の実行にはコンタクト履歴が存在します。実行の分岐と処理を開始するには、履歴を消去する必要があります。
17599	指定したコンタクト・ステータス・コードがシステムで定義されていません。
17600	フィールド名が複製しています。出力テーブルを作成できません。
17602	レスポンス・プロセスの内部エラー。
17603	レスポンス・プロセスのセル・ロック・エラー。
17604	レスポンス・プロセスのテーブル・ロック・エラー。
17605	レスポンス・プロセスの不明な関数タグ・エラー。
17607	レスポンス・プロセスのレポート・ロック・エラー。
17608	レスポンス・プロセスのセル・フィールド情報取得エラー。
17611	double 型から string 型への変換エラー。
17613	オーディエンス・レベルが空白です。
17614	入力を選択されていません。
17615	選択した入力セルのオーディエンス・レベルが異なります。
17616	オファーが選択されていません。
17617	1 つ以上のオファーにセルの割り当てがありません。
17618	オファー・コード・フィールドがありません。
17620	キャンペーン・コード・フィールドがありません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17621	セル・コード・フィールドがありません。
17622	チャネル・コード・フィールドがありません。
17623	製品 ID フィールドがありません。
17624	他の場所にログを記録するためのテーブルが選択されていません。
17625	レコードを更新するには、トラッキングと同じオーディエンスを持つベース・テーブルが必要です。
17626	他の場所にログを記録するためのファイルが選択されていません。
17627	区切り記号付きファイルにログを記録するための区切り記号が指定されていません。
17628	ログを記録するためのディクショナリー・ファイルが指定されていません。
17629	他の場所にログを記録するフィールドが選択されていません。
17630	無効なフィールド名です。
17631	選択したレスポンス・タイプのオファーは、このプロセスに既に追加されています。
17632	レスポンス・タイプが指定されていません。
17633	レスポンス・チャネルが指定されていません。
17634	レスポンスの日付フィールドが日付型フィールドではありません。
17635	レスポンス日付値は、指定された形式になっていません。
17636	オファーが選択されていません
17637	内部エラー: オファーが見つかりません。
17638	内部エラー: コンタクト・チャネルが見つかりません。
17639	内部エラー: キャンペーンが見つかりません。
17640	すべての着信レスポンスをトラッキングするには、オファー・フィールドを指定する必要があります。
17641	入力セルとは異なるオーディエンス・レベルでトラッキングする場合、すべてのオーディエンス ID フィールドを、「ログ」タブの「追加フィールド」タブで指定する必要があります。
17642	ユーザー・レスポンス・タイプ・テーブルにデフォルトのレスポンス・タイプが見つかりません
17643	コンタクト・ステータス・テーブルにデフォルトのコンタクト・ステータスが見つかりません
17644	処理マッピングが指定されていません。
17651	リスト・ボックス選択エラー
17653	レスポンス名が空白です
17654	このプロセスのレコードが、レスポンス履歴テーブルおよびトラッキング・テーブルから消去されます。
17655	このプロセスのレスポンス履歴テーブルおよびトラッキング・テーブルのレコードを消去します。本当によろしいですか?
17656	レスポンス・チャネルが指定されていません。
17657	このプロセスのレコードがコンタクト履歴テーブルおよびトラッキング・テーブルから消去されます。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
17658	このプロセスのコンタクト履歴テーブルおよびトラッキング・テーブルのレコードを消去します。本当によろしいですか?
17659	異なるオーディエンス・レベルでコンタクト履歴がトラッキングされています。すべてのオーディエンス ID フィールドを指定する必要があります。
17702	キューブ・プロセスの内部エラー。
17703	キューブ・プロセスのセル・ロック・エラー。
17704	キューブ・プロセスの不明な関数タグ。
17705	入力セルまたはセグメントがありません。
17706	セグメント名が一意ではありません。
17713	出力キューブが指定されていません。
17714	ディメンションが存在しません。
17715	選択したセグメントは、不明なオーディエンス・レベルに基づいています。
17717	レポート・ロック・エラー。
17718	無効なフィールド名です。
17752	キューブ名がありません。
17753	使用可能なディメンションがありません。
17754	このキューブのディメンションが指定されていません。
17755	無効な構成: 複製するディメンションが選択されています。
17800	表示する日付の書式設定中にエラーが発生しました。
17801	ユーザーが入力した日付の解析中にエラーが発生しました。
17802	表示する通貨値の書式設定中にエラーが発生しました。
17803	ユーザーが入力した通貨値の解析中にエラーが発生しました。
17804	表示する数字の書式設定中にエラーが発生しました。
17805	ユーザーが入力した数字の解析中にエラーが発生しました。
17806	表示する時刻の書式設定中にエラーが発生しました。
17807	クライアントに保存されたリストの内部エラー。
17808	表示する日時の書式設定中にエラーが発生しました。
19000	内部エラー: 関数タグが不明です。
19001	メモリー・エラー
19002	DOM 例外
19003	パイプ・オープン・エラー
19005	終了日に開始日よりも前の日付が指定されています
19006	レポート名が無効です
19007	属性名が無効です
19010	数値フィールドに無効な文字が見つかりました。
19011	セグメントは使用中です。変更できません。
19013	キューブの指定が無効です
19014	有効開始日が無効です
19015	有効期限が無効です
19016	終了日に開始日よりも前の日付が指定されています

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
19018	同じフォルダー内では、各フォルダー名が一意である必要があります。指定されたフォルダー名は既にこのフォルダー内で使用されています。
19019	フォルダーを削除できません。最初にフォルダーの内容 (ファイル/サブフォルダー) を削除する必要があります。
19020	フォルダーには使用中のセグメントが存在します。移動することはできません。
19021	削除できません。
19022	移動することはできません。
19023	フォルダーにはアクティブなセグメントが存在します。削除できません。
19024	フォルダーには非アクティブなセグメントが存在します。削除できません。
19025	宛先フォルダーが選択されていません。宛先フォルダーを選択してから、再試行してください。
19026	無効なフォルダー ID が指定されました。
19027	セッション名は、フォルダー内で一意である必要があります。指定されたセッション名は既にこのフォルダー内で使用されています。
19028	アクティブなフローチャートが含まれているので、キャンペーン/セッションを移動できません。
19029	移動することはできません。移動すると、宛先フォルダー内に複製したセグメント名が生成されます。
19030	宛先の名前が付いたオブジェクトが既に存在します。
19500	プロセスの内部エラー。
19501	文字列への変換でエラーが発生しました。
19502	選択した Optimize セッションが見つかりません。
20000	内部エラー: 関数タグが不明です。
20002	DOM 例外
20003	パイプ・オープン・エラー
20004	オファー・コードが一意ではありません
20005	終了日に開始日よりも前の日付が指定されています
20006	レポート名が無効です
20007	属性名が無効です
20008	オファーは使用されています。削除できません。
20009	フォルダーには使用されているオファーが存在します。削除できません。
20010	数値フィールドに無効な文字が見つかりました。
20011	セグメントは使用中です。変更できません。
20012	オファー・バージョン名が一意ではありません。
20013	キューブの指定が無効です
20014	有効開始日が無効です
20015	有効期限が無効です
20016	終了日に開始日よりも前の日付が指定されています
20017	オファー・バージョン・コードが一意ではありません。

表 77. Campaign のエラー・コード (続き)

コード	エラーの説明
20018	同じフォルダー内では、各フォルダー名が一意である必要があります。指定されたフォルダー名は既にこのフォルダー内で使用されています。
20019	フォルダーを削除できません。最初にフォルダーの内容 (ファイル/サブフォルダー) を削除する必要があります。
20020	フォルダーには使用中のセグメントが存在します。移動することはできません。
20021	削除できません。
20022	移動することはできません。
20023	フォルダーにはアクティブなセグメントが存在します。削除できません。
20024	フォルダーには非アクティブなセグメントが存在します。削除できません。

IBM Unica 技術サポートへの連絡

ドキュメンテーションを参照しても解決できない問題があるなら、指定されているサポート窓口を通じて IBM Unica 技術サポートに電話することができます。このセッションの情報を使用するなら、首尾よく効率的に問題を解決することができます。

サポート窓口が指定されていない場合は、IBM Unica 管理者にお問い合わせください。

収集する情報

IBM Unica 技術サポートに連絡する前に、以下の情報を収集します。

- 問題の性質の要旨。
- 問題発生時に表示されるエラー・メッセージの詳細な記録。
- 問題を再現するための詳しい手順。
- 関連するログ・ファイル、セッション・ファイル、構成ファイル、およびデータ・ファイル。
- 「システム情報」の説明に従って入手できる、製品およびシステム環境に関する情報。

システム情報

IBM Unica 技術サポートに電話すると、実際の環境に関する情報について尋ねられることがあります。

問題が発生してもログインは可能である場合、情報の大部分は「バージョン情報」ページで入手できます。そのページには、インストールされている IBM Unica のアプリケーションに関する情報が表示されます。

「バージョン情報」ページは、「ヘルプ」>「バージョン情報」を選択することにより表示できます。「バージョン情報」ページを表示できない場合、どの IBM Unica アプリケーションについても、そのインストール・ディレクトリーの下にある `version.txt` ファイルを表示することにより、各アプリケーションのバージョン番号を入手できます。

IBM Unica 技術サポートの連絡先情報

IBM Unica 技術サポートとの連絡を取る方法については、IBM Unica 製品技術サポートの Web サイト (<http://www.unica.com/about/product-technical-support.htm>) を参照してください。

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒103-8510
東京都中央区日本橋箱崎町19番21号
日本アイ・ビー・エム株式会社
法務・知的財産
知的財産権ライセンス渉外

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation
170 Tracer Lane
Waltham, MA 02451
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

表示されている IBM の価格は IBM が小売り価格として提示しているもので、現行価格であり、通知なしに変更されるものです。卸価格は、異なる場合があります。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することが

できます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。これらのサンプル・プログラムは特定物として現存するままの状態を提供されるものであり、いかなる保証も提供されません。IBM は、お客様の当該サンプル・プログラムの使用から生ずるいかなる損害に対しても一切の責任を負いません。

この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

商標

IBM、IBM ロゴ、および ibm.com は、世界の多くの国で登録された International Business Machines Corp. の商標です。他の製品名およびサービス名等は、それぞれ IBM または各社の商標である場合があります。現時点での IBM の商標リストについては、『www.ibm.com/legal/copytrade.shtml』をご覧ください。



Printed in Japan